

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第13集

船越高原A遺跡Ⅰ

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

2000

福岡県教育委員会

一般国道 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第13集
210号

船越高原A遺跡Ⅰ

福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査

2000

福岡県教育委員会



1 船越高原A遺跡I区全景（西を望む）



2 I区第一遺構面東半部（空中写真）



3 107号竪穴住居跡（南から）

序

福岡県教育委員会では、建設省九州地方建設局の委託を受けて、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。昭和54（1979）年に調査を開始して以来、9遺跡の調査を完了し、既に一部が一般供用されております。

この報告書は、平成8～11（1996～1999）年度に発掘調査を実施した田主丸町大字船越・吉井町大字下古賀に所在する船越高原A遺跡の記録です。当遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれ、自然の恩恵を受けた緑豊かな場所に位置しています。今回の調査では弥生時代から中世までの集落遺跡を確認し、この地で連綿と営まれ続けた人々の生活の新たな一面に触れることができました。

本書が地域文化の研究や文化財愛護思想の普及、および学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び出土遺物の整理作業や報告書作成にあたって、多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここで深甚の謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告書は、平成8～11（1996～1999）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した、一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財報告の第13集である。
2. 本書に記録した船越高原A遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第10地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字船越・吉井町大字下古賀に所在する。
3. 船越高原A遺跡の報告は、平成11年度以降数ヶ年に分けて実施するが、平成11年度はI区古墳時代以降の遺構について報告するものである。
4. 本書に掲載した遺構図は、齋部麻矢・秦 憲二・吉田東明・今井涼子・進村真之が作成した。なお、使用した方位は全て座標北（G.N.）である。
5. 本書に掲載した遺構写真は齋部・吉田・今井・進村が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお空中写真は空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の整理・復原作業は九州歴史資料館において岩瀬正信の、実測作業は福岡県文化財保護課太宰府事務所において平田春美の、図面上諸作業は文化財保護課太宰府事務所において豊福弥生の指導と協力によりそれぞれ実施した。
7. 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆は齋部・吉田・進村が分担し、編集は齋部が行った。

本文目次

序

例言

I はじめに

1. 調査の経緯……………1
2. 調査の組織……………2

II 遺跡の位置と環境……………4

III 発掘調査の記録

1. 基本層序……………9
2. 竪穴住居跡……………10
3. 掘立柱建物……………110
4. 土坑……………111
5. 溝……………119
6. 竪穴状遺構……………142
7. 落ち込み・ピット・包含層出土土器……………143
8. その他の遺物……………149

IV おわりに……………152

図版目次

巻頭図版 1 船越高原A遺跡I区全景（西を望む）

2 I区第一遺構面東半部（空中写真）

3 107号竪穴住居跡（南から）

図版一1 1 I区第一遺構面中央部分全景（西から）

2 I区第一遺構面東部分全景（東から）

図版一2 1 I区第一遺構面東部分全景（空中写真）

2 I区第一遺構面東端部全景（空中写真）

図版一3 1 I区第一遺構面西端部全景（南から）

2 I区第一遺構面西部分全景（北から）

図版一4 1 1号竪穴住居跡（北から）

2 1号竪穴住居跡カマド（北から）

3 2号竪穴住居跡（西から）

図版一5 1 3号竪穴住居跡（南から）

2 3号竪穴住居跡カマド（南から）

3 4号竪穴住居跡（南から）

- 図版-6 1 4号竪穴住居跡カマド (南から)
2 5号竪穴住居跡 (南から)
3 5号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版-7 1 6号竪穴住居跡 (南から)
2 6号竪穴住居跡カマド (南から)
3 7号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-8 1 7号竪穴住居跡カマド (南から)
2 8号竪穴住居跡 (南から)
3 8号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版-9 1 9号竪穴住居跡 (南から)
2 9号竪穴住居跡カマド (南から)
3 10号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-10 1 10号竪穴住居跡カマド (南から)
2 11号竪穴住居跡 (南から)
3 11号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版-11 1 12号竪穴住居跡 (南から)
2 12号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版-12 1 12・15・16・34竪穴住居跡検出状況 (南から)
2 13号竪穴住居跡 (南から)
3 14号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-13 1 15号竪穴住居跡 (南から)
2 15号竪穴住居跡カマド (南から)
3 16号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-14 1 16号竪穴住居跡カマド (南から)
2 17号竪穴住居跡 (南から)
3 18号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-15 1 19号竪穴住居跡 (南から)
2 19号竪穴住居跡カマド土器出土状況① (南から)
3 19号竪穴住居跡カマド土器出土状況② (南から)
- 図版-16 1 19号竪穴住居跡カマド (南から)
2 20号竪穴住居跡 (南から)
3 20号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版-17 1 21号竪穴住居跡 (南から)
2 21号竪穴住居跡カマド (南から)
3 22号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-18 1 22号竪穴住居跡カマド (南から)
2 23号竪穴住居跡 (南から)
3 24号竪穴住居跡 (南から)
- 図版-19 1 24号竪穴住居跡カマド (南から)

- 2 25号竪穴住居跡（南から）
- 3 26号竪穴住居跡（南から）
- 図版-20 1 26号竪穴住居跡カマド（南から）
- 2 27号竪穴住居跡（西から）
- 3 27号竪穴住居跡カマド（西から）
- 図版-21 1 28号竪穴住居跡（南から）
- 2 28号竪穴住居跡カマド（南から）
- 3 29号竪穴住居跡（南から）
- 図版-22 1 29号竪穴住居跡カマド（南から）
- 2 30号竪穴住居跡（南から）
- 3 30号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版-23 1 31号竪穴住居跡（南から）
- 2 31号竪穴住居跡カマド（南から）
- 3 32号竪穴住居跡（東から）
- 図版-24 1 33号竪穴住居跡（東から）
- 2 33号竪穴住居跡土器溜（東から）
- 3 34号竪穴住居跡（南から）
- 図版-25 1 34号竪穴住居跡カマド（南から）
- 2 35号竪穴住居跡（南から）
- 3 36号竪穴住居跡（南から）
- 図版-26 1 43号竪穴住居跡（西から）
- 2 43号竪穴住居跡カマド（西から）
- 3 44号竪穴住居跡（東から）
- 図版-27 1 44号竪穴住居跡カマド（東から）
- 2 45号竪穴住居跡（南から）
- 3 46号竪穴住居跡（南から）
- 図版-28 1 46号竪穴住居跡カマド（南から）
- 2 47号竪穴住居跡（南から）
- 3 48号竪穴住居跡（西から）
- 図版-29 1 49号竪穴住居跡（西から）
- 2 50号竪穴住居跡（東から）
- 3 50号竪穴住居跡カマド（東から）
- 図版-30 1 51号竪穴住居跡（南西から）
- 2 59号竪穴住居跡（南東から）
- 3 89号竪穴住居跡（東から）
- 図版-31 1 91号竪穴住居跡（北西から）
- 2 92号竪穴住居跡（南西から）
- 3 93号竪穴住居跡（南東から）
- 図版-32 1 94号竪穴住居跡（南東から）

- 2 95・97号竪穴住居跡（南東から）
3 95号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版一33 1 96号竪穴住居跡カマド（北東から）
2 98号竪穴住居跡（南東から）
3 98号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版一34 1 99号竪穴住居跡（南東から）
2 100号竪穴住居跡（南から）
3 100号竪穴住居跡カマド（南から）
図版一35 1 101号竪穴住居跡（南から）
2 102号竪穴住居跡（南から）
3 102号竪穴住居跡カマド（南から）
図版一36 1 103号竪穴住居跡（南から）
2 103号竪穴住居跡カマド（南から）
3 104号竪穴住居跡（南から）
図版一37 1 104号竪穴住居跡カマド（南から）
2 107号竪穴住居跡炭化材（南から）
3 107号竪穴住居跡（南から）
図版一38 1 107号竪穴住居跡カマド（南から）
2 108号竪穴住居跡（南から）
3 109号竪穴住居跡（南から）
図版一39 1 109号竪穴住居跡カマド（南から）
2 110号竪穴住居跡（南から）
3 110号竪穴住居跡カマド（南から）
図版一40 1 111号竪穴住居跡（南から）
2 111号竪穴住居跡カマド（南から）
3 112号竪穴住居跡（東から）
図版一41 1 112号竪穴住居跡カマド（東から）
2 113号竪穴住居跡（南から）
3 113号竪穴住居跡下層（南から）
図版一42 1 113号竪穴住居跡カマド（南から）
2 1号掘立柱建物（西から）
3 2号掘立柱建物（西から）
図版一43 1 3号掘立柱建物（南から）
2 4号掘立柱建物（東から）
3 5号掘立柱建物（東から）
図版一44 1 3号土坑遺物出土状況（東から）
2 21号土坑（東から）
3 21号土坑断面（北から）
図版一45 1 22号土坑（西から）

- 2 23号土坑（西から）
- 3 1号溝（東から）
- 図版-46 1 9号溝断面（南から）
- 2 9号溝遺物出土状況（西から）
- 3 9号溝甕出土状況（西から）
- 図版-47 1 11号溝断面（北から）
- 2 12号溝断面（北から）
- 3 67号溝断面（南から）
- 図版-48 1 68号溝断面（南から）
- 2 69号溝（東から）
- 3 5号竪穴状遺構（北から）
- 図版-49 1～5・7・8号竪穴住居跡出土土器
- 図版-50 9・11・12・15・16・18号竪穴住居跡出土土器
- 図版-51 19・20号竪穴住居跡出土土器
- 図版-52 21・22・24・25・27・28号竪穴住居跡出土土器
- 図版-53 29・32・43・46・59・89・90・96・97号竪穴住居跡出土土器
- 図版-54 98・100・101号竪穴住居跡出土土器
- 図版-55 102・107号竪穴住居跡出土土器
- 図版-56 107・108・109・110・111・113号竪穴住居跡出土土器
- 図版-57 1・3～5・8号土坑、1・9号溝出土土器
- 図版-58 9号溝出土土器
- 図版-59 9・11・28・31・50・52号溝出土土器
- 図版-60 ピット、包含層出土土器
- 図版-61 1 出土土製品（1）
- 2 出土土製品（2）
- 3 出土石製品（1）
- 図版-62 1 出土石製品（2）
- 2 出土鉄製品（1）
- 3 出土鉄製品（2）

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図（1/50,000）	5
第2図	調査区周辺字図および条里の復原（1/10,000）	6
第3図	調査区位置図（1/2,000）	7
第4図	船越高原A遺跡基本層序模式図（1/40）	9
第5図	1号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）	10
第6図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）	11

第7図	2・3号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	12
第8図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	14
第9図	4号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	16
第10図	4～6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	17
第11図	5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	18
第12図	5・6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)	19
第13図	7号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	21
第14図	7・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第15図	8号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	24
第16図	9号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	25
第17図	9・10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	27
第18図	10・11号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	28
第19図	11～15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	29
第20図	12・13号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	31
第21図	14号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	33
第22図	15・16号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	35
第23図	16～18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	37
第24図	17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第25図	19号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	39
第26図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3)	40
第27図	19・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	41
第28図	20号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	43
第29図	21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第30図	21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)	45
第31図	21・22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	46
第32図	22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	47
第33図	23号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	48
第34図	23・24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	49
第35図	24・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50
第36図	24・25号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	51
第37図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	52
第38図	26・27号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	54
第39図	26～29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	56
第40図	28号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	57
第41図	29号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	58
第42図	30・31号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	60
第43図	30～33・36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	61
第44図	32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	63
第45図	33号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	64

第46図	34～36号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	66
第47図	43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	68
第48図	43・45・46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	69
第49図	44号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	70
第50図	45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)	71
第51図	46号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	73
第52図	47号竪穴住居跡実測図 (1/60)	74
第53図	48・49・50号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	75
第54図	51・59号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)	76
第55図	59号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	77
第56図	89・90・91号竪穴住居跡実測図 (1/60)	78
第57図	89・90号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	79
第58図	89・90・92・93・95号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	80
第59図	92・93・94号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	82
第60図	95・96・97号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	84
第61図	96・97・99・100号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	85
第62図	98号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	87
第63図	98号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	88
第64図	99・100号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	90
第65図	101・102号竪穴住居跡実測図 (1/60)	92
第66図	102号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	93
第67図	101・102号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	94
第68図	103・104号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	96
第69図	107号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	97
第70図	107号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	98
第71図	108・109号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	100
第72図	108・109号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	102
第73図	110・111号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	103
第74図	110～112号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	104
第75図	112号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	106
第76図	113号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	107
第77図	1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	109
第78図	3号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	110
第79図	4・5号掘立柱建物実測図 (1/60)	111
第80図	1・3・4号土坑実測図 (1/40)	112
第81図	5～8号土坑実測図 (1/50)	113
第82図	1・3・5・6・8号土坑出土土器実測図 (1/3)	115
第83図	21～23号土坑実測図 (1/40)	117
第84図	22・23号土坑出土土器実測図 (1/3)	118

第85図	63・64号土坑実測図 (1/40)……………	119
第86図	1～3号溝出土土器実測図 (1/3)……………	121
第87図	9・10号溝土層断面実測図 (1/30)……………	122
第88図	9号溝出土土器実測図① (1/3)……………	123
第89図	9号溝出土土器実測図② (1/3)……………	124
第90図	9号溝出土土器実測図③ (1/3)……………	126
第91図	9号溝出土土器実測図④ (1/3)……………	127
第92図	10～12号溝出土土器実測図 (1～5・12：1/4, 6～11：1/3)……………	128
第93図	11・12号溝実測図 (1/60)……………	129
第94図	28・29・31・32・47号溝断面土層実測図 (1/30)……………	131
第95図	28号溝出土土器実測図 (1/3)……………	132
第96図	29号溝出土土器実測図 (1/3)……………	133
第97図	30・31・32・37・38・39・45・46・47・50・52号溝出土土器実測図 (1/3)……………	134
第98図	67～70号溝断面土層実測図 (1/60)……………	139
第99図	67・69・70～72号溝出土土器実測図 (1/3)……………	140
第100図	1～5号竪穴状遺構実測図 (1/60)……………	142
第101図	落ち込み・ピット出土土器実測図 (1/3)……………	144
第102図	包含層出土土器① (1/3)……………	146
第103図	包含層出土土器② (1/3)……………	147
第104図	包含層出土土器③ (1/3)……………	148
第105図	出土土製品・石製品・鉄器実測図 (1/2・1/3)……………	150
付図1	船越高原A遺跡I区遺構配置図第1面 (1/300)	
付図2	船越高原A遺跡I区遺構配置図第2面 (1/300)	
付図3	船越高原A遺跡I区遺構配置図第3面 (1/300)	

表 目 次

表	その他の遺物観察表……………	151
---	----------------	-----

I はじめに

1 調査の経過

1 調査の経緯と経過

一般国道210号浮羽バイパスは、大分県日田市と福岡県久留米市とを結ぶ主要道路である国道210号の交通渋滞緩和と地域の産業・経済発展を図るために、全長14.0kmの建設が計画された。建設に先立ち、昭和47（1972）年2月4日付で、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（以下「福岡国道事務所」ととする）より福岡県教育庁管理部文化課（現、総務部文化財保護課）に、建設予定地内の文化財の有無について、調査の依頼があり、これに基づいて浮羽町所在の塚堂遺跡の調査が昭和54年より4ヶ年に亘って実施された。その後昭和61（1986）年4月2日付で再度福岡国道事務所より埋蔵文化財の分布調査の依頼があり、塚堂遺跡を除く16地点について発掘調査必要箇所の回答をした。現在までにこの回答による16地点の調査を、随時協議を行いながら実施している。現在も調査継続中であるが、これまでの調査については平成10年度までに随時調査報告書を刊行している。

本書掲載の浮羽バイパス10地点「船越高原A遺跡」は、平成6・7年度に調査を行った「船越二ノ上遺跡」に継続して行ったものである。吉井町大字下古賀～田主丸町大字船越間0.7kmに亘る地点である。平成7（1995）年に用地買収終了部分のトレンチによる試掘調査を実施した。その結果遺構の存在を確認し、福岡国道事務所と協議の上、平成8（1996）年度から本調査を開始した。調査を開始する上で便宜上調査対象域をⅠ～Ⅲ区に分割し、試掘の状況や稲作の関係から、Ⅰ区より調査を開始することとなった。周囲では県営ほ場整備事業を行っており、この関係から吉井第5土地改良区とも随時協議をしながらの調査となった。この中で、平成8年4月に改良区より農業用水路の付け替え工事に伴う部分的な調査を優先させたいとの依頼があり、急遽Ⅲ区の用水路設置箇所の調査を行うこととなった。この年度は結果として3箇所の用水路設置に対応しながら調査を進めることとなる。調査の経過は以下の通りである。

平成7年度 道路建設予定地全域の試掘調査

平成8年 5月9日 Ⅲ区農業用水路設置箇所調査開始。

5月28日 空中写真撮影

6月3日 Ⅲ区用水路部分調査終了。Ⅰ区中央部重機による表土除去作業開始。

6月4日 Ⅰ区中央部調査開始。

10月11日 Ⅱ区用水路設置箇所の調査開始（Ⅰ区調査並行）

11月14日 Ⅰ区中央部第一遺構面・Ⅱ区水路設置箇所空中写真撮影。

11月15日 Ⅱ区水路部分調査終了。引き渡し。

11月22日 Ⅰ区中央部第一遺構面調査終了。埋め戻し

平成9年 1月20日 Ⅰ区用水路設置箇所の表土除去作業開始

1月23日 “ 第一遺構面調査開始

2月20日 “ 空中写真撮影。

2月25日 “ 第二遺構面検出。

3月17日 “ 空中写真撮影

	3月20日	I区中央部第一遺構面調査終了
	8月15日	I区東半部第一遺構面重機による表土除去作業
	8月26日	I区東半部調査開始
	12月14日	体験発掘開催
平成10年	3月13日	I区東半部調査終了
平成11年	4月28日	I区西半部調査開始
	11月28日	I区西半部空中写真撮影
平成12年	3月19日	I区全体の調査終了

2 調査の組織

発掘調査関係者および報告書作成関係者は次の通りである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度
所長	佐竹 芳郎	藤本 聡	藤本 聡	藤本 聡 森 将彦
副所長	藤浪 元生 緒方 良一	兼武征二郎 別府 五男	兼武征二郎 別府 五男	兼武征二郎 新開幸一郎 新開幸一郎
建設監督官	松尾 義信 山川 武春	有家 信義 柴田 智	有家 信義 柴田 智	有家 信義 中島 浩二
調査第二課長	田中 義高	田中 義高	赤星 文生	赤星 文生
調査第二係長	轟 敏信	沓掛 孝	沓掛 孝	沓掛 孝
建設技官	島田 隆一	島田 隆一	田中 博明	柳橋 孝博
工務課長	淵 幸一	河野 良行	河野 良行	後藤 昌隆
工務第一係長	黒木 俊彦	梶原 俊之	梶原 俊之	古木 英昭
工務第三係長	田口 仁	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度
総括				
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	松枝 功	松枝 功	藤吉純一郎	藤吉純一郎
指導第二部長	丸林 茂夫	竹若 幸二		
総務部長			富永 勲	岩本 誠
文化課長	松尾 正俊	石松 好雄		
文化財保護課長			石松 好雄	柳田 康雄
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄		
参事			柳田 康雄	井上 裕弘
課長補佐	元永 浩士	城戸 秀明		

課長補佐兼管理係長

角 伸幸

角 伸幸

参事補佐兼室長補佐

井上 裕弘

井上 裕弘

参事兼課長技術補佐

井上 裕弘

橋口 達也

調査班総括

橋口 達也

橋口 達也

調査第一係長

橋口 達也

兄玉 真一

調査第二係長

佐々木隆彦

佐々木隆彦

参事補佐

木下 修

木下 修

中間 研志

中間 研志

中間 研志

新原 正典

小池 史哲

中間 研志

庶務

管理係長

黒田 一治

黒田 一治

事務主査

東 健二

鶴我 哲夫

鶴我 哲夫

吉武 祐二

調査・報告

主任技師

齋部 麻矢

秦 憲二

吉田 東明

今井 涼子

技師

吉田 東明

進村 真之

進村 真之

今井 涼子

九州歴史資料館

主任技師

齋部 麻矢

調査及び整理期間中には、近隣市町村教育委員会をはじめ、多くの方々からご協力・ご助言を戴きました。深甚の謝意を表します。



体験発掘の様子

Ⅱ 位置と環境

1 調査の経過

船越高原遺跡は浮羽郡田主丸町・吉井町の2町に跨る遺跡であり、その大部分は田主丸町に属する。地形図（25,000分の1）では図幅名「田主丸」に含まれる。

浮羽郡は福岡県のほぼ中央部に位置し、浮羽・吉井・田主丸の3町からなる。一大穀倉地帯である筑後平野の東南部にあたり、北には一級河川である筑後川が流れ、南には標高802mの鷹取山を最高峰とする耳納連山が聳える。耳納山脈は断層山脈特有の急な傾斜を持って山麓に至り、人工造林地帯、果樹園芸地帯を構成する。山麓から筑後川にかけて広がる沖積層地帯には水田耕種農業・植木・園芸等の中核産業が展開される。当地の名産は巨峰・柿・梨・苺など果物と、植木の育成・販売であり、多くの人に関わっている。北は筑後川を挟んで朝倉郡・甘木市と接し、南は耳納山脈を挟んで八女郡と接する。また東は大分県と接し、西は久留米市と接している。江戸時代には、天領であった日田へ抜ける街道として、東西に多くの往来がある商業が栄える地であった。現在も吉井町内には白壁造りの町屋が建ち並び、毎年雛祭りの時期には当時の雛人形がそれぞれの町屋で公開される。この町並の中には当時の面影がそこかしこに息づいている。

当遺跡は吉井町と田主丸町が複雑に混在する町境であり、標高22mの低丘陵から美津留川に向かって階段状に東へ落ちる地形にある。暴れ川と呼ばれるこの川の氾濫により、古来より何度も削平を受けている。調査以前はこの地形を利用して段上の水田を作っていた。これによって西に向かうに従い、上層遺構の削平が激しい状況であった。また、地山面に石が多量にはいる箇所もあり、この状況は東接する鷹取五反田遺跡の状況と近似する。

2 歴史的環境

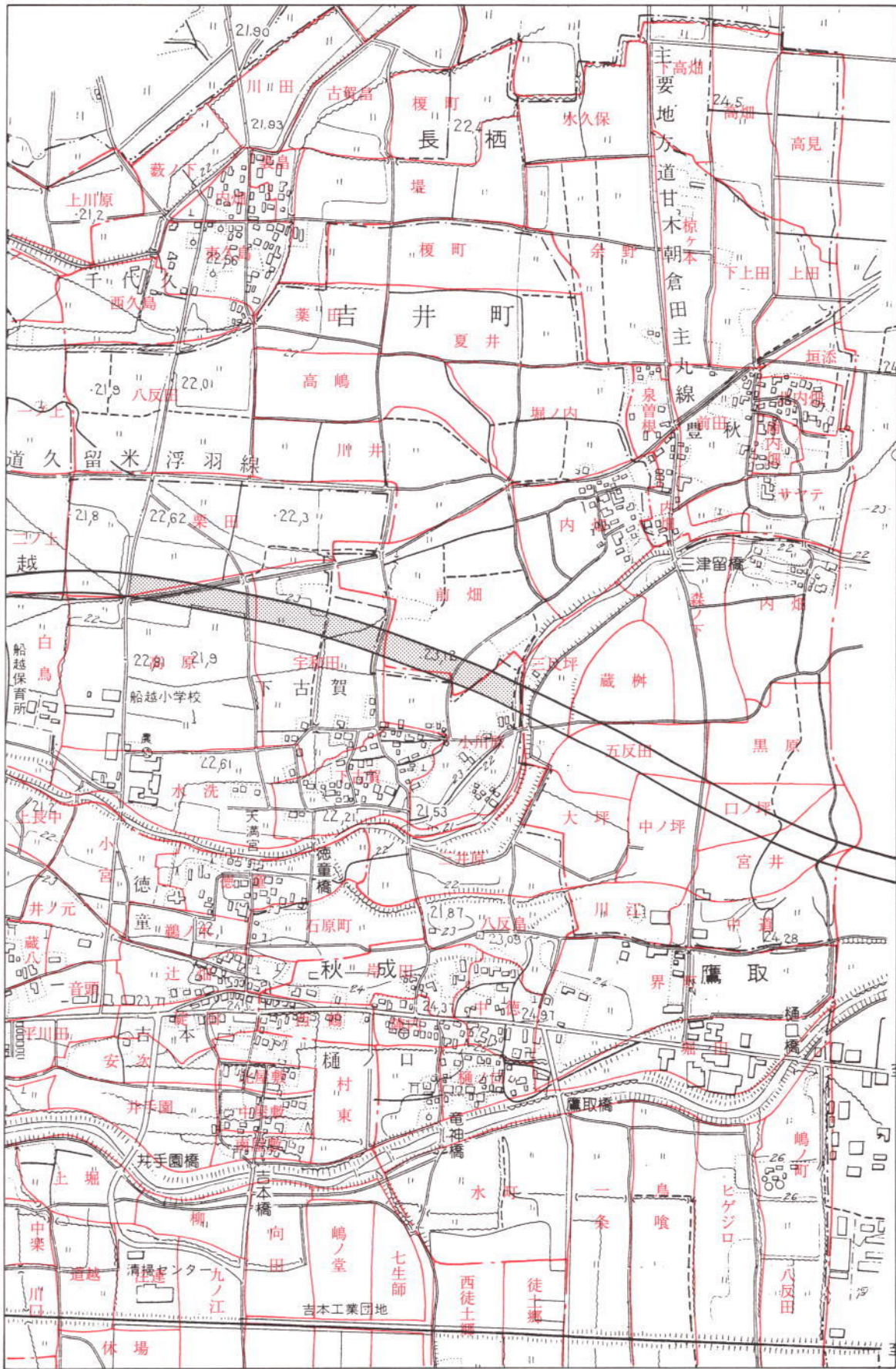
ここでは今回報告する古墳時代以降の遺跡について紹介する。

集落遺跡としては浮羽バイパス建設に伴う発掘調査を初めとして、いくつかの遺跡が確認されている。浮羽町塚堂遺跡は古墳時代前・中期の集落遺跡で、5世紀前半代にすでにカマドを持つ住居が出現している。高原A遺跡と西接する船越二ノ上遺跡では5世紀～7世紀初頭の住居群と、中世の土坑・溝が調査されている。この南北の部分も田主丸町教育委員会により、ほ場整備に伴う調査がなされている。当遺跡の南北地区も同様に調査されて、カマドを持つ住居群が検出されており、相互間の関係の検討が必要である。美津留川を挟んで東接する鷹取五反田遺跡では、5世紀前葉～中葉、6世紀中葉～末、8世紀中葉～後葉の集落が調査されている。前年度に調査報告が刊行されたが、ここでは集落の中心が時代を追って西に移動していることが確認されている。また検出された2基の土壇墓からは7世紀の年代が得られ、鷹取五反田遺跡においてはこの時期の住居跡が存在しないため、船越高原A遺跡の集落の墓地である可能性が指摘されている。これらのことを含め当遺跡の状況との関係が注目される遺跡である。東方1kmほどの地点に位置する大碓遺跡では、7世紀後半代を中心とする集落群と中世の掘立柱建物・井戸が調査されている。また、対岸の朝倉郡には、斉明天皇に関わる朝倉橘広庭宮の推定地があり、多くの掘立柱建物群が調査され、近隣でも火葬墓群が調査されている。白村江の戦いに際した宮の築造、天皇の行幸は、当時からその後も、朝

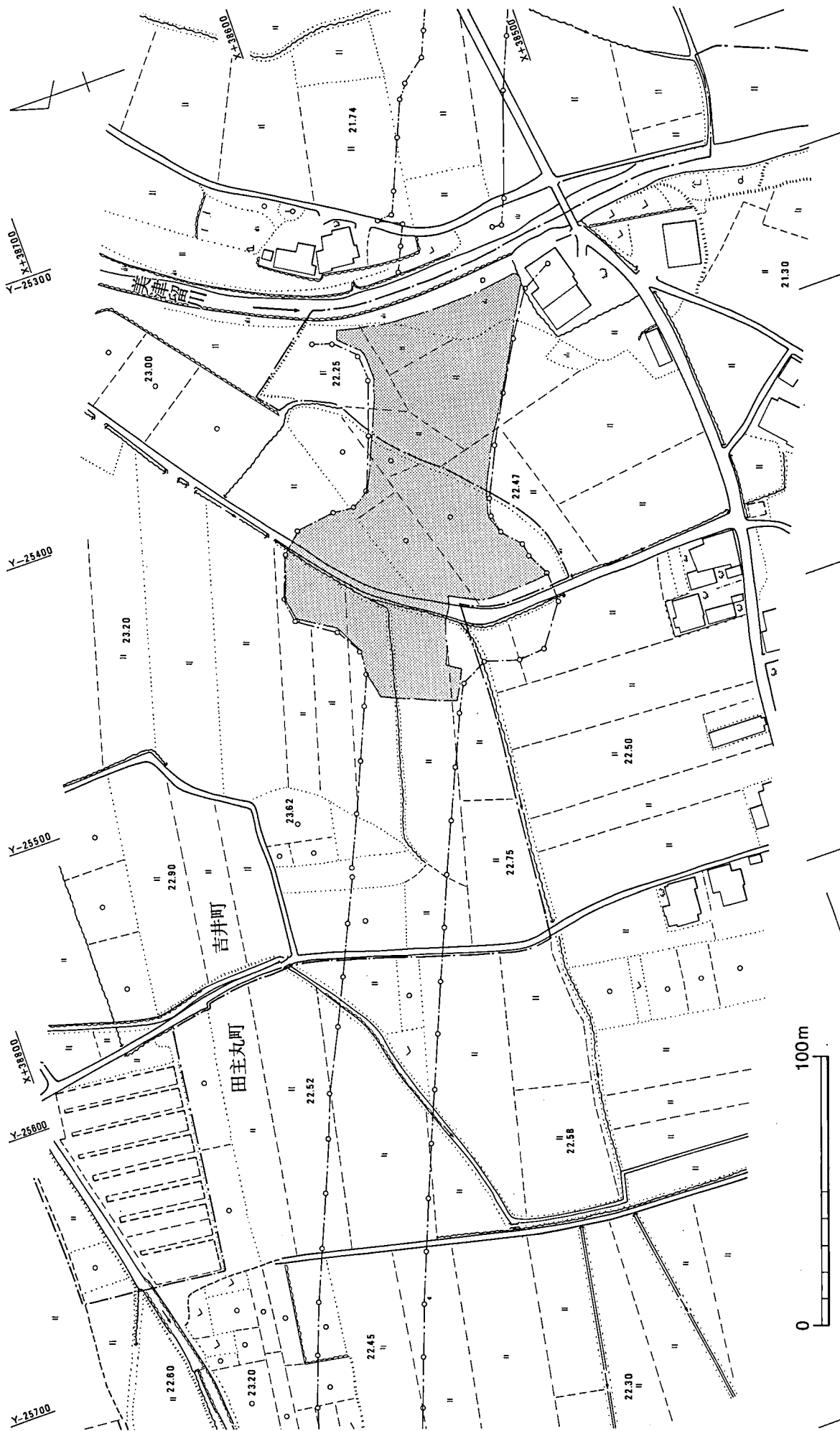


第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | |
|------------|--------------|------------|
| 1. 船越高原遺跡 | 11. 麦生古墳群 | 21. 千代久古墳群 |
| 2. 船越二ノ上遺跡 | 12. 益生田古墳群A群 | 22. 珍敷塚古墳 |
| 3. 鷹取五反田遺跡 | 13. 益生田古墳群B群 | 23. 原古墳 |
| 4. 堺町・大碓遺跡 | 14. 益生田古墳群C群 | 24. 鳥船塚古墳 |
| 5. 生葉地区遺跡群 | 15. 益永古墳群 | 25. 古畑古墳 |
| 6. 女塚古墳 | 16. 大塚古墳 | |
| 7. 水分遺跡 | 17. 大塚古墳群 | |
| 8. 寺徳古墳 | 18. 大塚清長橋古墳群 | |
| 9. 狐塚古墳 | 19. 森部平原古墳群 | |
| 10. 西館古墳 | 20. 森原古墳群 | |



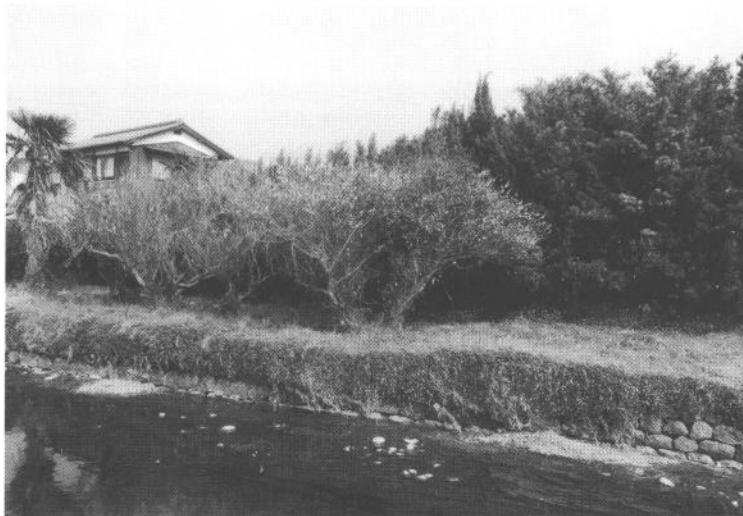
第2図 調査区周辺字図および条里の復原 (1/10,000)



第3図 調査区位置図 (1/2,000)

倉・浮羽地域に大きな影響を与えたものと考えられる。

次に墓域であるが、浮羽郡内は古墳が多数存在する。まず著名なところでは吉井町に所在する月岡古墳がある。月岡古墳は全長95 mの前方後円墳で、豪華・豊富な副葬品は国の重要文化財として一括指定されている。また装飾古墳の多さでは全国に有数の地域である。日岡古墳は同心円文を中心とする壁画を持つ装飾古墳であり、6世紀中頃とされている。浮羽町所在の塚花塚古墳・重定古墳・楠名古墳は国指定史跡となっている。このように浮羽郡内には指定されている古墳が多数存在するのである。当遺跡が所在する田主丸町に目を向けてみると、5世紀～6世紀後半を中心に築造された古墳が耳納山麓に多数存在する事が知られている。現在残っているものは300基程で、益生田古墳群・大塚古墳群・麦生古墳群・益永古墳群などいくつかの古墳群に分かれているが、これらは天井石のないものなど残存状況は良くない。この中で著名なものとしては、近年全長100 mを越す大型の前方後円墳であることが確認された田主丸大塚がある。この古墳は当初大型の円墳と認識されていたが、トレンチ調査の結果前方後円墳であることが確認され、前年度前方部の全面調査が行われた。この結果石列を墳丘に3重に巡らせており、東に石室が開口するものであることがわかった。石室部分は未調査である。また、平成6年度に調査された西館古墳は、益生田古墳群の中にある未調査の装飾古墳であった。調査の結果、天井石を外され盗掘はされていたものの、壁面に描かれた同心円・船・三角などの壁画が色鮮やかに描かれていた。東接の吉井町でも同様に、耳納山麓に屋形古墳群として国指定史跡になっている装飾古墳群が存在する。鳥船塚古墳などの名前に見られるように鳥・船・人物などが鮮明に描かれており、当時の葬送儀礼を窺わせる。耳納山麓にはこのほかにも未調査の古墳が多数存在している。これら古墳や集落遺跡は今後の調査が期待される。



美津留川の風景

Ⅲ 発掘調査の記録

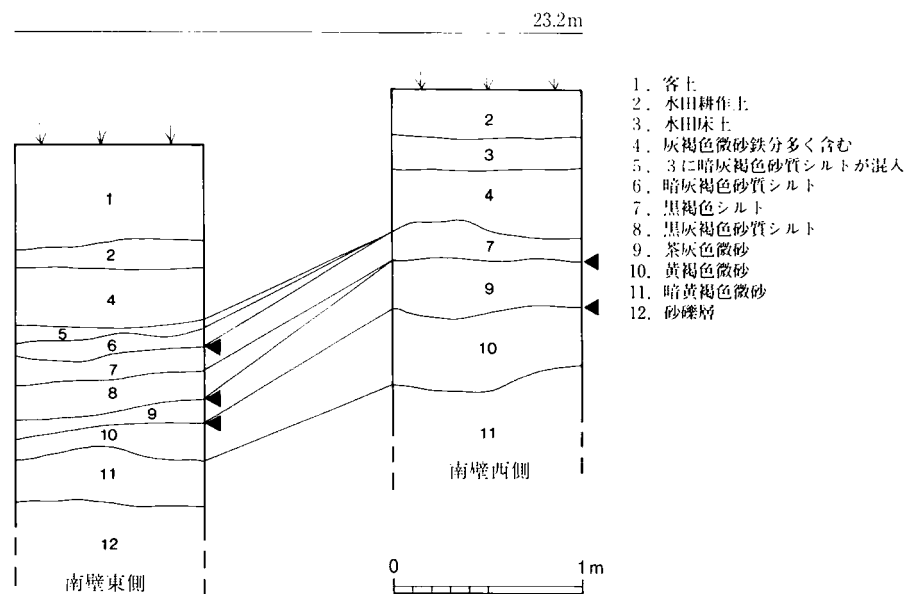
1 基本層序 (第4図)

船越高原遺跡は美津留川の堆積・浸食作用によって形成された自然堤防・後背湿地上に立地する。したがって土壌はシルト・微砂・砂礫の堆積土が基本である。

まず調査区南壁東側の堆積状況から説明を行う。第1層は農道付設時に盛られた客土、第2層は水田耕作土である。土層図を作成した場所が畦畔下に位置するため水田床土は見られない。第4層は鉄分を多く含んだ灰褐色微砂層で古墳時代後期以降の遺物をわずかに包含する。第5層は第4層と第6層の漸移層、第6層は暗灰褐色砂質シルト層で第1遺構面を被覆しており、古墳時代後期以降の包含層である。第7層は黒褐色シルト層で第6層とは明確な差がある。古墳時代以降の遺構はこの層の上面で確認できたため、これを第一遺構面に設定した。またこの層には弥生時代中期後半～古墳時代前期の遺物が多く含まれていたため下層に当該時期の遺構の存在が容易に予測できた。第8層は第7層と第9層との漸移層、第9層は茶褐色微砂層で上位の層と明確に区別できたために、この層の上面を第2遺構面に設定した。遺物は遺構上面を中心に古墳時代前期の土器が若干出土したものの、遺構はほぼ皆無に近い状況であった。またこの第9層には弥生時代中期後半を中心とする土器が若干含まれる。第10層は黄褐色微砂層で、この層の上面を第3遺構面に設定した。第3遺構面では弥生時代中期後半を中心とする時期の遺構を多く検出した。またこの層は無遺物層である。第11層は暗黄褐色微砂層、第12層は大小の円礫を中心とする砂礫層である。

調査区西側は自然堤防面に位置しており、東側とは様相が若干異なる。旧水田面にて土層図を作成したために第2層水田耕作土、第3層水田床土が存在する。第4層は東側と同様の状況である。第5層・第6層は認められないのは浸食作用が大きく働いた結果である。第7層黒褐色シルトは土層図を作成した場所付近では認められたが、位置によっては堆積しない場所もある不安定な層である。よって第7層上面での遺

構検出は行わなかった。第8層は認められず第7層の下には第9層が堆積する。第9層はほぼ全体で認められる安定した土層であり上層との分離も容易であったため、第9層の上面を第1遺構面に設定した。第10層以下は東側とほぼ同様の状況であり、したがって第10層の上面を第3遺構面に設定した。



第4図 船越高原A遺跡基本層序模式図 (1/40)

2 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版4-1、第5図)

調査区北部の壁際で検出した。長軸長4.3m、短軸長4.1mのほぼ正方形プランを有し、コーナー部は角を持つ。南壁中央やや東よりにカマドを付設し、他の住居とは異なった様相を呈する。床面までの深さは0.15m程しか残存していない。埋土は暗黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の支柱穴柱痕跡を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西0.9m・0.75m、南北0.9m・0.55mで歪な配置になり、P1が南西に寄る。柱掘形は0.4～0.5mの円形で、深さ0.15mを測る。柱痕跡は柱直径0.15m前後で、深さ0.25mを測る。P1付近には炭が0.3m程の範囲に広がっており、カマドから掻き出されたものと思われる。貼り床は灰黄色粘土を8cmの厚さで全面に行う。床下からはピットのみで土坑・溝等は検出されなかった。

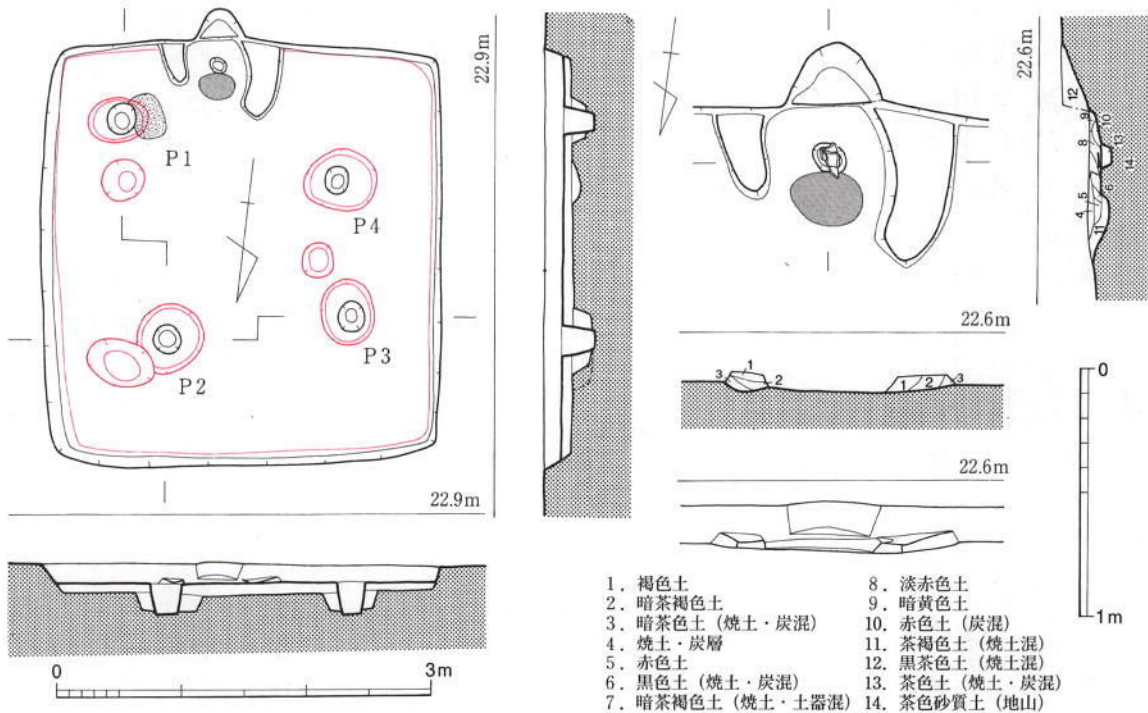
1号竪穴住居跡カマド (図版4-2、第5図)

南壁に直接貼り付られるもので、袖長は左が30cm・右が50cm、高さは5cmしか残存していなかった。埋土には焼土・炭が含まれる。底は住居床面と同レベルであるが、焚き口付近に深さ5cmほどのピットを穿っており、焼土混じりの茶褐色土が堆積する。上面は赤変硬化している。中央に支脚の抜き取り孔があり、孔を塞ぐように甕の胴部片が置かれていた。煙道は壁を床上5cm程から壁に掘り込み、斜め上方に緩やかに立ち上がりながら住居外に延びる。長さ25cm分を検出した。

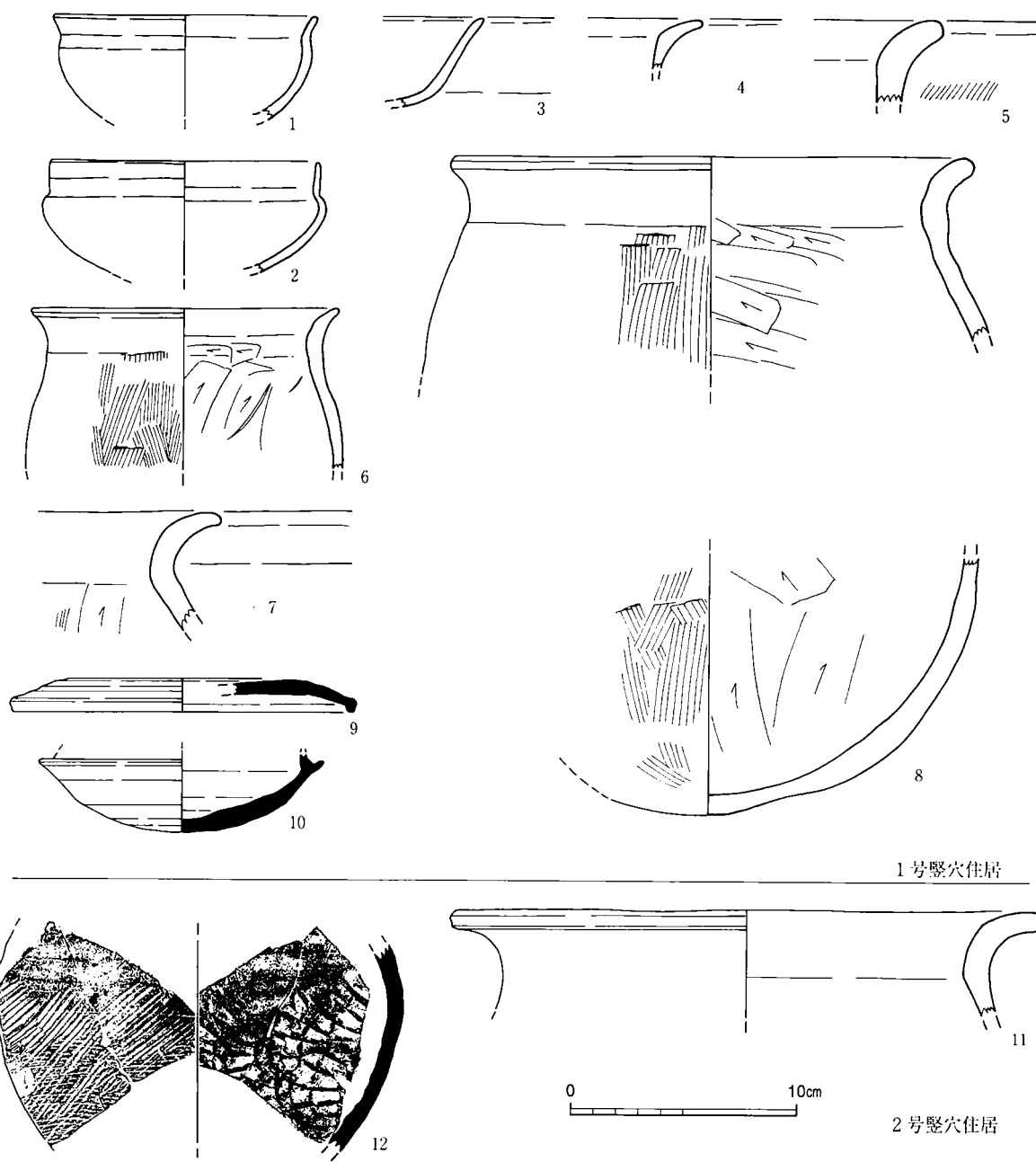
出土土器 (図版49、第6図)

土師器

壺(1～3)いずれも摩滅が激しく調整不明。1は口唇部を外反させ、体部は丸みを帯びる。2



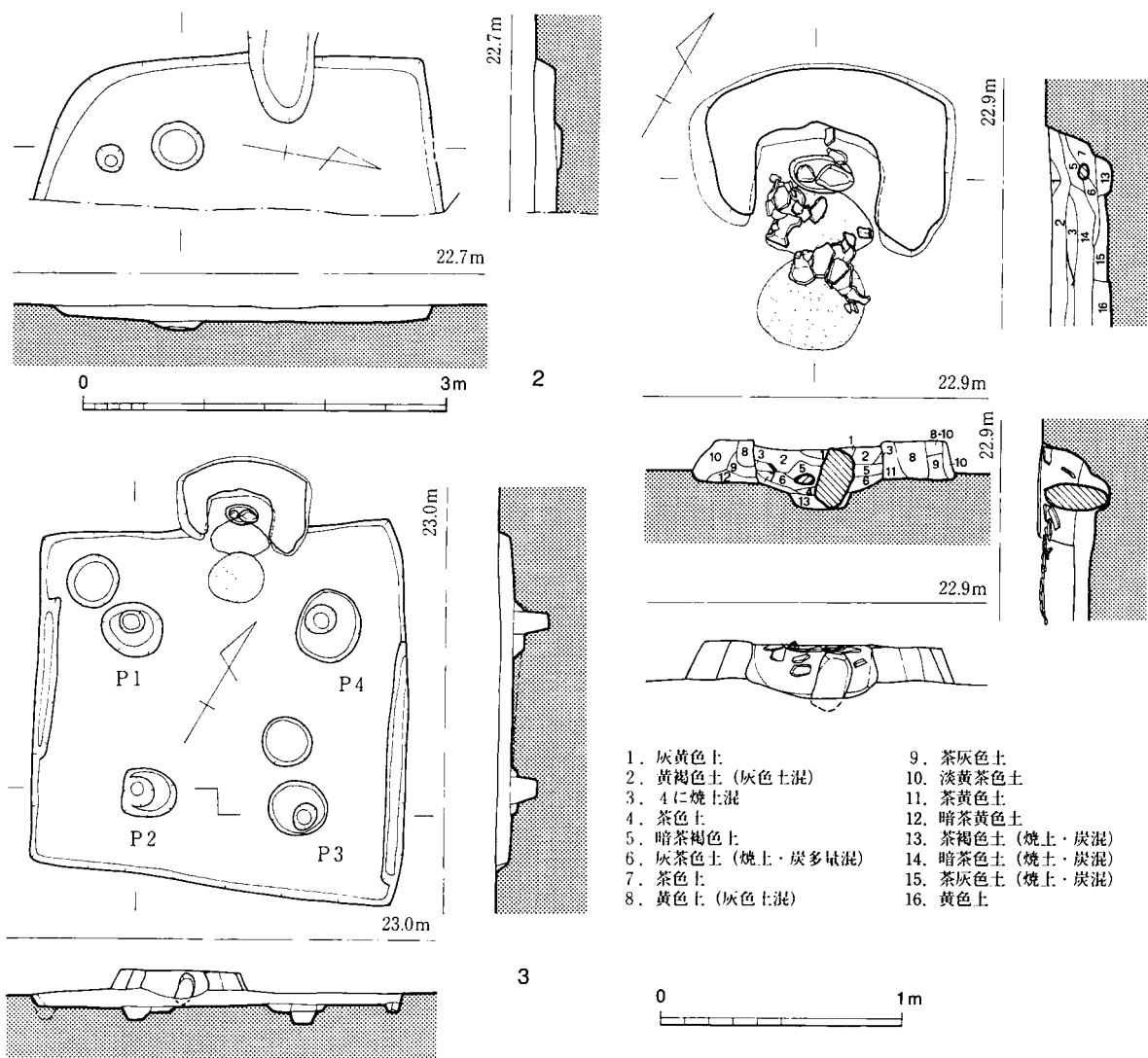
第5図 1号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第6図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

は中位に蓋受けの段を持ち、口縁部は直立する。3は口縁が大きく開くもので、体部は緩やかに立ち上がる。復元口径11.3・11.4cm。

甕(4~8) 4・5は胴張らないタイプで口縁が肥厚する。4は摩滅が激しく調整不明。5・7は内面をケズリ、5は外面に僅かにハケ目が残る。6は口縁部の屈曲は小さく、胴は張らないもの。器肉は全体に変化がない。外面をタテハケ、内面をタテケズリで調整し、後に口縁部外面を粗くナデる。外面は火を受けて一部赤色化する。復元口径13.7cm。8は胴部中位を欠くが同一個体である。口縁を緩やかに外反させ、頸部を肥厚させる。底部は丸底に造りやや歪む。外面は粗いタテハケで調整し、内面は上位を横位、下位を縦位のケズリを行った後、口縁部をヨコナデ調整する。外面下



第7図 2・3号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

位に黒斑を有する。復元口径22.2cm。6はカマド内から出土、8は埋土・床直上・カマド内からの出土資料が接合できた。

須恵器

蓋 (9) 端部を折り曲げる蓋である。天井部外面はヘラケズリ調整。復元口径15.2cm。

坏 (10) 返りを有する坏身で、端部を欠く。底部は外面が回転ヘラケズリ、内面はナデ、口縁部周辺はヨコナデする。復元最大径は12.6cm。

2号竖穴住居跡 (図版4-3、第7図)

調査区北部、1号竖穴住居跡の北側で検出した。2号溝に切られる。全体の半分以上が調査区外に広がると考えられる。現存するプランでは南北長が3.4mである。残存状態は悪く、深さ0.1m程で床に達した。埋土は暗黄褐色土中心の自然堆積である。床を精査したが支柱穴は検出できなかつ

た。カマドは確認できなかったが、残存プランから推測して調査区外に存在すると思われる。

出土土器 (図版49、第6図)

土師器

甕 (11) 口縁部小片である。摩滅が激しく調整は不明。外面は火を受けて赤色化する。復元口径26.0cmを測る。カマド内からの出土。

須恵器

鉢 (12) 体部片で、外面は細かい平行叩きで調整し、内面には復元径5.5cmの放射状に文様をつけた大きめの当て具痕が付く。口縁部付近は両面共にヨコナデ調整を施す。

3号竪穴住居跡 (図版5—1、第7図)

調査区中央北寄りで検出した。7・9号竪穴住居跡を切る。カマド内の焼土を上層で確認したが、住居のプランを確認できず掘り下げたため、カマドのみ浮いた状態になってしまった。南北長2.8～3.2m、東西長3.0mの横台形状のプランを有する。プラン検出面は貼り床面と見られ、茶灰色粘質土が約0.1mの厚さで全面に貼られていた。貼り床下でP1～P4の主柱穴を確認し、その全てで柱痕跡を確認した。柱間寸法は東西1.43m・1.4m、南北1.4m・1.6mで歪な配置になる。掘形は0.5m前後の円形を呈し、深さ0.1m前後、柱痕跡は0.15mで、深さは0.15～0.3mである。西壁際で長さ1.3m、深さ0.06～0.1mの小溝を、東壁際で長さ2.0m、深さ0.08mの小溝を検出した。

3号竪穴住居跡カマド (図版5—2、第7図)

北壁に付設させるカマドは、全体が住居外に突出する。袖と奥壁は粘質土で構築し、袖長は左袖30cm・右袖50cmである。底は奥壁付近を住居床面より5cm程掘り窪めており、中央奥壁寄りに石の支脚を据える。焚き口付近は幅50cm・奥行25cmほどが赤変しており、その全面に炭が広がっていた。その他に焼土や灰の堆積層は見られない。袖内壁上部は赤変硬化し、奥壁も若干赤変する。埋土は単純堆積で、清掃した可能性もある。支脚最上と同レベルで土師器甕が出土した。

出土遺物 (図版49、第8図)

土師器

鍋 (1・2) 口縁を大きく外反させ、端部付近には平坦面を造る。2点とも内面はヨコと斜のケズリで調整し、1の外面には磨きが残る。外面に火を受けて煤が付着しており、器面の劣化が激しい。

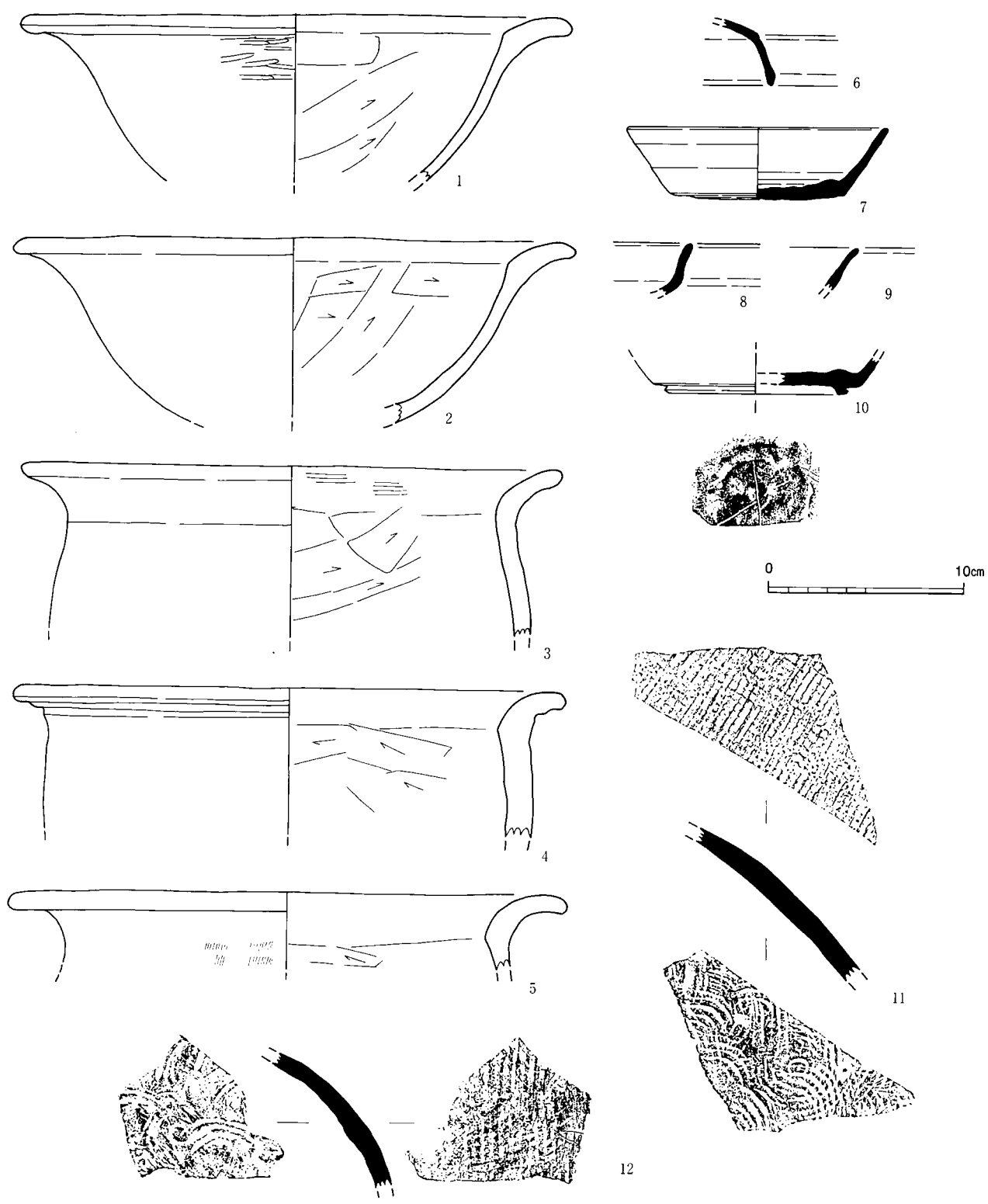
甕 (3～5) 甕口縁部片。全て摩滅のため外面は調整不鮮明。4・5は口縁を大きく外反させ内面に稜を造る。4は端部付近に段を有する。内面はヨコまたは斜のケズリで調整する。5は口縁部内面にヨコハケを施しており、煤が付着する。復元口径は27.4・28.0・28.4cmを測る。3はカマド内からの出土。

須恵器

蓋 (6) 天井部は回転ヘラケズリし、他は回転ナデ。体部と天井部の境に沈線が一条巡る。

坏 (7～10) 体部が底部から直線的に立ち上がるもので、外底部はヘラ切り離し未調整である。復元口径9.4cm、復元底径9.0cm、器高3.6cmを測る。8・9は口縁部小片。9の残存部は回転ナデ調整。10は高台付き坏。低い高台はやや中央依りに貼付し、端部断面は若干外に跳ね上がる形になる。回転ナデ調整で、外底部に「X」のヘラ記号がある。復元高台形9.4cm。

甕 (11・12) 胴部片。双方とも外面は格子叩き、内面は同心円の当て具痕が残る。12は貼り床下



第8图 3号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

からの出土。

4号竪穴住居跡 (図版5—3、第9図)

調査区中央部で検出した。長軸長5.0m、短軸長4.7mのプランを有する長方形の住居で、コーナー部は丸みを帯びる。埋土は暗黄褐色土中心の自然堆積である。北壁やや東寄りにカマドを付設する。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.7m、南北2.45m・2.4mで、いずれも画コーナーを結んだ対角線上に位置する。掘形は直径0.6～0.7mの円形で、深さ0.25～0.35mを測る。柱痕跡は0.15cm前後で深さ0.35～0.65cmを測る。貼り床下からは浅いピットと土坑を検出した。

4号竪穴住居跡カマド (図版6—1、第9図)

カマドは北壁を僅かに掘り込み、粘質土を貼り付けて袖と奥壁を構築する。袖長は左袖45cm・右袖50cm、高さは15cm残存している。埋土には焼土や炭が含まれ、上層の赤色土は崩落した天井部と思われる。底は住居床面より6cm程掘り窪め、中央に石の支脚が残る。支脚の前面には底部に赤色土が堆積し、黄褐色土の間層の上面が若干赤変硬化しており、焼土・灰の粘質層が堆積する。この層の上面は平坦であり、直上に支脚を巻くように土師器甕片が置かれていた。これから2時期の使用面があったことが窺える。煙道は底より25cm上位から壁に掘り込み、トンネル状に住居外の40cm先に抜ける。煙道の直径は出口付近が12cm、カマド奥壁では22cmを測る。

出土遺物 (図版49、第10図)

土師器

坏(1・2) 1は体部を丸く造るもので、端部が若干肥厚する。外面に丹塗りの痕跡が残り、内面口縁部には工具痕が見える。2は口縁を直立させ、端部のみ内傾させる。1・2共に外底部は手持ちヘラ削りで丸く造るが、摩滅のため単位は見えない。復元口径10.4・10.6cm。1はカマド内から、2は貼り床下ピットP5からの出土。

高坏(3) 口縁がわずかに外反し大きく開くタイプの坏部。摩滅のため調整は不明。復元口径16.0cm。カマド内からの出土。

甕(4～11) 5は頸部を肥厚させ、口縁は緩やかに外反する。4・6～9は口縁部を肥厚させ、内面に稜を持つ。4は外面ナデ、内面屈曲部付近はヨコケズリし、下位はタテケズリを施す。4・6の外面一部火を受けて赤色化する。7は底部をレンズ状に造り、外面をタテハケで調整し、内面は後部によってナデる。底部は内外面ともナデ調整。外面は全面火を受けて劣化している。8・9は外面にタテハケ、内面はヨコケズリを施す。10は丸底の底部で、外面にハケ目が残り、火を受けて僅かに赤色化する。11は口唇部を大きく外反させ、内面はヨコケズリで稜を造る。9・10以外の復元口径は12.8・12.8・13.0・12.8・13.6・22.0cm。4・6～9・12はカマド内から、5・9～11はカマド周辺からの出土。

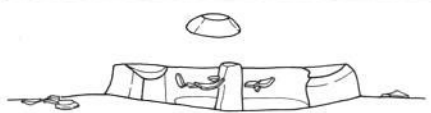
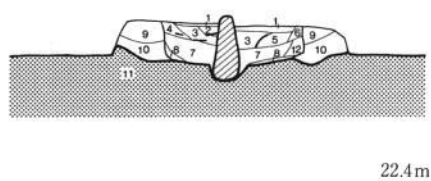
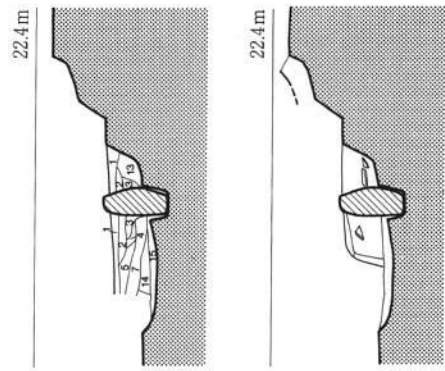
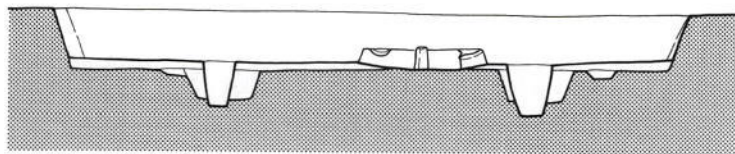
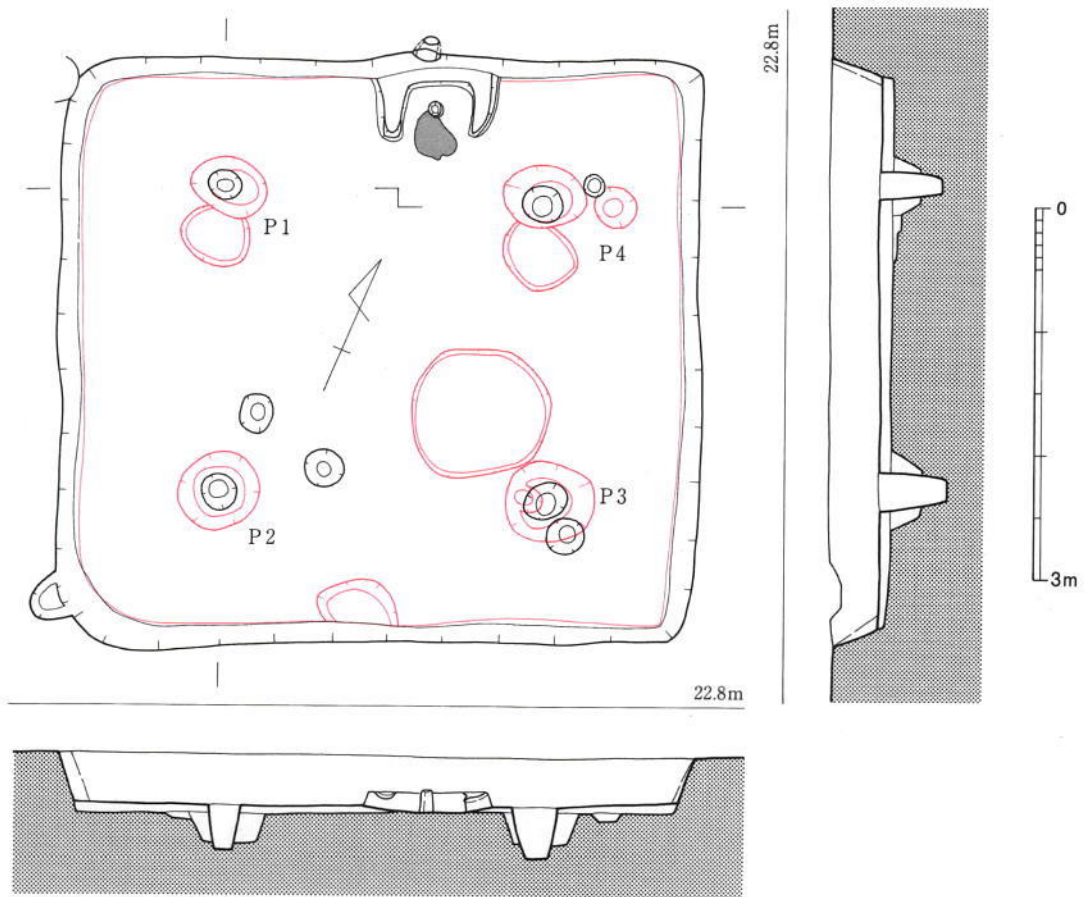
須恵器

坏(12) 口縁部片で、体部が直立するものである。全面回転ナデ調整で、外面は器面の凹凸が激しい。カマド内からの出土。

5号竪穴住居跡

(図版6—2、第11図)

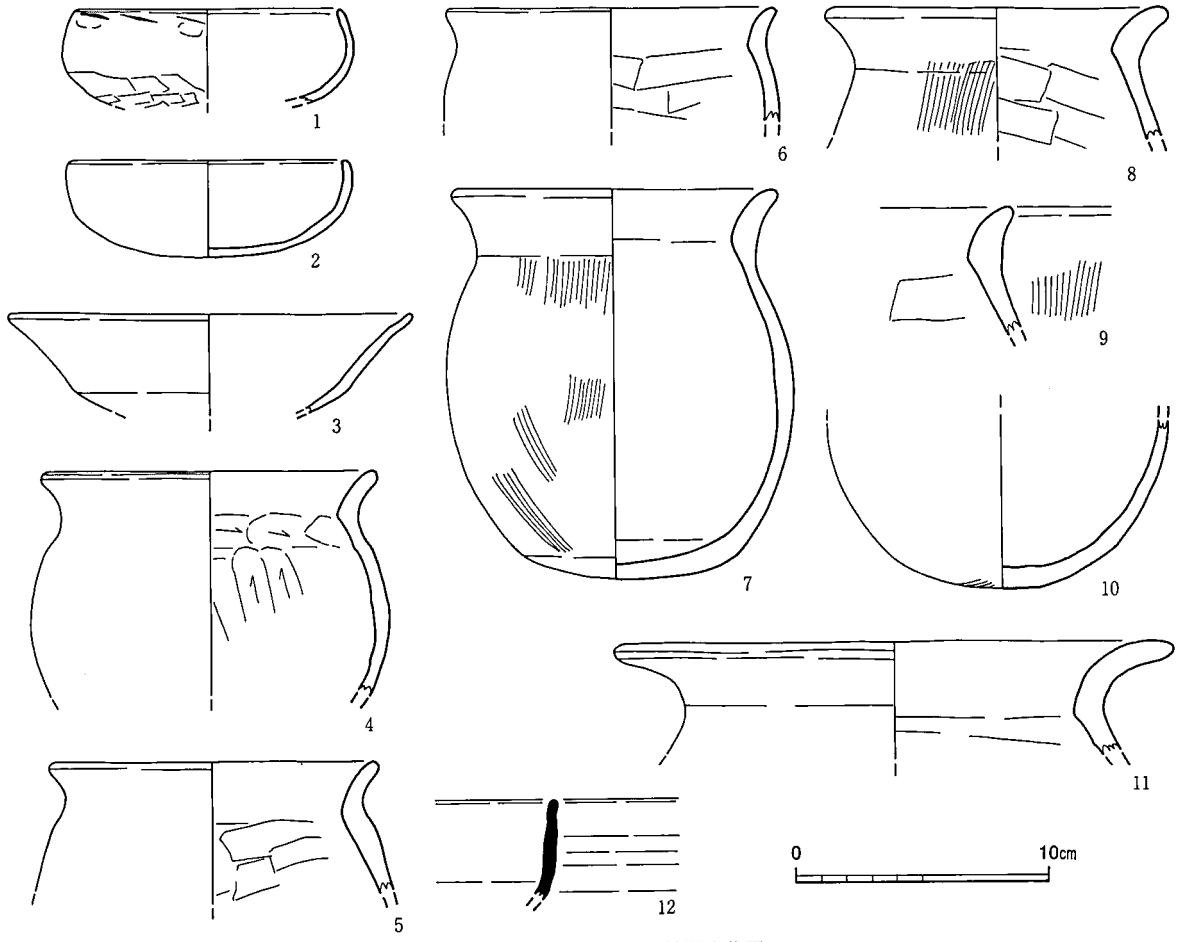
調査区中央部、4号竪穴住居跡の南、11号竪穴住居跡の西で検出した。切り合い関係はない。長



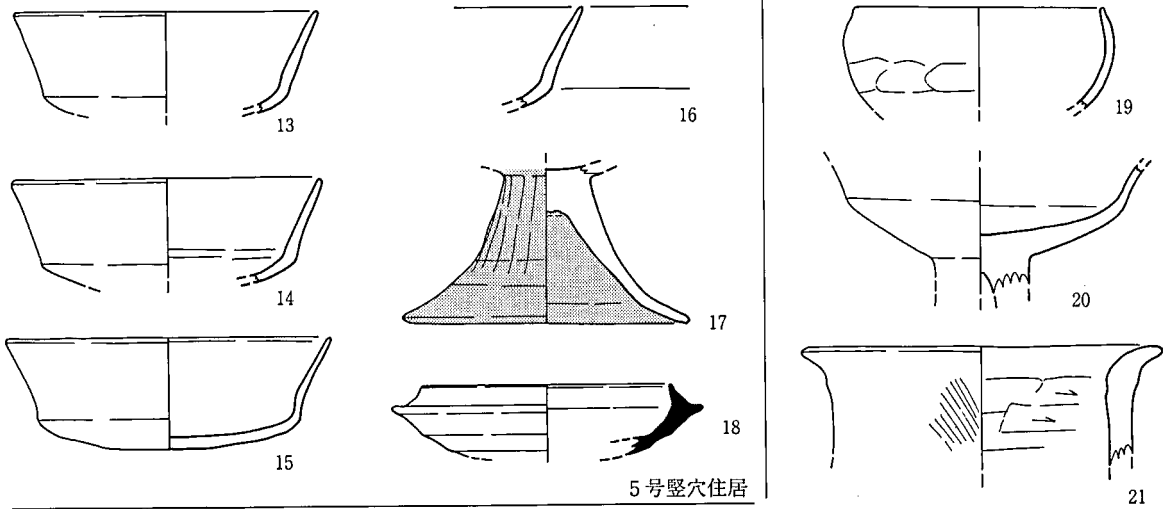
- 1. 黄褐色土
- 2. 1に焼土・炭混
- 3. 茶褐色土
- 4. 暗茶色土
- 5. 黒褐色土（焼土多量混）
- 6. 赤色土
- 7. 焼土・炭粘質層
- 8. 7+黄褐色砂質土
- 9. 黄褐色土（焼土混）
- 10. 茶褐色粘質土
- 11. 暗茶色粘質土
- 12. 茶色土（焼土混）
- 13. 4に炭混
- 14. 7に炭多量混
- 15. 赤色土



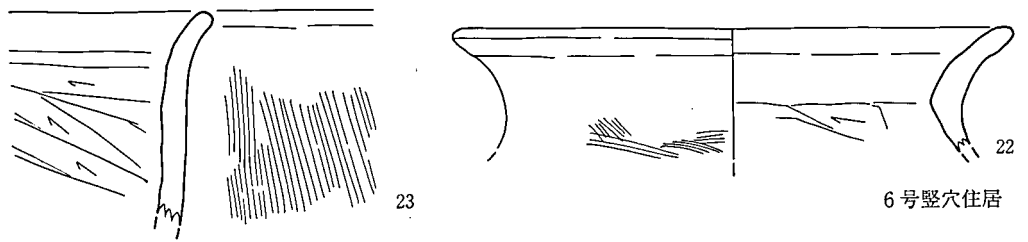
第9図 4号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



4号竖穴住居

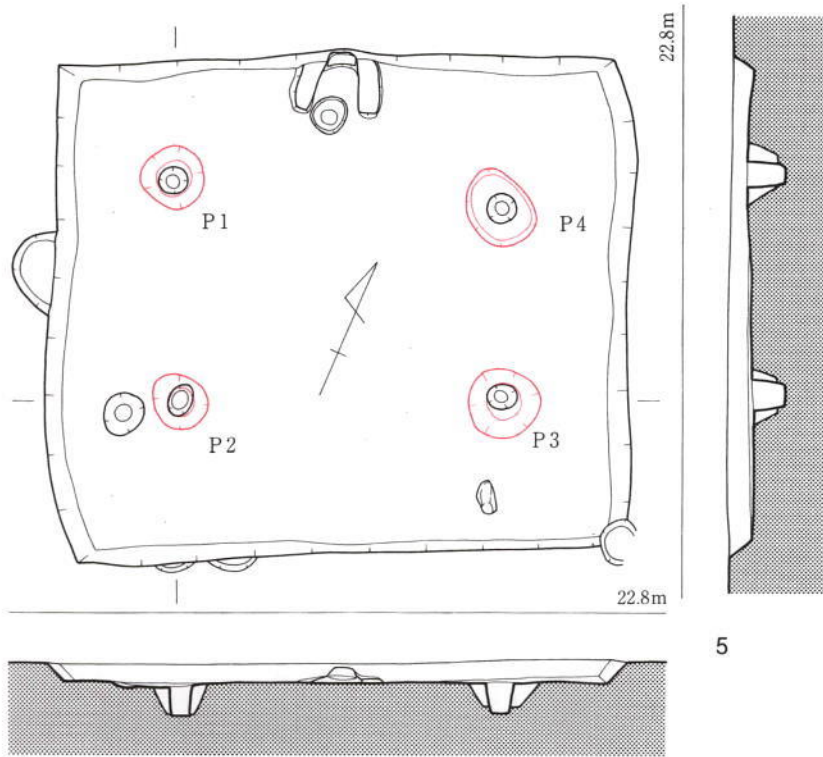


5号竖穴住居

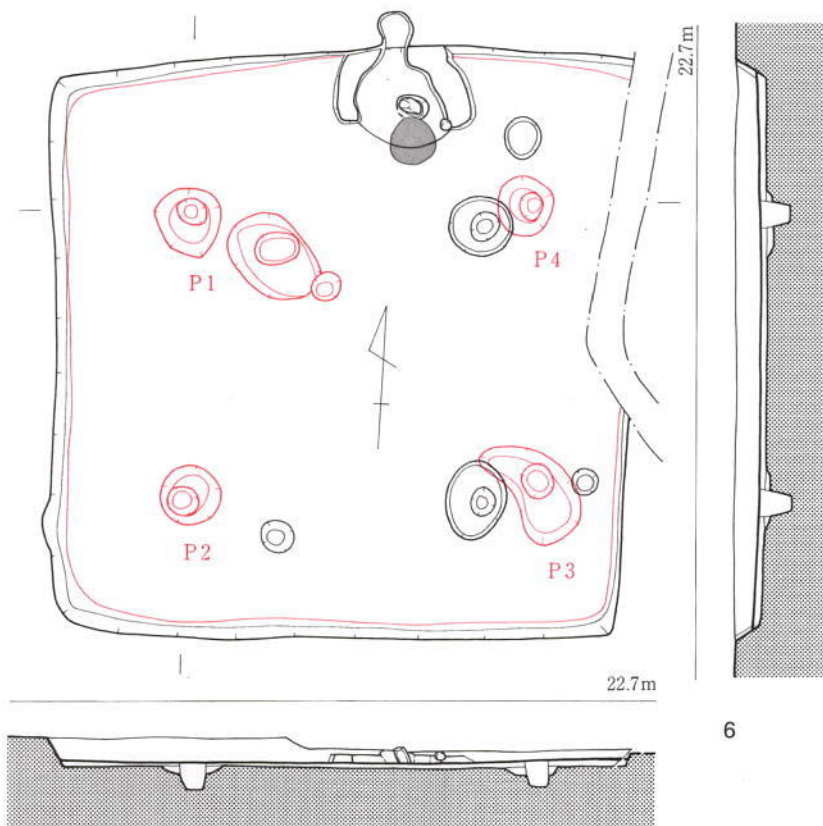


6号竖穴住居

第10图 4~6号竖穴住居出土土器实测图 (1/3)



5



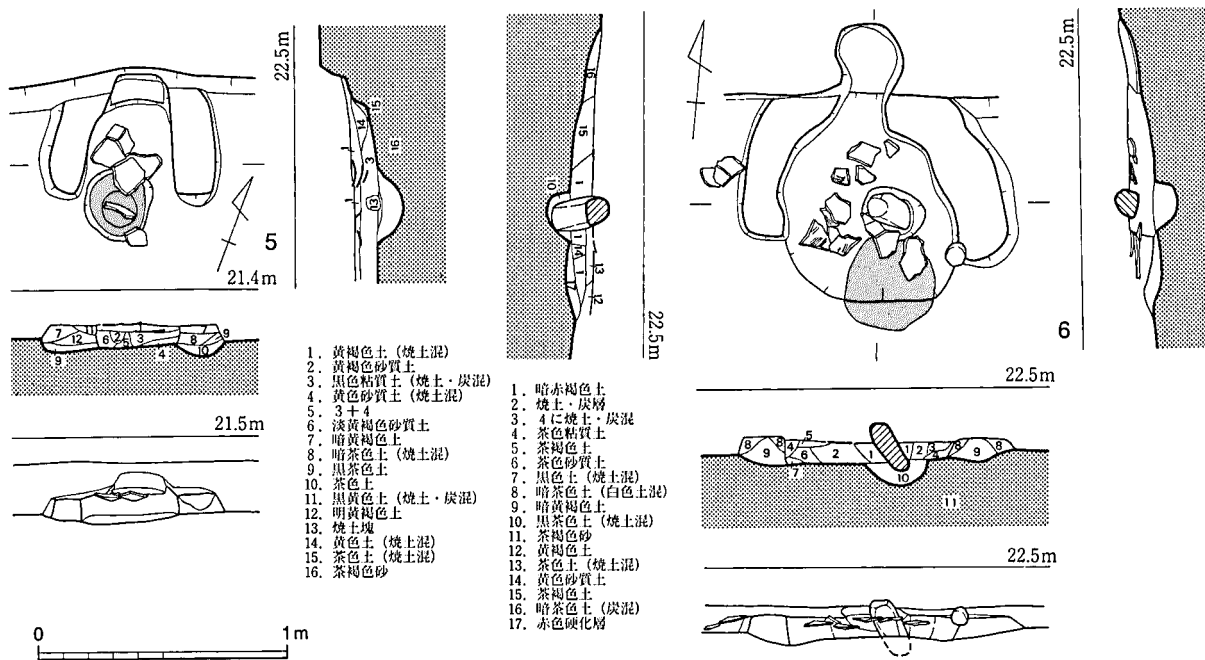
6

軸長4.5 m、短軸長4.0 mの横長長方形のプランを有し、コーナー部は角を持つ。カマドは北壁中央に付設される。床までの深さは0.13~0.2 mで残存状況が悪く、埋土は暗黄褐色土の自然堆積である。貼り床はなく、床面でP1~P4の支柱穴を検出した。柱間寸法は東西2.6 m、南北1.5 m・1.8 mで、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。掘形は直径0.45~0.65 mの円形で、深さは0.3 cm前後を測る。柱痕跡は直径0.15 m前後で、深さ0.25~0.30 mを測る。床直上には0.2 m前後の石が置かれるが、使用については不明である。他の住居と考えあわせると、カマド構築に使用された可能性も考えられる。床下から土坑や溝の検出はなかった。

5号竪穴住居跡カマド
(図版6-3、第12図)

北壁に直接袖を貼り付けて構築される。袖は厚く、長さは左袖40 cm・右袖43 cm、高さは7 cm残存する。底は住居床面と同じレベルであるが、焚き口に縦30

第11図 5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第12図 5・6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

cm、横27cm、深さ11cmの窪みがあり灰色土混じりの赤色土が堆積する。上面は硬化しているが焼土や灰の堆積層はない。カマド内埋土は焼土・灰混じりの黒色粘質土が厚く堆積しており、清掃後に意図的に埋められたと思われる。埋土上層には土師器甕の胴部片が散乱していたが、接合不可能で図示できなかった。支脚や抜き取り孔は見られない。奥壁に高さ7cmほどの段を有し、煙道と思われる。壁は直立し残存部においては屋外に延びていない。

出土遺物 (図版49、第10図)

土師器

坏 (13~16) すべて摩滅が激しく調整は不明。15は体部に蓋受けの段を有する。復元口径は11.8・12.3・12.8cm。床直上からの出土。

高坏 (17) 脚部片で全面に丹塗りを施す。外面はタテケズリで面取りし、端部は一部黒色化する。復元底径11.0cm。床直上からの出土。

須恵器

坏 (18) 外底部を回転ヘラケズリし、天井部内面は回転ナデでやや平坦に仕上げる。外面には焼成時の灰が被る。復元口径11.0cm。床直上からの出土。

6号竪穴住居跡 (図版7-1、第11図)

調査区中央部壁際、4号竪穴住居跡の東、11号竪穴住居跡の北で検出した。東辺は調査前のトレンチによって掘り抜いてしまったため、プランの2/3程が検出できなかった。一辺4.7mの方形プランを有し、コーナー部は角を持つ。北壁やや東寄りにカマドを付設する。床面までの深さは最大0.2mで、埋土は黄褐色土中心の自然堆積である。茶灰色の粘質土で全面に貼り床を施す。床面でP1~P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.8m・2.9m、南北2.2m・2.3m。掘形は直径0.45m前後の円形で、P3のみが不整形なプランを有する。しかし

柱痕跡は各コーナーを結ぶ対角線上にほぼ位置していることから、柱間を合わせるために若干掘形を広げたものかもしれない。深さは0.1cm前後。柱痕跡は直径0.15m前後で、深さ0.25mを測る。貼り床下にはピットが4個あるのみで、土坑・溝等は存在しなかった。

6号竪穴住居跡カマド（図版7—2、第12図）

住居北壁に直接貼り付けられる。袖長は左袖56cm・右袖65cm、高さは8cm残存する。底は住居床面より3cmほど掘り窪め、中央やや東寄りに石の支脚を立てる。焚き口付近には赤色土が堆積し上面は硬化する。直上には焼土・灰の粘質層が厚く堆積する。底より10cmほど上面には土師器甕の胴部片が散乱しており、恣意的に埋められたものかもしれない。また東袖焚き口付近に直径8cmほどの石が埋め込まれており、両袖とも焚き口に袖石を使用した可能性も考えられる。煙道は底から3cm程の高さより奥壁を掘り込み、底は緩やかに立ち上がって住居外に延びる。約30cm長を検出した。

出土遺物（第10図）

土師器

埴（19）体部が内湾し、端部を僅かにつまみ上げる。摩滅が激しく、外面中位に手持ちヘラケズリが僅かに残るのみ。復元口径9.7cm。

高坏（20）坏部下位のみ残存。摩滅が激しく調整不明。

甕（21・22）21は胴が張らないものである。22は口縁を大きく外反させ、内面に稜を持つ。外面はハケ目、内面はヨコもしくは斜のケズリで調整する。22のケズリはややランダムで、口縁部に煤が付着する。復元口径13.0・22.0cm。22は床直上からの出土。

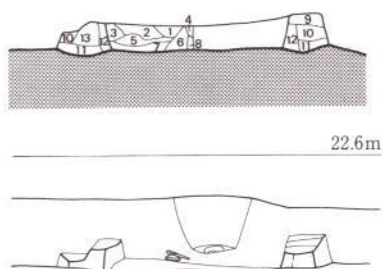
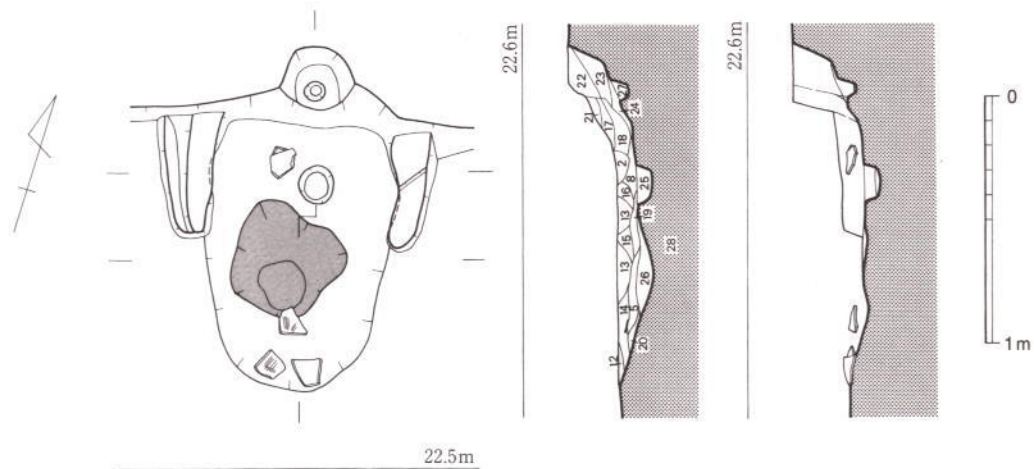
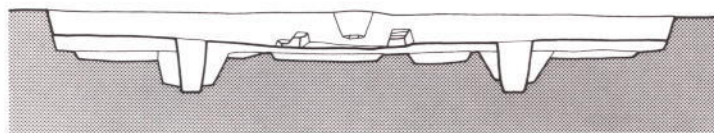
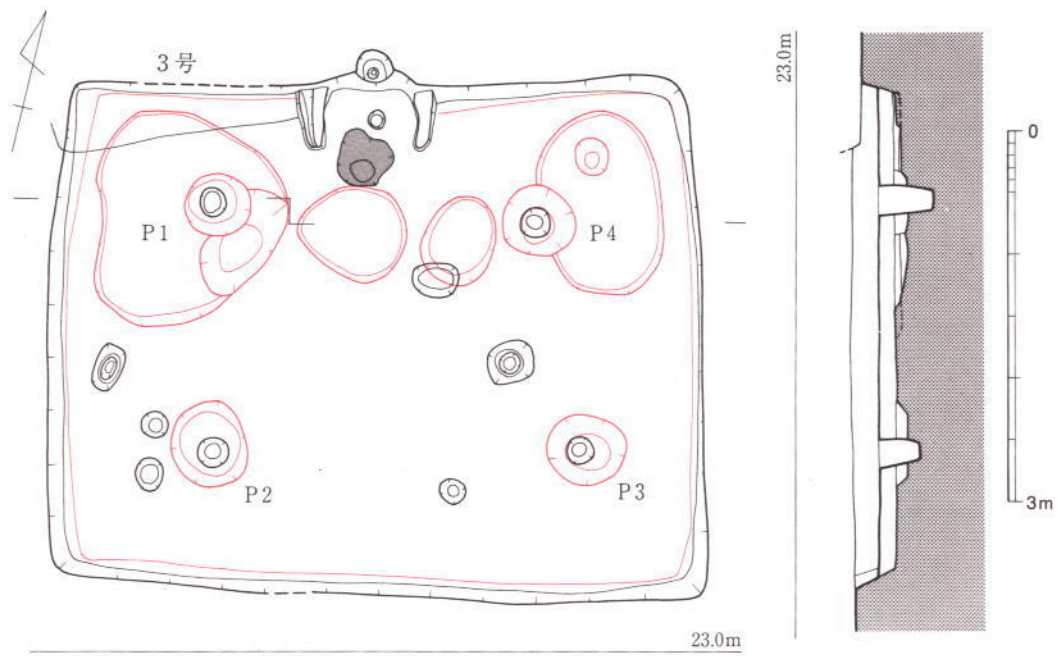
甌（23）口縁部片で、端部を外反させるものである。外面はタテハケ、内面はヨコと斜位のケズリ、口縁部は横ナデで調整する。

7号竪穴住居跡（図版7—3、第13図）

調査区西部北側、3号竪穴住居跡の南で検出し、西北部を3号住居に切られる。長軸長5.2m、短軸長4.2mの横長長方形プランを有し、コーナー部は角を持つ。北壁中央にカマドを付設し、床面までの深さは0.22m、床下までの深さは0.35mを測る。黄色土が埋土最上層を被覆し、以下は黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4までの4本の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.6m・2.9m、南北1.9m・2.0mで、P4が若干内側に寄るが、すべて住居各コーナーの対角線上に位置する。掘形は0.45～0.6mの円形で深さ0.25mを測る。柱痕跡は直径0.15～0.18mで、深さ0.4mを測る。貼り床は茶褐色の粘質土で全面に施しており、床下では土坑・ピットを検出したが、いずれも5cm以下の浅いものである。

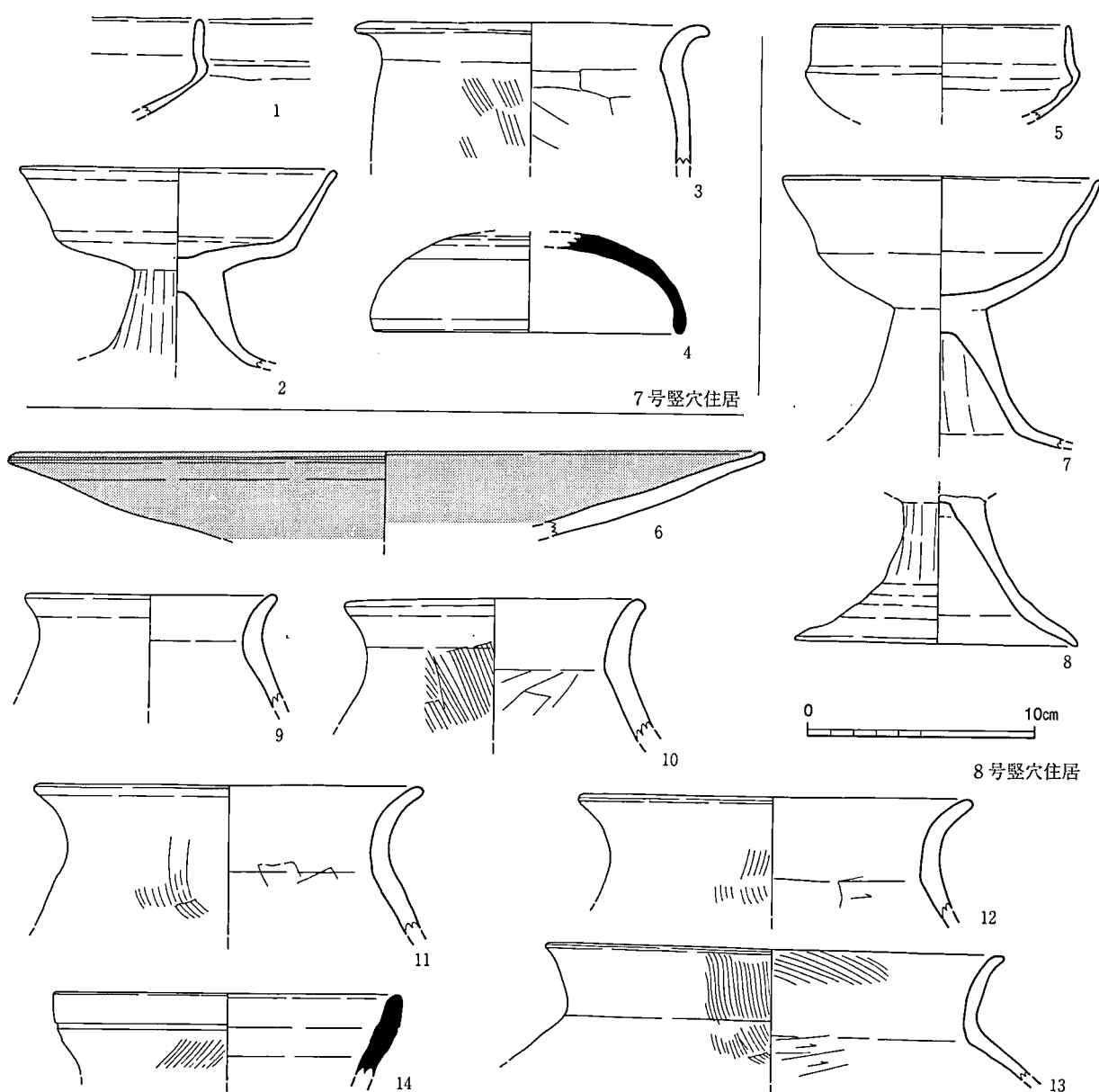
7号竪穴住居跡カマド（図版8—1、第13図）

北壁に袖を直接壁に貼り付ける。袖は薄く、長さ48cm、高さは15cmしか残存していなかった。底は住居床面より5cmほど掘り窪めており、中央には支脚の抜き取り孔がある。孔前面は赤色土が厚く堆積し、上面南寄りに硬化面が見られた。硬化面上には焼土・灰の堆積層が見られる。埋土中にも焼土や炭が混じる。また、カマド内とその前面の埋土中では土師器甕の胴部片が住居床面レベルで出土したが、少片のため接合不可能で図示できなかった。煙道は底より8cm上位から壁をピット状に掘り込み、強い角度で住居外上方に立ち上がる。煙道床に直径13cm、深さ5cmのピットが穿たれており、柱を建てた覆い状の施設があったことも考えられる。



- | | |
|----------------|---------------------|
| 1. 茶褐色土 | 15. 茶黄色土 |
| 2. 1に焼土混 | 16. 15に炭混 |
| 3. 暗茶色土 (焼土塊混) | 17. 明茶色土 (焼土・炭混) |
| 4. 焼土・炭粘質層 | 18. 赤茶色土 (焼土塊・炭混) |
| 5. 茶黄色砂質土 | 19. 黄色粘質土 (焼土混) |
| 6. 5に黄茶色砂混 | 20. 5に黄茶色砂混 |
| 7. 焼土・炭層 | 21. 黄褐色土 |
| 8. 暗黄色土 | 22. 茶褐色土 (赤黒色土混) |
| 9. 黄茶色土 | 23. 暗茶色土 (赤黒色土混) |
| 10. 暗茶灰色土 (炭混) | 24. 暗茶褐色土 (焼土・炭多量混) |
| 11. 黒茶色土 | 25. 茶色土 (焼土・炭混) |
| 12. 黄色土 | 26. 赤色土 |
| 13. 黄褐色土 (焼土混) | 27. 茶褐色土 |
| 14. 暗茶色土 (焼土混) | 28. 黄茶色砂 |

第13図 7号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第14図 7・8号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (図版49、第14図)

土師器

坏 (1) 蓋受けの段を有し、口縁は直立する。摩滅のため調整は不明。床面直上からの出土。

高坏 (2) 摩滅が激しく、脚部にタテケズリの面取りが僅かに見えるのみである。復元口径13.9 cm。床面直上からの出土。

甕 (3) 胴の張らないタイプのもので、外面をハケ目、内面をヨコまたは斜のケズリで調整する。頸部内面の稜は鈍い。復元口径15.6 cm。床面直上からの出土。

須恵器

坏蓋 (4) 端部が肥厚し内湾させる。天井部外面を回転ヘラケズリする。復元口径14.0 cm。

8号竪穴住居跡 (図版8—2、第15図)

調査区西北部、7号竪穴住居跡の西で検出した。1号土坑に東北隅を切られる。また試掘時のトレンチに全体の約1/4を削平され全体のプランは不明である。残存状況では西辺が長くなる台形状のプランを有すると思われ、北壁中央やや西寄りにカマドを付設する。床までの深さは0.15mで、残存状況は良くない。埋土は黄褐色土中心の自然堆積で、貼り床はなく、床面でP1・P2・P4を、トレンチ底でP3の主柱穴を検出した。柱間寸法は東西2.6・2.7m、南北2.0mで住居プランに合わせて配する。柱掘形は直径0.5前後の円形プランで、深さは0.3m前後、柱痕跡は直径土0.1～0.2mで深さ0.2～0.3mを測る。その他土坑・溝などの施設は存在しなかった。

8号竪穴住居跡カマド (図版8—3、第15図)

北壁に袖を直接貼付する。袖長は共に長さ40cm、高さは10cm残存する。底は住居床面と同レベルで、焚き口を直径25cm、深さ3cmほど掘り窪める。窪みには赤色土が堆積しており、上面は硬化している。支脚や抜き取り跡は存在しなかった。埋土中には焼土や炭は混入するが、焼土・灰の堆積層が無く、埋土中に土器片が多量に散乱していたことから、清掃され土器と共に恣意的に埋められた可能性がある。煙道は検出し得なかった。

出土遺物 (図版49、第14図)

土師器

高坏(6～8)6は丹塗りの高坏で、底部がやや肥厚する。内面を回転ナデ、外面を工具によるナデで調整し、端部には沈線が一条巡る。復元口径33.0cm。7は底部が丸く深いもので、口縁部を内湾させる。脚部内面に僅かにタテの稜線が見えるのみで調整不明。8の脚はタテケズリで面取りし、端部はヨコナデする。復元径13.9cm・12.4。5はP1から、6は床直上からの出土。

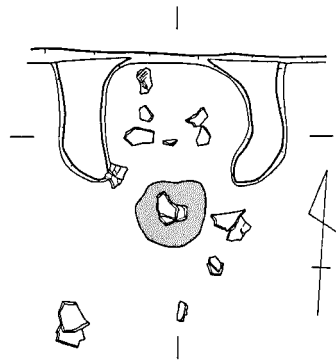
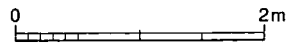
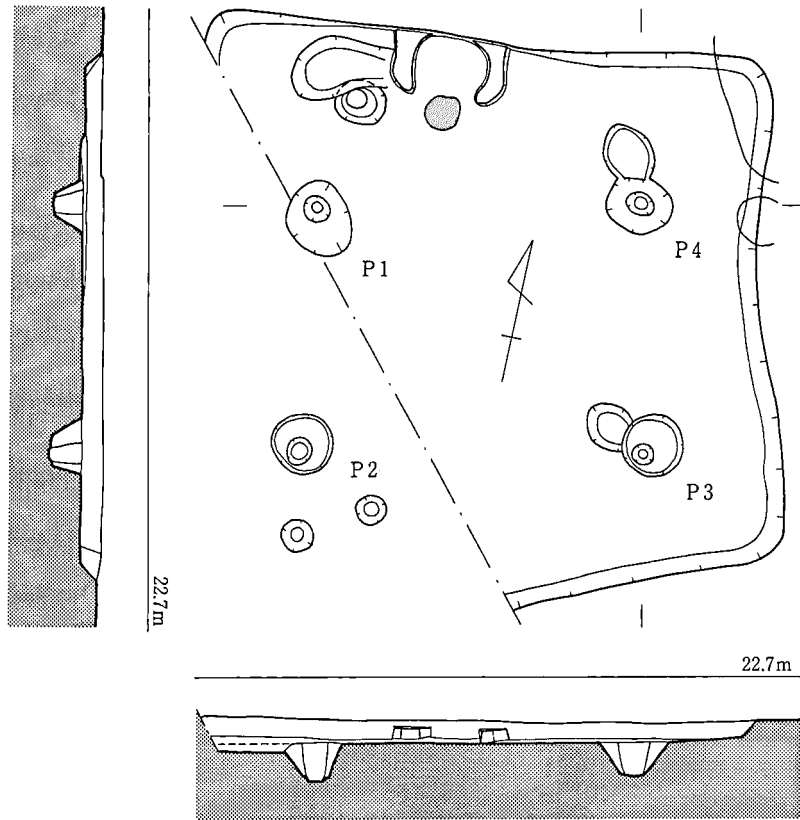
甕(9～13)9～11は口縁を緩やかに外反させ、頸部が肥厚する。13は口縁が窄まり胴が張るもの。器肉は薄く厚さの変化はない。9の外面はナデ調整。10・11は外面をハケ目、内面をヨコまたは斜のケズリ、口縁部周辺はヨコナデ調整。13も同様の調整であるが、端部周辺にも斜のハケ目が残る。復元口径11.0・13.2・17.2・17.0・20.0cm。10・12・13はカマド内からの出土。

須恵器

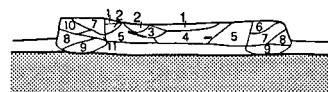
壺(14)口縁部片。外面下位はカキメ状の工具痕が残り、沈線が一条巡る。内面はヨコナデ調整で、復元口径15.2cm。

9号竪穴住居跡 (図版9—1、第16図)

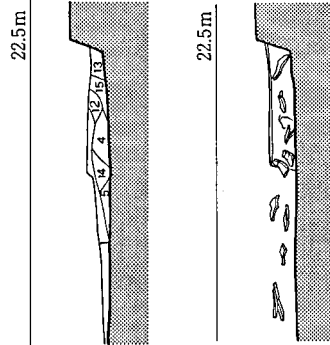
調査区北西部、3号竪穴住居跡北側で検出し、3号住居・1・3号溝に切られる。長軸長6.0m、短軸長5.9mで逆台形のやや不整形なプランを有する。床面積が圧倒的に大きく、I区内で最大規模である。カマドは北壁中央に取り付けるが、1号溝に切られるため北側を欠損する。埋土は最上層が黄色土で、以下は黄褐色土中心の自然堆積である。貼り床までの深さは残りの良い部分で0.3mになる。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.8m・3.1m、南北2.4m・2.5mとばらつきがあるが、住居のプランと同様逆台形の配置になる。掘形は0.65～0.95mの円形プランを呈し、深さは0.2～0.3m、柱痕跡は太さ0.15m前後、深さ0.3～0.35m前後である。貼り床下ではP1の周囲に長軸長2m、短軸東1.3m、深さ0.07mの土坑と西南隅にわずかな段落ちを確認した。またP3とP4の間に柱穴状のピットを検出したが、使用法は不明である。



22.5m



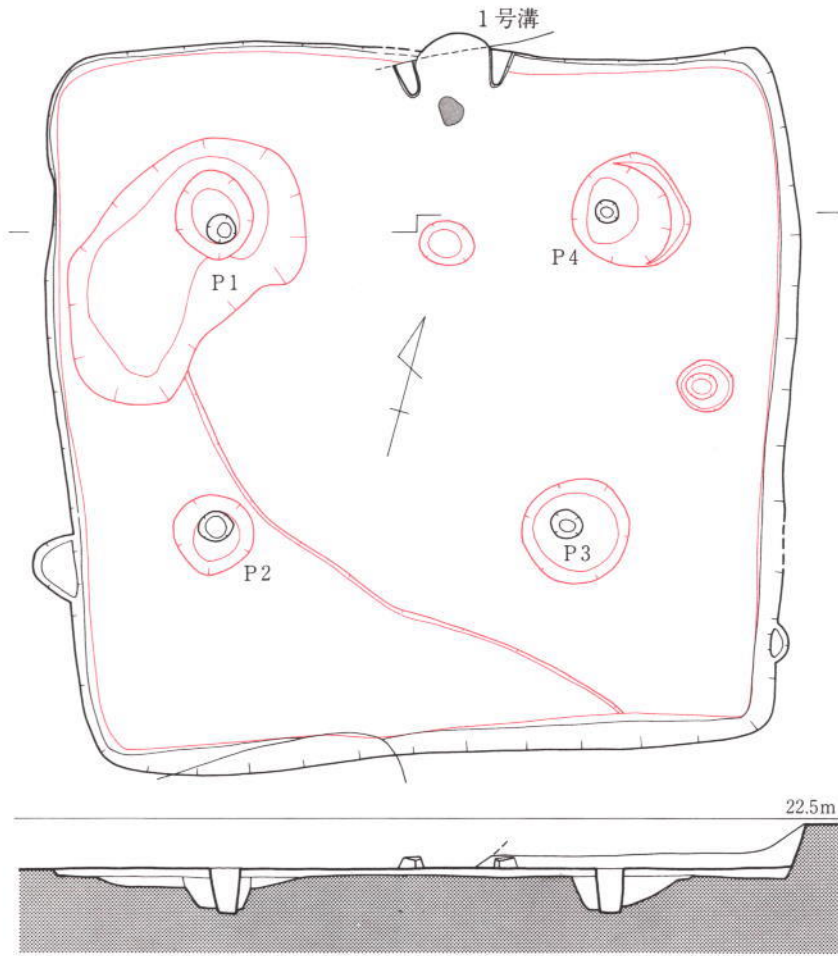
22.5m



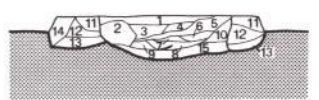
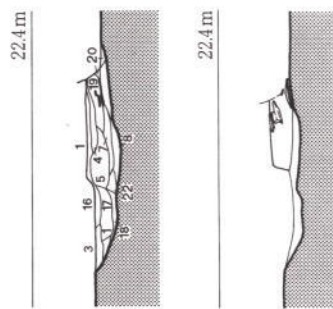
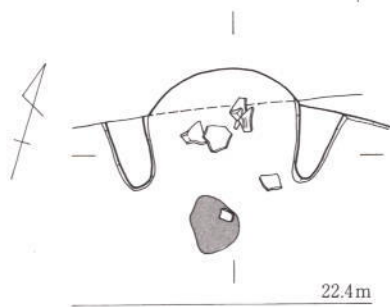
1. 黄褐色土
2. 暗茶色土 (焼土・炭混)
3. 黄色土
4. 茶褐色土 (焼土混)
5. 茶色土 (焼土・炭混)
6. 暗茶色土
7. 暗黄褐色土
8. 暗茶褐色土
9. 黒茶色土 (焼土混)
10. 茶色土 (焼土・炭混)
11. 茶色土
12. 茶褐色土
13. 暗黄褐色土
14. 茶色土
15. 黒茶色土



第15図 8号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



0 3m



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 黄色土 | 12. 黄茶色土 |
| 2. 明茶色土 (焼土・炭混) | 13. 黒茶色土 |
| 3. 黄褐色土 | 14. 暗茶褐色土 |
| 4. 赤褐色土 | 15. 茶色砂質土 (焼土混) |
| 5. 焼土・炭粘質層 | 16. 暗茶赤色土 (焼土塊混) |
| 6. 5+7 | 17. 5に赤色土混 |
| 7. 焼土層 | 18. 茶色土 (炭混) |
| 8. 7に茶褐色砂混 | 19. 5に土器混 |
| 9. 茶色砂質土 | 20. 赤色土 (焼土混) |
| 10. 茶褐色土 | 21. 茶褐色砂 (焼土・炭混) |
| 11. 暗黄褐色土 | 22. 黄色砂 (地山) |

0 1m

第16図 9号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

9号竪穴住居跡カマド（図版9—2、第16図）

北壁に付設するカマドは、1号溝に切られ北部を欠損する。このため煙道は確認できなかった。カマド本体は住居外に半円形に突出し、残存する両袖は長さ28cm、高さ14cmを測る。底は住居床面より7cm掘り窪め、茶色土が堆積する。焚き口の直径20cmの部分が赤色硬化し、焼土・灰の粘質土層が厚く堆積していた。支脚や抜き取り孔はない。埋土中と底直上から甕の胴部片が出土した。

出土遺物（図版50、第17図）

土師器

蓋（1）須恵器を模倣した坏蓋。段を有し口縁部は大きく開く。天井部は摩滅のため調整不明、他はヨコナデ。復元口径14.0cm。

碗（2）体部の湾曲が大きいもので、摩滅が激しい。底部には僅かにケズリが見えるが単位は不明。復元口径12.4cmで、カマド内からの出土した。

坏（3）端部を外反させるもの。器肉は極めて薄く、摩滅の為調整不明。復元口径12.6cm。

高坏（4）脚部のみで、外面をタテケズリで面取りして薄く造り、端部付近を外に折り曲げる。内面はヨコケズリする。復元径10.2cm。

甕（5～9）5は口縁が緩やかに外反するもの。6は口縁端部を丸く造るもので、外面には煤が付着する。外面ヨコハケ、内面をヨコ・斜のケズリで調整する。7は頸部内面の稜が強く、胴はあまり張らないもの。外面は細かいハケ調整で、内面はヨコケズリする。外面は火を受けて一部剥離している。8は口縁部を大きく外湾させ、端部付近に平坦面を造る。9は口縁部が最大径となるものでも、外面をはタテ、内面端部付近をヨコにハケ目があり、胴部はヨコケズリする。復元口径は12.0・13.8・14.0・21.0・23.0cm。

甗（10）口縁部片。外面はタテの斜の方向に粗いハケ目でランダムに調整する。内面はヨコケズリ。口縁部をやや外反させる。一部煤が付着する。

須恵器

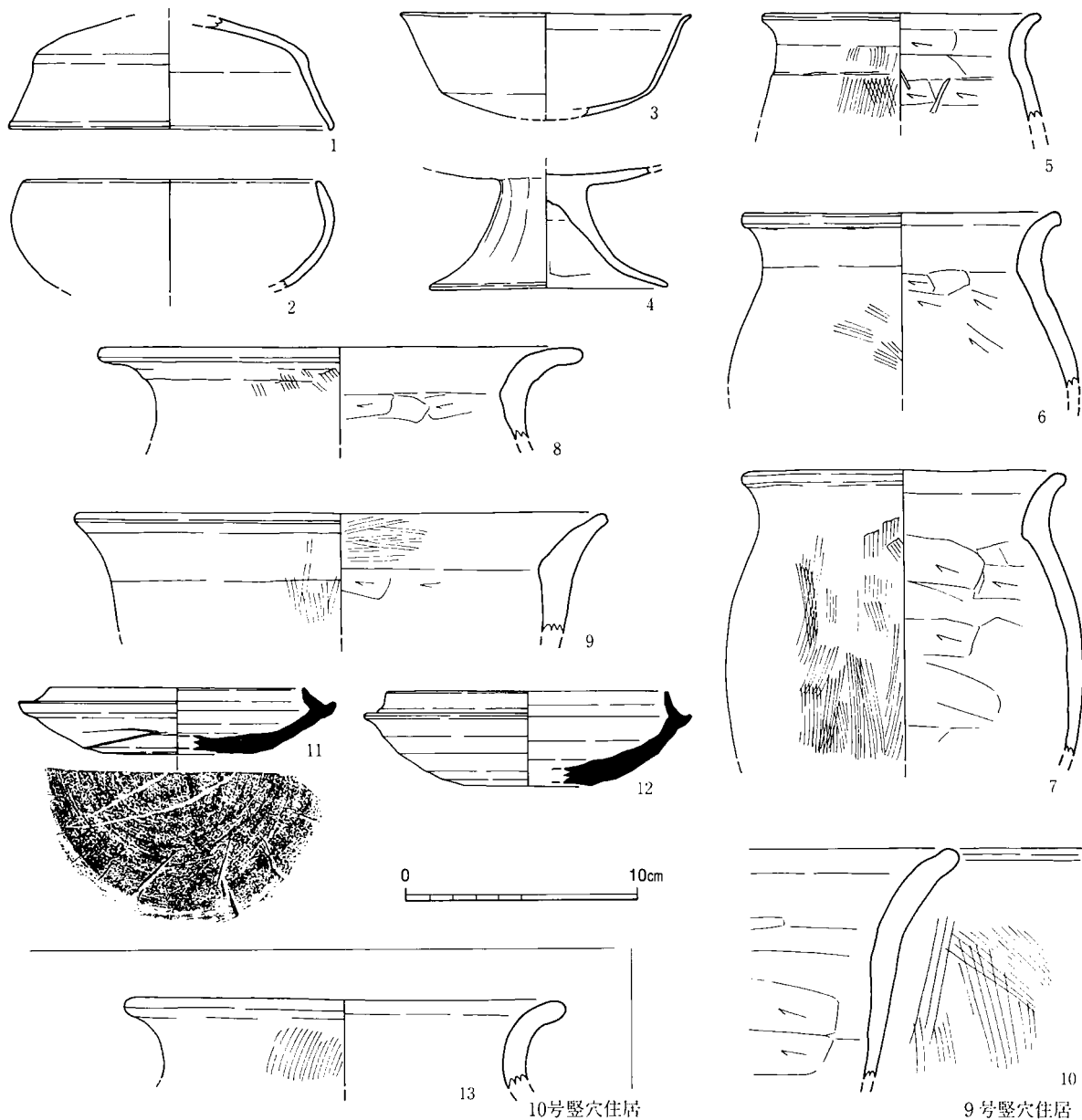
坏（11・12）11は外底部を回転ヘラケズリし、後にナデで窪ませる。外底部にヘラ記号がある。復元口径11.0cm、器高2.9cm。12は底部の器肉が厚く、やや平坦になる。底部を回転ヘラケズリ調整する。中位に沈線があるが一周しない。復元口径12.0cm。

10号竪穴住居跡（図版9—3、第18図）

調査区北西部、9号竪穴住居跡の東側で検出し、9号住居に切られるため西側全体の約1/3を欠損する。南北長3.2mで、カマドを中心と推定すれば東西長3.4mとなる。カマドは北壁に付設される。貼り床はなく、床までの深さは0.2mである。主柱穴はP1・P2を検出しており、柱間寸法は1.3mで、壁際に建てられる。柱痕跡から柱の径は0.15～0.2mに推定できる。床面には数個のピットがあるのみで、土坑や溝はなかった。

10号竪穴住居跡カマド（図版10—1、第18図）

北壁より突出して付設されるカマドは、ピットに切られて北半部の様子が不明である。袖も残存状況が悪く長さは左袖20cm・右袖34cm、高さは8cmを確認した。中央に支脚抜き取り孔がある。その前面は直径25cmの範囲で住居床面より5cm程掘り窪め、赤色土が厚く堆積している。硬化面はない。カマド内側がピットに切られるため、埋土の堆積状況は確認できなかったが、焼土・炭が含まれていた。



第17図 9・10号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

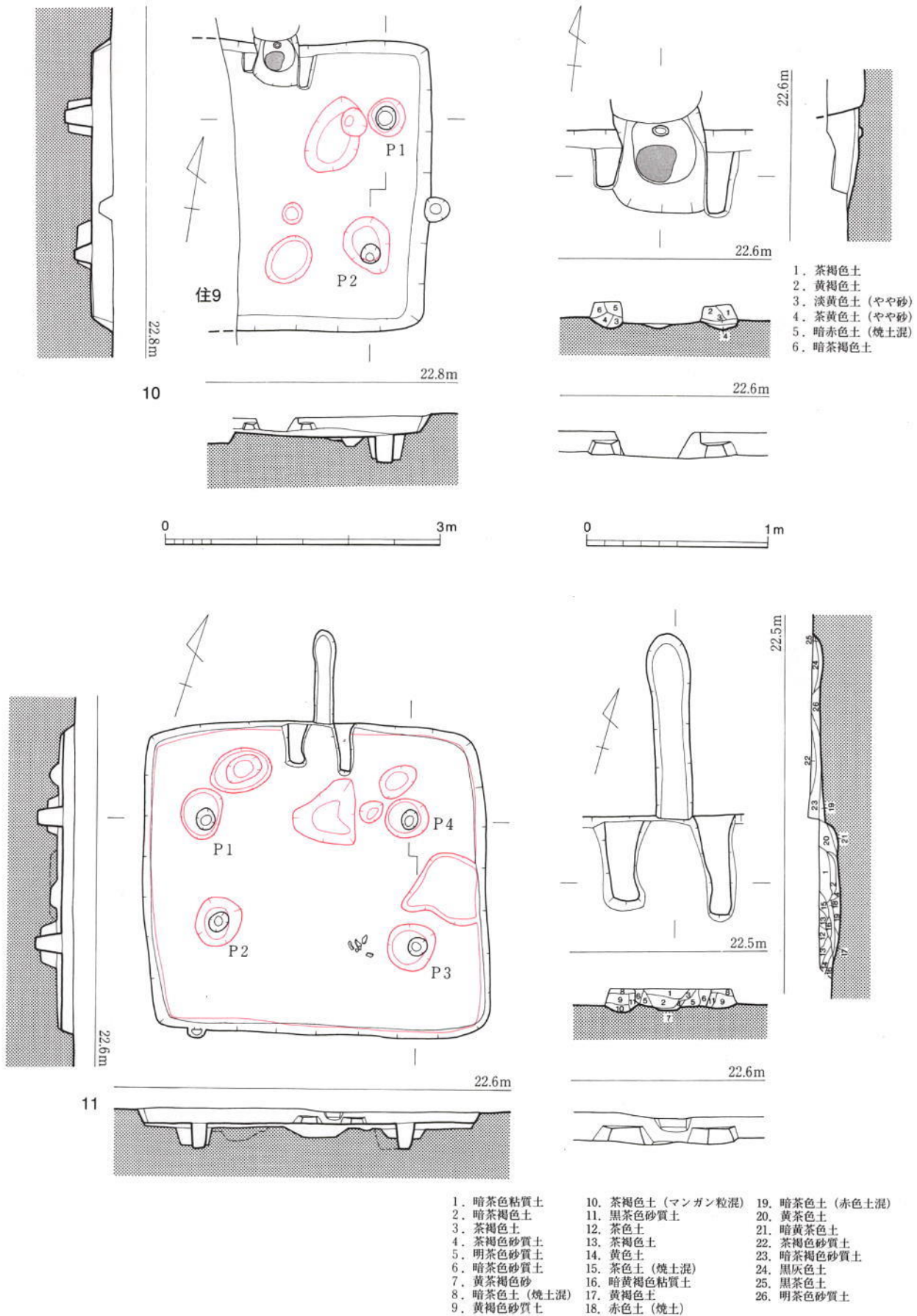
出土遺物 (第17図)

土師器

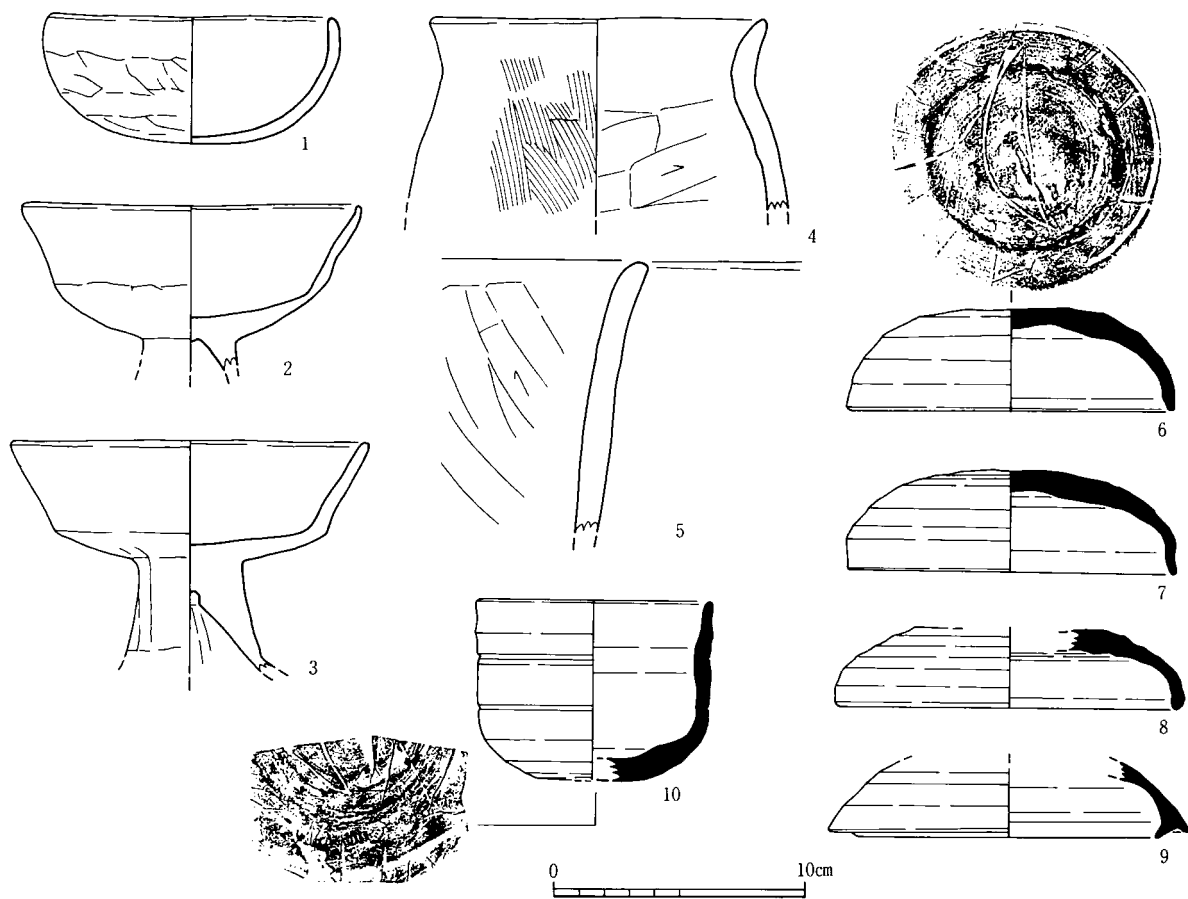
甕 (13) 口縁部片。外面はタテハケ、他はヨコナデで調整する。内面の稜は退化している。復元口径19.0cm、カマド内からの出土。

11号竖穴住居跡 (図版10—2、第18図)

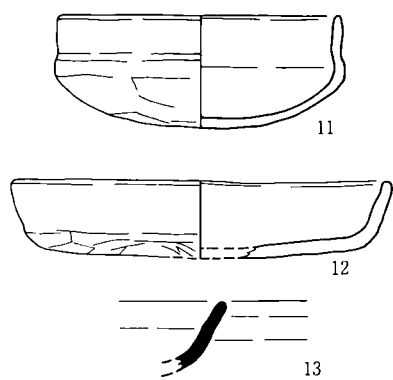
調査区北西部壁際、5号竖穴住居跡の東、6号竖穴住居跡の南で検出した。切り合い関係はない。長軸長3.7m、3.4mの横長長方形のプランを有し、コーナー部は丸みを持つ。北壁中央にカマドを付設する。埋土は黄色土中心の自然堆積である。床面までの深さは0.12m程で、残存状況は良くない。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.2



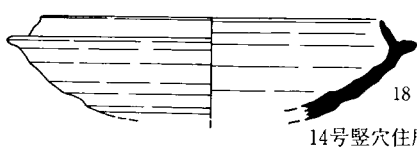
第18図 10・11号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



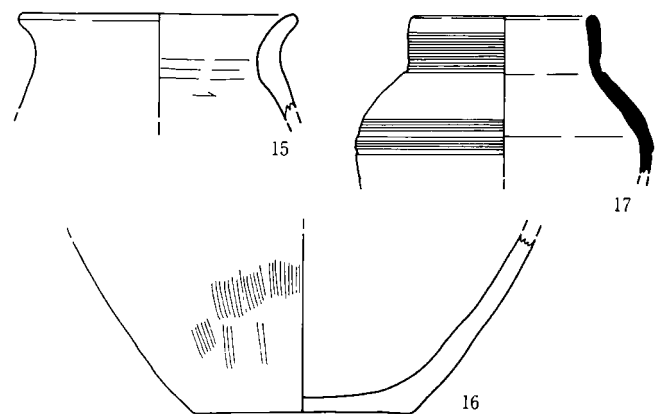
11号竖穴住居



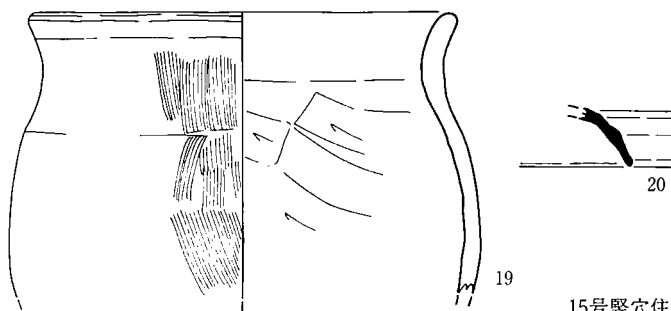
12号竖穴住居



14号竖穴住居



13号竖穴住居



15号竖穴住居

第19图 11~15号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

m、南北1.6 m・1.4 mで、P 2 がやや北寄りに位置する以外は、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.4～0.5 mの円形プランで深さ0.15～0.25 m、柱痕跡は直径0.15 cm前後で深さが0.3 mを測る。貼り床は暗茶色粘質土を使用して全面に施され、床下ではカマド前面で直径0.7 m・深さ0.3 mの隅丸三角形の土坑と東壁際に長軸長0.4 m・深さ0.18 mの不整形土坑を検出した。

11号竪穴住居跡カマド（図版10—3、第18図）

北壁中央に直接貼り付ける。袖長は左袖45 cm・右袖55 cm、高さは12 cm残存していた。底は住居床面より5 cm程掘り窪め、焚き口住居床面レベルに赤色土が堆積していたが硬化面はない。埋土には焼土や灰の堆積層が無く、清掃されたものか。支脚や抜き取り孔はなかった。煙道は底より上5 cmから壁に掘り込み、0.98 m北側へ溝状に延びる。底はほぼ平坦で、煙出し部分のみ若干掘り窪める。

出土遺物（図版50、第19図）

土師器

埴（1）底部は薄く口縁部がやや肥厚するものである。摩滅が激しく、外面のケズリが僅かに確認できるのみである。復元口径11.4 cm。

高坏（2・3）体部下位がやや膨らみ外面に稜を持つ。摩滅が激しく、2の底部のヨコケズリと、3の脚部外面のタテケズリ、内面のヨコケズリが僅かに残る。復元口径13.5・14.0 cm。支柱穴柱掘形からの出土。

甕（4）頸部の外反が弱く、端部を薄く造る。外面を斜のハケ、内面をヨコケズリで調整する。復元口径13.2 cm。カマド周辺からの出土。

甌（5）口縁部小片。体部は直線的で口縁が僅かには外反する。全体に摩滅が激しく、内面に斜のケズリが残るのみ。カマド周辺からの出土。

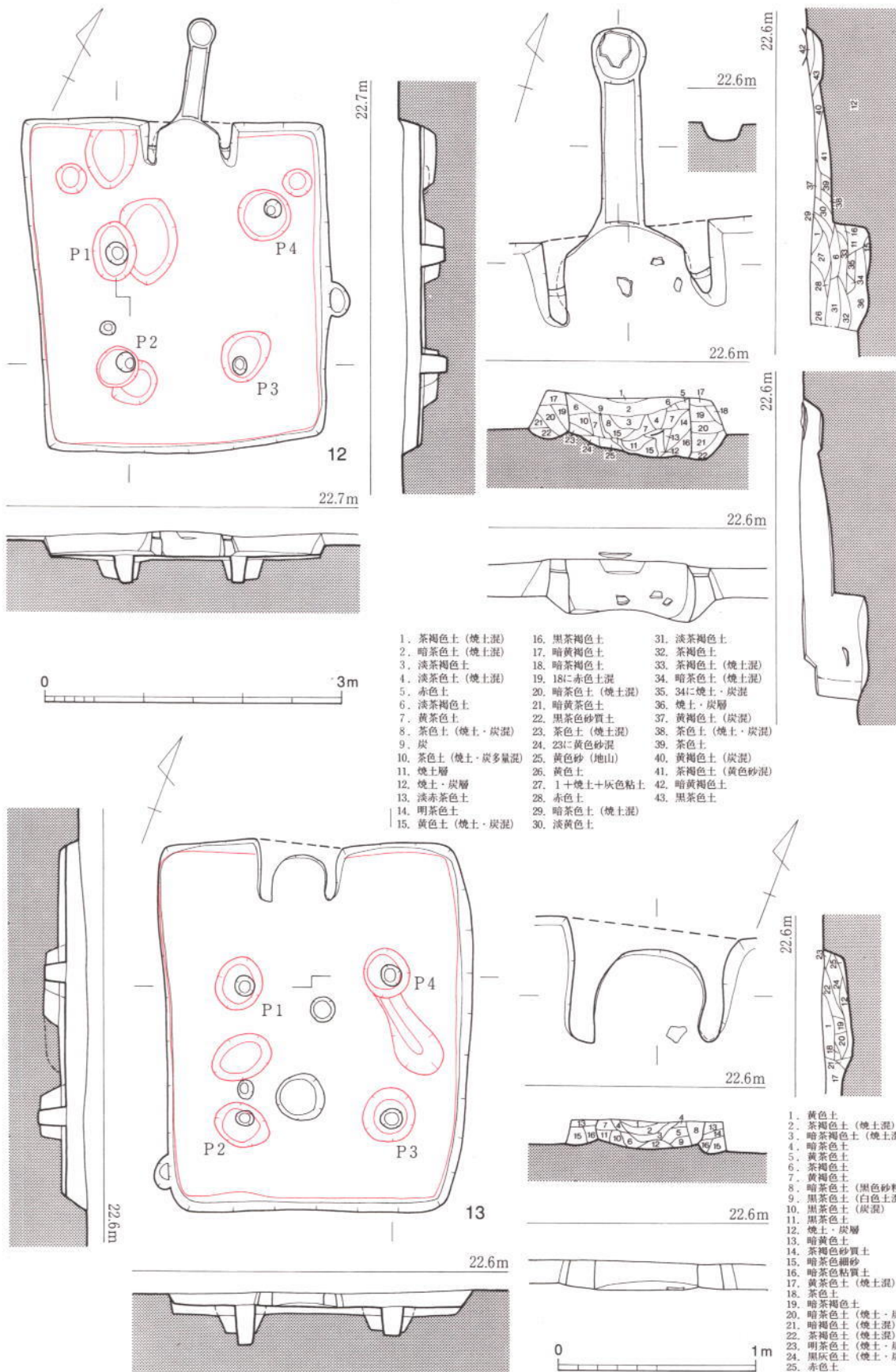
須恵器

蓋（6～9）6～8は返りを持たないもの。6は端部内面に平坦面を造り、天井部にはヘラ記号を持つ。7は口唇部を強く屈曲させるもので、天井部は肥厚し、全体に調整による凹凸が顕著である。8は端部を丸く収め若干内湾させるものである。全て外天井部を回転ヘラケズリする。ヘラ記号が見えるが破片のため全容は知り得ない。やや軟質で淡灰色を呈する。復元口径13.4 cm。9は返りを有する蓋で、天井部は平坦になるか。外面中位よりヘラケズリを施す。端部は破碎が激しく形状は不鮮明。復元口径12.0 cm。6は支柱穴柱掘形からの出土。

坏（10）コップ型の坏で、外面中位に2条の沈線を持つ。底部は肥厚し、平坦に造る。内外面ともヨコナデ調整、内底部はナデで仕上げる。外底部にはヘラ記号を持つ。復元口径9.4 cm、器高7.1 cmを測る。

12号竪穴住居跡（図版11—1・2、第20図）

調査区中央部の竪穴住居跡が12・13・15・16・35・36号と6棟切り合う箇所検出し、この中で最も新しい。長軸長3.35 m、短軸長2.85～3.15 mの縦長逆台形のプランを有する。コーナー部は角を持ち、北壁にカマドを付設する。埋土最上層は黄色土、以下は茶色土と淡黄色土で恣意的に埋められたと思われる。床面までの深さは0.2 m前後で、P 1～P 4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.6 m・1.1 m、南北1.1 m・1.6 mで、P 1以外は各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。貼り床は茶灰色粘質土を5 cmほどの厚さで全面に施す。床下からは北・東壁際とP 1・2・4付近で深さ0.13 m程の4つの土坑と、2個のピットを検出した。



第20図 12・13号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

12号竪穴住居跡カマド（第20図）

北壁に直接貼り付ける。袖長は左袖42cm・右袖36cm、高さは32cm残存していた。底は住居床面より6cm程掘り窪め、最下層に焼土が厚く堆積し、奥壁付近には赤色土と焼土が堆積する。赤変硬化面や支脚孔は検出しなかった。埋土中には焼土・炭・土師器甕小片が混入する。奥壁は直立し、底より17cm上位から壁を掘り込み煙道を北へ延ばす。煙道の床は北に向かって緩やかに登り、煙出し部分のみ3cm程ピット状に掘り窪める。また、煙出し上面には土師器甕の胴部片が蓋をするように置いてあった。

出土遺物（図版50、第19図）

土師器

坏（11・12）11は口縁を直立させ、体部には蓋受けの段を有する。全体に摩滅が激しく、底部のヘラケズリが僅かに残るのみである。口径11.3cm、器高4.5cmを測る。12は平底で、体部が直立気味に立ち上がる。底部外面をヘラケズリする。復元口径は11.3・15.0cm。

甕（13）口縁部を外反させる。残存部は全てヨコナデ調整。カマド内からの出土。

須恵器

坏（14）コップ形のもので、若干焼き歪む。体部中位に二条の沈線を持ち、その下位にはカキメを施す。口径9.0cm、器高7.0cmを測る。

13号竪穴住居跡（図版11—3、第20図）

調査区中央の住居集中部、12号竪穴住居跡の南で検出した。長軸長3.75m、短軸長2.4～3.1mの南北に長い逆台形の12号住居と似通ったプランを有する。コーナー部は丸みを帯び、北壁中央にカマドを付設する。床面までの深さは0.15mと残存状況は悪い。埋土は黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.4m、南北1.3m・1.45mで長方形の配置になる。柱掘形は直径0.45m前後の円形プランで深さ0.2m前後、柱痕跡は直径0.15～0.18mで深さ0.25～0.4mを測る。貼り床は茶灰色粘質土で全面に施し、床下ではP4の掘形に続く深さ0.15mの上坑と、P1・P3間で深さ0.25mのピットを検出した。

13号竪穴住居跡カマド（第20図）

北壁中央やや西寄りに袖を直接貼り付ける。壁が薄く奥壁は住居プランより内側に入る。袖長は西が65cm・東が55cm、高さは最大18cm残存している。底は住居床面より5cm程掘り窪め、最下位に焼土・灰の堆積層があるが、赤変硬化面と支脚や抜き取り孔は存在しなかった。煙道は12号住居に削平されており不明である。底面から甕片が出土したが、小片のため図示できなかった。

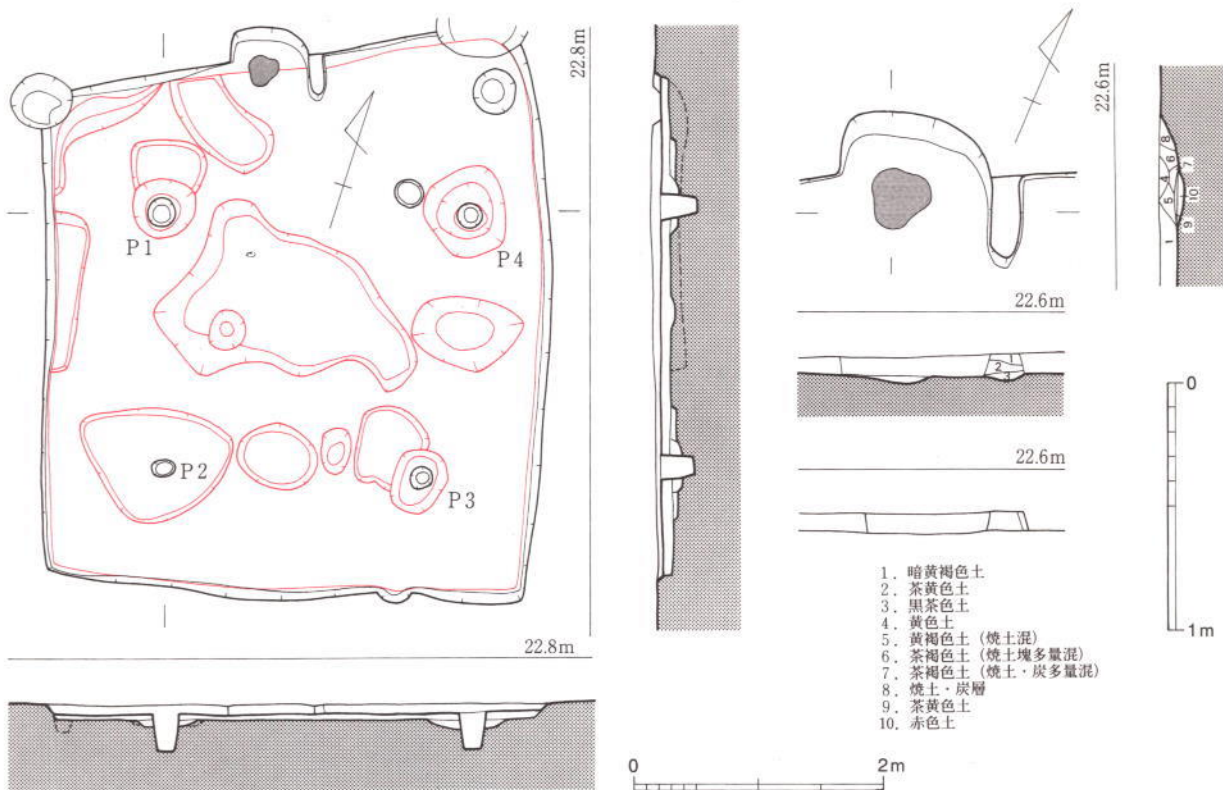
出土遺物（第19図）

土師器

甕（15・16）15は小型のもので、頸部を肥厚させる。頸部内面に粘土の継ぎ目が認められる。内面はヨコケズリ後に横ナデする。復元口径11.0cm。16は平底の甕で、外面をタテハケ調整、内面をナデ調整し、外底部に黒斑がつく。復元底径8.5cm。15は床直上からの出土。

須恵器

短頸壺（17）底部を欠く。外面カキメを施すが、片部付近と胴部下半は後にヨコナデするためカキメは消えている。内面はヨコナデ調整、口縁端部と胴部中位が肥厚する。復元口径7.3cmを測る。



第21図 14号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

14号竪穴住居跡 (図版12—1、第21図)

調査区西中央で検出した。長軸長4.0～4.6 m、短軸長4.0 mで、東壁が西壁より長い歪な縦長長方形のプランを有する。コーナーは角を持ちカマドは北壁中央に壁を掘り込んで付設する。床面までの深さは最大で0.08 mと非常に状態が悪く、出土遺物も少量である。埋土は黄色土中心の自然堆積で、床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した柱間寸法は東西2.5 m・2.1 m、南北が2.1 mで、P4以外は各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.5 m程度の楕円形で深さは0.05～0.1 m、柱痕跡は直径15～20 cmで深さ0.3 mを測る。貼り床は茶灰色土粘質の5 cmの厚さで全面に施す。貼り床下では中央部に長軸長2.0 m・短軸長1.0 m・深さ13 cmの不整形土坑を検出した。また、西北壁際に深さ0.15 mの溝状土坑、西壁際に長さ0.2 m・深さ0.1 mの溝状土坑、支柱穴周辺に浅い土坑を、他にピット検出した。

14号竪穴住居跡カマド (図版12—2、第21図)

北壁から大きく突出するカマドは、右袖のみ残存していた。袖長は35 cm、高さは8 cm残存する。床面は中央を直径20 cm前後掘り窪め、赤色土が堆積し上面は硬化する。埋土中には焼土や炭が多量に混入する。支脚や抜き取り孔は無く、煙道も削平されており確認できなかった。

出土遺物 (第19図)

須恵器

坏 (18) 器肉が薄く、調整による凹凸が激しい。内外面ともほとんど回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリする。外面には灰が被る。復元口径13.5 cm。

15号竪穴住居跡（図版13—1、第22図）

調査区中央の住居集中部、12号竪穴住居跡の西で検出した。12号住居に切られ、16・36号住居を切る。長軸長3.0m、短軸長2.7mの長方形のプランを有する。コーナーは丸みを帯び、北壁を大きく掘り込んでカマドを付設する。床面までの深さは0.2m、東半部約1/3は12号住居に削平されるためほとんど残存していない。埋土は最上層が黄色土中心で、恣意的に埋めたと思われる。床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.6m・1.7m、南北1.16mで、各コーナーを結ぶ対角線上にバランス良く位置する。柱掘形は直径0.4～0.5mの円形プランで深さ0.08～0.2m、柱痕跡は直径0.15から0.18mで深さ0.15～0.3mを測る。貼り床は茶褐色粘質土を5～8cmの厚さで全面に貼り、貼り床下では南側中央に直径0.8m前後・深さ0.3mの不整形土坑をと他にピットを検出した。

15号竪穴住居跡カマド（図版13—2、第22図）

北壁中央部に、壁外に15cm突出して付設される。プランは隅丸方形で残存する袖の状況から1/2が壁外に突出すると思われる。袖長は左袖15cm・右袖13cm、高さは17cm残存している。底は住居床面と同レベルで、中央に直径12cmの支脚抜き取り孔があり、焚き口付近が東西50cm・南北15cmの横長範囲が赤色硬化する。埋土は単純層で、焼土や炭は混入するが層にはならず、清掃されたものかもしれない。煙道は床面より5cm上から壁を掘り込み、北へ溝状に1.0mの長さで住居外に延びる。煙道床面のレベルはほぼ水平で、煙出し部分のみ直径25cm程緩やかに掘り窪められ、黒色粘質土が堆積していた。

出土遺物（図版50、第19図）

土師器

甕（19）頸部の屈曲は弱く胴も張らない。外面をタテハケで調整し、内面はヨコもしくは斜位のケズリで調整する。火を受けて外面の一部が赤色化する。復元口径17.0cm。

須恵器

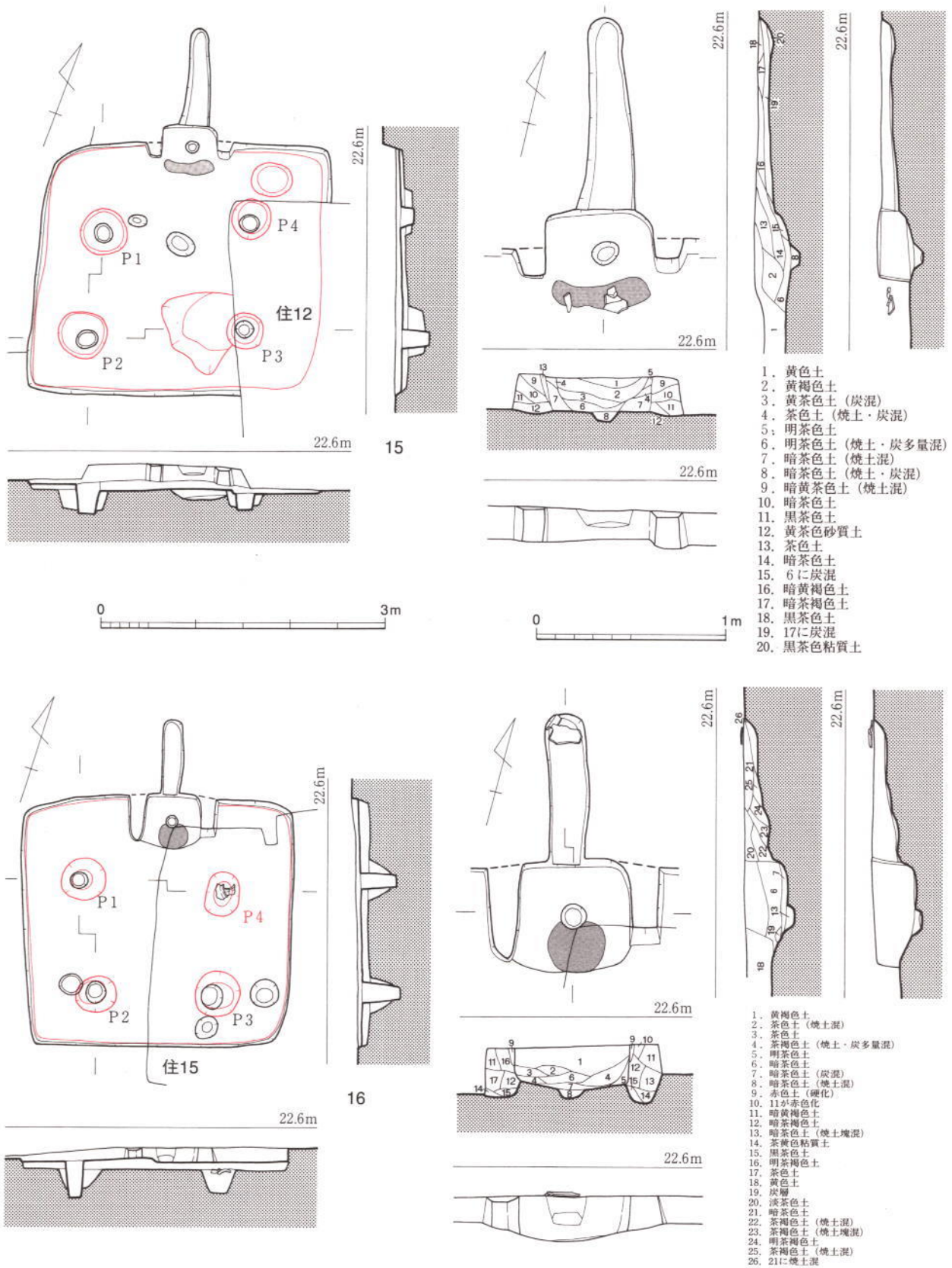
蓋（20）口縁部小片で、器壁が薄く端部は若干尖り気味である。残存部は全て回転ナデで、器壁の凹凸が激しい。

16号竪穴住居跡（図版13—3、第22図）

調査区中央の住居集中部、15号竪穴住居跡の西で検出した。15号住居に東半部を大きく抉られる。長軸長2.7～2.9m、短軸長2.6mの横長逆台形のプランを有し、コーナー部は丸みを帯びる。カマドは北壁中央やや東よりに付設する。床面までの深さは最高で0.15mで、埋土は黄色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.2m・1.5m、南北1.1mで各コーナーを結ぶ対角線上にほぼ位置する。柱掘形は直径0.5mの円形プランで深さ0.25m、柱痕跡は直径0.15mで深さ0.4mを測る。P4のみ柱痕跡が無く、埋土も他の支柱穴とは異なる。土師器甕が埋められており、住居廃棄時の祭祀に関わる可能性もある。貼り床は茶灰色粘質土を10cm前後の厚さで全面に貼る。貼り床下では土坑等の検出はなかった。

16号竪穴住居跡カマド（図版14—1、第22図）

住居北壁に袖を張り付け、内面プランは隅丸長方形をなす。袖長は左袖50cm、右袖32cmで東袖は15号住居に切られ、高さは最高で25cm残存する。床面は住居床より8cm掘り窪めており、中央に支脚抜き取り孔がある。孔の前面直径25cmの範囲は僅かに床が赤色化するが硬化面は認められな



第22図 15・16号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

かった。両袖内面上位は赤色の硬化層があり、袖が粘土で化粧されていた可能性もある。埋土には焼土や灰の堆積層はなく、また単純層であることから恣意的に埋められたものであろう。奥壁は直立し、底より8 cm上位から壁を掘り込んで煙道を住居外北側へ0.75 m延ばし、床面は階段状に北へ上っている。また煙出し部上面には穴を閉塞するように土師器甕片が置かれていた。

出土遺物 (図版50、第23図)

土師器

甕(1・2) 1は口縁の外反が強いもので、外面に僅かにタテハケが見えるが、摩滅が激しい。2は口縁の外反が弱く、端部を薄く造る。外面をタテハケで調整し、内面はヨコケズリする。頸部内面はケズリ後にヨコナデする。復元口径15.7 cm。1は煙道内から、2はP4からの出土。

17号竪穴住居跡 (図版14—2、第24図)

調査区西部中央部で検出したが、1号溝に切られ南半分のみが残存であった。残存長5.2 m、埋土は黄色土中心の自然堆積である。カマドは検出できなかった。床面までの深さは17~22 cmで、床面でP1・P2の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は3.0 mで、掘形は直径0.5 m・深さ0.18 m、柱痕跡は直径0.18 m・深さ0.35 mを測る。貼り床は茶褐色土で7~10 cmの厚さで全面に貼られる。床下から土坑等の検出はなかった。

出土遺物 (第23図)

土師器

高坏(3・4) 口縁が大きく外反する高坏坏部。全面摩滅のため調整不明。4の脚は平坦部が大きく、屈曲部内面には明瞭な稜がつく。内面をヨコケズリ、外面をナデ調整する。

甕(5・6) 5は口縁部が短く、胴が張るもの。外面を斜、内面をタテケズリで調整し口縁部付近はヨコナデ。6は口縁端部が強く外反する。内面をヨコケズリする。復元口径13.0・19.0 cm。

須恵器

坏(7・8) 7は全体に非常に器肉が薄く、堅緻である。外面は灰が厚くかかり調整不明。内面はナデ調整で、器面に気泡が多く見られる。復元口径9.0 cm。8の口縁部片はやや内湾する。外面に沈線を一条有する。ヨコナデ調整で全面に灰色釉が係り、外面は特に厚い。

18号竪穴住居跡 (図版14—3、第24図)

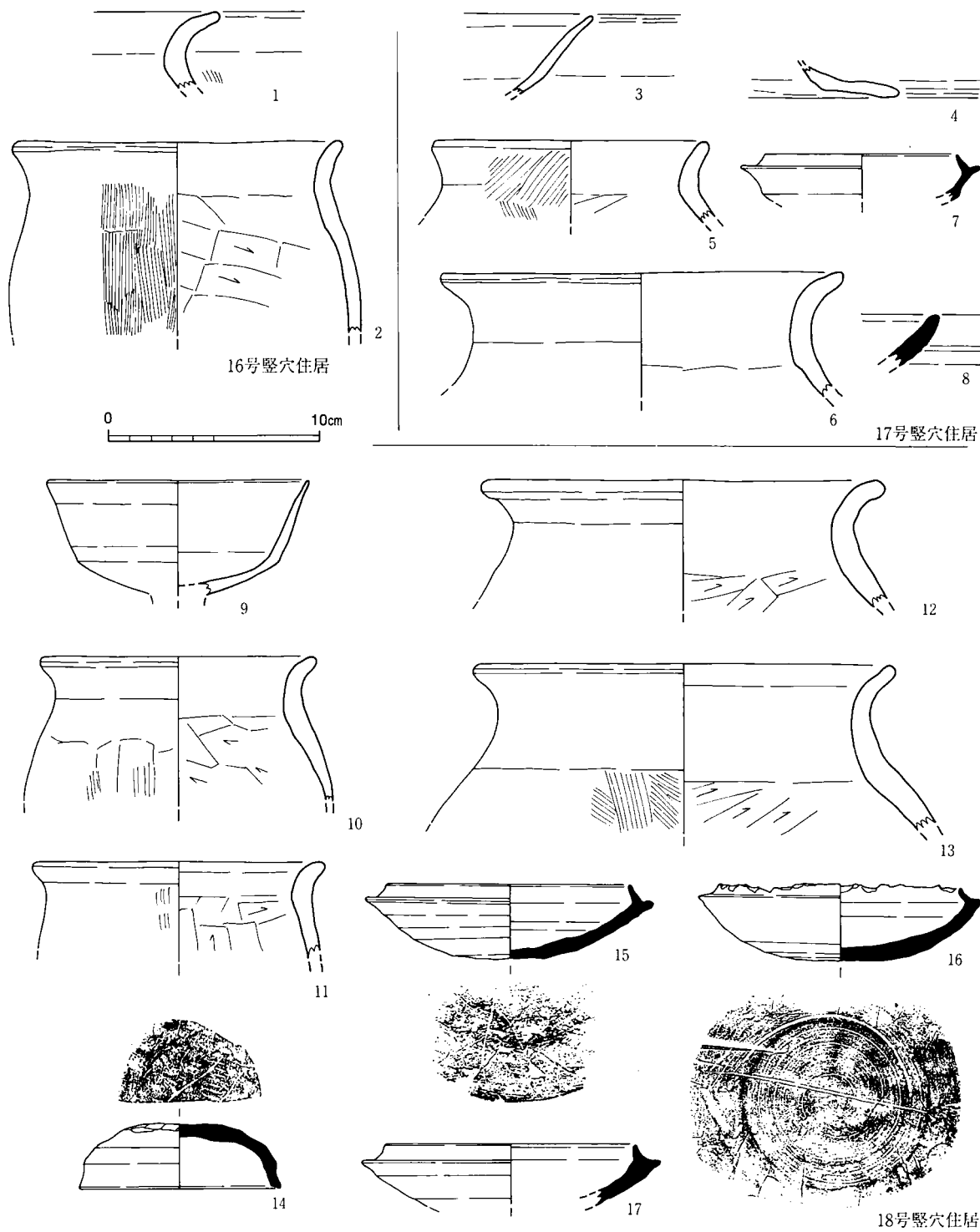
調査区西部中央、17号竪穴住居跡の西南部で検出した。残存するプランは南北4.8 m・南北5.0 mを測る。カマドは検出されなかった。床面までの深さは0.2 m前後で、埋土は黄褐色土中心の自然体積である。床面でP1~P3の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。掘形は直径0.~0.65 mの円形プランで深さ0.15 m、柱痕跡は直径0.15~0.18 mで深さ0.3 mを測る。貼り床は茶褐色粘質土で全面に施され、床下での土坑等の検出はなかった。

出土土器 (図版50、第23図)

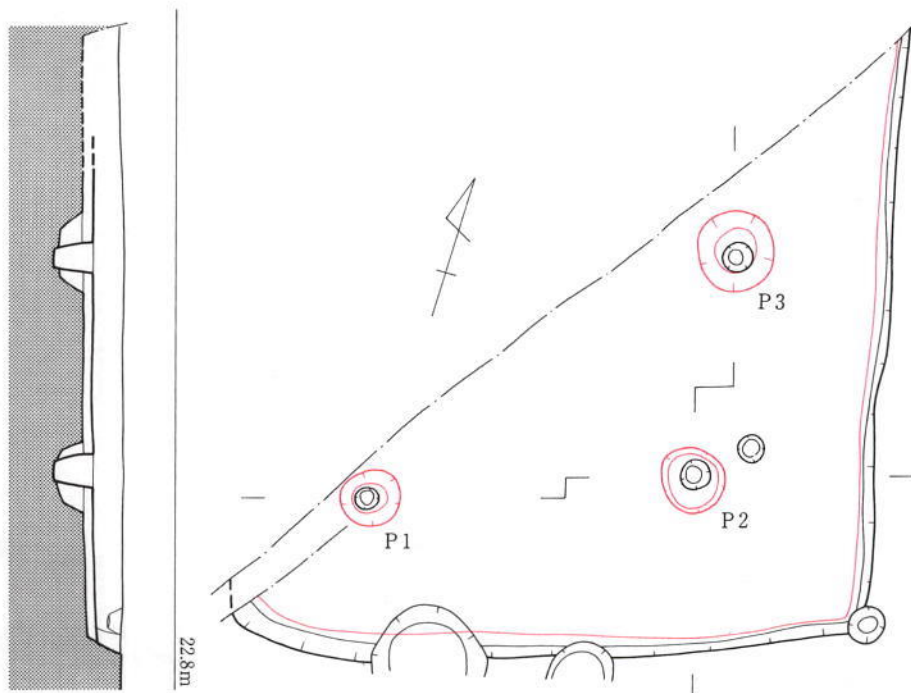
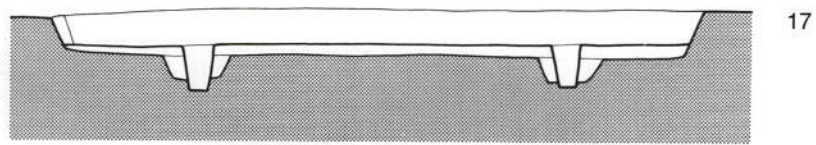
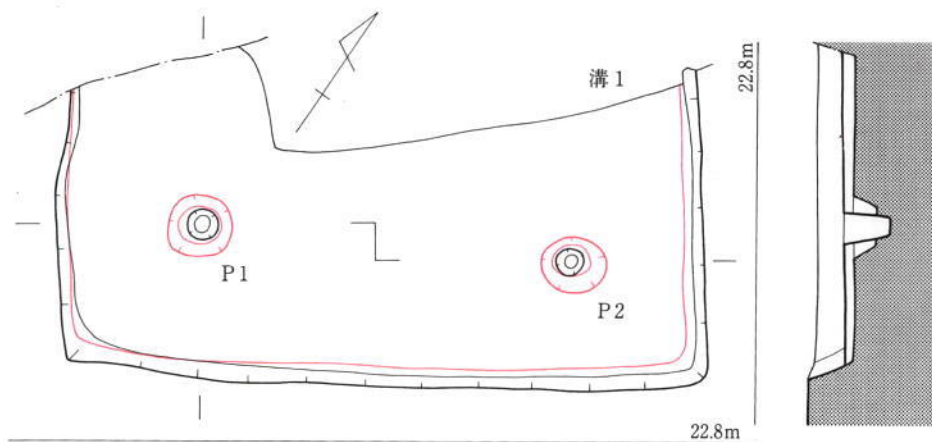
土師器

高坏(9) 深めのもので、摩滅が激しく調整不明。復元口径12.4 cm。

甕(10~13) 10・11の頸部屈曲は緩やか。12・13は口縁部が大きく外湾するもので、胴が張る。10・11・13は外面をタテもしくは斜位のハケで調整、内面は削る。12は外面ヨコナデで、内面は斜に削る。13は口縁が小さく窄まるタイプで、端部は薄く造る。復元口径13.0・13.8・19.0・20.0 cm。



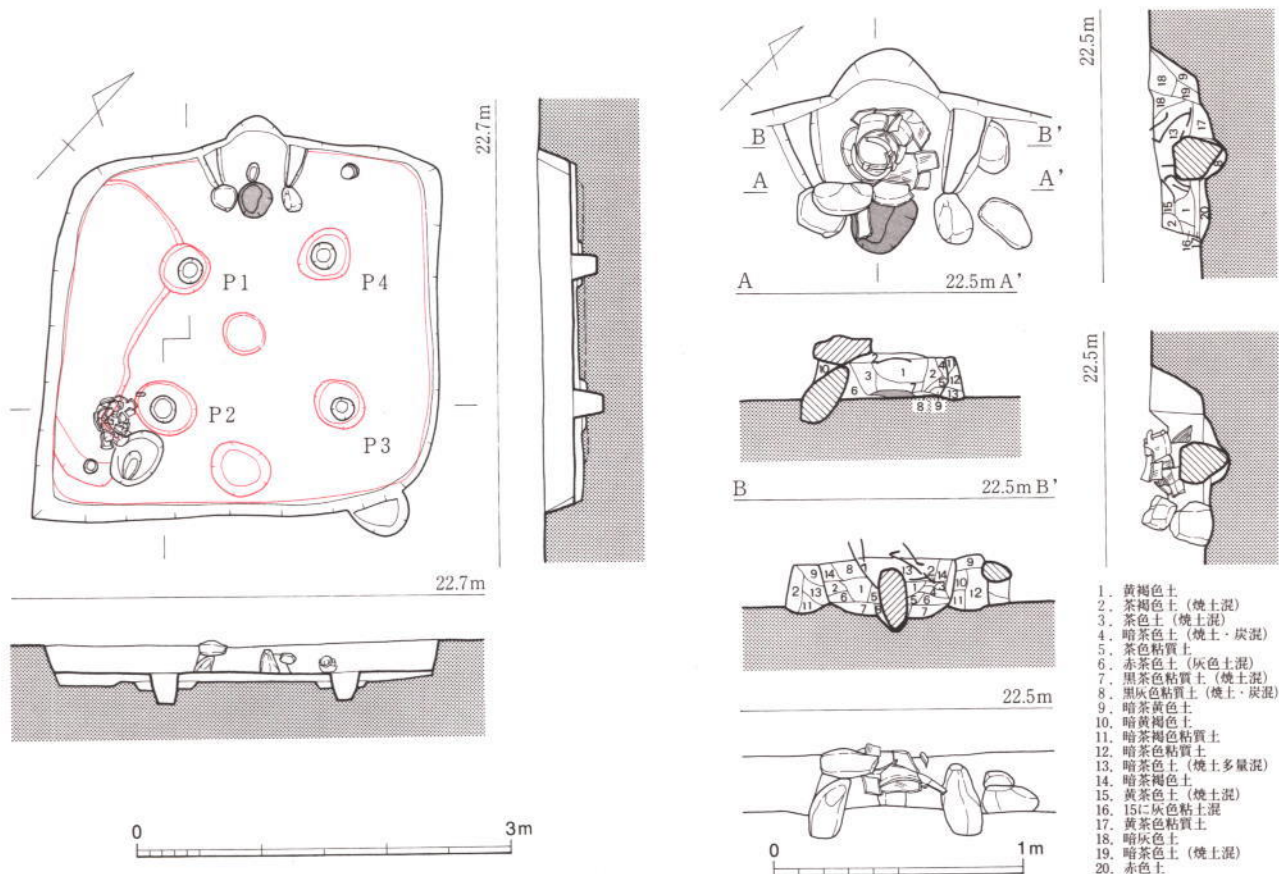
第23图 16~18号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)



18



第24图 17·18号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第25図 19号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

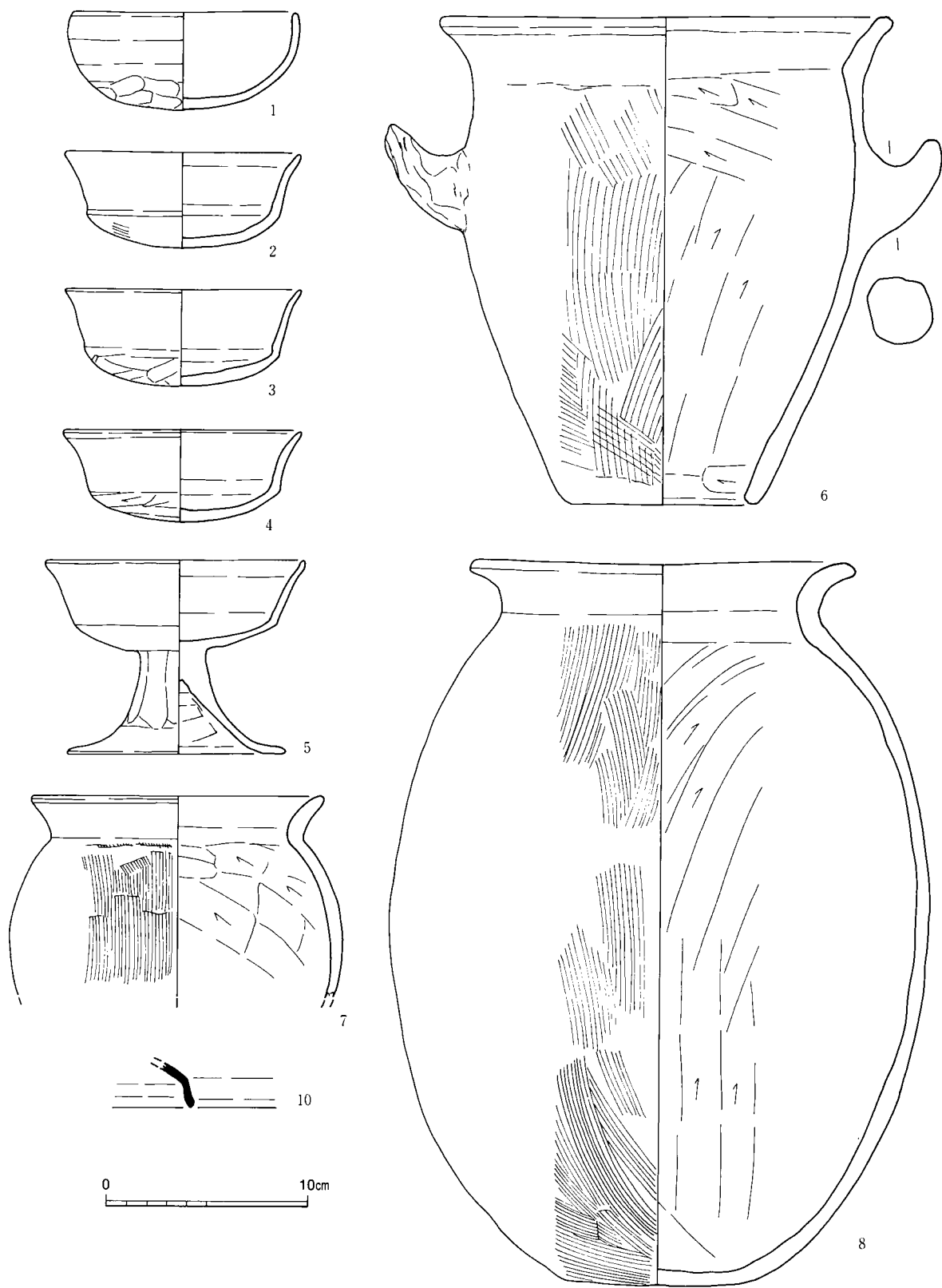
須恵器

蓋 (14) 径の小さい蓋で、端部を薄く断面四角に造る。天井部を手持ちヘラケズリで調整し、他の部分は回転ナデの後、内天井部のみナデ調整する。外天井部にはヘラ記号と一箇所カキメがつく。復元口径9.3cm。

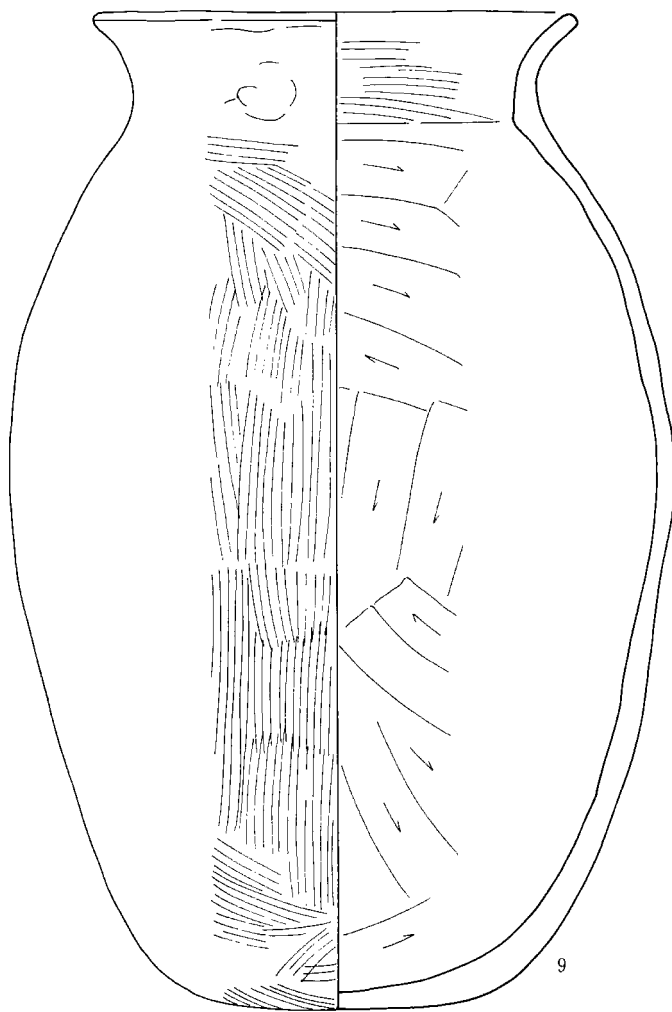
坏身 (15~17) 16は口縁部の内傾が大きく端部を外反させる。蓋受けの段は不明瞭で、底部は肥厚し全体に鈍い造りになる。口縁部は焼成後に打ち欠いており、底部には「一」のヘラ記号がある。15・16は外底を回転ヘラケズリ調整する。どちらも底部にヘラ記号を持つ。15は外面に厚く灰が被る。15・16とも口径11.5cm、器高3.6cm。17は蓋受け部を肥厚させる。復元口径11.8cm。

19号竖穴住居跡 (図版15—1、第25図)

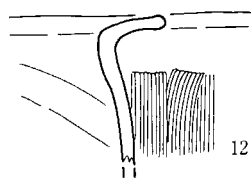
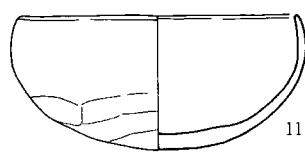
調査区西長軸長3.1m、短軸長2.9mで西北隅が突出する不整形なプランを有し、コーナー部は丸みを帯びる。北壁中央に、壁を若干掘り込んでカマドを付設する。床面までの深さは25cmで、検出時に若干掘りすぎている。埋土は上層が黄色土、以下は黄褐色中土心の自然堆積である。東北隅の埋土中には甕がつぶれた状態で埋まっていた。床面でP1~P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.1m・1.4m、南北1.14m・1.24mで各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱痕跡から柱の太さは15~20cmに復元できる。床は茶褐色粘質土を5~7cmの厚さで全面に貼る。貼り床下では東壁際と北東壁際で土坑を、他にピットを確認した。またカマド



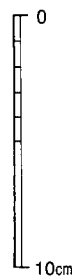
第26图 19号竖穴住居跡出土土器実測图(1)(1/3)



19号竪穴住居



20号竪穴住居



第27図 19・20号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

東の床面には高坏と坏2点が重ねた状態で置かれていた。

19号竪穴住居跡カマド (図版15—2・3、16—1、第25図)

北壁に借りつけられたカマドは、壁を若干掘り込む。袖は短く、焚き口に石を使用して構築する。石を含めた袖長は左袖28cm、右袖33cm、高さ22cmが残存する。焚き口付近に散乱する石は全てカマドに使用されたと思われる、また右袖外側にも補強石が使用される。カマド内には甕と甑が重なって潰れた状態で遺存していた。上が逆位の甑、下が正位の甕で、使用状態そのままではなく、恣意的に埋められたと思われる。これらを取り除くと中央には石の支脚が座っており、煙道は底より4cm上から壁に大きく掘り込み、長さ5cmで垂直に奥壁が立ち上がる。カマド内の埋土は灰や焼土の堆積層もなく、恣意的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 (図版51、第26・27図)

土師器

碗(1) 口縁部は直立するもので外底部を手持ちヘラケズリする、ほぼ完形品で口径10.8cm、器高5.0cmを測る。

坏(2~4) 丸底で口縁を外反させる。外底部はヘラケズリ、2の外表面には工具痕が残る。3・4の体部と底部の境の稜は明瞭である。4は外面に火を受けて一部赤色化する。2~4は法量・器形とも酷似しており同一規格品かもしれない。2は復元口径11.5cm、器高4.7cm、復元底径9.5cm。3・4は完形品で口径11.5・11.6cm、器高4.8・4.6cm、底径9.6・9.3cm。1・3・4はカマド横床直上

からの出土。

高坏（5）口縁部を外反させ、端部は玉縁状に丸く造る。坏部は摩滅のため調整不明、脚部は外面タテケズリによる面取り、内面はヨコケズリし、端部付近をヨコナデする。また脚の一部が黒色化している。完形品で復元口径12.7cm、器高9.6cm、脚径10.6cmを測る。カマド横床直上からの出土。

甑（6）口縁部が頸部内面屈曲部の稜は明瞭である。体部外面上位は縦位、下位は縦位や斜位のハケ調整、内面上位は斜、中位はタテ、下位端部周辺はヨコのケズリを施す。取っ手はナデによって調整する。口縁部周辺はヨコナデ調整。一部に煤が付着する。復元口径21.8cm、復元器高24.2cm、復元底径8.6cm。カマド内で8の甕に重なって潰れた状態で出土。

甕（7～9）7は「く」字に口縁を屈曲させ、胴部は球形になる。胴部外面をタテハケ、内面を斜位のケズリで調整し、口縁部は横ナデする。復元口径14.2cm。8・9は長胴のもので、8は口縁を「S」字に強く湾曲させ、口径が小さく胴が張る胴部の器肉は薄い、口縁部は肥厚させる。外面は上位をタテハケ、下位をヨコハケで調整、内面は軽いケズリで擦過状になる。口縁部周辺はヨコナデ。全体に強く火を受けており、器面の劣化が激しく煤が付着している。中位には黒斑を有する。9は口縁を大きく外反させ、頸部が締まり内面屈曲部に強い稜が付く。底部は平底に近い。胴部外面はヨコとタテの粗いハケで調整、内面はケズリで調整する。口縁部周辺は内面を粗いヨコハケで調整した後、内外面ともヨコナデする。底部には黒斑が付く。口径は双方とも19.0cm、器高は35.8・39.4cm。7・8はカマド内からの出土。

須恵器

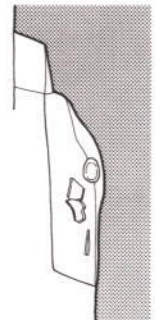
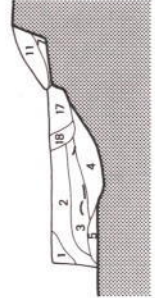
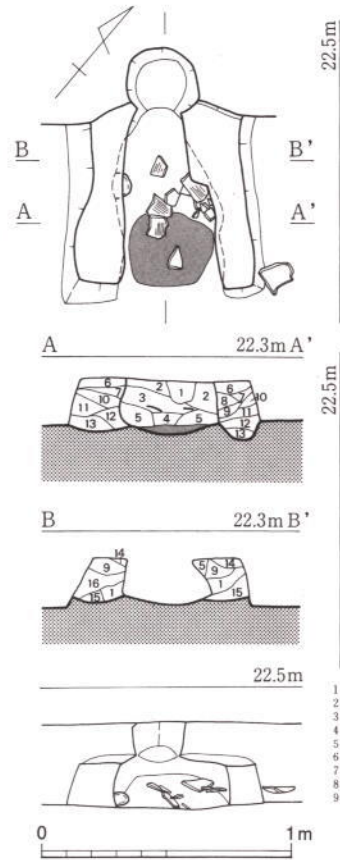
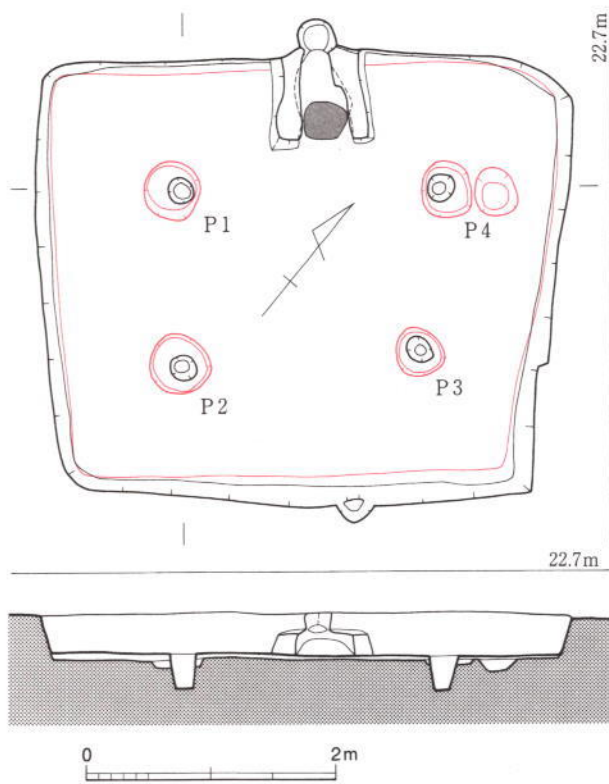
坏蓋（10）端部はやや肥厚し、肩部の屈曲が明瞭である。残存部は全面回転ナデ調整。

20号竪穴住居跡（図版16—2、第28図）

調査区西部中央、19号竪穴住居跡の東で検出した。長軸長3.8～4.1m、短軸長3.5mの横長逆台形プランを有する。コーナーは丸みを帯び、カマドは北壁中央に付設する。床面までの深さは0.3mで、残存状況が良い。埋土は上層が淡黄色土、以下は淡茶褐色土で一括埋土である。床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.9m・2.1m、南北1.3m・1.4mで、P3以外は各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.45m前後の円形プランで深さ0.05～0.08m、柱痕跡は直径0.1～0.15mで深さ0.3mを測る。貼り床は茶灰色粘質土を8cm前後の厚さで全面に施す。貼り床下ではピットを1つ検出したのみである。

20号竪穴住居跡カマド（図版16—3、第28図）

北壁を僅かに抉って直接袖を貼り付ける。両袖の長さは70cmと長いもので、高さは18cmと残存状況が極めて良い。天井部も僅かに確認できた。袖積み土中に焼土や炭が混入することから、再構築の可能性がある。また西袖最下部には丸石が1つ埋め込まれており、補強のために使用されたと思われる。底は住居床と同レベルであるが、奥壁近くを住居床面より3cm程掘り窪める。支脚や抜き孔は無い。焚き口付近直径30～35cmの範囲が赤変硬化面となり上面に焼土・灰の堆積層がある。内部埋土中層には土師器甕片が散乱していた。埋土が単純層であることから、恣意的に埋められたものであろう。甕は接合不可能であったため図示できなかった。奥壁は緩やかに立ち上がり、底より20cm上位から壁に掘り込まれた煙道に繋がる。煙道は住居外にピット状に造られ、壁は急激に上方へ立ち上がる。底部には焼土が残るが上位には住居の最上層埋土と同じ土が入る。煙道も清掃さ



- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 黄茶褐色土 | 10. 暗茶褐色土 |
| 2. 淡黄褐色土 | 11. 黄色土 |
| 3. 淡茶褐色土 | 12. 11+13 |
| 4. 3に焼土混 | 13. 黒灰色土 |
| 5. 焼土・灰胎質層 | 14. 黄褐色土・焼土混 |
| 6. 暗黄褐色土 | 15. 黄茶色土 |
| 7. 黄褐色土 | 16. 茶褐色砂質土 |
| 8. 黄褐色土(赤色土混) | 17. 茶褐色土 |
| 9. 8に焼土混 | 18. 淡黄色砂質土 |

第28図 20号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

れたものか。

出土遺物 (図版51、第27図)

土師器

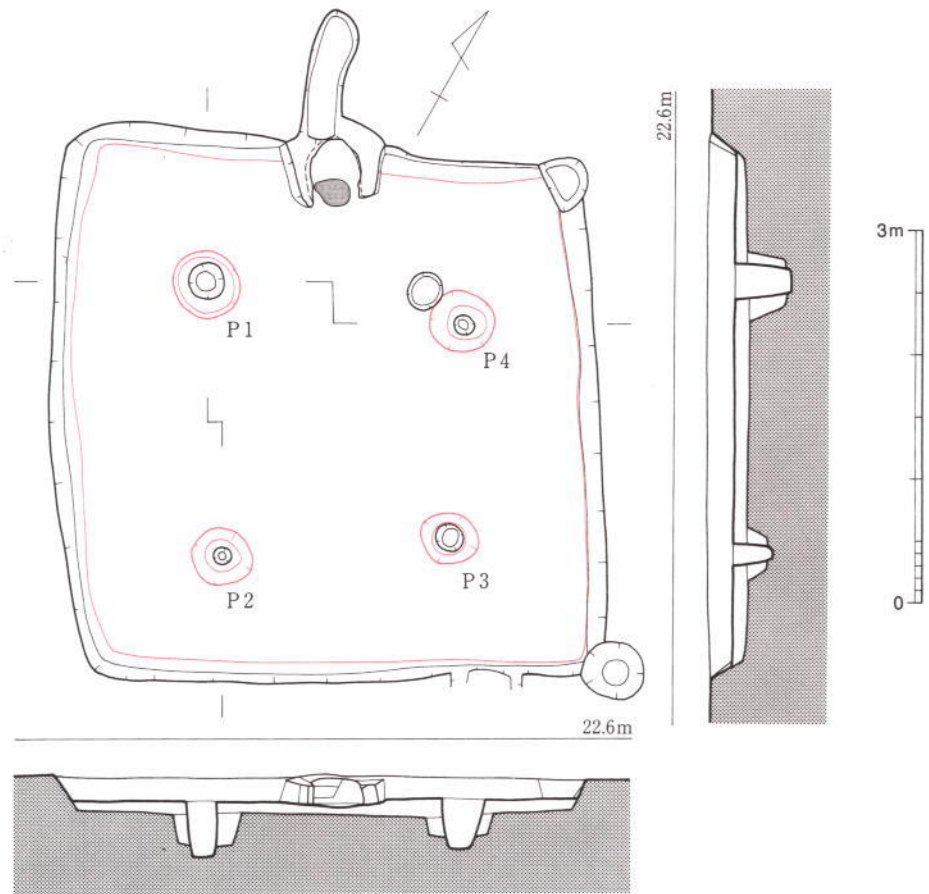
埴 (11) 完形品で、口縁部を内湾させるもの。底部はヘラケズリが僅かに残るが、他は摩滅が激しく調整不明。明橙褐色を呈する。口径11.2cm、器高5.3cm。カマド横床直上からの出土。

甕 (12) 口縁を直角に近く外反させるもの。器壁は薄く、外面はタテハケ、内面はナデ調整する。

21号竖穴住居跡 (図版17—1、第29図)

調査区西南部、25号竖穴住居跡北西で検出した。南北長4.0~4.6m、東西長4.4mのほぼ正方形のプランを有する。コーナー部は丸みを帯び、カマドは北壁中央に付設する。床面までの深さは0.2mで前後で、埋土は上層が淡黄色土、以下は茶色土で一括堆積と思われる。床面でP1~P4

の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.85 m・2.05 m、南北1.7 m・2.2 mを測り、P4以外は各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.5 m前後の円形プランで深さ0.15~0.3 m、柱痕跡は直径0.25~0.45 mで深さ0.3 mを測る。床は茶褐色粘質土を10 cm前後の厚さで全面に貼っている。床下ではピットを1つ検出したのみであった。



第29図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)

21号竪穴住居跡
カマド (図版17—
2、第30図)

北壁から突出するもので、茶褐色土中心で袖と奥壁を構築して張り付ける。袖長は左袖55 cm・右袖45 cm、高さは最高で16 cm残存しており、上位は内湾している。袖積み土中には焼土が混入しており、再構築の可能性もある。底は住居床面より6 cm程掘り窪められ、支脚や抜き取り孔はなかった。焚き口付近は直径25 cmの範囲が赤変硬化面となり、上面に焼土・灰が厚く堆積していた。埋土は焼土や炭を含む自然堆積で、奥壁付近中層から台付壺が出土した。煙道は底より8 cm上位から壁を掘り込んで住居外北へ溝状に1.0 m延びる。底は北に向かって緩やかに上っており、煙出しの掘り込みはなかった。

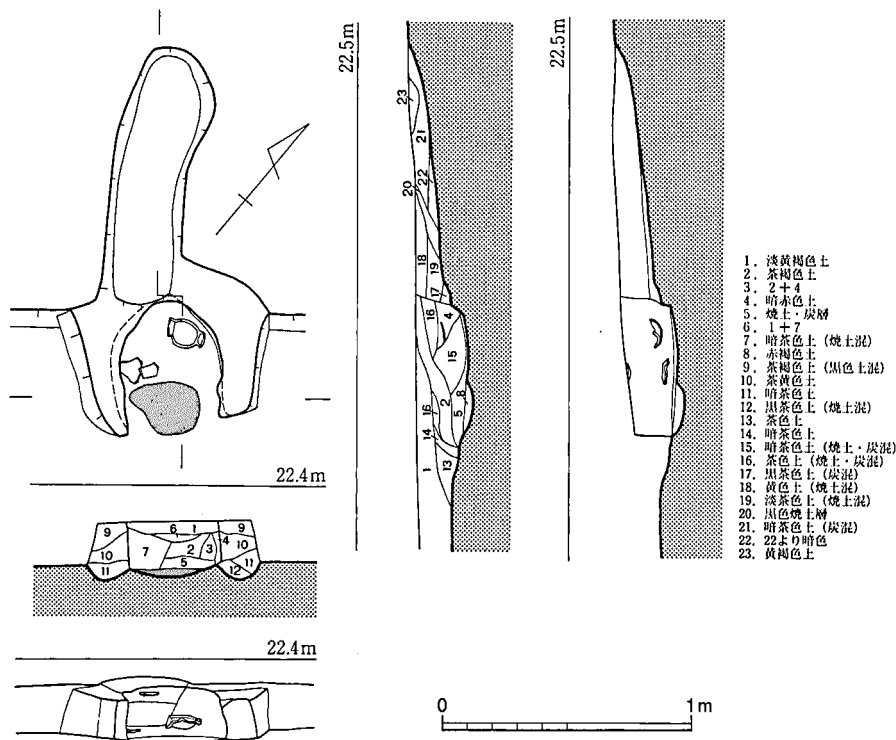
出土遺物 (図版52、第31図)

土師器

坏 (1) 体部中位から口縁部が大きく開き、底部は平坦に近くなる。内外面とも摩滅が激しく調整不明。口径12.6 cm、器高5.2 cm、底径9.5 cmを測る。カマド内からの出土。

取手付脚台壺 (2) 脚部を欠く。外面・口縁周辺・取手はナデ調整、内面はヨコケズりする。底部は指押さえによって脚を接合し、押圧痕が残る。復元口径9.2 cm。

甕 (3~6) 3は口縁部の屈曲がほとんど無く、端部は丸く収める。外面をタテハケ、内面をタ



第30図 21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

く、外面に黒斑が認められる。6は頸部の屈曲が無く、端部のみ外反する。頸にあたる部分は若干肥厚する。口縁部が最大径となるもの。端部は強く外反させる。外面はランダムなハケ目、内面はタテケズリ調整する。復元口径20.2・28.2・30.0cm。5はカマド横床直上からの出土。

22号竪穴住居跡 (図版17—3、第32図)

調査区西南部壁際で検出した。22・24号竪穴住居跡に切られ、35号竪穴住居跡を切る。また全体の約1/6程を欠く。現存プランは東西長4.0m、南北長4.65mで、コーナー部は丸みを帯びる。床面までの深さは0.15m程で、埋土は上層が黄色土、以下は黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.5m・2.3m、南北1.7m・2.0mを測り、規則性なく配される。柱掘形は直径0.45m～0.65mの楕円形プランで深さ0.3m、柱痕跡は直径0.15～0.18mで深さ0.5～0.65mを測る。床は茶褐色粘質土を5cm前後の厚さで全面に貼っている。床下ではピットを検出したのみであった。

22号竪穴住居跡カマド (図版18—1)

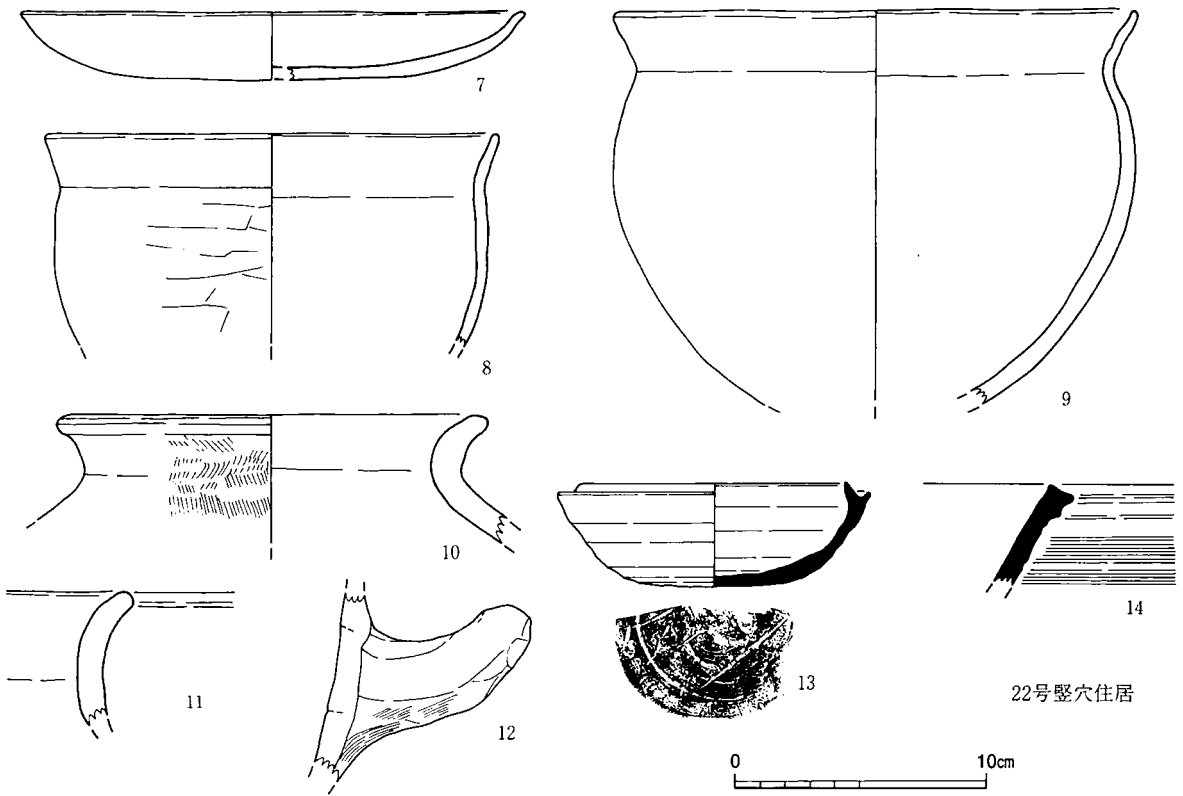
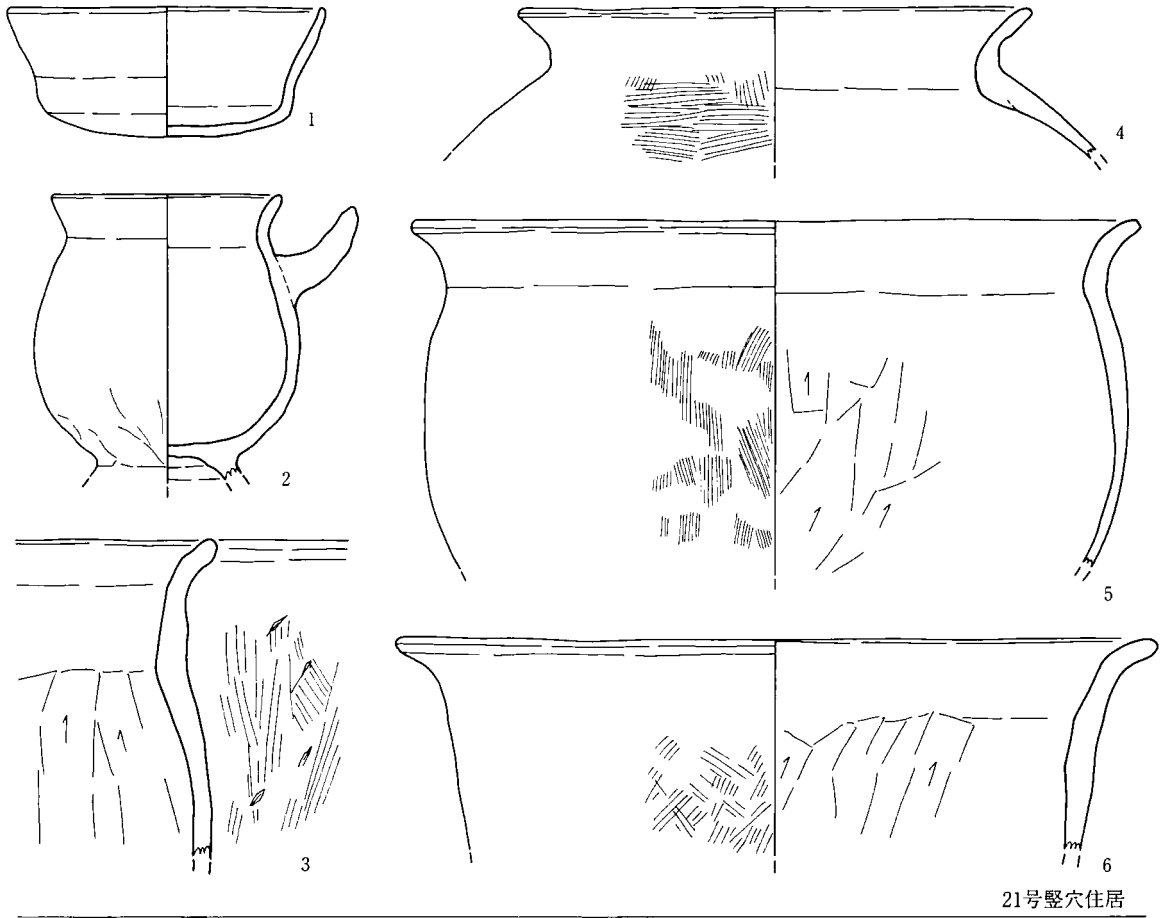
北壁中央やや東寄りであったが、トレンチによって削平される。残存する部分は焚き口と考えられ、住居床レベルより6cmほど掘り窪めている。最下層は赤色土層で、その上には焼土・灰が厚く堆積する。また周囲にも炭が散乱しており、掻き出されたものと思われる。

出土遺物 (第34図)

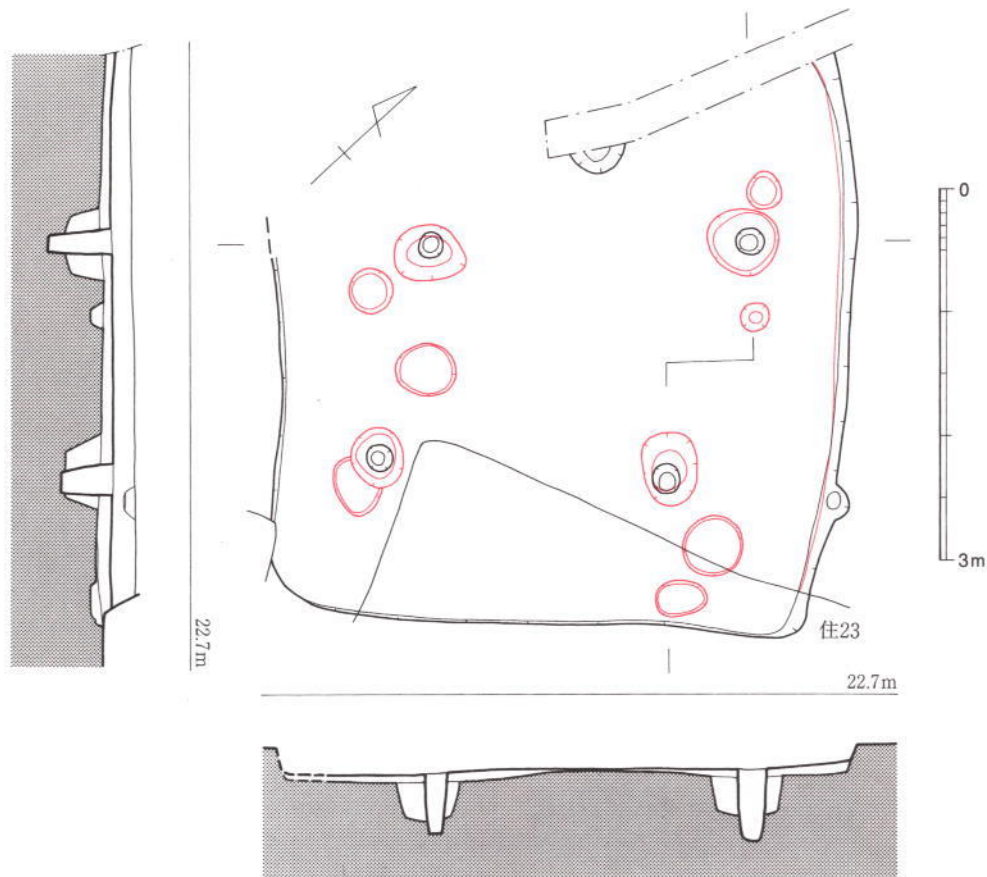
土師器

坏(1) 口縁部を直立させ、底部はやや丸くなる。摩滅のため調整不明。

テケズリ、口縁部周辺をヨコナデで調整する。外面のハケはややランダム。4は胴が大きく張るもので、口縁部は「く」字に強く外反させる。屈曲部は肥厚し、胴部と口縁部は器肉が薄い。外面はタテとヨコのハケ調整、内面は若干剥離しているため調整不明。5は口縁が広く、緩やかに屈曲させるもの。外面は細かいタテハケ、内面はタテケズリ、口縁部周辺はヨコナデで調整する。体部の器壁は薄



第31图 21·22号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第32図 22号竪穴住居跡実測図 (1/60)

甕(2) 口縁を「く」字に曲げる口縁部片。端部は四角く造る。外面はヨコナデ調整。

須恵器

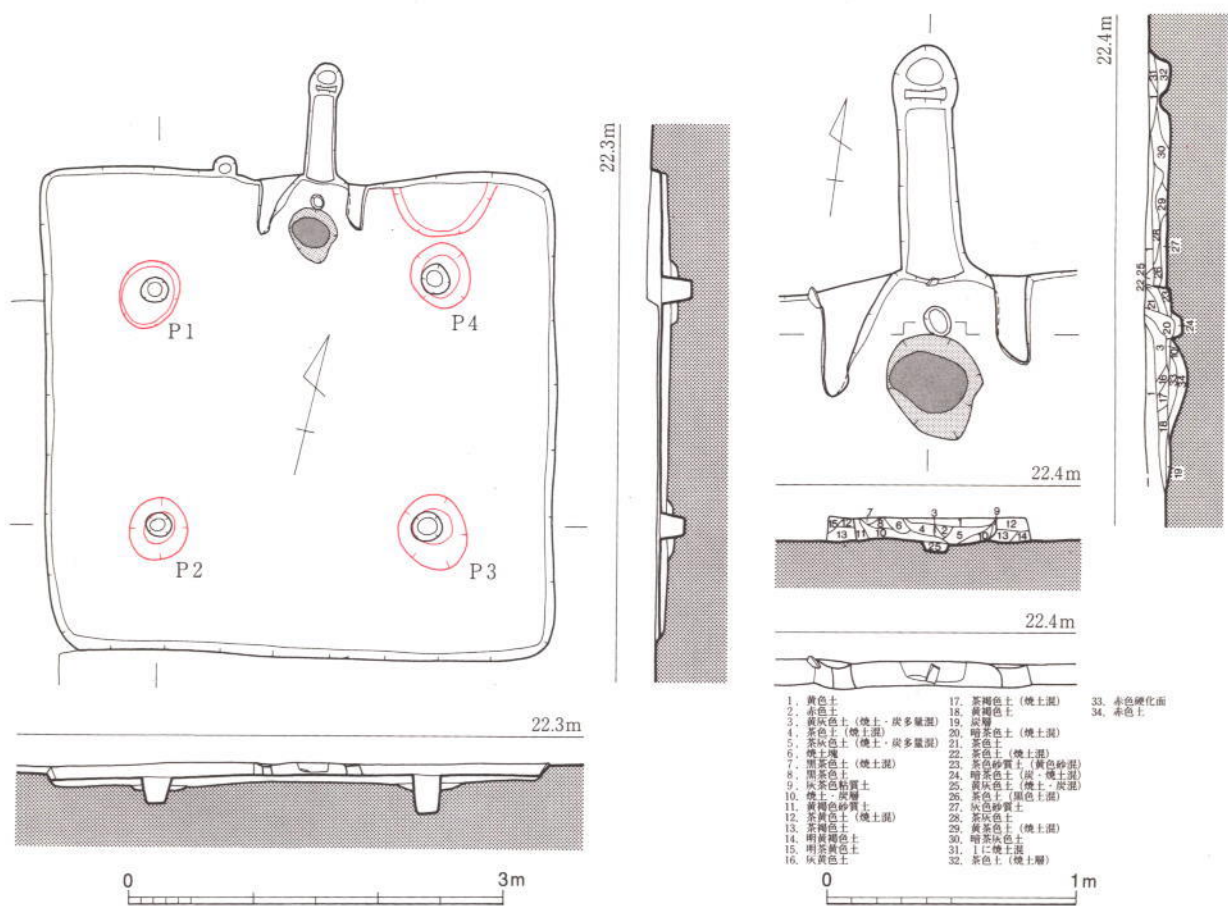
坏蓋(3) 口縁部小片。端部を折り曲げるもので、断面三角を呈するが屈曲は鈍い。

23号竪穴住居跡 (図版18—2、第33図)

調査区西南部、竪穴住居跡4棟が切り合う部分で検出した。一辺4.0mの正方形のプランを有し、北壁中央にカマドを付設する。コーナー部は角をもつ。床面までの深さは3~15cmと残りが悪く、埋土は上層が黄色土、以下は黄褐色土の自然堆積である。床面でP1~P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.1m・2.15m、南北2.0m・南北2.1mを測り、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.55m前後の円形プランで深さ0.05m、柱痕跡は直径0.15~0.18mで深さ0.2~0.3mを測る。貼り床は茶灰色粘質土を5~8cmの厚さで全面に施す。床下では北壁際で直径0.4m、深さ0.15mの浅い半円形土坑を検出した。

23号竪穴住居跡カマド (図版18—3、第33図)

北壁に直接袖を貼り付ける。袖長は左が45cm・東が35cm、高さは12cm残存する。底は住居床面と同レベルであるが、焚き口付近の直径0.4m部分を床面より8cm程円形に掘り窪めており、赤色土が厚く堆積する。上面は硬化しており、焼土・灰が薄く堆積していた。中央奥壁寄りに直径12cmの支脚の抜き孔があり、埋土にも抜き取った痕跡がある。埋土最上層は住居埋土と同じで、以下は



第33図 23号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

炭と焼土が混入する自然堆積である。煙道は底より2cm上面から壁を掘り込んで住居外北へ溝状に延ばす。長さは0.9m、底は北がやや低く、煙出しと煙道との境に高まりを造ってピット状になる。煙出し付近底には焼土が堆積する。

出土遺物 (図版52、第31図)

土師器

皿(7) 底部の屈曲が緩やかで、端部をやや外反させる。摩滅が激しく調整は不明。復元口径19.8cm。橙褐色を呈する。埋土出土資料と23号竖穴住居跡カマド内出土資料とが接合できた。

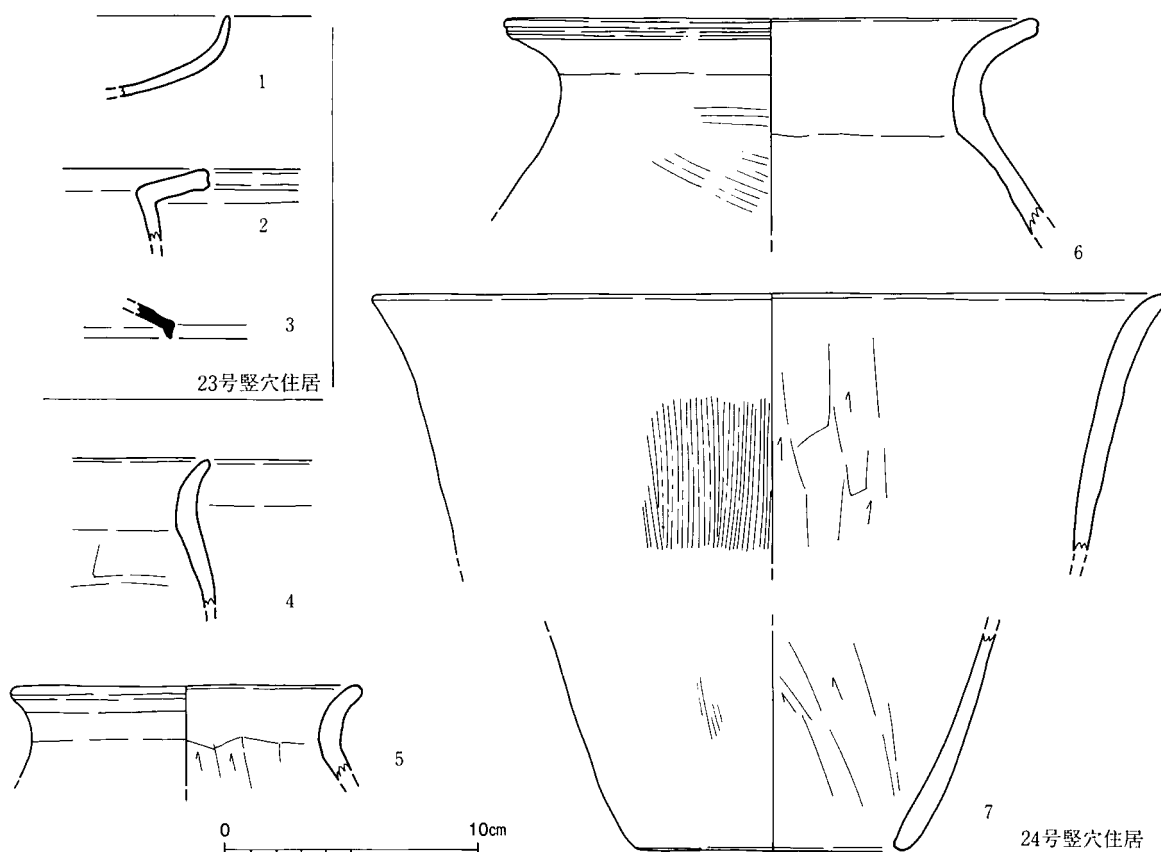
鉢(8・9) 8は口縁部を僅かに屈曲させる。内外面ともナデ調整で器肉を薄く仕上げている。9は口縁部を緩やかに外反させ、端部はナデにより内湾させる。全体に摩滅が激しく調整不明。復元口径は17.4・19.7cm。カマド内からの出土。

甕(10・11) 頸部が短く胴が張る甕で、口縁部を強く屈曲させる。端部は玉縁状に丸く造る。外面のハケ目は細かい。復元口径17.0cm。11は摩滅のため調整不明。カマド内からの出土。

取手(12) 外面にはハケ目が残りに、ナデで整形後に細かいハケで調整している。内面は摩耗しているが、タテケズリか。内面に取手差込みの痕跡が円形に残る。

須恵器

坏(13) 器高が高く、底部は平坦で肥厚する。屈曲部内面は稜を持たない。外底部はヘラケズリ、



第34図 23・24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

調整する。外底部にはヘラ記号が認められる。復元口径10.6cm、器高4.0cmを測る。

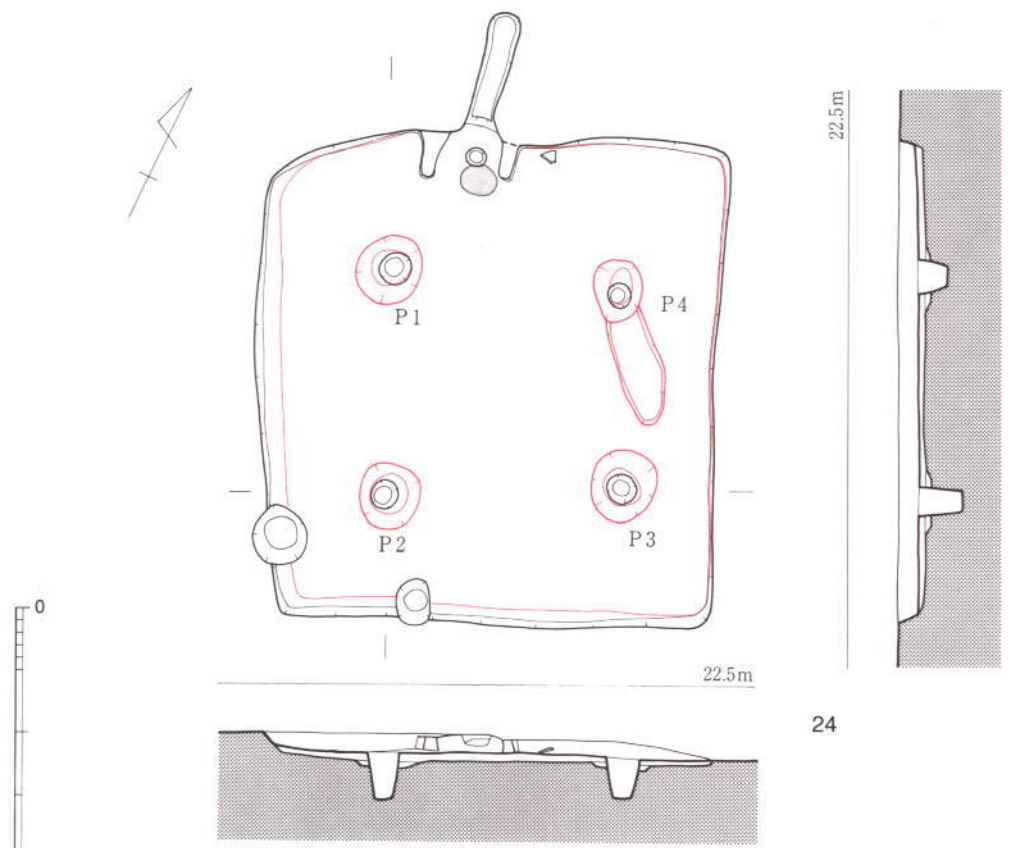
壺 (14) 口縁部小片で、端部付近に一条の凸帯が巡る。外面はカキメ、内面は回転ナデ調整する。

24号竪穴住居跡 (図版18—3、第35図)

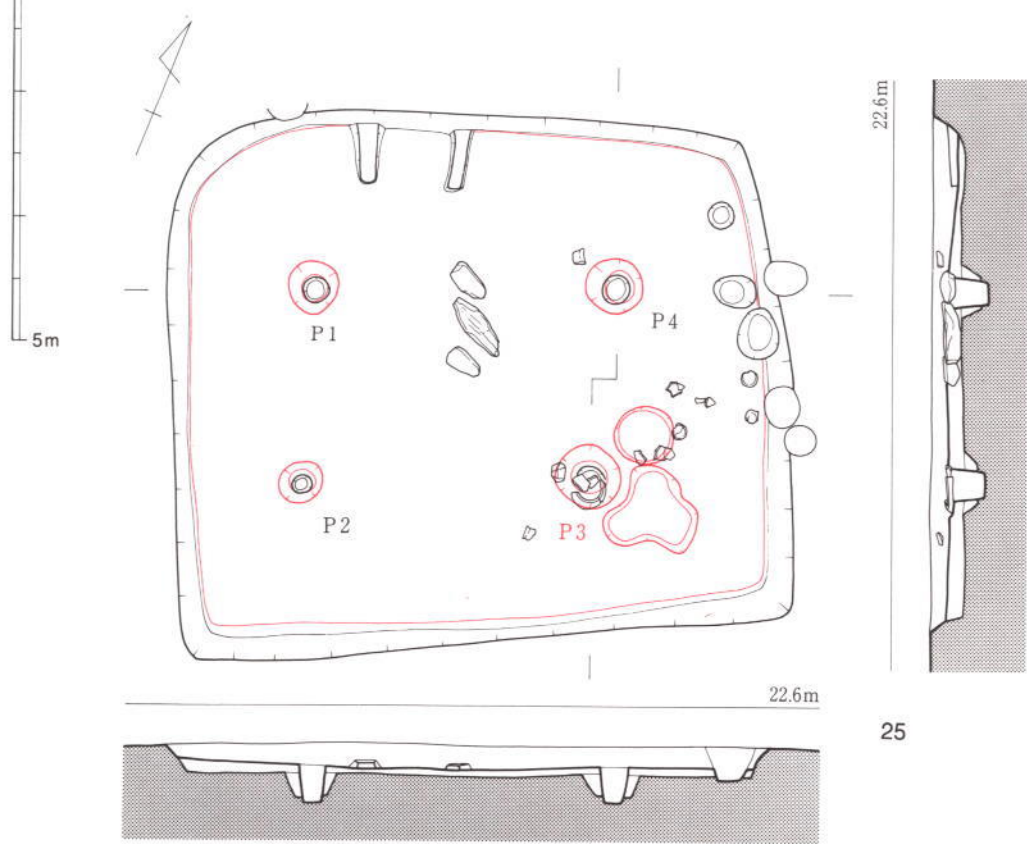
調査区西南部壁際で検出した。22・35号竪穴住居跡を切る。長軸長3.9m、短軸長3.5mの縦長長方形のプランを有し、カマドは北壁中央西寄りに付設する。コーナー部は角を持つ。床面までの深さは7~12cmと残存状況が悪く、埋土は上層が黄色土、以下は茶褐色土中心の自然堆積である。床面でP1~P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.8m、南北1.5m・1.8mでP4が南に寄るが、全て各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.55mの円形プランで深さ0.05~0.08m、柱痕跡は直径0.15~0.18mで深さ0.25~0.35mを測る。床は茶灰色土を5cm前後の厚さで全面に貼り、床下ではP2南で掘形に続く浅い土坑を検出した。

24号竪穴住居跡カマド (図版19—1、第36図)

北壁に張り付けるもので、袖長は左袖0.35m・右袖0.28mで、高さは最高で0.2m残存している。底は住居床面より4cm程掘り窪める。中央には支脚抜き孔があり、埋土にも抜き取った痕跡が見られる。焚き口付近には幅0.3mの赤色硬化面があり、上面には焼土と炭の粘質土が堆積する。埋土上層は住居と同じで、以下は炭や焼土混じりの自然堆積である。煙道は奥壁が緩やかに立ち上がって底より5cm上で段をなし、住居外北へ溝状に0.85m延びる。底は北に向かって上っており、煙出

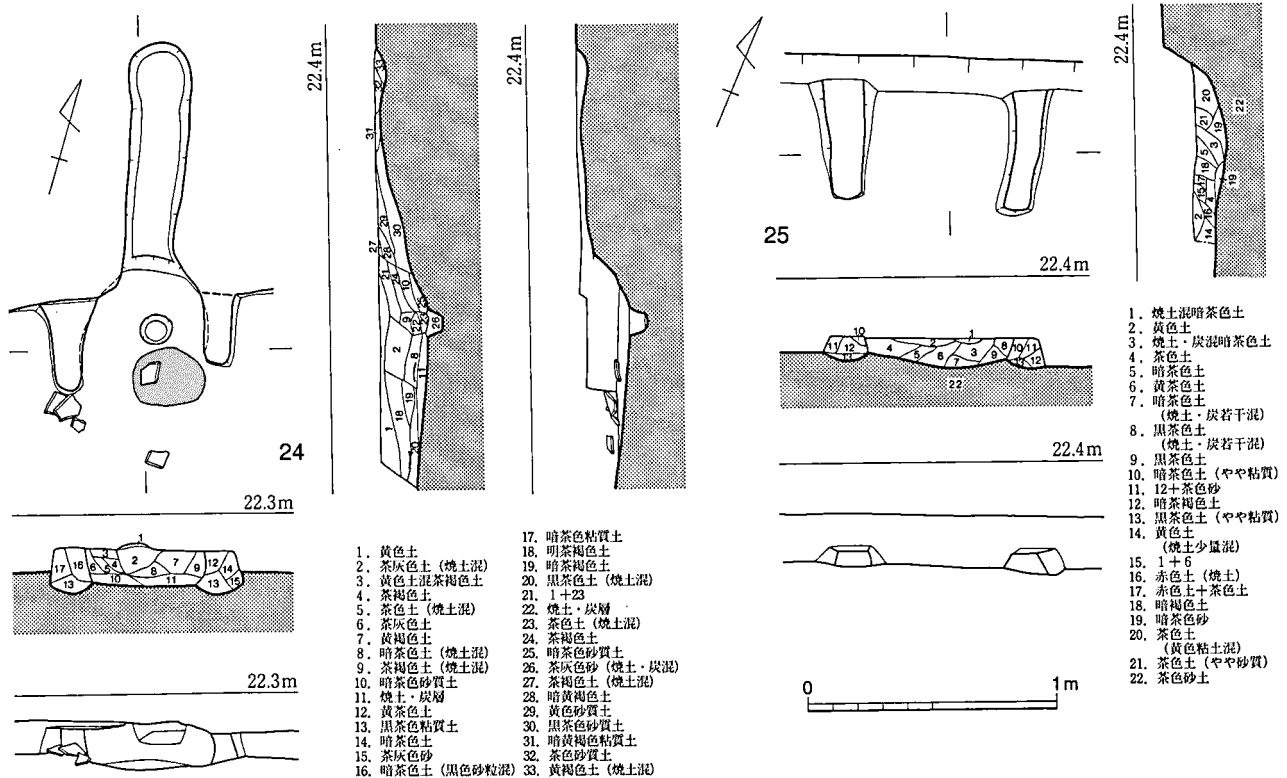


24



25

第35図 24・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第36図 24・25号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)

し部のみ底が緩やかに窪む赤変硬化面上と袖前面で甑片が出土し接合した。

出土遺物 (図版52、第34図)

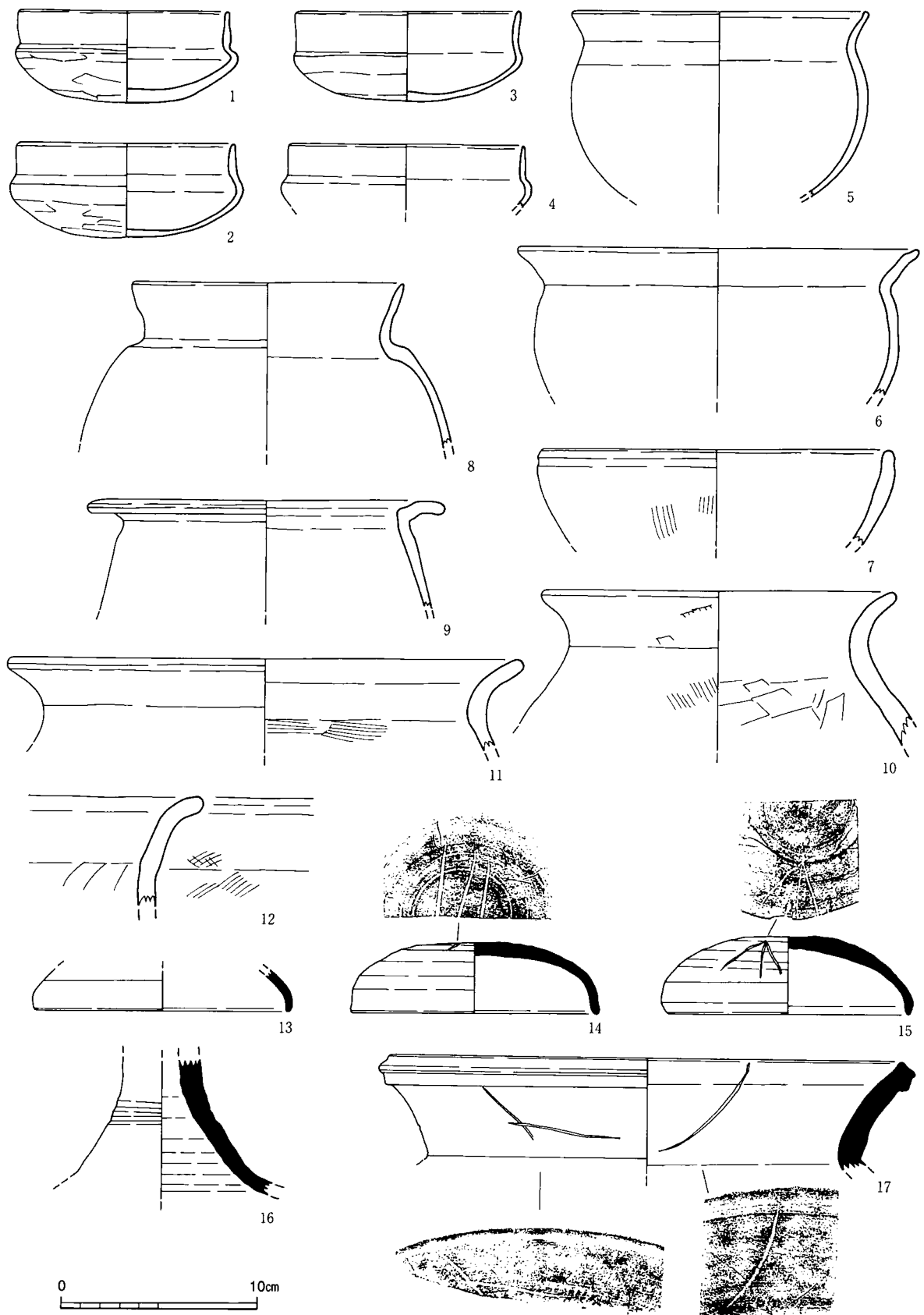
土師器

甕 (4~6) 4は口縁がほとんど屈曲しない。内面のヨコケズリ以外は摩滅のため調整不明。5は緩やかに口縁部を外反させるもので、内面の稜は鈍い。内面をタテヘラケズリ、口縁部をヨコナデする。外面はハケ目が僅かに認められる。復元口径13.9cm。6は頸部が長いものである。口縁は大きく開き、端部に沈線が一条巡る。摩滅が激しいが、外面に粗いハケと内面のケズリが認められる。特に内面屈曲部のケズリは強く、稜が明瞭に付く。復元口径21.2cm。4はカマド前面床直上、5は貼り床内、6は床直上からの出土。

甑 (7) 口縁部と底部で同一個体である。口縁は大きく開き、端部を薄く造る。外面はタテハケ、内面はタテケズリで調整し、底部端はやや肥厚する。復元口径31.6cm、復元底径10.0cmを測る。カマド内とカマド前面の資料が接合できた。

25号竖穴住居跡 (図版19-3、第36図)

調査区中央部、21・26号竖穴住居跡の間で検出した。3号土坑に切られる。長軸長4.6~4.9m、短軸長3.9~4.3mの横長不整長方形のプランを有し、コーナー部は丸みを持つ部分と角を持つ部分がある。カマドは北壁中央西寄りに付設する。床面までの深さは0.15mで、埋土は上層が黄褐色土、以下は茶褐色土中心の自然堆積である。床面でP1~P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形



第37图 25号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

を検出した。柱間寸法は東西2.4 m・2.3 m、南北1.6 m・1.5 mを測り、若干歪な配置となる。柱掘形は直径0.35～0.5 mの円形プランで深さ0.15 m、柱痕跡は直径0.15～0.2 mで深さ0.3 mを測る。P 3では床面で柱痕跡を巻くように置かれた土師器壺を検出した。貼り床は茶褐色粘質土を0.1 mの厚さで全面に施す。床下ではP 3付近で不整形土坑とピットを検出した。また、床面中央部で検出した3つの自然石は当初カマドに使用したものと考えたが、貼り床内に埋められていたことから、他の住居カマドに使用されていた可能性も考えられる。当住居での用途は不明である。

25号竪穴住居跡カマド（第36図）

北壁に袖を直接貼り付ける。袖長は東西とも48 cm、高さは8 cm残存しており、底は住居床面より5 cm程掘り窪める。支脚や抜き取り孔、赤色硬化面はなく、埋土中にも焼土・灰の堆積層はなかった。清掃された可能性が強い。奥壁は緩やかに立ち上がるが、煙道は確認できなかった。

出土遺物（図版52、第37図）

土師器

坏（1～4）口縁が直立し蓋受けの段を有する。1は受け部の屈曲が強く、底部を肥厚させる。2～4は屈曲が若干弱い。1・2は体部外面をヘラケズりする。他は調整不明。1は口径10.7 cm、器高4.7 cm、2・3は復元口径11.1・11.4 cm、器高4.9・4.4 cm、4は復元口径12.0 cmを測る。

鉢（5～7）は5は口縁を緩やかに外反させ、端部を僅かに内傾させる。6は口縁が大きく開き屈曲も強い。端部は薄く仕上げる。双方とも摩滅のため調整不明。復元口径15.0・20.2 cm。7はボウル型のもので、端部付近に鈍い凹線を巡らせる。外面に僅かにハケ目が残るは他は調整不明。復元口径17.3 cm。7は貼り床内からの出土。

壺（8）肩部に稜の付く短頸壺。口縁部は若干外反させ端部を薄く造る。屈曲部は内外面とも稜が付く。摩滅のため調整は不明。復元口径13.8 cm。床直上からの出土。

甕（9～12）9は「く」字に口縁を屈曲させ、平坦部を造り端部は若干下がる。10は胴が大きく張るもので、頸部の屈曲は緩やかである。内面を工具によるナデ、外面をハケで調整する。11は内面に僅かにハケ目が見えるのみ。復元口径18.0・18.0・25.5 cmを測る。12は端部を若干肥厚させる。外面はハケ、内面はタテケズりで調整し、口縁部をヨコナデする。10は床直上からの出土。

須恵器

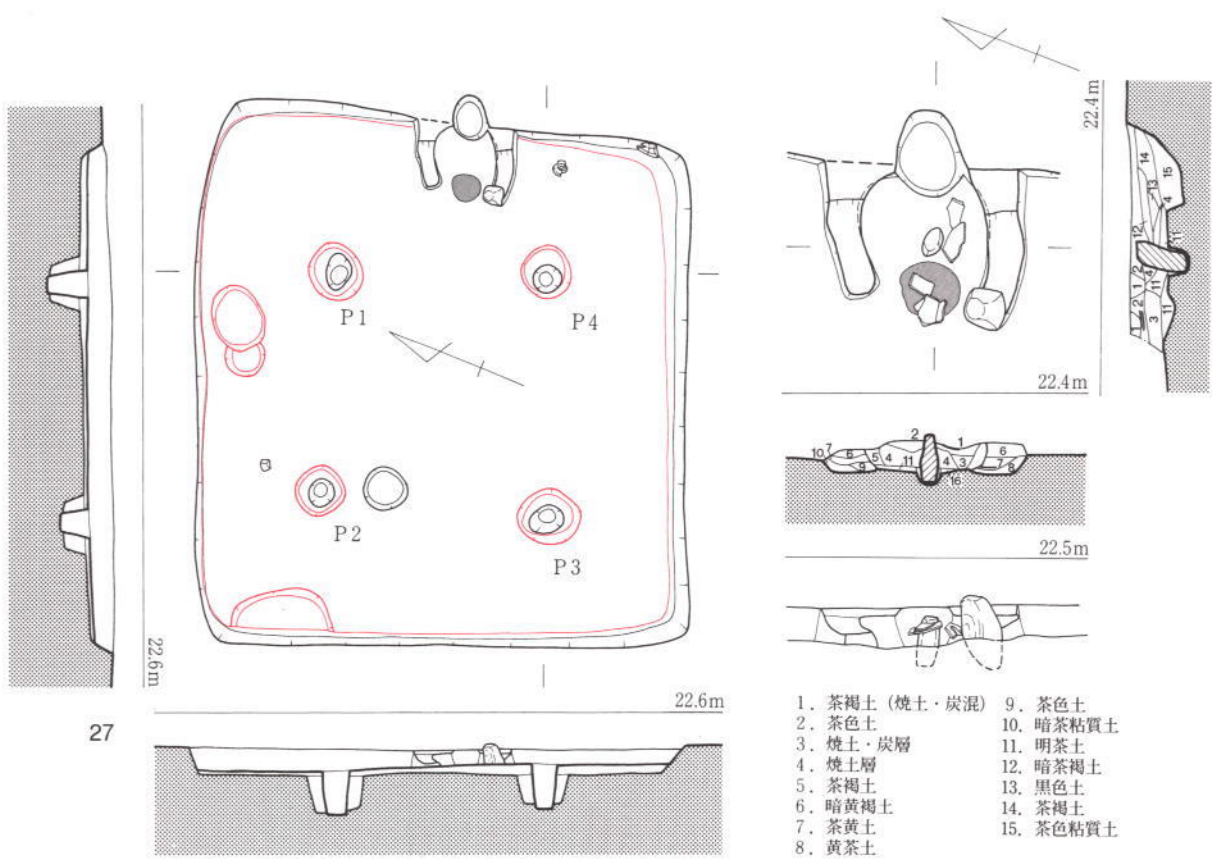
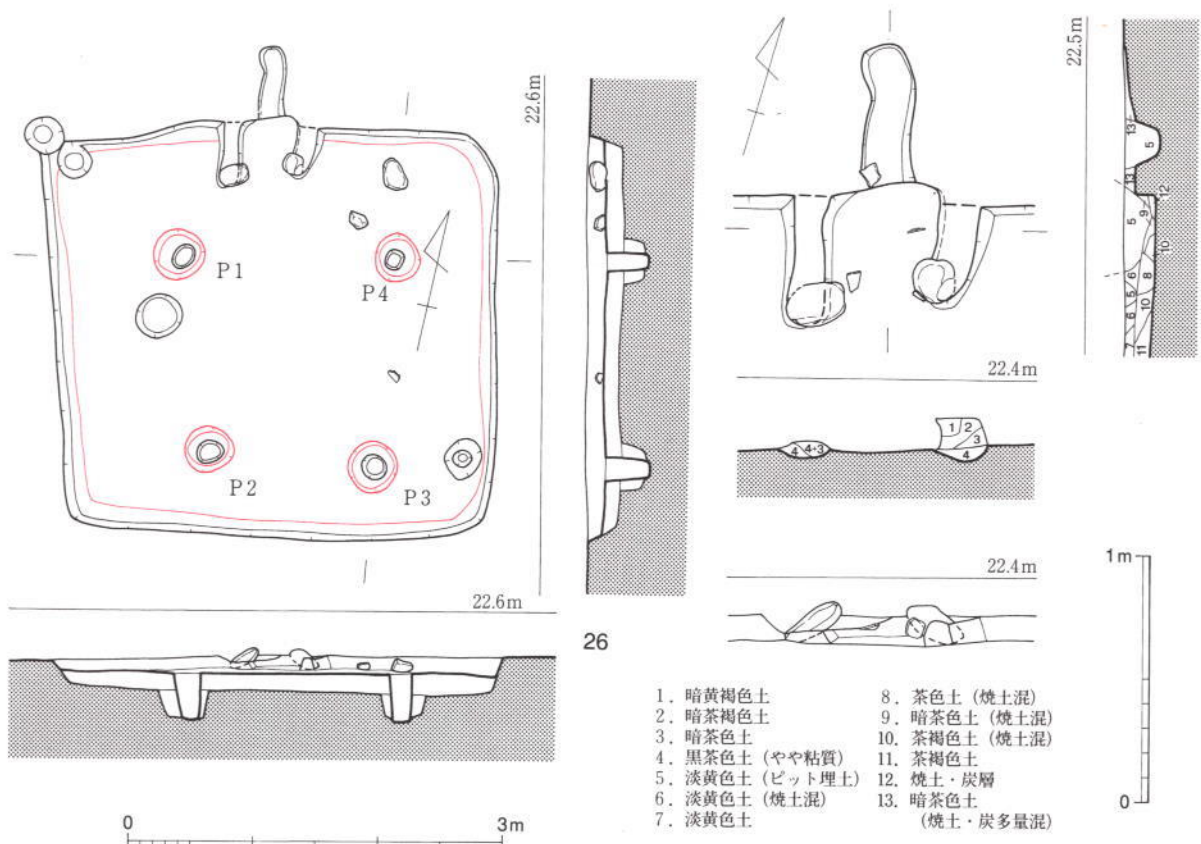
蓋（13～15）返りを持たない蓋で、口縁部を屈曲させる。15は全体に丸みを持つが、13・14はやや平坦に造る。天井部外面は回転ヘラケズリ調整する。14の端部はやや外反する。14・15は天井部にヘラ記号を持つ。復元口径12.4・12.6・12.6 cm、器高3.6・4.0 cmを測る

高坏（16）脚部片で外面に2条の沈線が巡る。内面も回転ナデによる起伏が激しい。床直上からの出土。

壺（17）大型の壺口縁部で、端部に断面三角の突帯が巡る。内外面ともヨコナデで、外面には工具痕が残る。また内外面ともヘラ記号がある。床直上P 3の周囲からの出土。

26号竪穴住居跡（図版19—3、第38図）

調査区西南部、25・27号竪穴住居跡の間で検出した。長軸長3.4～3.7 m、短軸長3.3 mの横長長方形のプランを有し、コーナー部は角を持つ。カマドは北壁中央部に付設する。床面までの深さは0.1～0.15 mと残存状態が悪く、埋土は淡黄色土中心の自然堆積である。床面でP 1～P 4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.7 m・P 1.3 m、南北1.6 m・1.7 mを測り、逆台形のプランになる。柱痕跡から柱の太さは0.15～0.18 mに復元できる。床は茶褐色土



第38図 26・27号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

を10～15cmの厚さで全面に貼り、床下ではピットを検出したのみである。北東部床直上で石を2個検出した。

26号竪穴住居跡カマド（図版20—1、第38図）

北壁に張り付けるもので、突出しない。袖長は54cm・45cmで、高さは最高で0.08m残存している。西袖は上層からのピットに切られて中央部を欠損する。両袖部焚き口にはそれぞれ縦長の石を1つ、斜めに埋め込んで使用している。カマド東の床面で検出した石も、カマドに使用されたと思われる。底は住居床面より3cmほど掘り窪められ、支脚や抜き孔は存在せず、硬化面もなかった。埋土中には焼土や灰がほとんど無く、清掃されたと思われる。煙道は底面から硬化面下には焼土と炭の粘質土が堆積する。煙道は底面の8cm上位から壁に掘り込み、北へ溝状に55cm延びる。底はほぼ水平で、半ばで緩やかな段が付き、煙出し部に向かって緩やかに上る。底には焼土・灰の粘質土が堆積していた。

出土遺物（第39図）

土師器

鉢（1）口縁をやや内湾させ端部は肥厚して丸く収める。調整は外面にハケ目が残るのみである。貼り床下からの出土。

甕（2）頸部の屈曲が強く、内面の稜も強い。胴部はナデ、口縁部はヨコナデする。復元口径14.1・17.6cm。床直上からの出土。

27号竪穴住居跡（図版20—2、第38図）

調査区西南部で検出した。長軸長4.0～4.4m、短軸長3.9mの縦長長方形のプランを有し、コーナー部は丸みを持つ。カマドは北壁中央部に付設し、南西隅で浅い土坑を検出した。床面までの深さは0.12～0.18m、埋土は淡黄色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.7・1.8m、南北1.9・1.7mで、P2がやや西北に寄る。柱痕跡から柱の太さは0.15～0.18mに復元できる。床は茶褐色土を3～8cmの厚さで全面に貼り、床下ではピットを検出したのみである。

27号竪穴住居跡カマド（図版20—3、第39図）

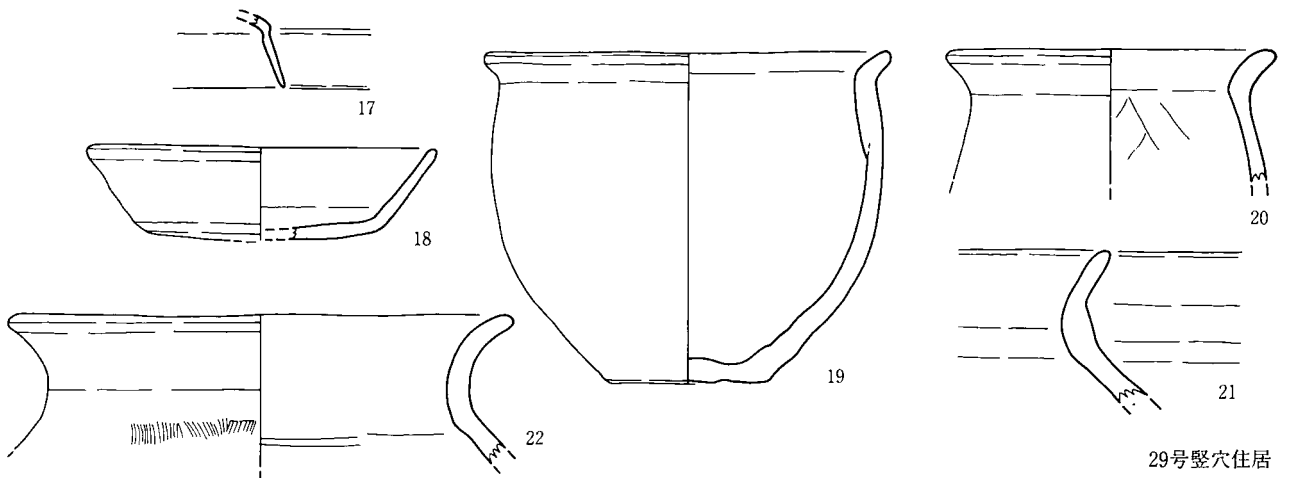
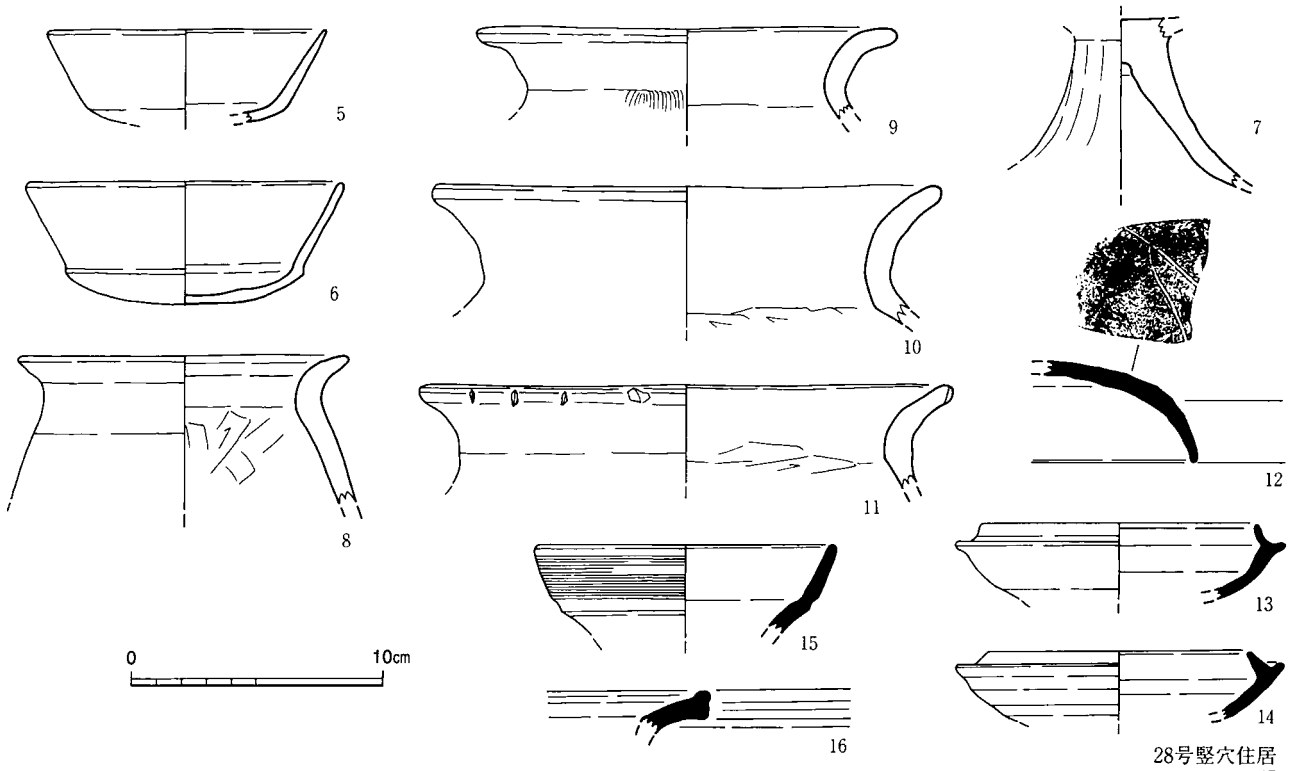
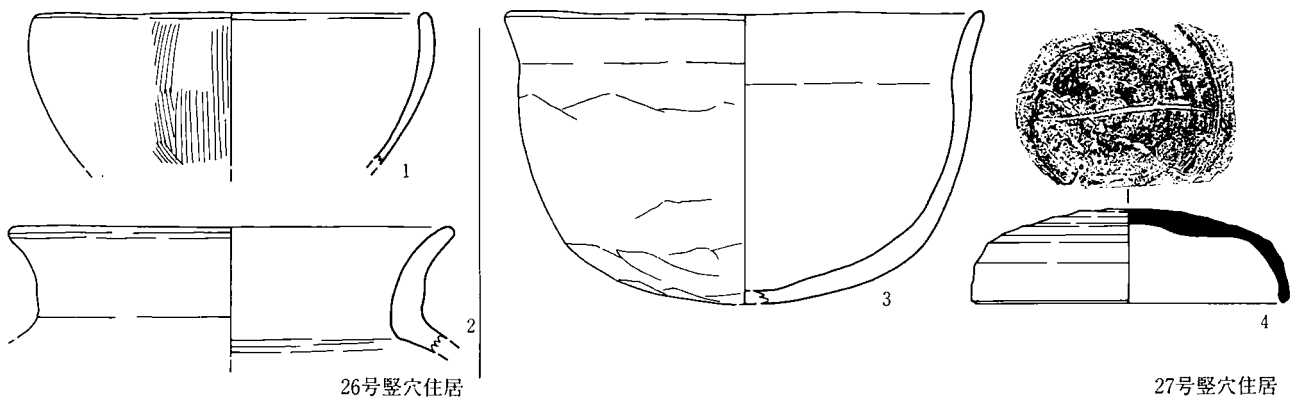
北壁に直接貼り付けられる。袖長は左袖55cm・右袖65cmで、高さは最高で14cm残存している。東袖焚き口には縦長の石を直立させて使用しており、西袖にはない。内底は住居床面より4cmほど掘り窪め、焚き口中央はさらに3cm掘り窪め赤色土が堆積している。中央に石の支脚が据えられており、前面には赤色硬化面が幅25cmで存在する。奥壁付近に焼土・灰の薄い層はあるが、面的に堆積しない。底直上で土師器甕片が出土したが、小片のため接合不可能で図示できなかった。煙道は奥壁付近をピット状に深く掘り込んでおり、底より8cm程低い。壁は急激に立ち上がり、炭混じりの粘質土が厚く堆積していた。

出土遺物（図版52、第39図）

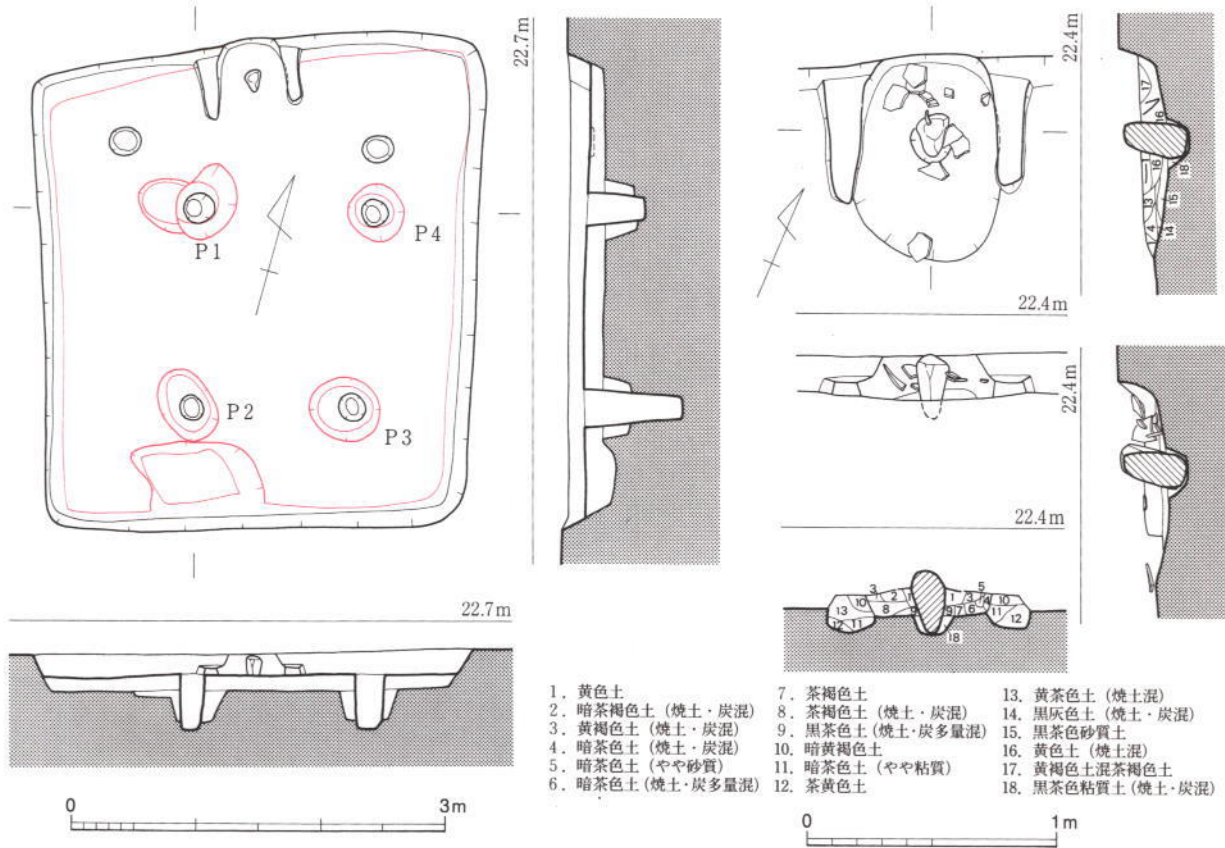
土師器

鉢（3）口縁をやや外反させ、頸部はやや肥厚する。外面にケズリが認められるが、摩滅が激しく調整は不明瞭である。

蓋（4）口縁を垂直に立ち上げ、端部には段が付く。天井部1/2を回転ヘラケズリ調整する。



第39图 26~29号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第40図 28号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

胎土は粗悪で、器面の凹凸も激しい。天井部に「一」のヘラ記号を持つ。復元口径12.6cm、器高4.7cm。床直上からの出土。

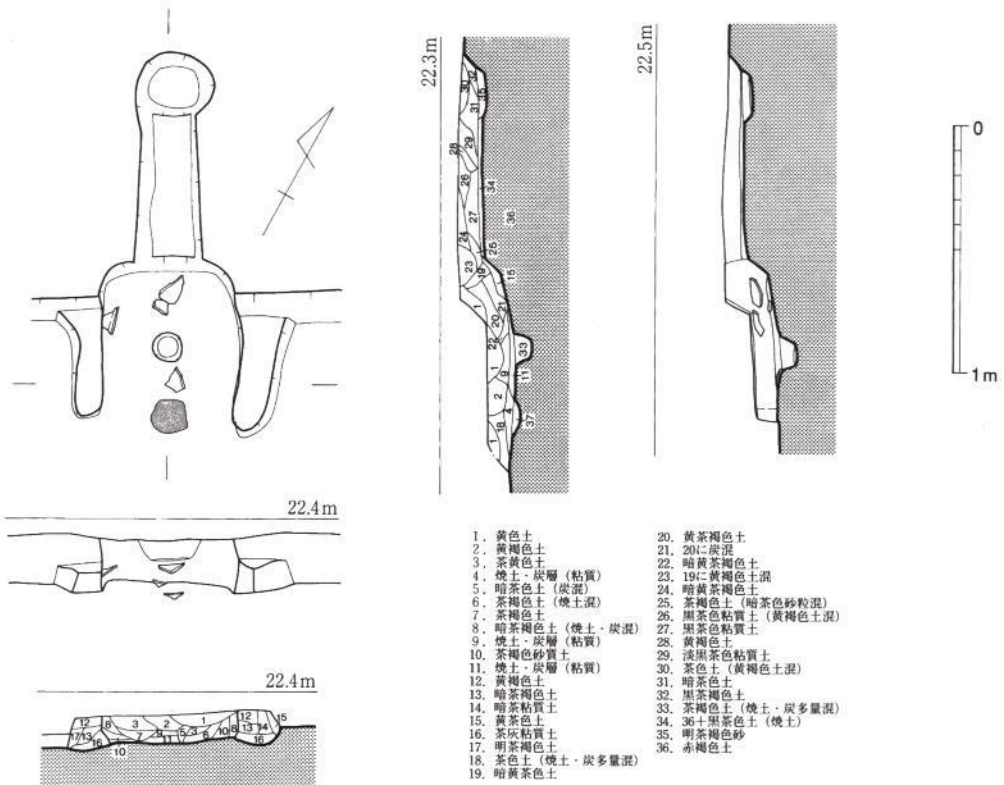
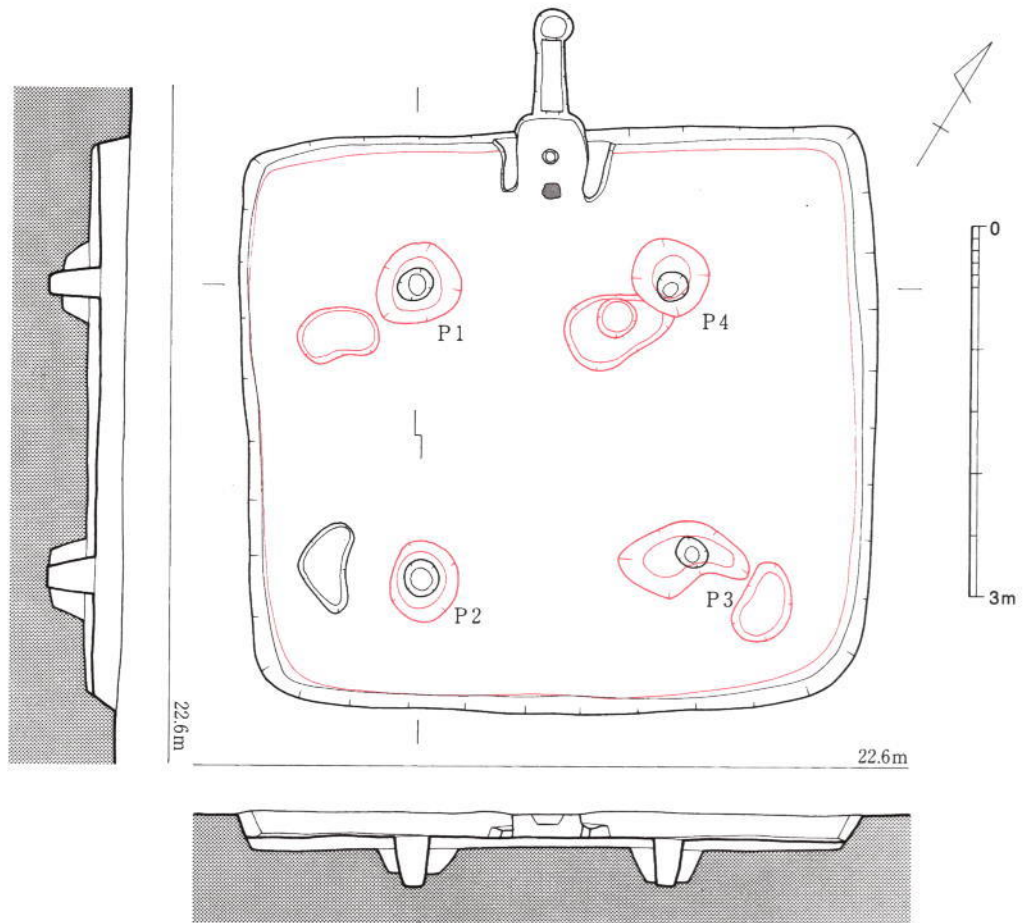
28号竪穴住居跡 (図版21-1、第40図)

調査区西南部、32・33号竪穴住居跡の間で検出した。32・33号住居を切る。長軸長3.6~4.0m、短軸長3.4~3.6mの縦長不整長方形のプランを有し、コーナー部は角を持つ。カマドは北壁中央部に付設する。床面までの深さは0.15~0.2m、埋土は黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1~P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.4m・1.3m、南北1.6mを測り、住居のプランに対して若干東に振れ、東南に偏った形になる。柱掘形は直径0.45~0.65mの円形もしくは楕円形で深さは床面より0.25m、柱痕跡は直径0.15~0.2mで貼り床面から深さ0.45~0.75mを測る。貼り床は茶灰色粘質土を10~15cmの厚さで全面に貼り、床下では南壁際で長軸長0.9m・短軸長0.6m・深さ0.1mの土坑を検出した。

28号竪穴住居跡カマド (図版21-2、第40図)

北壁を若干抉りこんで奥壁を作り、袖を直接貼り付ける。袖長は左袖0.50m・右袖0.45mで、高さは最高で7cmしか検出できなかった。中央には長さ26cmの石の支脚が据えられており、周辺埋土中に土師器甕片が散乱していたが、接合不可能。埋土には炭や焼土が混入しているが単独層にはならず、赤変硬化面もない。清掃後に土器等が埋められたと考えられる。煙道は遺存しなかった。

出土遺物 (図版52、第39図)



第41図 29号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

土師器

坏（5・6）口縁が大きく開くもの。6は蓋受けの段が残る。双方とも摩滅が激しく調整不明。

高坏（7）坏部と脚端部を欠く。外面はタテケズリによる面取り、内面はヨコナデ調整する。

壺（8～11）いずれも口縁部の破片。いずれも口縁を大きく外反させる。内面はヘラケズリ、9は外面にタテハケが残る。他は摩滅のため調整不明。10は口縁端部に不整形な刻みを有する。復元口径は13.0・16.0・20.0・21.0cmを測る。

須恵器

蓋（12）端部内面が若干剥離している。天井部外面は手持ちヘラケズリで、内面はナデ、口縁部付近はヨコナデする。埋土からの出土。

坏（13・14）13は口縁部を薄く造り、やや外反させる。4は口縁を強く内傾させる。双方とも外底部を回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整する。14は外面に灰が被る。復元口径10.9・10.3cmを測る。

甗（15）口縁部のみの資料。中位に段を、外面にはカキメを有する。そのほかは回転ナデ調整。復元口径11.8cm。

甕（16）端部上面に丸い突帯を有する。小片のため復元不可能。

29号竪穴住居跡（図版21—3、第41図）

調査区西南部、30号竪穴住居跡東で検出した。30号住居に切られ、4・5号土坑を切る。長軸長5.0m、短軸長4.7mの横長長方形のプランを有し、コーナー部は丸みを持つ。カマドは北壁中央部に付設する。床面までの深さは0.17mで、埋土は上層が黄色土、以下は茶色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.0m・2.2m、南北2.1m・2.3mを測り、P4がやや西によるが、他は各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は0.65m前後の円形プランになり、P3のみ不整形である。柱間の調整のために横長に拡張されたものかもしれない。深さは床面より0.25～0.35m、柱痕跡は直径0.15～0.2m、深さは貼り床面から0.4mを測る。貼り床は茶灰色粘質土を10cmの厚さで全面に貼り、床下では各柱穴周辺に浅いピットを検出した。

29号竪穴住居跡カマド（図版22—1、第41図）

北壁より15cm突出して造られるもので、隅丸方形のプランを有する。袖長は左袖43cm・右袖46cmで、高さは最高で8cmしか残存していなかった。底は住居床面より3cmほど掘り窪められ、中央には直径12cmの支脚抜き取り孔がある。焚き口付近には直径15cmのピットを掘り込み、赤色土が堆積していた。上面は硬化し、焼土・灰の粘質層が堆積する。煙道は底面より8cm上位から壁に掘り込み、住居外北へ溝状に0.85m延ばす。底はほぼ水平で、煙出し部のみ2cmほどピット状に掘り窪める。ピット最下層には焼土が堆積するが、上位は自然堆積である。

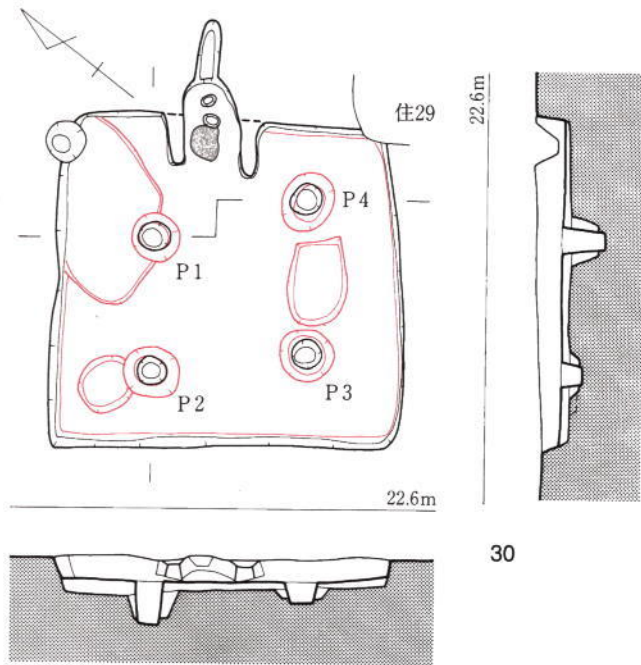
出土遺物（図版53、第39図）

土師器

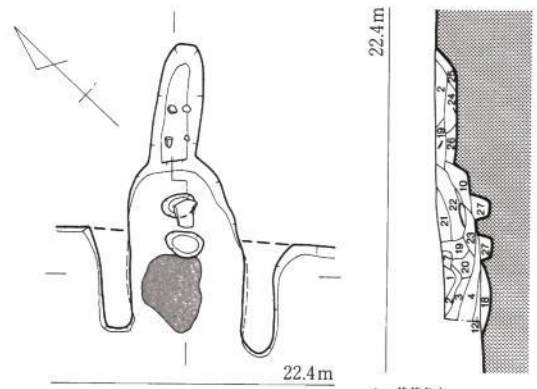
蓋（17）須恵器を模した蓋口縁部で、天井部との境に段を有する。摩滅のため調整は不明。

坏（18）口縁が広がるもので、摩滅のため調整不明。復元口径13.6cmを測る。

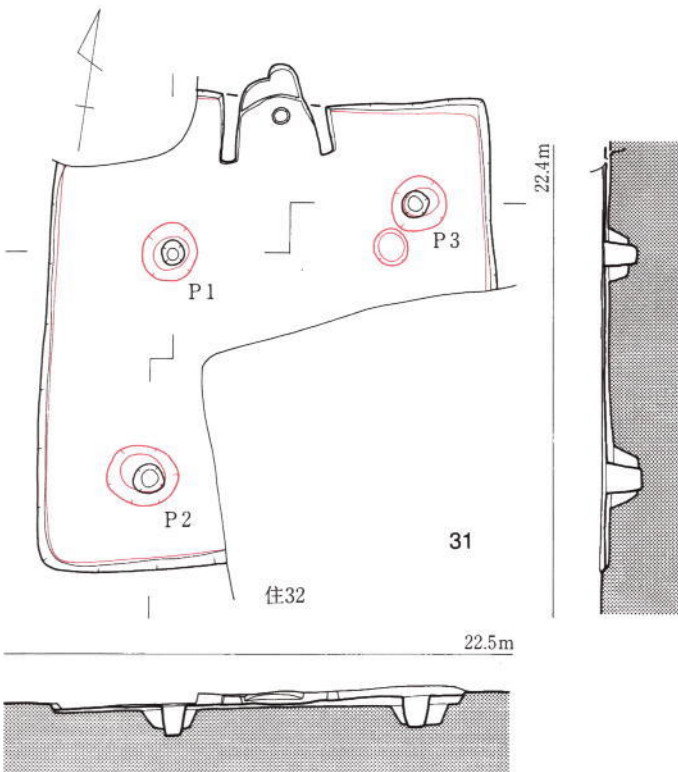
甕（19～21）19は小型のもので口縁部は短く強く外反させる。底部は平坦で、若干肥厚する。内面はナデ調整、外面は劣化が激しく調整不明。復元口径16.0cm、復元底径6.6cm、器高13.1cmを測



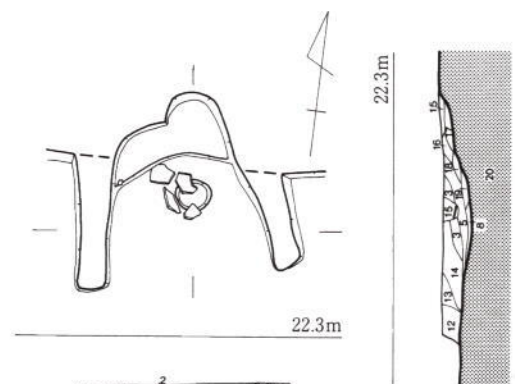
30



1. 黄茶色土
2. 黄褐色土
3. 茶褐色土 (焼土・炭混)
4. 明茶褐色土 (焼土・炭混)
5. 1+7
6. 暗茶色粘質土 (炭混)
7. 黄褐色砂
8. 黄色砂
9. 黒茶色土
10. 焼土・炭層
11. 茶褐色砂
12. 暗黄褐色土
13. 赤色土
14. 暗茶褐色土
15. 黒茶色粘質土
16. 暗茶色土
17. 暗茶色砂質土
18. 赤褐色土
19. 暗茶色土 (焼土混)
20. 暗茶色砂質土
21. 茶褐色土
22. 暗茶褐色土
23. 黒茶色土 (炭混)
24. 黒茶色土 (黄色ブロック混)
25. 黒茶色土
26. 暗茶色砂
27. 暗茶色粘質土

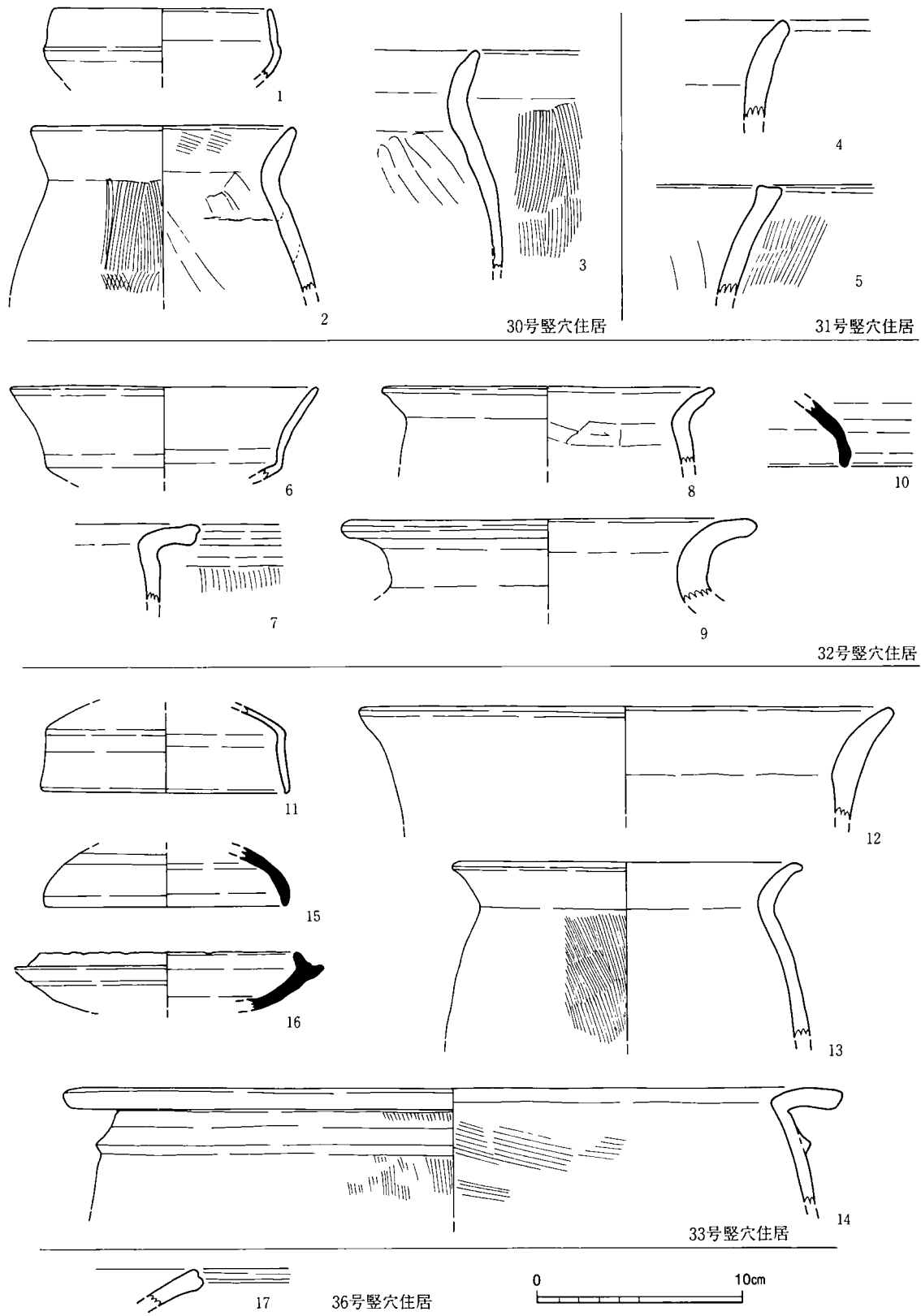


31



1. 炭・焼土混茶色土
2. 暗茶色土 (焼土・炭混)
3. 茶褐色砂質土 (焼土・炭混)
4. 明茶褐色土 (焼土・炭混)
5. 暗茶色砂質土
6. 黄茶色砂質土
7. 茶褐色砂質土
8. 茶色土
9. 暗黄褐色土
10. 暗茶色粘質土
11. 暗茶色土
12. 黄褐色土
13. 黄褐色土
14. 焼土・炭層
15. 黄茶色土
16. 茶色土 (赤色土混)
17. 明茶色土
18. 暗茶色砂
19. 暗茶色砂 (焼土・炭混)
20. 黄色砂

第42図 30・31号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第43图 30~33·36号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

る。20は口縁が肥厚し、頸部内面の稜が明瞭に付く。摩滅が激しく、内面に僅かにタテケズリの痕跡が認められる。復元口径13.0cm。21は口縁部が短く緩やかに外反させるもので、頸部は肥厚する。全面ヨコナデ。22は口縁部を大きく屈曲させる。外面にタテハケ、内面にヨコナデの痕跡が認められる。復元口径20.0cm。19は床直上、20はカマド内からの出土。

30号竪穴住居跡（図版22—2、第42図）

調査区西南部、29号竪穴住居跡の西で検出、29号住居・6・7号土坑を切る。東西長2.6～2.8m、南北長2.6～2.7mのほぼ正方形のプランを有する小規模の住居である。コーナー部は角を持ち、カマドは北壁中央部に付設する。床面までの深さは0.18mで、埋土は黄色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.3m、南北1.1m・1.2mを測り、菱形のプランになり歪である。柱掘形は直径0.4mの円形プランで床下から深さ0.1～0.2m、柱痕跡は直径0.15～0.2mで床面から深さ0.18～0.35mを測る。貼り床は茶灰色粘質土を5～10cmの厚さで全面に貼り、床下では西北隅で浅い土坑を検出した。P3・P4間にも深さ8cmの土坑を確認した。

30号竪穴住居跡カマド（図版22—3、第42図）

北壁より30cmを突出して造られるもので、縦長楕円形のプランを有する。袖長は左が40cm・右が45cmで、高さは15cm残存している。右袖内面は赤変硬化している。底は住居床面と同レベルで、中央と北寄りの2箇所に支脚の抜き孔を検出した。中央孔の前面、焚き口部分は住居床面より4cm掘り窪められ、赤色土が堆積している。上面は直径15cm範囲が硬化している。焼土・灰の堆積層は奥壁付近に集まっており、一度清掃されたものかもしれない。埋土中にも多量に含まれる。煙道は底より6cm上位から壁に掘り込み、住居外北へ溝状に50cm延ばされる。底はほぼ水平で煙出し部奥壁は急激に立ち上がる。埋土に焼土等は混入していない。

出土遺物（第43図）

土師器

坏（1）口縁がやや内傾し、蓋受けの段が僅かに残る。調整は不明。

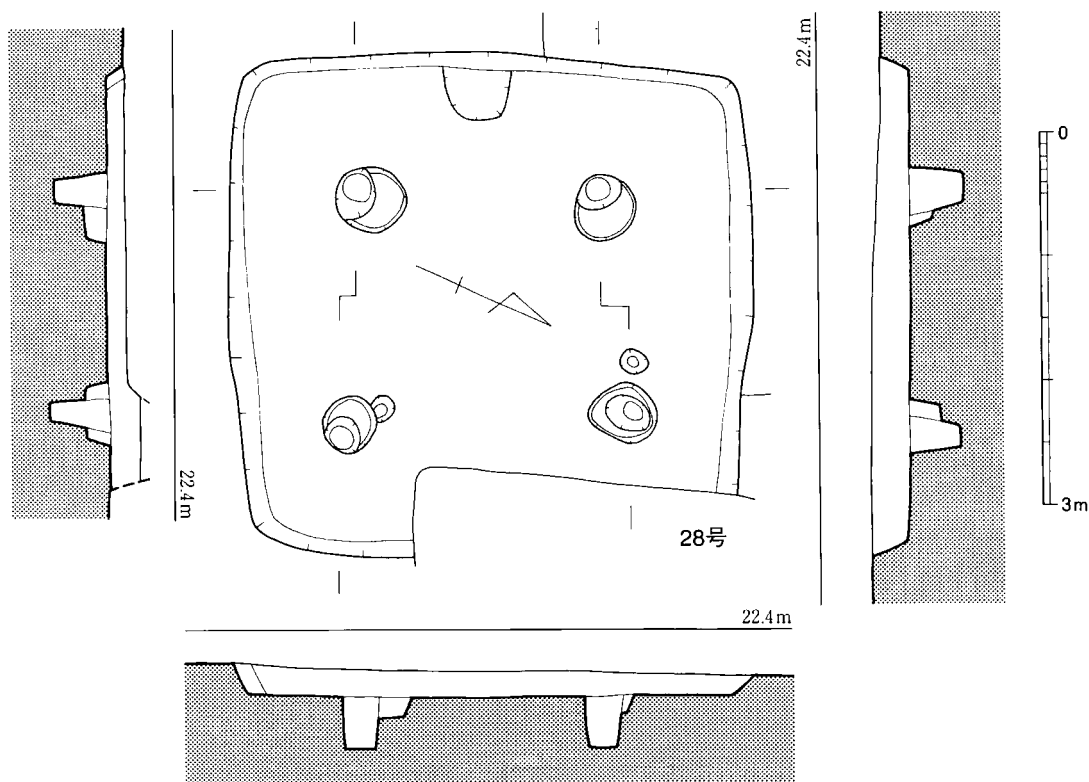
甕（2・3）口縁を緩やかに外反させ、端部は薄く造る。内面頸部の稜はない。2は外面にタテ、口縁部に斜のハケを施し、内面はタテの指ナデの後にヨコナデする。一部粘土紐の合わせ目が残る。復元口径13.0cm。3は外面をタテハケ、内面をタテの指ナデで調整する。3はカマド内からの出土。

31号竪穴住居跡（図版23—1、第42図）

調査区西南部、32号竪穴住居跡の東で検出した。東南部を32号に切られ、西北隅は試掘時のトレンチで欠損する。現存する部分で東西長3.6m・南北長3.8mの規模である。コーナー部は角を持ち、カマドは北壁中央部に付設する。床面までの深さは0.1mで、埋土は黄色土と黄褐色土の自然堆積である。床面でP1～P3の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.0m、南北間1.8mで、P3が北に寄る。柱掘形は直径0.5～0.55の円形プランで床下から深さ0.15～0.25m、柱痕跡は直径15～20cmで床面から深さ0.25～0.35mを測る。貼り床は茶灰色土を全面に貼ると思われる。床下からはピットを1つ検出したのみである。

31号竪穴住居跡カマド（図版23—2、第42図）

北壁に突出して造られ、袖は壁に直接貼り付ける。袖の長さは左袖55cm・右袖40cmでハの字状に



第44図 32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

開き、高さは12cm残存していた。底は住居床面より5cmほど掘り窪め、中央奥寄りに直径13cmの支脚抜き取り孔を検出したが、深さ3cmと浅い。奥壁には高さ3cmの段を有し、そのまま煙道に繋がる。煙道は短く上方へ急に立ち上がると思われる。赤変硬化面や焼土・灰の堆積層はなかった。

出土遺物 (第43図)

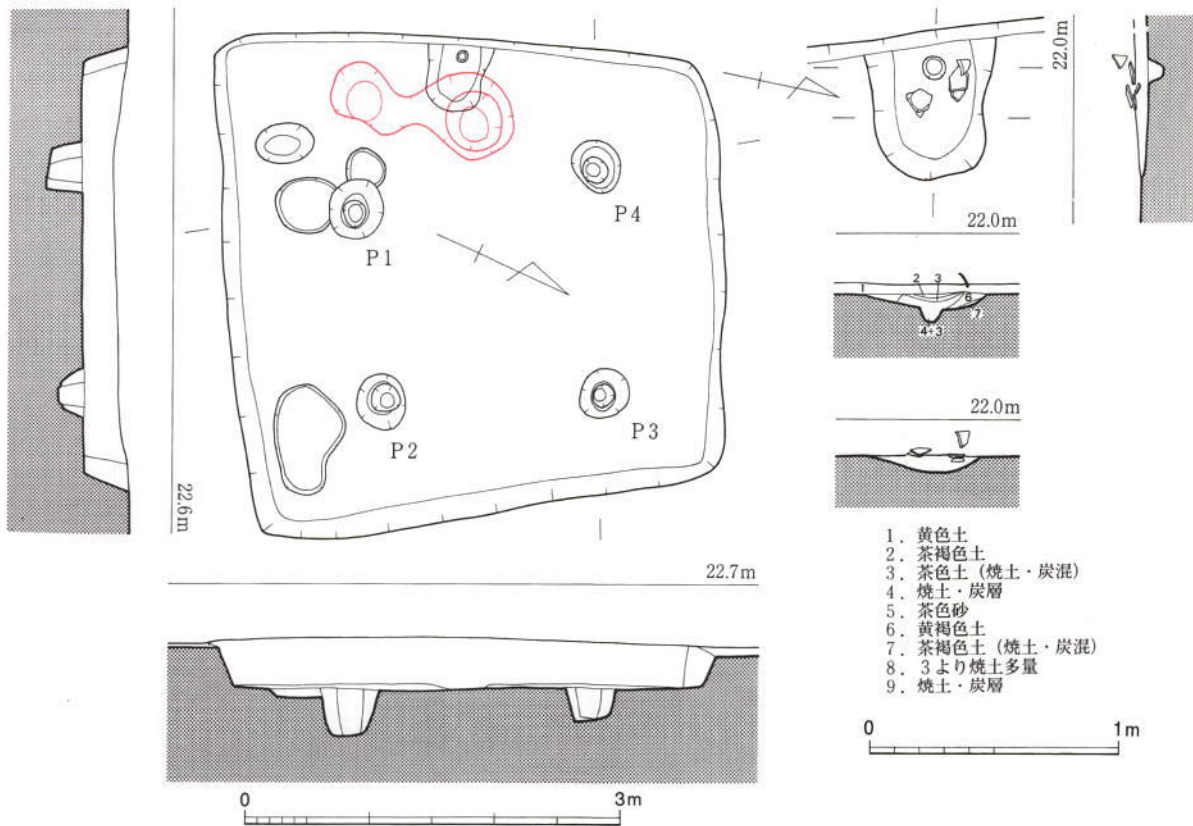
土師器

甕(4) 口縁部小片。緩やかに外反するが、屈曲は弱い。甑になるかもしれない。摩滅が激しく調整不明。

甑(5) 口縁部小片で、端部断面は方形に造る。体部外面は粗いタテハケ、内面はタテケズリが僅かに認められる。口縁部付近はヨコナデで、やや歪んでいる。床直上からの出土。

32号竪穴住居跡 (図版23—3、第44図)

調査区西南部、28・31号竪穴住居跡の間で検出した。28号住居に切られ、31号住居を切る。長軸長4.2m、短軸長4.1mのほぼ正方形のプランを有する。コーナー部は角を持つ。カマドは西壁中央部に窪みが残るのみである。床面までの深さは0.2mで、埋土は黄色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.9m・2.0m、南北2.3m・1.8m測り、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。P3以外は掘形壁に貼り付けるように柱痕跡を確認したが、上部構造のバランスを取るためかもしれない。柱掘形は0.45～0.6mの円形プランで深さは床下から0.15～0.2m、柱痕跡は直径0.15～0.2mで床面からの深さは0.45mを測る。貼り床はなく、土坑・溝等も検出されなかった。



第45図 33号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

32号竪穴住居跡カマド

北壁際中央部に東西55cm、南北40cmの赤変した窪みがあるのみで、袖等は検出しなかった。窪み底は僅かに赤色化するが、焼土・硬化面はない。

出土遺物 (図版53、第43図)

土師器

甕 (4) 緩やかに外反するが、屈曲は弱い。甑になるかもしれない。摩滅が激しく調整不明。

甑 (5) 口縁部小片で、端部断面は方形に造る。体部外面は粗いタテハケ、内面はタテケズリが僅かに認められる。口縁部付近はヨコナデで、やや歪んでいる。床直上からの出土。

33号竪穴住居跡 (図版24—1・2、第45図)

調査区西南部で検出した。東西長3.9m、南北長3.4~4.0mの横台形プランを有する。カマドは北壁中央部に付設するが窪みが残るのみである。床面までの深さは最高で0.35mで、埋土は黄色土中心の自然堆積である。P1~P4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.9m・2.3m、南北2.0m・1.8mを測り、P1が北東に寄る。柱痕跡から柱の太さは0.15~0.25mに復元できる。貼り床はなく、床下でP1掘形周辺とP2の南で深さ0.05~0.08mの土坑と深さ0.15mのピットを検出した。

33号竪穴住居跡カマド (第45図)

北壁際中央部に南北30cm、東西25cmの窪みが残り、袖等は除去されていた。深さは7cm程で、

中央壁寄りに支脚の抜き取り孔があり、その上面に焼土・灰の堆積層があった。

出土遺物（第43図）

土師器

蓋（11）須恵器を模した坏蓋で、端部が僅かに内湾する。天井部と体部の境の稜は明瞭で、天井部の器壁は薄い。摩滅のため調整は不明。明橙褐色を呈する。復元口径10.8cm。

甗（12）甗口縁部と考えるが、甗になるかもしれない。摩滅のため調整不明。復元口径26cm。

甗（13・14）13は外面をタテハケ、内面をナデ調整し、口縁部周辺はヨコナデする。復元口径17.0cm。14は弥生土器。大きく「く」字に曲がる甗口縁部で、口縁下に断面三角の突帯を巡らせる。復元口径37.8cm。17の口縁部小片は端部に凹線を有する。13は床直上からの出土。

須恵器

蓋（15）端部を肥厚させる小片で、回転ナデ調整。復元口径11.3cm。

坏（16）器肉の厚い個体で、全体に鈍いつくりになる。端部は丸みを帯び、蓋受けは上方へ跳ね上がる。回転ナデ調整で口縁部を打ち欠く。復元口径11.6cm。

34号竪穴住居跡（図版24—3、第46図）

調査区中央部の竪穴住居跡がと6棟切り合う場所で検出し、15・16号竪穴住居跡に切られる。残存する部分から推定すると東西長3.5m、南北長2.7m前後の横長長方形のプランを有し、コーナー部は丸みを帯びる。カマドは北壁中央部やや東寄りに付設される。床面までの深さは最高で0.22mで、埋土は黄色土中心の自然堆積である。P1～P4の支柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.9m・2.3m、南北2.0m・1.8mを測り、住居プランに対して全体に南東に寄る形になる。柱掘形は直径0.35mの円形プランで深さは0.15m、柱痕跡は0.1～0.15mで深さ0.2mを測る。貼り床・土坑・小溝は検出されなかった。

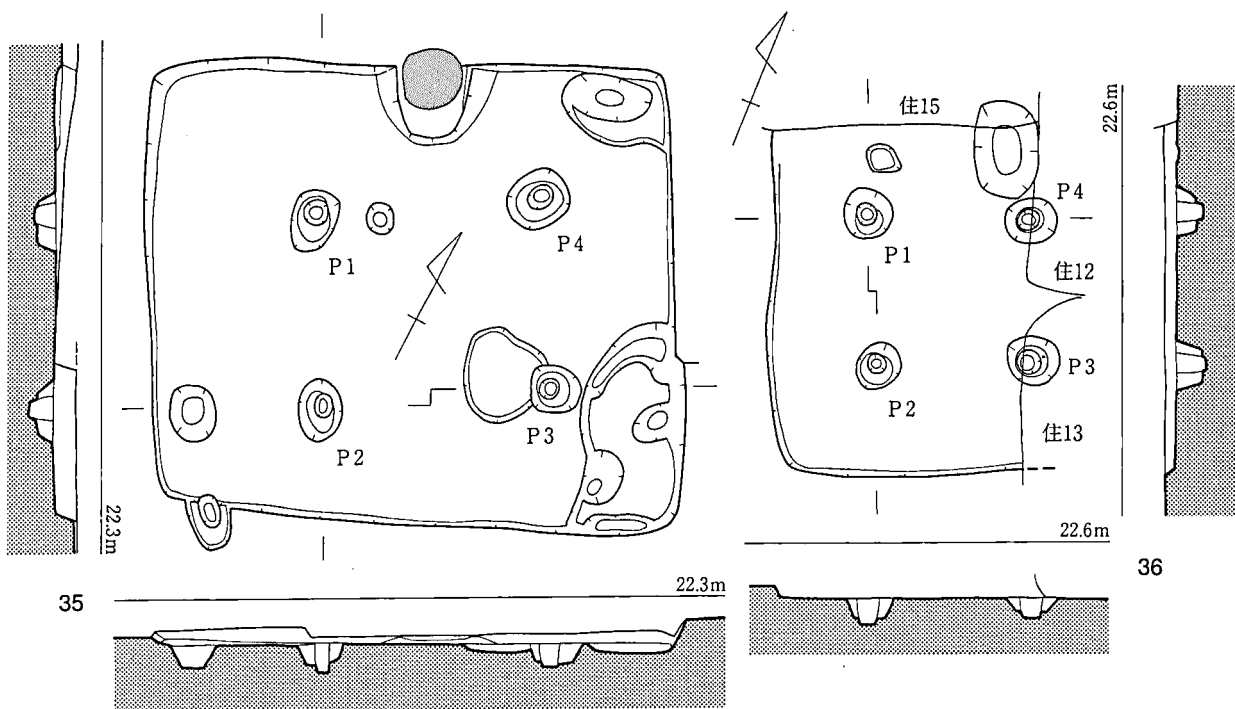
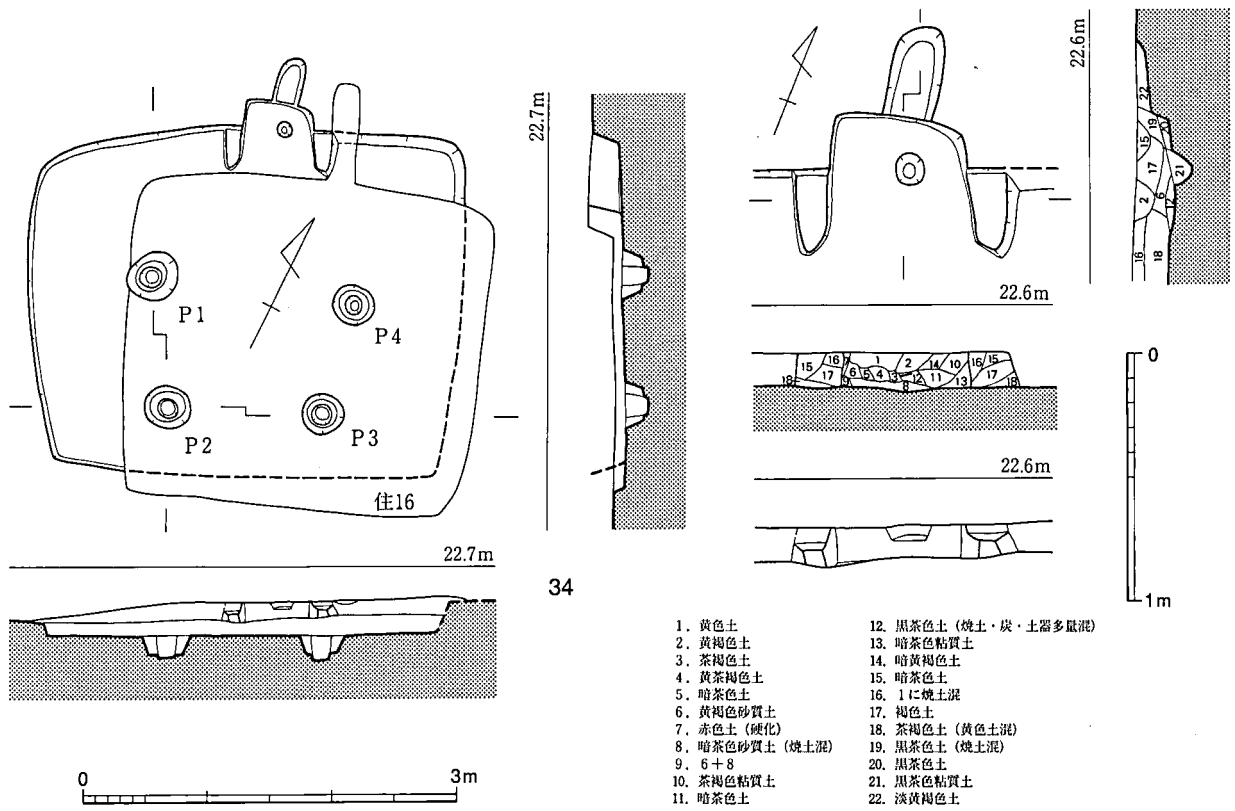
34号竪穴住居跡カマド（図版25—1、第46図）

北壁際中央やや東寄りに、壁から15～25cm突出して付設される。袖長は左右とも30cmで高さ10cmが残存する。底は住居床レベルより3cm程窪ませ、中央に直径10cmの支脚抜き取り孔がある。赤変面や焼土・灰層はないが、左袖内壁は赤変硬化する。内部は清掃されたものであろう。煙道は底より7cm上位から壁を掘り込み、住居外へ溝状に30cm延ばす。埋土は住居埋土に似る。出土遺物は少なく小片のため、図示できない。

35号竪穴住居跡（図版25—2、第46図）

調査区南西壁際で検出した。22・23・24号竪穴住居跡に切られる。長軸長4.2m、短軸長3.6～3.8mの横長長方形プランを有する。カマドは北壁中央部に付設するが袖は残らない。床上は削平されたと思われる。底までの深さは残りの良いところで0.2m、埋土は上層が黄色土、以下は黄褐色土中心の自然堆積である。床面でP1～P4の支柱穴を確認した。柱間寸法は東西1.64m・1.24m、南北1.1m・0.9mを測り、住居プランに対して西に振れる。柱掘形は直径0.35～0.5mの楕円もしくは円形で深さは0.15m、柱痕跡は直径0.1～0.15mで深さ0.2mを測る。東北隅と東南隅で不整形な土坑を検出した。小溝・土坑等は検出されなかった。また出土遺物も少量小片で、図示できない。

35号竪穴住居跡カマド



第46図 34～36号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

北壁際に長軸長55cm、短軸長45cmの高まりがあり、中央に焼土が広がる。焼土の範囲が10cm程は住居外になり、突出型のカマドであったと思われる。上面が削平されるため袖や支脚・抜き孔等はなく、埋土も不明である。

36号竪穴住居跡（図版25—3、第46図）

調査区中央部の竪穴住居跡が6棟切り合う箇所で見出し、12・13・15・16号住居に切られる。プランはほとんど削平されるため不明である。カマドも残存しないが、北壁に付設すると考える。床面でP1～P4の主柱穴を確認した。柱間寸法は東西1.1m・1.3m、南北1.2mで各コーナーを結ぶ対角線上に位置すると思われる。柱掘形は直径0.45cm前後の円形で深さ0.1～0.2m、柱痕跡は直径0.1～0.15mで深さ0.15～0.25mを測る。貼り床は確認できなかった。東北隅で土坑を見出した。また出土遺物も少量で、図示できるものがない。

43号竪穴住居跡（図版26—1、第47図）

調査区の北東側で見出した竪穴住居跡で、他の竪穴住居跡の分布域からやや離れた位置にある。東壁長4.55m、南壁長4.9mを測り、平面形は東西方向に若干長い方形プランとなる。総面積は22.08㎡を測る。カマドは南壁のほぼ中央に付設され、他の竪穴住居跡と方向が異なっており特異である。

遺構は黒褐色シルト層上面で見出した。埋土は上層に灰褐色微砂、下層が灰褐色微砂と黒褐色シルトの混ざった層からなり、ほぼ水平に堆積する。遺存状態はあまり良好ではなく、遺構確認面から約10cmほどの深さで床面を見出した。床面は暗黄褐色シルトと黒褐色シルトブロックを混ぜた土を使用して全面に貼り床を行っている。この床面は全体的に硬化しており、特に主柱穴に囲まれた部分で硬化が顕著に認められた。

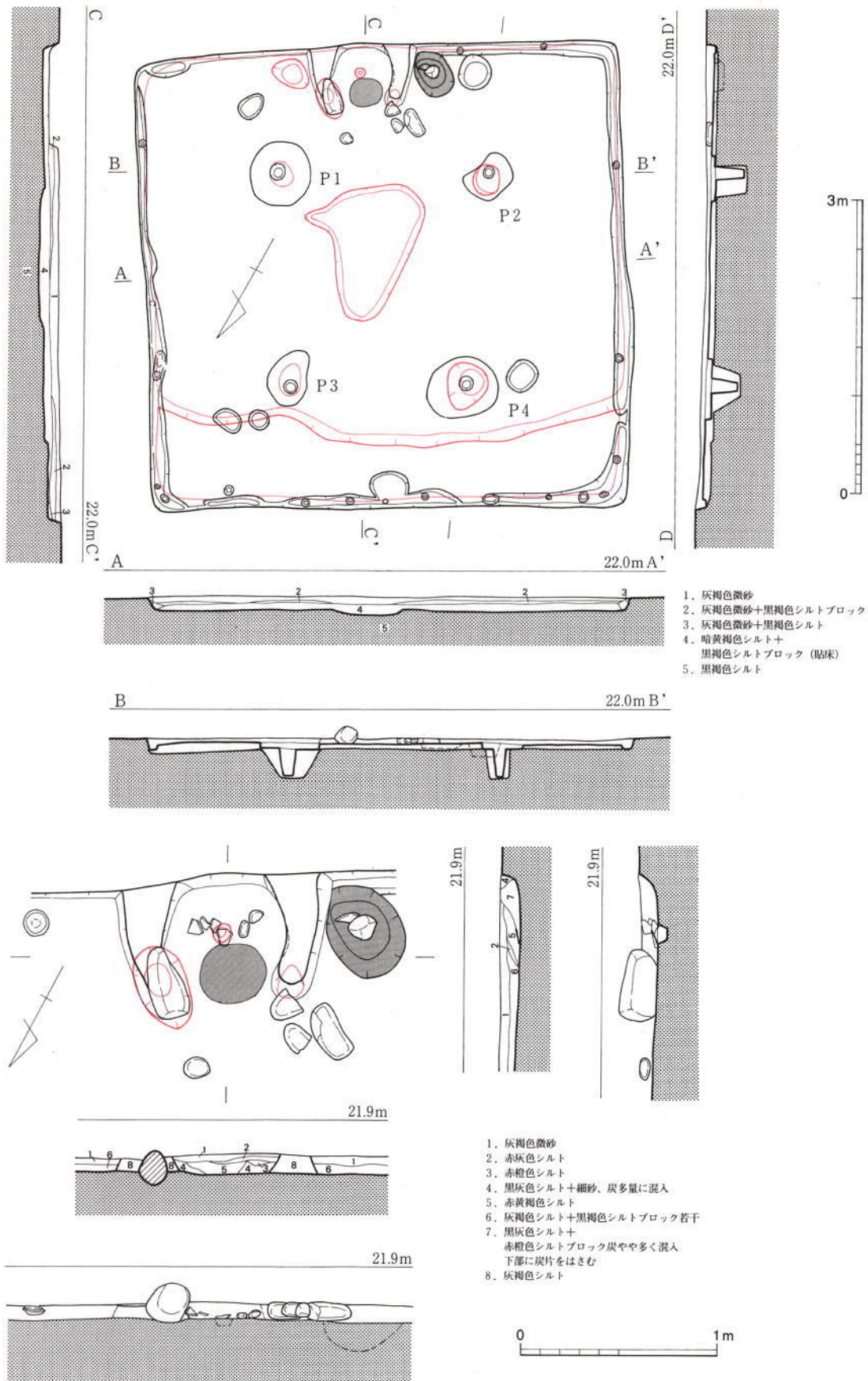
主柱穴はP1～P4の4つが確認できた。いずれも各コーナーを結んだ対角線上に位置しており、対称的な配置形態をとっている。径は0.3～0.6m、平面形はP1が正円形を呈する以外は不整形であり平面形態上の差は大きい。深さはいずれも30cm前後を測る。また全ての主柱穴で柱痕が確認できた。径0.15m、深さ0.25～0.3mを測る。これらの主柱穴以外に床面上で幾つかのピットを見出したが、形状が不整形で深さも非常に浅いものである。また壁際には幅0.1～0.2m、深さ5cm程度の壁小溝が巡っている。さらにこの溝底では径0.1m、深さ0.1m程度の小ピットを幾つか見出した。大きさ、深さ共に同じ程度のものであるが、規則的に配置された様子は窺えない。

貼り床は約10cmの厚さで行われており、これを除去すると黒褐色シルトの掘形が現れた。掘形は北壁側が幅60cmの広さで南側よりも約5cm程高くなる。また中央付近では楕円形の浅い掘り込みがあり、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ5cmを測る。

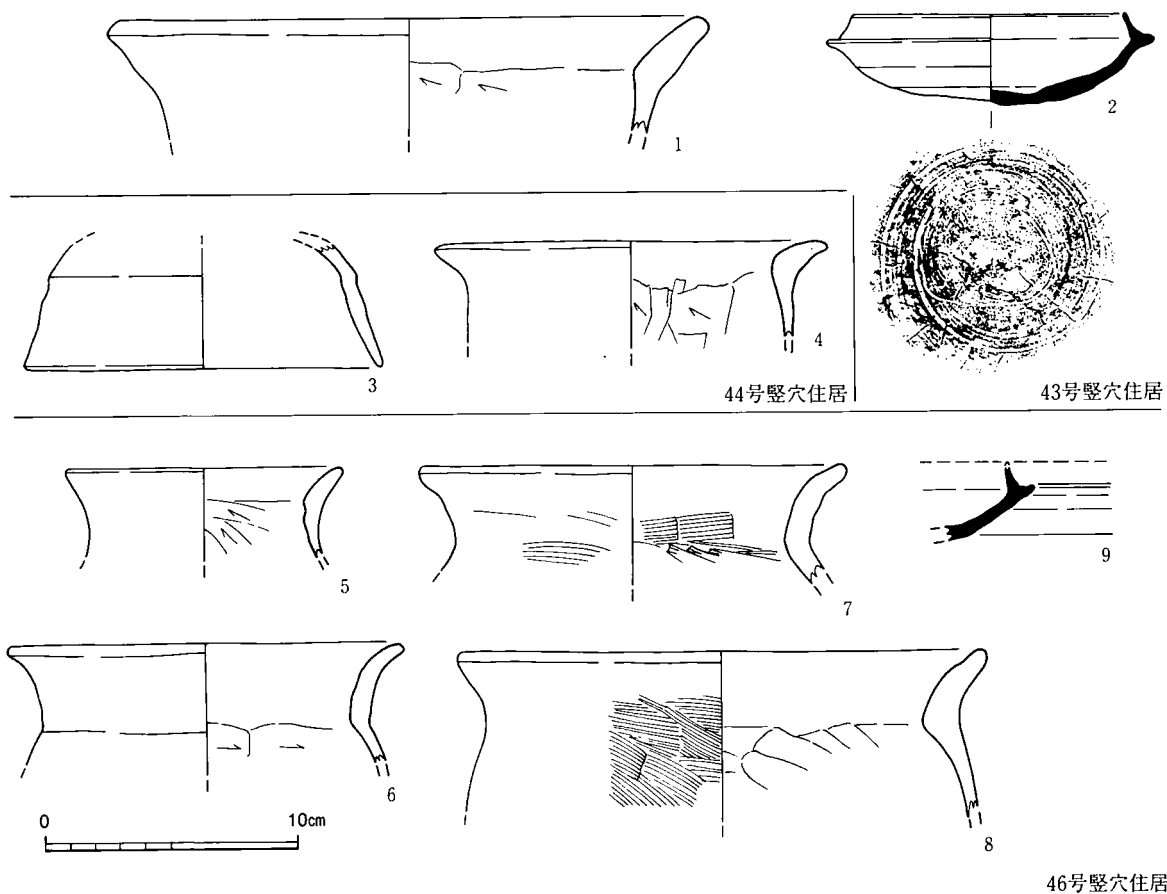
出土遺物は非常に少ないが、北コーナー付近の床面直上から鉄製刀子が出土している。

43号竪穴住居跡カマド（図版26—2、第47図）

南壁のほぼ中央に付設されるカマドである。覆土上層は住居跡内とほとんど変わらず、下層には焼土・炭が若干含まれる。土層断面の観察では自然堆積の状況を呈している。煙道は見出ししていない。袖長は右袖65cm、左袖70cmを測る。焚き口の両側に河原石を据えていた様で、左袖には横倒しの状態で、また右袖はやや手前に離れて河原石を見出ししている。さらに右袖側では両方の袖石に架したと思われる横長の河原石を見出ししている。



第47図 43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第48図 43・45・46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

支脚は遺存していなかったが、壁から20cm手前のカマド中軸線上で径10cmの支脚抜き取り痕を検出した。またこの前面は約30cmの広さで赤変面が認められた。カマドの右側には長軸50cm、短軸40cm、深さ15cmを測る楕円形のピットがあり、このピットの埋土には焼土が多量に含まれていた。

カマド内部では2個の小円礫と共に若干の土器が出土した。またカマド左側から約40cm離れた位置で完形の須恵器坏が出土した。

出土土器 (図版53、第48図)

土師器

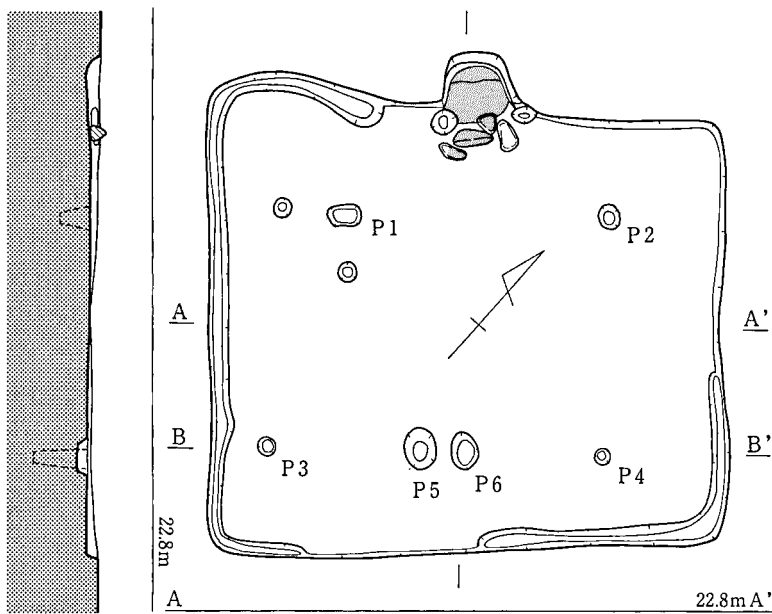
甑 (1) 甑の口縁部片である。口縁部は直線的に開き、体部は内面を強く横ヘラケズリするため器壁が薄くなり、また口縁部との境に稜線ができている。口径22.6cm。

須恵器

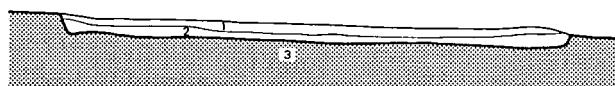
坏 (2) カマド北側の床面直上から出土した坏である。立ち上がりは短く内傾し、ヘラケズリは外底部にのみ施され、そこにヘラ記号が記される。口径13.1cm、受け部径13.6cm、器高3.6cm。

44号竪穴住居跡 (図版26—3、第49図)

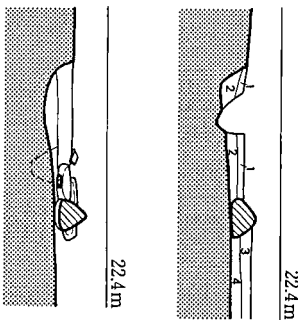
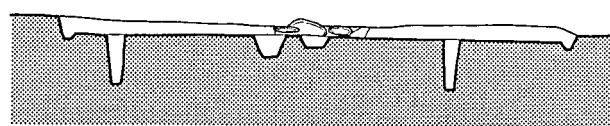
調査区の北端にあたり、密集する竪穴住居跡群からやや離れて位置する竪穴住居跡である。南西壁長3.7m、南東壁長4.0m、北東壁長3.4mを測り、東壁に比べて西壁が長く、また全体的に横長の不整形プランの竪穴住居跡である。カマドは北西壁のほぼ中央に付設する。埋土は上層が暗灰



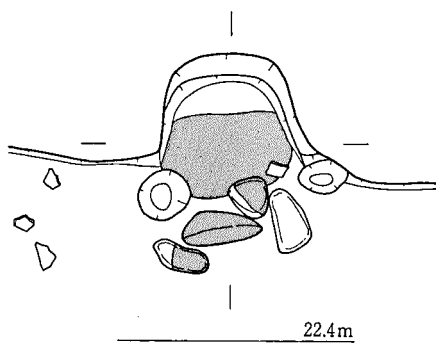
1. 暗灰褐色シルト
2. 暗黄褐色シルト
3. 2に礫砂を多く含む



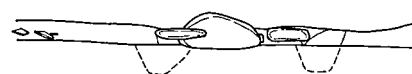
B 22.8m B'



1. 暗灰褐色シルトに焼土ブロック若干混入
2. 暗黄褐色シルト焼土ブロックわずかに混入
3. 暗灰褐色シルト
4. 暗黄褐色シルト



22.4m

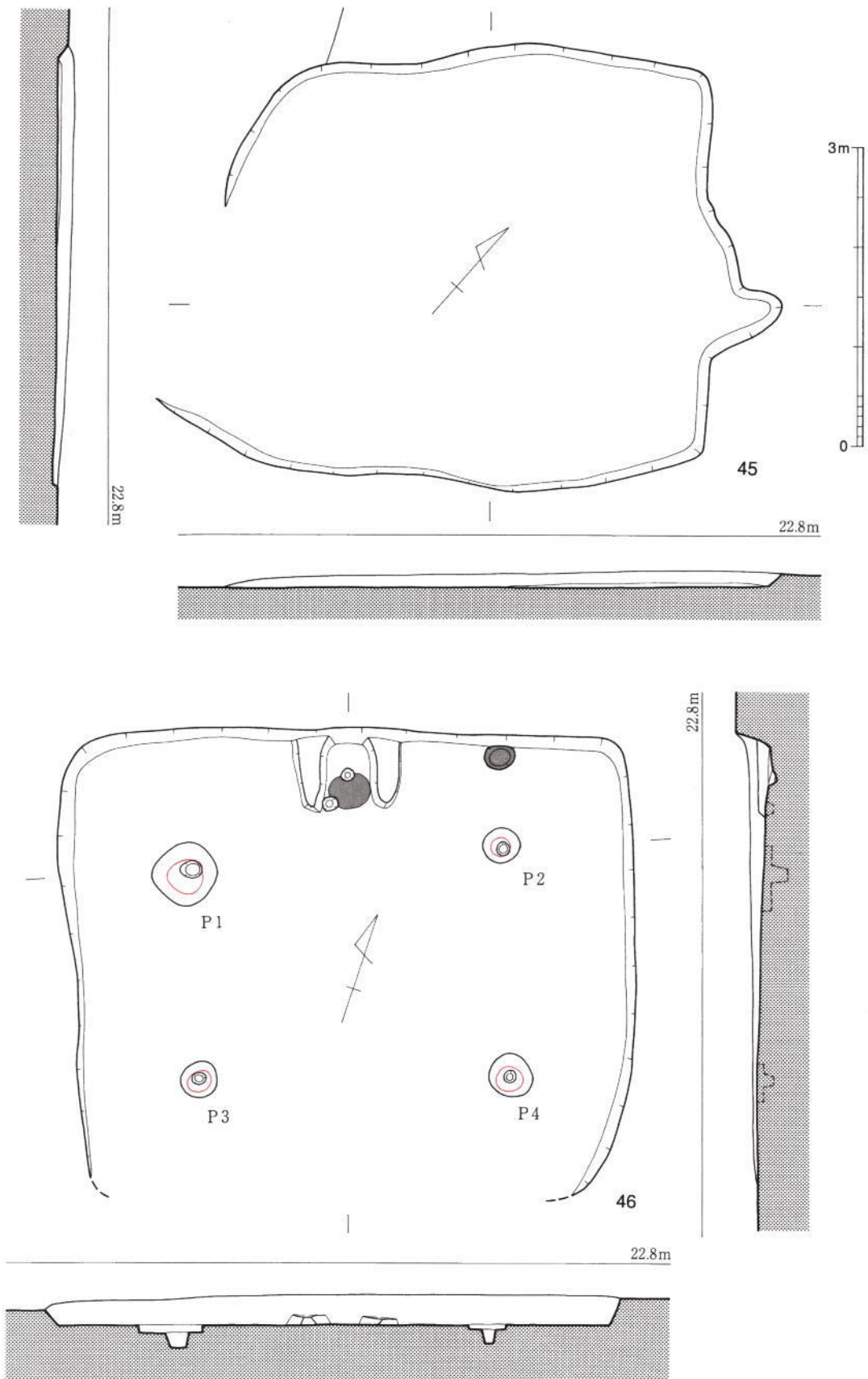


褐色シルト、下層が暗黄褐色シルトの水平堆積である。この暗黄褐色シルトを除去すると砂礫層の床面が現れ、通常床面を構成する貼り床は確認できなかった。遺構の遺存状態はあまり良好ではなく、遺構面から床面までの深さは0.1mを測るに過ぎない。床面上では幾つかのピットを検出したが、このうちP1～P4が主柱穴に相応しい位置にあるが、径15cm～20cmと非常に小さなものである。深さは0.3～0.45mを測る。またP3・P4を結んだ線上のほぼ中央でP5・P6を検出した。径0.3～0.35m、深さ0.1～0.15mを測る。その位置から出入口施設に関する柱穴と考えている。東側コーナー付近および南西壁際には幅0.15～0.2m、深さ0.05～0.1m程度の壁小溝が巡っている。出土遺物は非常に少ない。

44号竪穴住居跡カマド(図版27—1、第49図)

北壁のほぼ中央に付設されるカマドで、壁から約50cm外側に方形に張り出している。カマド内面には積土が全く見られない。カマド内の埋土は上層が暗灰褐色シルト、下層が暗黄褐色シルトが堆

第49図 44号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第50图 45·46号竖穴住居迹实测图 (1/60)

積し、どちらの層にも焼土・炭が若干含まれる。土層断面の観察では自然堆積の状況を呈している。煙道は検出していない。焚き口を河原石で補強していた様で、カマドの両側で径15cm～20cm、深さ10cm程度のピットを検出し、さらにカマド全面では熱を受けた河原石を検出した。支脚やその抜き取り痕は検出してないが、4個の河原石のうち最もカマドに近いものは、形状から推察して支脚として使用されていたものであろう。また奥壁から約15cm内側では長軸50cm、短軸30cmの大きさを楕円形に赤変面が認められた。

出土遺物からは明確な時期を決定し難いが、おおよそ6世紀後半～7世紀前半頃に比定できる。

出土土器 (第49図)

土師器

坏蓋(3) 模倣坏に対応する蓋として報告するが、坏身としても使用されていたものと思われる。体部上半で屈曲し、反転して口縁部が直線的に開く。口縁部は尖り気味に仕上げる。口径14.2cm。

甕(4) 小型の甕の口縁部片。口縁部は短く強く外反し、胴部は張りが無い。口縁部中位が肥厚し端部は薄く仕上げる。胴部内面に雑な縦ケズリを強く施しており器壁が薄くなる。口径15.6cm。

45号竪穴住居跡 (図版27—2、第50図)

調査区の中央付近に位置し、砂礫層上面で検出した遺構である。カマド・支柱穴等が検出されず、竪穴住居跡ではない可能性もあるが、一応竪穴住居跡として報告する。南側が削平され消失するが、復元すれば長軸5.0m、短軸3.9m程度の不整長方形プランになる。北東壁の中央からやや東に寄った位置が0.6mほど外側に張り出している。北側が最も遺存状態が良好で、遺構検出面から床面までの深さは0.15mを測る。床面は砂礫層が露出しており微妙な起伏があるものの、全体的にほぼ水平である。出土遺物は非常に少なく図示できるものはない。

46号竪穴住居跡 (図版27—3、第50図)

調査区の中央で、密集する竪穴住居跡群からやや離れた位置にある竪穴住居跡である。南壁は削平を受けており消失する。北壁長5.5m、東壁長4.6mを測り、東西にやや長い隅丸方形プランになるだろう。カマドは北壁のほぼ中央に付設する。北側が最も遺存状態が良好で、遺構面から床面までの深さは0.3mを測る。床面上ではP1～P4の計4つの支柱穴を検出しており、いずれも径0.35～0.6mを測る。また全ての支柱穴で柱痕を確認しており、径0.1～0.15m、深さ0.2～0.25mを測る。貼り床は確認できなかった。

46号竪穴住居跡カマド (図版28—3、第51図)

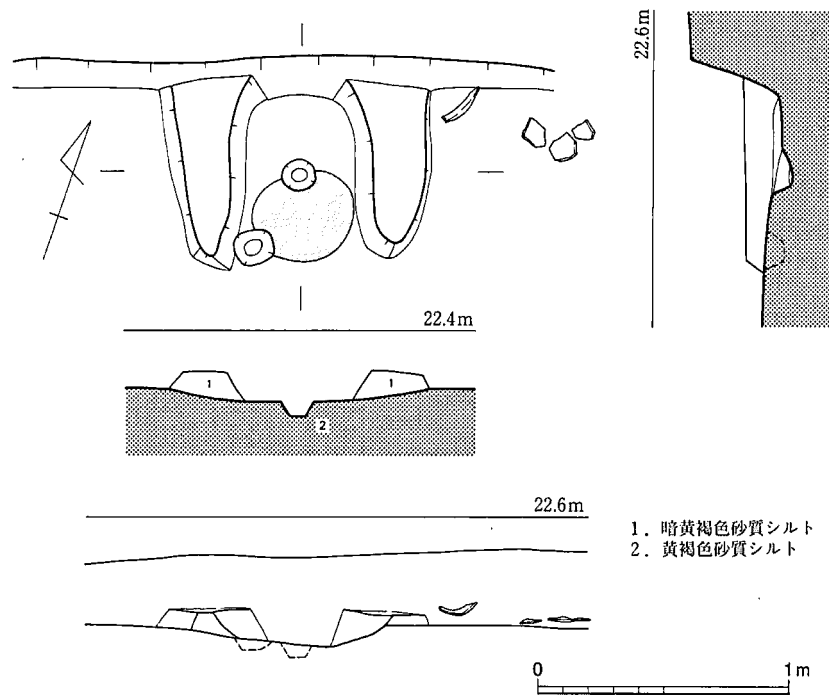
北壁のほぼ中央に付設されるカマドである。竪穴住居跡の確認段階ではカマドは全く確認できず、20cm程掘り下げた時点で焼土が検出されカマドのプランが判明した。袖長は右袖70cm、左袖80cm。左袖の端部内側で、径15cm、深さ10cmの円形ピットを1つ検出している。支脚は遺存していなかったが、奥壁から30cm手前のカマド中軸線上で、径15cmの支脚抜き取り痕を検出した。またこの前面は約40cmの広さで赤変面が認められた。

出土土器 (図版53、第48図)

土師器

甕(5～8) 5はP1掘形内から出土した小型の甕で口縁部が短く外反し、端部は薄くなる。体部内面を強くヘラケズリ調整するために体部の器壁が薄くなる。口径11.0cm、6は床面直上から出

土した中型の甕で口縁部は外反しながら長めに伸びる。体部内面を強く横ヘラケズリ調整するために口縁部と体部の境に稜線ができる。口径15.6cmを測る。7も6と同様中型の甕で、やはり口縁部が長めに外反する。カマド内から出土した。器壁は6と比べて若干厚い。口縁部内面は横ハケ後に横ナデ調整を行うが、一部ハケ目が消えずに残っている。体部内面はヘラケズリ、外面は横ハケ調整が認められる。口径17.0cm、外面は著しい二次加熱の為に変色する。8はカマドの右側から出土した中型の甕である。口縁部は器壁が厚く、短く外反する。体部は強く斜ヘラケズリ調整を行い器壁が薄くなる。口縁部は横ナデ、体部外面は斜ハケ調整を行う。口径20.8cmを測る。



第51図 46号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

須恵器

坏 (9) 9は覆土下層から出土した坏の口縁部片である。立ち上がりの端部を欠失するが、恐らく短く直立気味に立ち上がるものであろう。全体的に器壁が薄く、シャープである。外底部にヘラ記号が記される。

47号竪穴住居跡 (図版28-2、第52図)

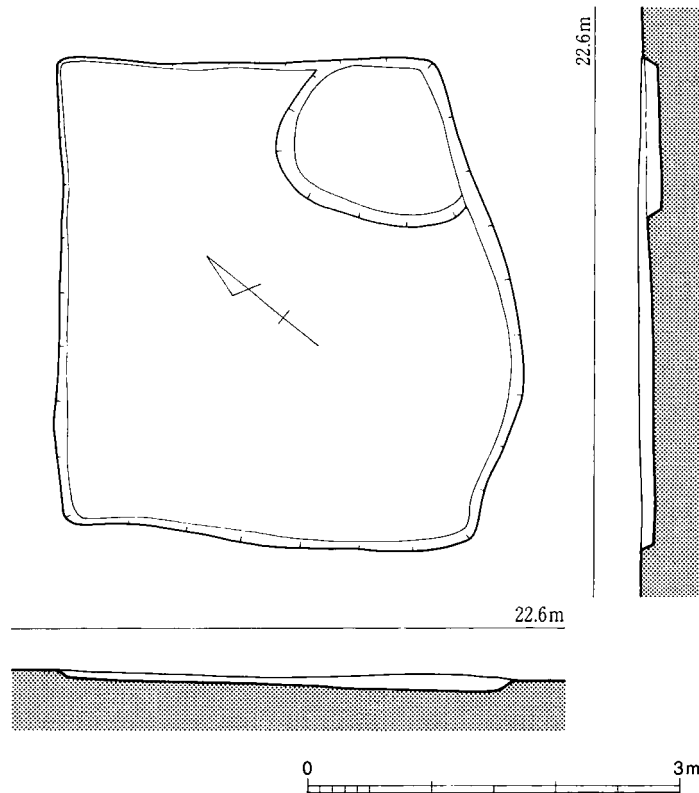
調査区の中央付近に位置し、砂礫層上面で検出した遺構である。45号竪穴住居跡同様カマド・支柱穴等が検出されず竪穴住居跡ではない可能性もあるが、一応竪穴住居跡として報告する。北西壁3.7m、南西壁3.3mを測り、東側がかなり不整形になるがほぼ方形プランとなる。遺構検出面から床面までの深さは約15cmを測り、東隅は径0.3mの大きさでさらに0.15mほど深くなる。遺物はほとんど出土しておらず、図示できるものはない。

48号竪穴住居跡 (図版28-3、第53図)

調査区の北西部で検出した。9号住居と重複しており、これより古い。平面プランは南北1.9m + α 、東西4.0mである。壁の立ち上がりは緩やかである。壁は残りが悪く深さ5cm程度。貼床、壁小溝は確認できていない。支柱穴はP1・P2を検出した。遺物は出土していない。

49号竪穴住居跡 (図版29-1、第53図)

調査区の北西部で検出した。7号住居と9号住居と重複しており、これらより古い。平面プラン



第52図 47号竪穴住居跡実測図 (1/60)

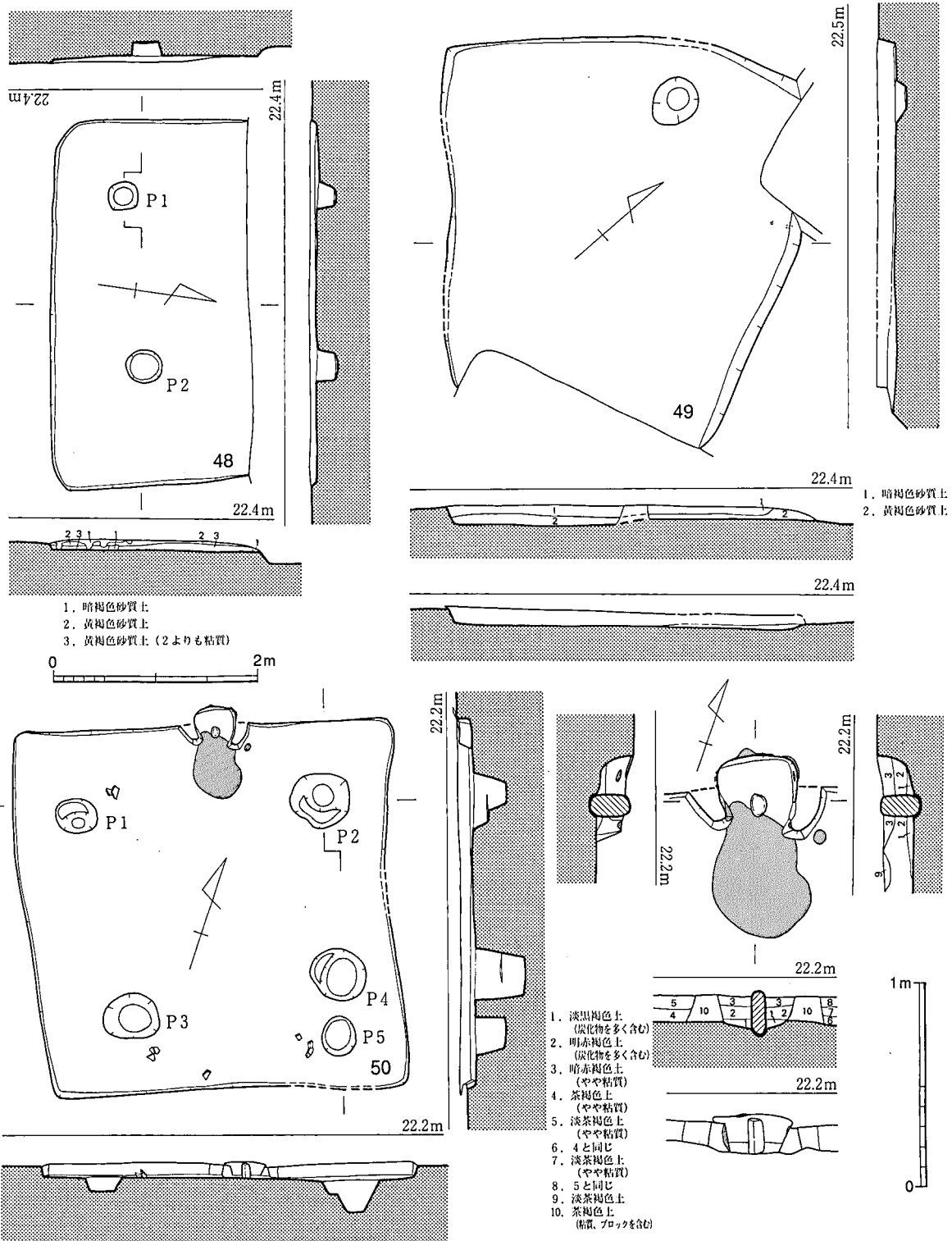
は南北 $4.0\text{ m} + \alpha$ 、東西 $3.5\text{ m} + \alpha$ で不整形な台形を呈すと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかであるが、壁の残りが悪く深さ 0.15 m 程度である。貼床、壁小溝は確認できていない。柱穴はP 1を検出した。遺物は出土していない。

50号竪穴住居跡 (図版29-2、第53図)

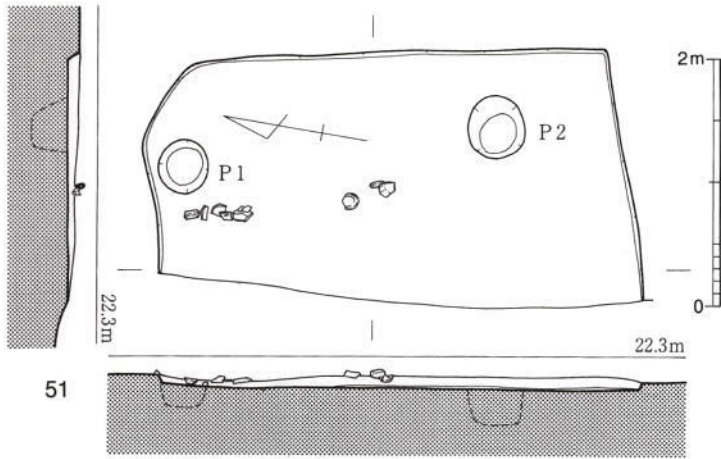
調査区北西部で検出した。61号住居・53号住居・31号土坑と重複しており、この中で最も新しい。平面プランは南北 3.6 m 、東西 3.6 m のほぼ正方形である。北壁中央にカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の深さは 10 cm 程度で残りが悪い。床面で支柱穴P 1～P 4を検出した。他に住居に関連する柱穴としてP 5を考えている。貼床、壁小溝は確認できなかった。

50号竪穴住居カマド (図版29-3、第53図)

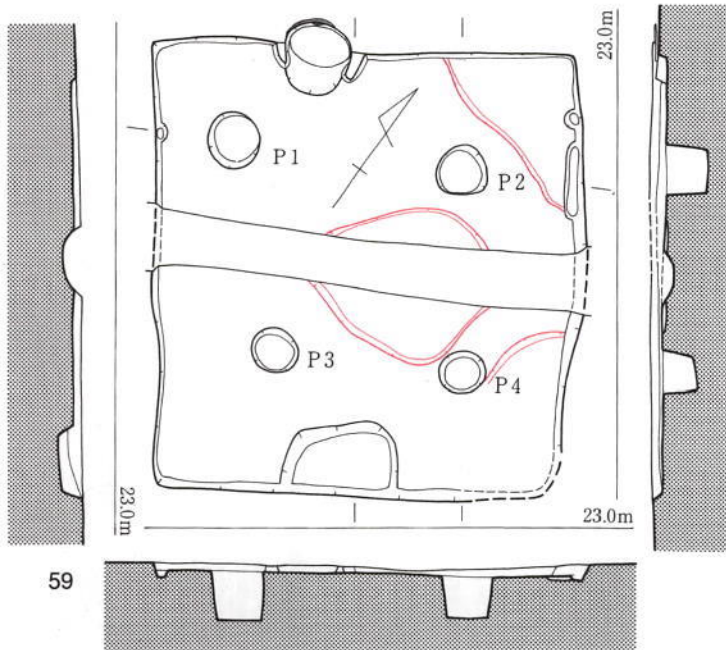
北壁中央に付設するカマドで、壁を掘り込み外側へ 15 cm 程度突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。両袖は茶褐色粘質土を用いて構築され、補強のため東袖の内側に 10 cm ほどの平たい石を貼り付けている。カマド内壁は燃烧により赤く硬化している。奥壁から 15 cm 手前に自然石の支脚を据えられた状態で検出した。支脚の前面に赤変、硬化している部分があり、それより手前で焼土の広がりを確認した。



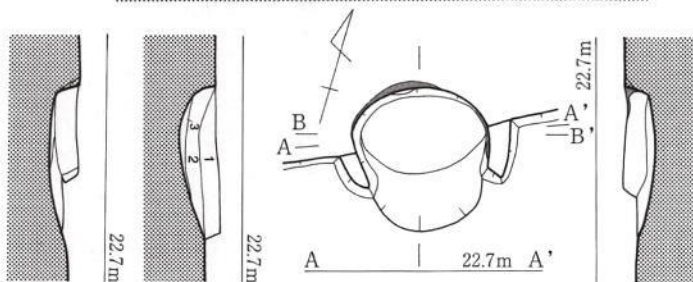
第53図 48・49・50号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



51

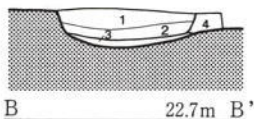


59



1. 淡茶褐色土 (やや粘質)
2. 茶褐色土 (粘質)
3. 淡灰褐色土 (砂質)
4. 赤褐色土 (粘質)

0 1m



51号竪穴住居跡 (図版30-1、第54図)

調査区北西部で検出した。西側を削平により失う。平面プランは南北3.8m、東西2.1+αmである。壁の深さは0.1m程度で残りが悪く、立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1・P2を検出した。P1-P2間で土器群がやや浮いた状況で出土した。貼床、壁小溝は確認できていない。

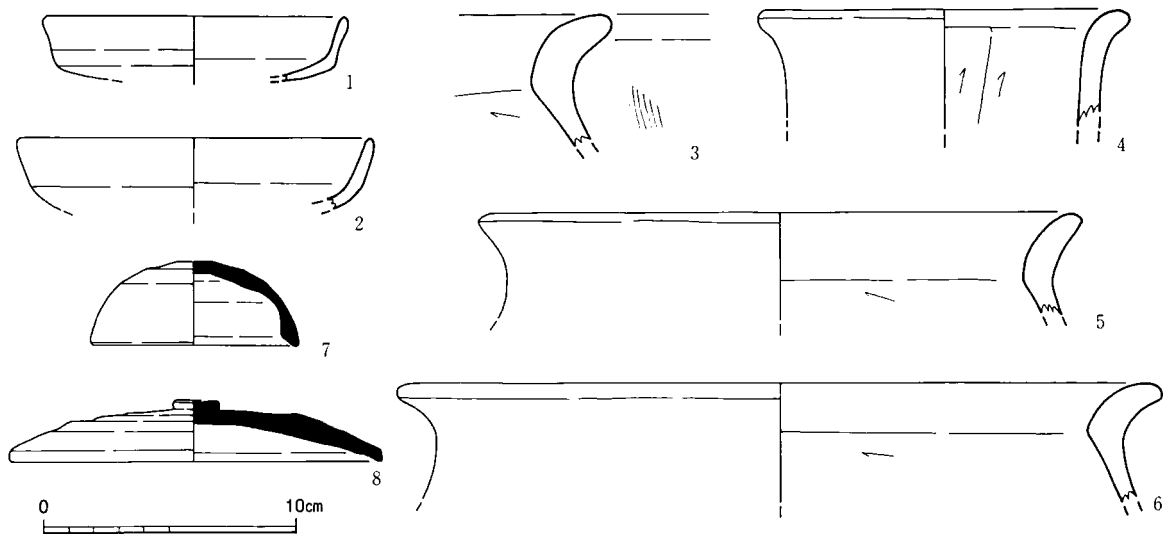
59号竪穴住居跡 (図版30-2、第54図)

調査区の北西部で検出した。95号住居、96号住居、49号溝と重複し、95号住居より新しく、その他より古い。平面プランは南北3.6m、東西3.6mのほぼ正方形である。北壁の西よりにカマドを付設し、主軸を北東にとる。壁の深さは0.1m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1~P4を検出した。東壁の一部に壁小溝を検出した。南壁中央に0.5×0.9m、深さ約0.15mの浅い土坑が掘り込まれる。床面下層は部分的に5cm程度の浅い掘り込みがある。

59号竪穴住居カマド (第54図)

北壁の西よりに付設するカマドで、壁を掘り込み外側へ20cm程突出する。突出部分は地山を掘り込み、そのまま炎燃部の壁としている。両袖は赤褐色粘質土を用いて構築されるが短

第54図 51・59号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第55図 59号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

く、細い。カマド床面では確認できなかったが、カマド内壁の上部は燃焼により赤く硬化している部分がある。

出土土器 (図版53、第55図)

土師器

坏 (1・2) 1はP 3から出土。口縁部がやや外反気味に直立する。全体の調整はナデ。2はカマド内から出土。口縁部がやや開く。全体の調整はナデ。

甕 (3～6) 3は口縁部がやや強く外反する。内面は削り、その他はナデ。4はカマド内から出土。口縁部が緩やかに外反し、胴部は広がらない。全体に同じ厚さで、内面の調整は削り。その他はナデ調整。5は口縁部がわずかに外反する。6は口縁部が大きく外反するもので、カマド内から出土した。

須恵器

蓋 (7) 小型で、口縁部が肥厚し、外面天井部は回転ヘラ削り。P 3から出土した。

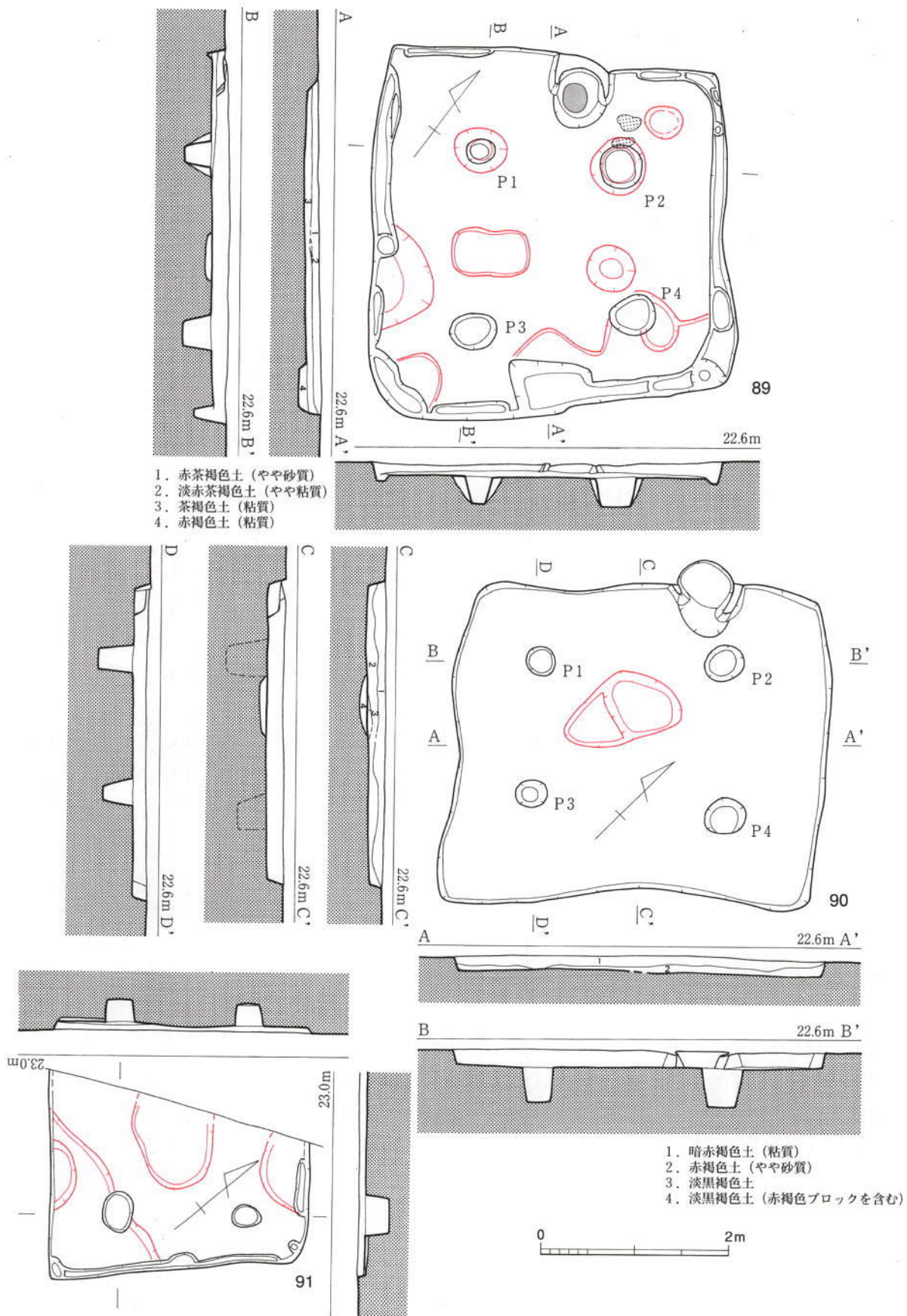
坏蓋 (8) ボタン状のつまみで、口縁端部がわずかに折れる。かえりは全く無い。器壁は全体に厚い。外面天井付近は削り。その他はナデ調整。焼成は甘い。

89号竪穴住居跡 (図版30-3、第56図)

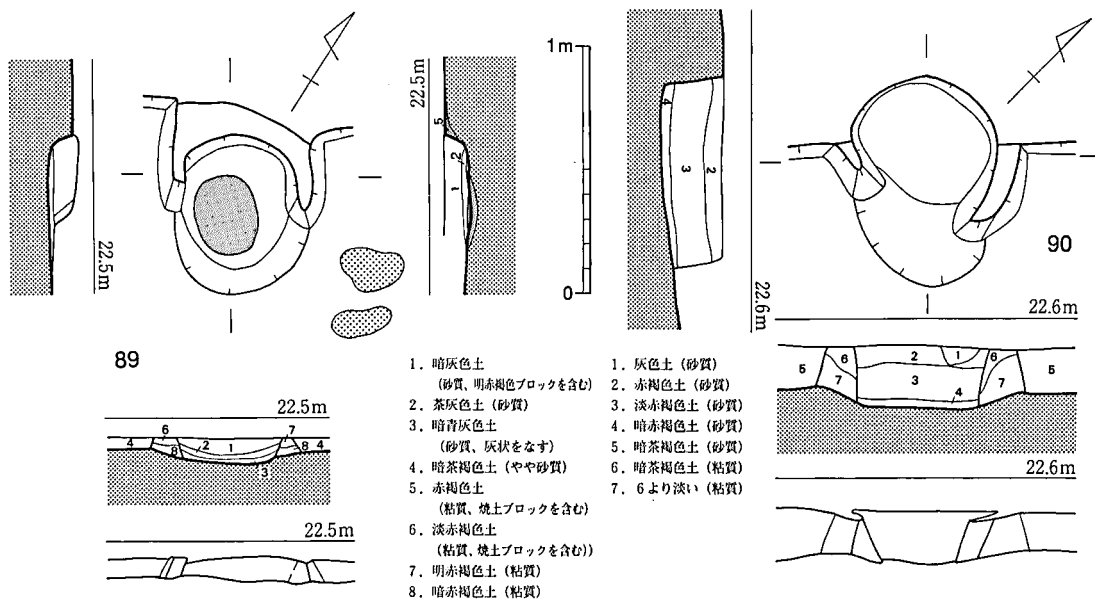
調査区の西端部で検出した。90号住居と近接し、I区の他の住居から離れて存在する。平面プランは南北3.9m、東西3.8mのほぼ正方形を呈す。北壁中央部分にカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、深さ0.15m程度で残りが悪い。床面で支柱穴P 1～P 4を検出した。幅広の壁小溝がほぼ全体に巡り、所々にピット状に深く掘り込まれる。南壁中央に0.4×0.8m、深さ0.1m程の浅い土坑を検出した。床面に部分的に浅い掘り込みを持つ。

89号竪穴住居跡カマド (第57図)

北壁中央に付設するカマドで、壁を掘り込むことなく赤褐色粘質土を用いて構築されるが、袖が



第56図 89・90・91号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第57図 89・90号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

短すぎ、検出時に失敗したと考える。住居床面よりやや低くなるカマド床面中央に20×15cmの楕円形に赤変、硬化している部分があり、さらにその周辺にも赤変が広がっている。東側袖の手前で灰の集積を検出した。

出土土器 (図版53、第58図)

土師器

坏 (1) 精製品。摩滅が著しいが全体ナデ調整か。口縁部がわずかに内湾する。

甕 (2) 口縁が強く外反し、胴部は張る。ナデ調整。

須恵器

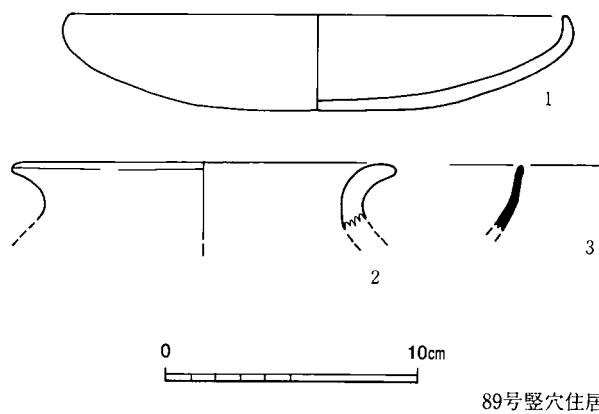
坏 (3) 強く焼成を受け、焼け歪みが著しいため、器種は不明であるがここでは坏として報告する。全体にナデ調整を行う。

90号竪穴住居跡 (第56図)

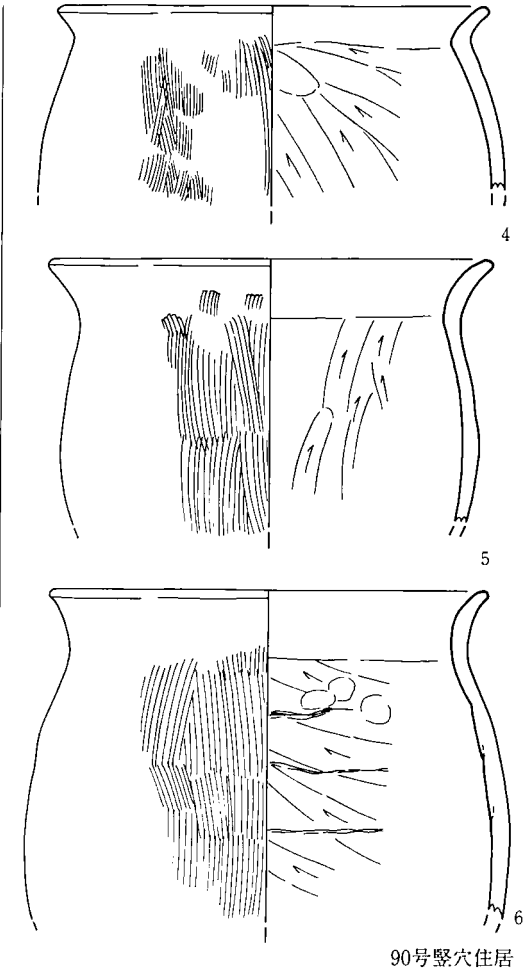
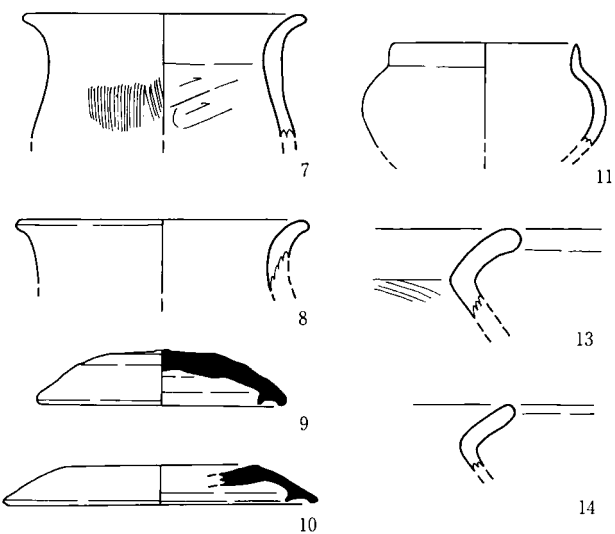
調査区の西端部で検出した。39号溝と重複し、これより新しい。89号住居と近接し、他のI区の住居から離れて存在する。平面プランは南北3.6m、東西4.0mのやや長方形である。北壁東よりにカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁の深さは20cm程度で残りが悪い。床面で支柱穴P1～P4を検出した。壁小溝は確認できなかった。床面下層は中央部分に深さ10cm程度の浅い掘り込みを検出した。

90号竪穴住居跡カマド (第57図)

北壁の東よりP2の正面に付設する。壁を掘り込み外側へ約30cm程突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。両袖は茶褐色粘質土と砂質土を用いて構築される。検出した両袖は短く、赤変部分が両袖の手前にあり、袖は本来、更に長かったものと考えられる。東側の袖が上面で30cm、西側の袖は10cmと極端な差があり、焚口部分は西を向いた状態となる。明瞭な赤変、



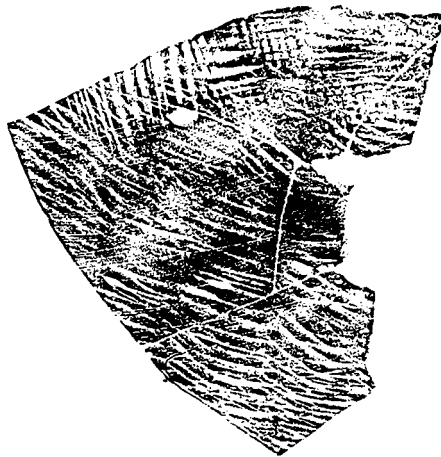
89号竖穴住居



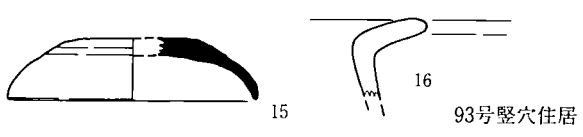
90号竖穴住居



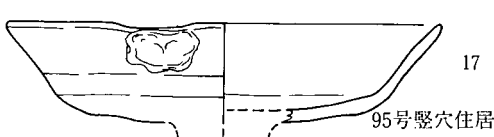
12



92号竖穴住居



93号竖穴住居



95号竖穴住居

第58图 89·90·92·93·95号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

硬化した部分は認められない。

出土土器 (第58図)

土師器

甕(4~6) 4は口縁がやや強く外反し、胴部が張る。器壁はほぼ同じ厚さである。外面はハケメ。内面は削りを行う。5はカマド内から出土した。口縁が肥厚し、緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。6の内面は削りが行われるが、口縁部下には指頭圧痕が残り、ほぼ2.5cmの間隔で内傾接合の痕跡が見られる。

91号竪穴住居跡 (図版31-1、第57図)

調査区北西部で検出した。1号溝と重複し、これより古い。平面プランは南北2.7m、東西2.2+ α mである。壁の深さは0.05m程度で残りが悪い。床面で支柱穴P1、P2を検出した。壁小溝は北側及び東側に廻り、コーナーの部分はピット状に深くなる。床面下層は中央部分及び壁側の部分的に深さ0.1m程度の浅い掘り込みを検出した。遺物は出土していない。

92号竪穴住居跡 (図版31-2、第59図)

調査区北西部で検出した。50号溝と重複し、これより古い。平面プランは南北4.0m、東西3.7+ α mである。壁の深さは0.1m程度で残りが悪い。床面で支柱穴P1~P4を検出した。壁小溝を部分的に検出した。床面下層は中央及び南北の壁面部分的に0.05m程度浅く掘り込まれる。

出土土器 (第58図)

土師器

甕(7・8) 何れも小型品で口縁部が緩やかに外反し、胴部がわずかに膨れる。外面はナデ調整。内面は削りを行う。

短頸壺(11) 精製品。小型で口縁部が直立する。器壁は同じ厚さである。摩滅が著しいが全体にナデ調整。

須恵器

坏蓋(9・10) 9は全体に器壁が厚く、返りの退化が著しい。天井部外面はヘラ切未調整。その他はナデ調整。10は焼け歪みにより天井部が大きく窪む。ナデ調整。

大甕(12) 胴部で、外面の叩きは格子叩き、平行叩きの2種がはっきりと残る。内面は同心円文の当て具痕が残る。

弥生土器

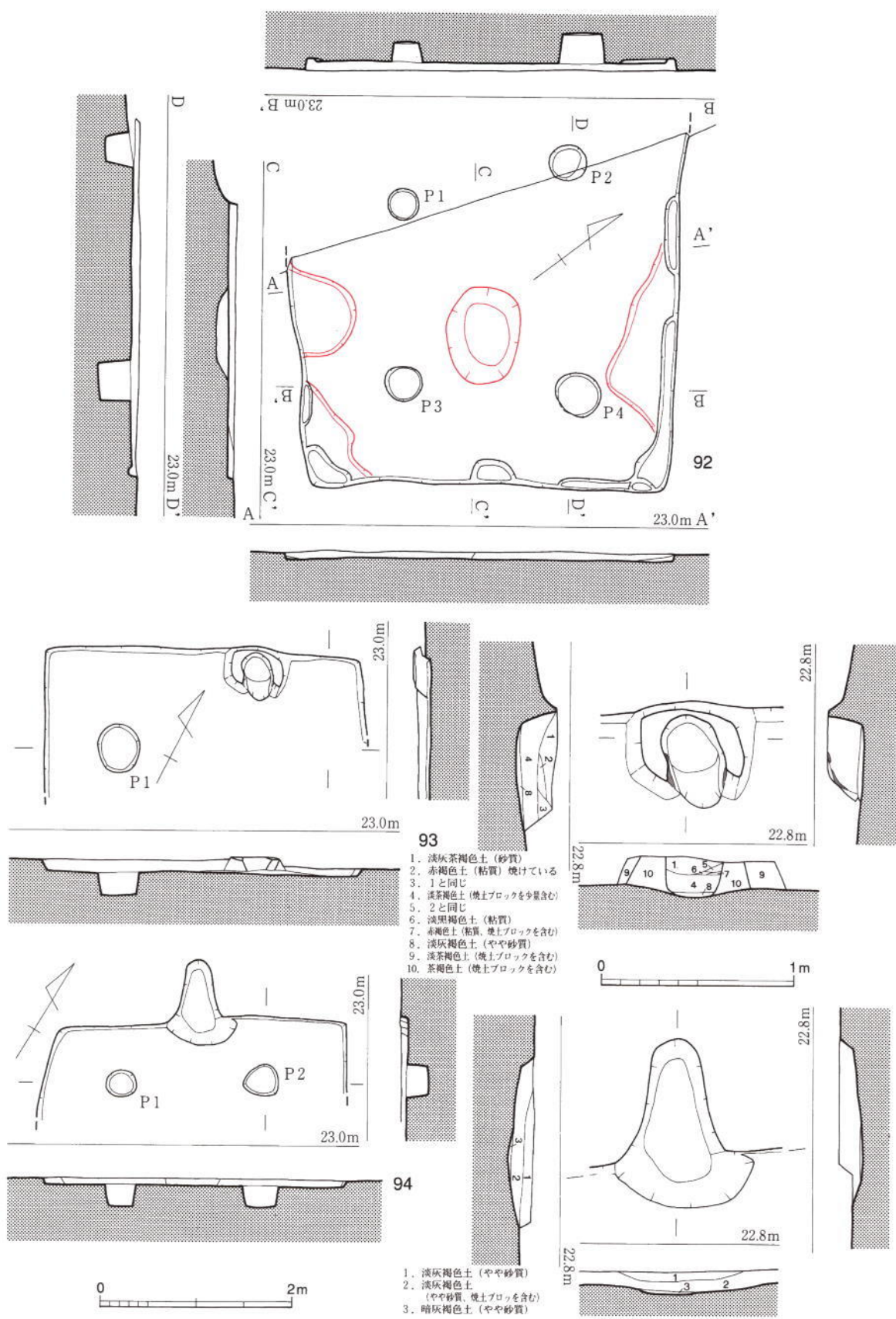
甕(13・14) 混入と考えられる。13は内面の口縁部と肩部の間に稜を持つ。内面ハケメ調整。その他はナデ。

93号竪穴住居跡 (図版31-3、第59図)

調査区の北西部北よりで検出した。平面プランは南北1.5+ α m、東西3.3mである。北壁東よりにカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の深さは0.1m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1を検出した。貼床、壁小溝は確認できなかった。

93号竪穴住居跡カマド (第59図)

北壁の東よりに付設するカマドで、壁を掘り込むことなく焼土ブロックを含む茶褐色土を用いて



第59図 92・93・94号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

堅固に構築される。残存する両袖端部内面が燃焼により赤変、硬化している。

出土土器 (第58図)

須恵器

坏蓋 (15) 天井部の器壁が厚い。口縁部付近は薄い。天井部外面には手持ちヘラ削りが施される。

弥生土器

甕 (16) 混入と考えられる。直角に折れる口縁部で、器壁は同じ厚さである。全体にナデ調整。

94号竪穴住居跡 (図版32-1、第59図)

調査区の北西部で検出した。平面プランは南北1.0 m + α 、東西3.1 mである。北壁中央にカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁の深さは0.05 m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1・P2を検出した。貼床、壁小溝は確認できなかった。遺物は出土していない。

94号竪穴住居跡カマド (第59図)

北壁の中央に付設するカマドで壁を掘り込み外側へ60 cm突出する。最も深い部分で床面から5 cm程度掘り込まれる。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。先端が次第に細く上がっており、途中から煙道となるとも考えられる。両袖は検出できなかった。カマド内壁及び床面の赤変、硬化は認められなかった。

95号竪穴住居跡 (図版32-2、第60図)

調査区の北西部で検出した。59号住居・96号住居・97号住居・49号溝と重複し、これらの中で最も古い。平面プランは南北1.0 + α m、東西2.6 + α mである。支柱穴から判断すると北壁中央にカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の深さは0.1 m程度で残りが悪く、壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1・P2を検出した。貼床、壁小溝は確認できていない。

95号竪穴住居跡カマド (図版32-3、第60図)

北壁中央に付設するカマドで、壁を掘り込み外側へ45 cm突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部、燃焼部の壁としている。焚口部両側は長楕円形の川原石を深く埋め込み、北壁との隙間を土で充填し、袖としている。燃焼部内壁はやや膨らんでおり、燃焼により赤く硬化しているが、カマド床面では確認できなかった。

出土土器 (第58図)

土師器

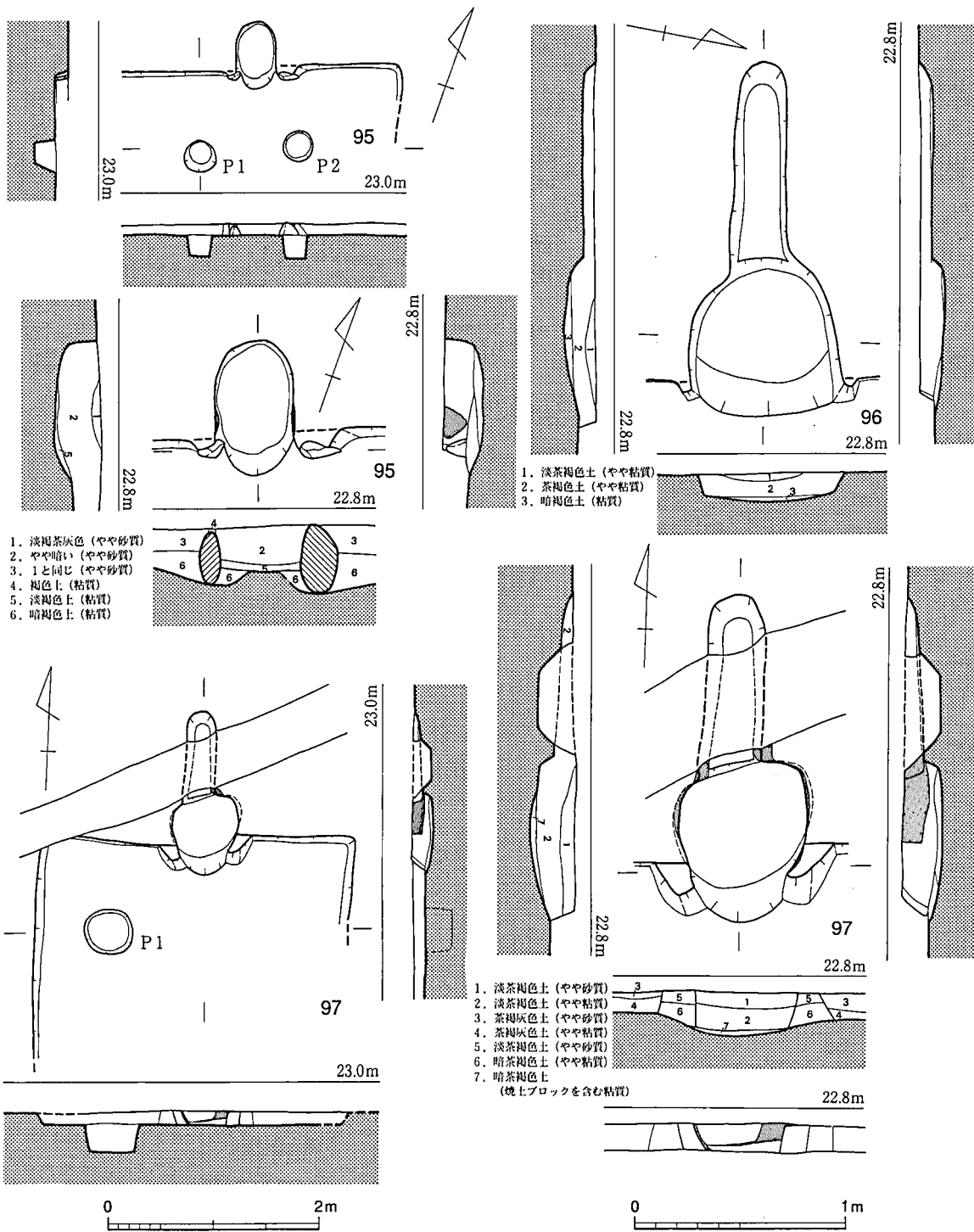
高坏 (17) カマド内から出土した。大きく広がる坏部の口縁部外面には焼成以前に粘土を厚く貼り付けた補修痕が見られる。ナデ調整。

96号竪穴住居跡 (第60図)

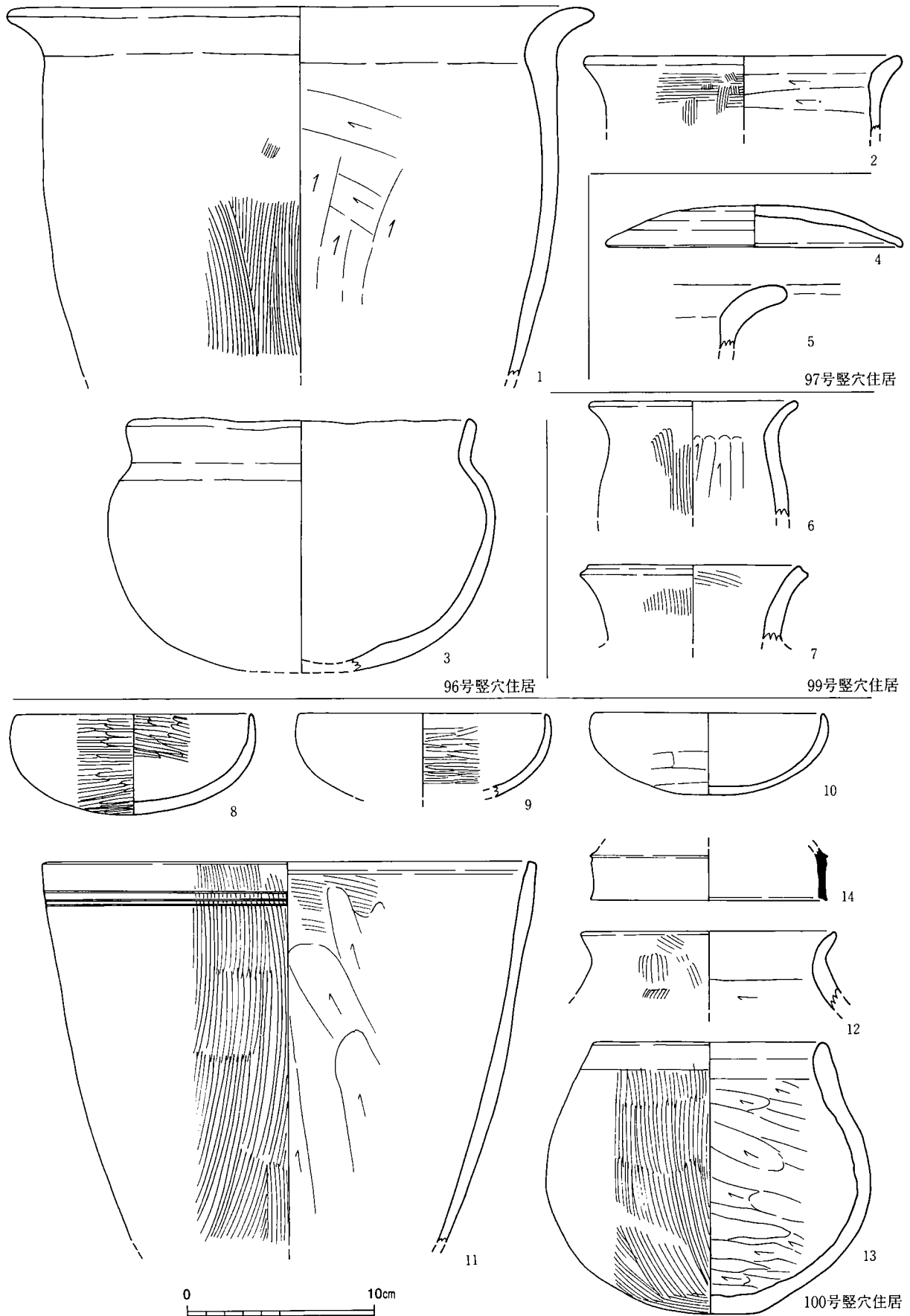
調査区の北西部で検出した。59号住居・95号住居・97号住居・49号溝と重複し、95号住居・97号住居より新しく、59号住居・49号溝より古い。竪穴部のほとんどが他の住居によって掘削されており、平面プランは不明である。カマドのみが残存し、主軸を西北西にとる。

96号竪穴住居跡カマド (図版33-1、第60図)

西壁に付設するカマドで、壁を掘り込み外側へ55 cm程突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃



第60図 95・96・97号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第61图 96·97·99·100号竖穴住居出土土器实测图(1/3)

部、燃烧部の壁としている。両袖は淡茶褐色土を用いて構築されるが、壁から5cm程度しか突出しない。カマド内面で燃烧による赤変、硬化は認められなかった。煙道は炎燃部の先から90cm伸びる。

出土土器 (図版53、第61図)

土師器

甕(1・2) 1は口縁が肥厚する。強く外反し、胴部はほとんど張らない。外面はハケメ調整。内面は削り調整。2は小型で外面はヨコハケの後、部分的にタテハケを施す。内面は削りを行う。カマド内から出土した。

鉢(3) カマド内から出土した。直線的にやや外反する口縁で、肩部がやや張る。口縁端部は凹凸が著しい。内外面の調整はナデで底部付近の器壁は次第に肥厚する。

97号竪穴住居跡 (第60図)

調査区の北西部で検出した。59号住居・95号住居・96号住居・49号溝と重複し、95号住居・96号住居より新しく、49号溝より古い。平面プランは南北 $2.2 + \alpha$ m、東西 $3.0 + \alpha$ mである。壁の深さは10cm程度で残りが悪く、壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1を検出した。貼床、壁小溝は確認できていない。

97号竪穴住居跡カマド (第60図)

北壁中央に付設するカマドで壁を掘り込み外側へ45cm突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部、燃烧部の壁としている。両袖は淡茶褐色土を用いて構築され、壁から15cm突出する。床面では確認できなかったが、燃烧部、炎燃部の壁面、特に煙道口の付近で著しい燃烧による赤変、硬化が認められた。煙道は炎燃部の先から80cm伸びる。

出土土器 (図版53、第61図)

土師器

坏蓋(4) 口縁部は下方にわずかに屈曲する。器壁は全体に厚い。天井部は削り。その他の部分はナデ調整を行う。焼成は良好である。

甕(5) 口縁が外側に大きく外反する。内面は削り。その他はナデ調整。

98号竪穴住居跡 (図版33-2、第62図)

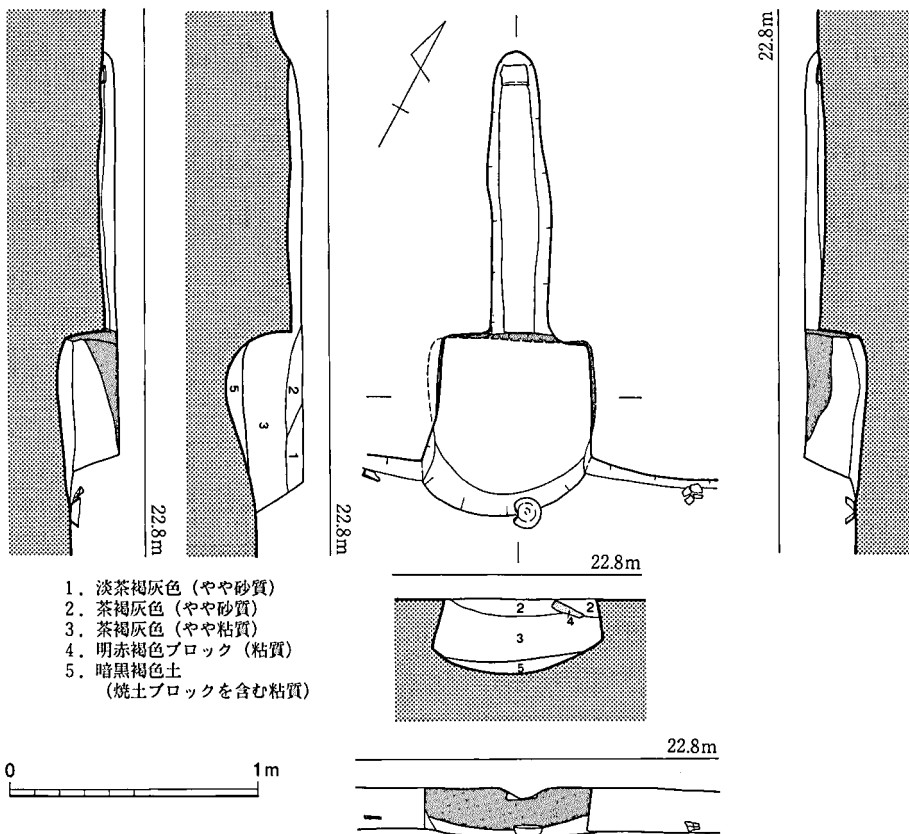
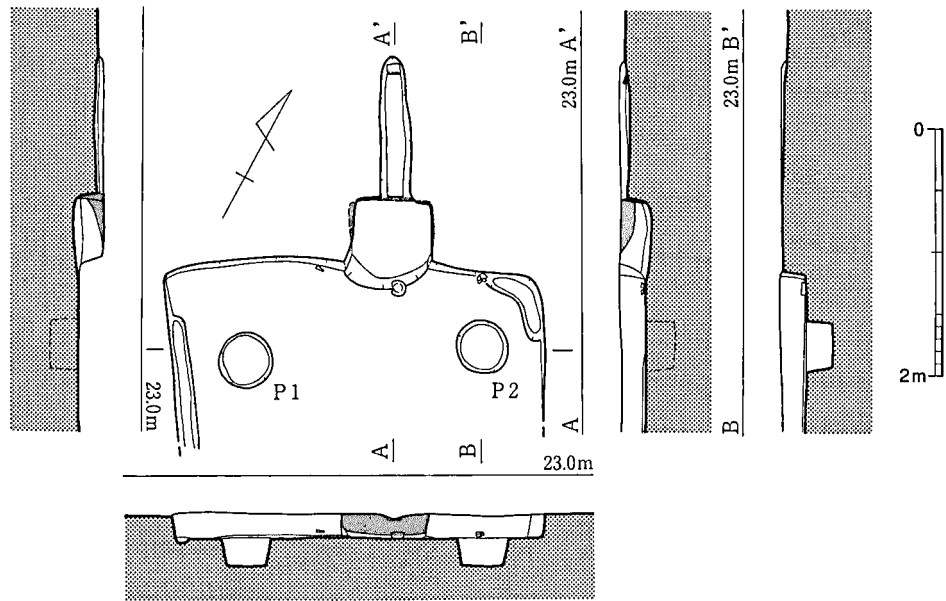
調査区北西部で検出した。平面プランは南北 $1.5 + \alpha$ m、東西3.0 mである。北壁中央やや東よりにカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の深さは0.2 m程度で残りが悪い。床面で支柱穴P1・P2を検出した。東西壁の一部に壁小溝を検出した。貼床は検出できなかった。

98号竪穴住居跡カマド (図版33-3、第62図)

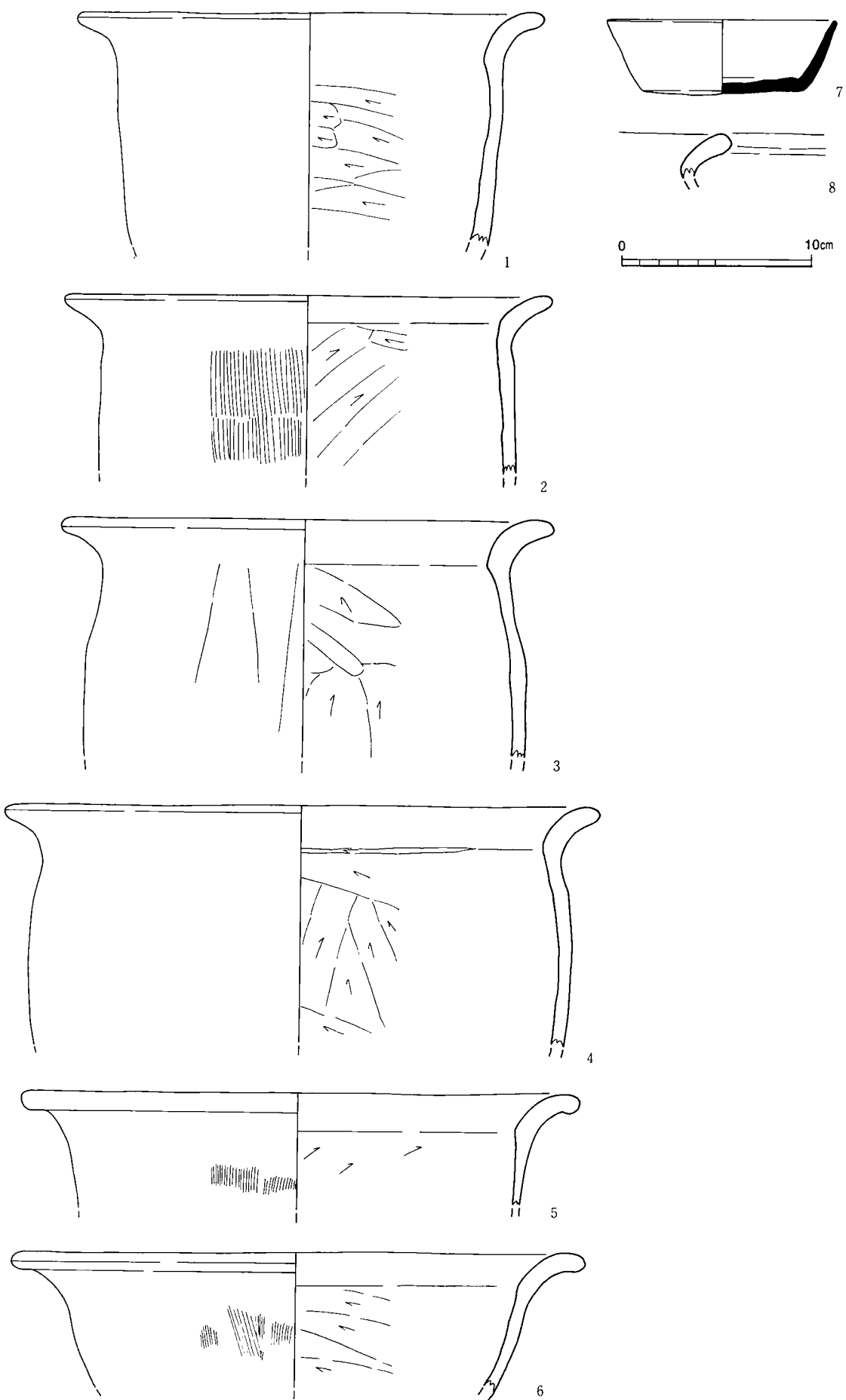
北壁中央やや東より付設するカマドで壁を方形に掘り込み外側へ50cm突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部、燃烧部の壁としている。壁面はオーバーハングしている。両袖は無い。カマド床面では確認できなかったが、炎燃部及び燃烧部の壁面は赤変、硬化している。焚口正面に須恵器坏身が置かれていた。煙道は炎燃部から120cm突出する。煙道の先端から甕の口縁部片が煙道のカーブに沿うように据えられて出土している。

出土土器 (図版54、第63図)

土師器



第62図 98号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第63图 98号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

甕（1～5）何れも口縁部が大きく外反し、胴部が張らない。1はカマド内から出土した。外面の調整はナデである。2は胴部外面にハケメが整然と行われる。3の外面は板状工具によるナデ調整を施す。4はピット内から出土した。外面はナデ調整。

鉢（6）胴部の内傾は著しくない。外面のハケメには細かいものと粗いものの2種が見られ、粗いハケの方が後から施される。内面の調整は削り。

須恵器

坏（7）カマド正面で出土した。外面底部はヘラ切未調整である。その他はナデ調整。口縁は直線的に広がる。焼成はやや甘い。

弥生土器

甕（8）混入と考えられる。口縁端部が丸くやや膨らみ気味に仕上げられる。全体にナデ調整。

99号竪穴住居跡（図版34-1、第64図）

調査区の北西部で検出した。平面プランは南北2.8m \pm α 、東西4.2mである。北壁中央やや東よりにカマドと考えられる突出部分があり、主軸を北北西にとる。壁の深さは0.1m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1・P2を検出した。壁小溝は検出できなかった。床面下層は中央部分とカマド手前部分に深さ3cm程度の浅い掘り込みがある。遺物は土師器が出土している。

99号竪穴住居跡カマド

北壁中央やや東よりにカマドと思われる突出部分がある。壁を掘り込み外側へ30cm緩やかに突出する。平面・断面を精査したが両袖は検出できなかった。カマド床面にわずかながら燃焼による赤変が認められる。

出土土器（第61図）

土師器

甕（6）口縁の外反は緩やかで、胴部はあまり張らない。器壁の厚さはほぼ同じである。外面はハケメ調整。内面は削り。

弥生土器

甕（7）混入と考えられる。外反する口縁端部は面取りを行う。内外面の調整はハケである。

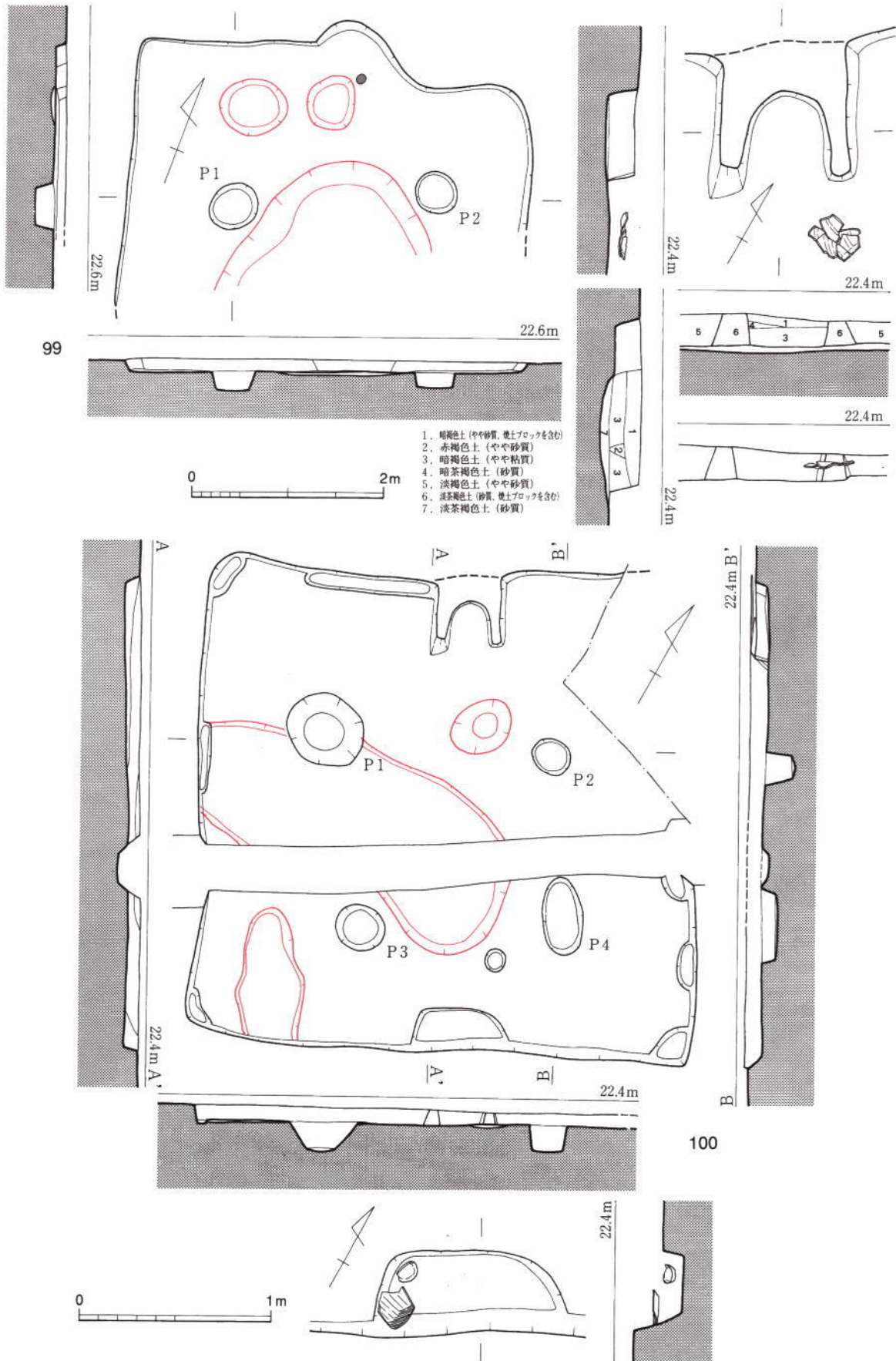
100号竪穴住居跡（図版34-2、第64図）

調査区の北西部で検出した。29・30・59号溝と重複し、29号溝より古く、その他より新しい。住居の北東部コーナーが調査区外へ伸びているが、平面プランは南北4.9m、東西5.2mのほぼ正方形を呈すと考えられる。北壁中央部分にカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは20cm程度で残りが悪い。床面でP1～P4を検出した。壁小溝は部分的に認められる。南壁中央に30×90cm、深さ10cm程の浅い土坑を検出した。土坑埋土上層で坏と土師器片が出土している。床面下層は中央部分及び部分的に浅い掘り込みを持つ。

100号竪穴住居跡カマド（図版34-3、第64図）

北壁中央に付設するカマドで壁を掘り込まず、全体が焼土ブロックを含む淡茶褐色砂質土を用いて構築される。両袖が短い、本来もっと長かったものと考えられる。カマドの内面に燃焼による赤変、硬化は認められなかった。カマド前面で土器片がやや浮いた状態でまとまって出土している。

出土土器（図版54、第63図）



第64図 99・100号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

土師器

坏（8・9・10）何れもわずかに内湾する口縁部である。8はカマド対面土坑内から出土した。8・9は内外面に丁寧なヘラミガキが施される。10の外面は粗いケズリ。

甗（11）口縁部から直線的に緩やかにすぼまる。外面の調整はハケメで、後から口縁部外面付近に3条の細い沈線を巡らす。内面はハケ調整の後、縦方向にヘラ削りを行う。カマド対面土坑内から出土した。

甕（12）口縁部がわずかに外反し、胴部は張る。口縁端部付近まで粗いハケメを施す。内面の調整は削りである。

鉢（13）カマド正面で出土した。小型で口縁は内傾して広がらない。器壁は厚く、胎土は粗砂を多く含む。器面の調整も外面にはハケメ調整、内面には強い削りを行うが、全体に粗い。外面は二次加熱を受けている。

須恵器

坏蓋（14）カマド内から出土した。口縁端部内面には明瞭な段を有する。天井部と口縁部の境には突帯状に段をつける。調整はナデ。

101号竪穴住居跡（図版35-1、第65図）

調査区の北西部で検出した。29号溝と重複し、これより古い。カマドは検出されていないが、南側に浅い土壌があり、他の住居と軸を同じにするとところから、29号溝に掘削された北壁に本来、カマドを付設していたものと考えられる。平面プランは南北3.9m + α 、東西3.9mである。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは0.15m程度で残りが悪い。床面で4つのピットを検出はしたが、P2以外は床面下層から明確に検出することのできた。P1・P3・P4を支柱穴とするほうが位置的にも適当であろうと思われる。壁小溝はごく部分的、ピット状に検出した。南壁中央に0.7×1.2m、深さ0.15mの土坑を検出した。床面下層は全体に掘り込まれているが、中央部分は浅く島状に残され、周辺は約0.15mと深めに掘りこまれる。

出土土器（図版54、第67図）

土師器

壺（1～4）1は口縁部やや内湾し、内外面ヘラミガキ調整。床面下層から出土した。2・3・4は摩滅が著しいがミガキ調整と考えられ、口縁はわずかに外開きである。2はカマド内から出土した。

甕（5）床面下層から出土した。口縁部が緩やかに外反する。内面の調整は削り。その他はナデ調整を行う。

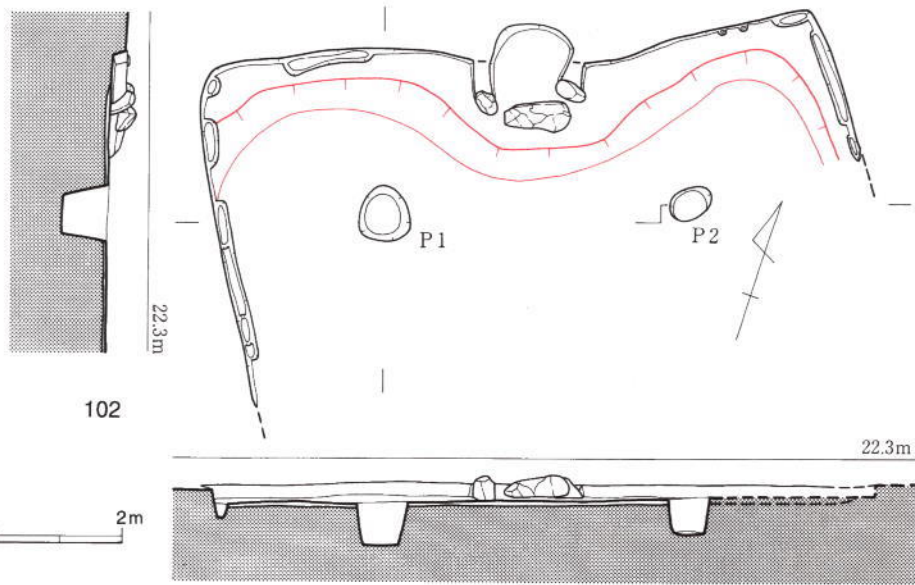
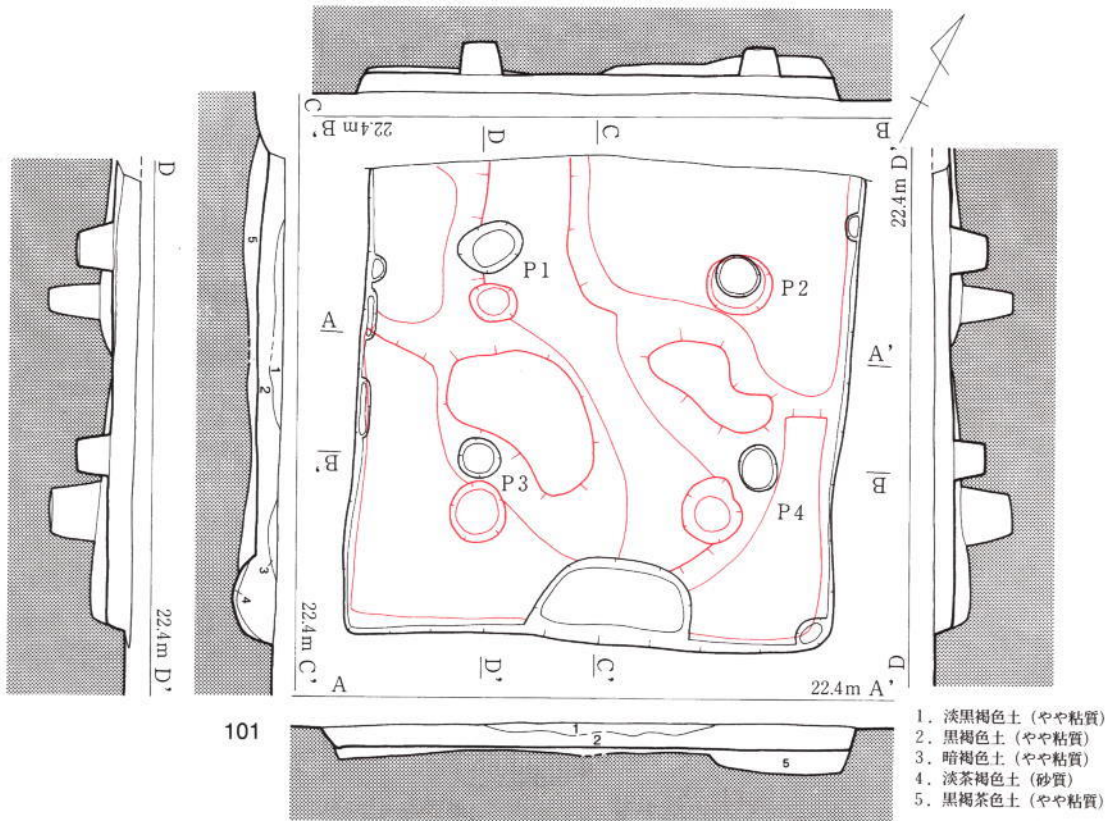
高坏（6）脚部がやや大きく広がるものである。全体にナデ調整を行う。

鉢（7・8）7はやや胴が張り、口縁部がわずかに外反する。器壁は厚く、調整はナデ。8は球形に胴が張り、口縁は頸部から直線状に開く。内面は削り調整。その他はナデ調整を行う。

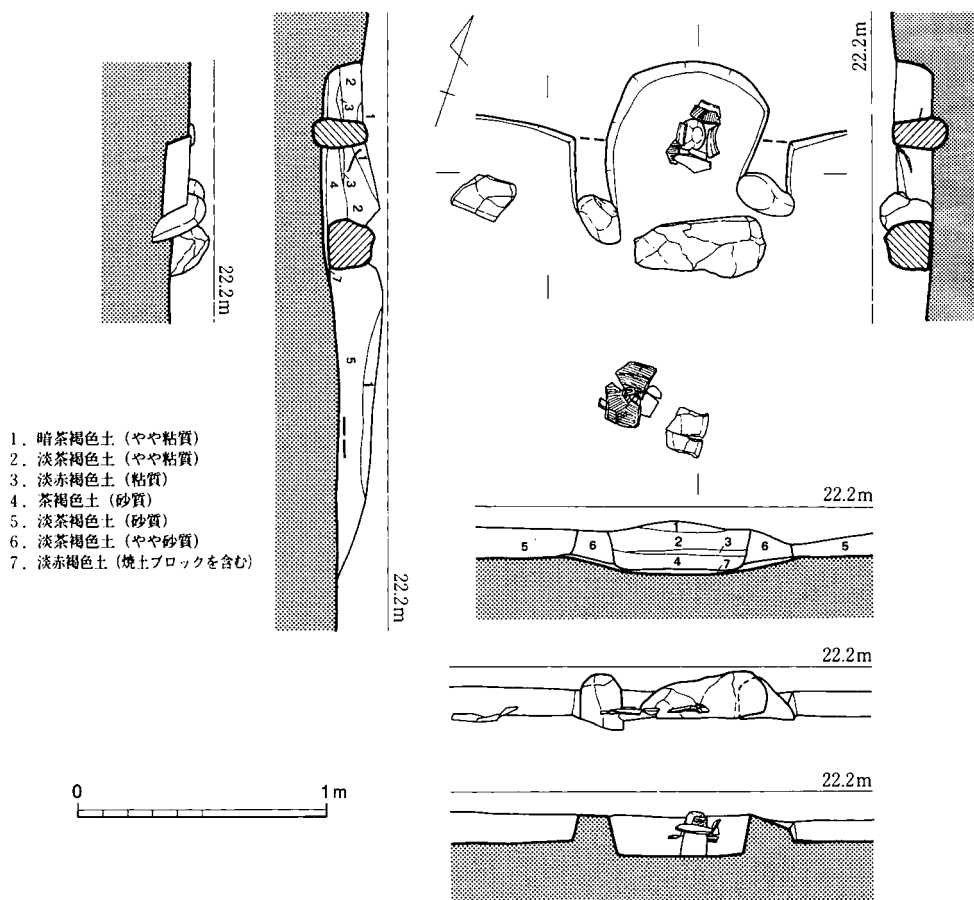
弥生土器

甕（9）混入と考えられる。口縁部が内側にやや張り出し、やや外形気味である。外面はハケメ調整。内面はナデ調整を行う。

102号竪穴住居跡（図版35-2、第65図）



第65図 101・102号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第66図 102号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

調査区の北西部で検出した。80号住居と重複するが、これより新しい。平面プランは南北3.8 m + α 、東西5.2 mである。北壁中央にカマドを付設し、主軸を北北西にとる。壁の深さは0.1 m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面でP 1・P 2を検出した。壁小溝はほぼ全体に途切れながら続いている。床面下層は一部壁際を除き、ほぼ前面が0.05 m程度掘り込まれる。遺物は土師器が出土している。

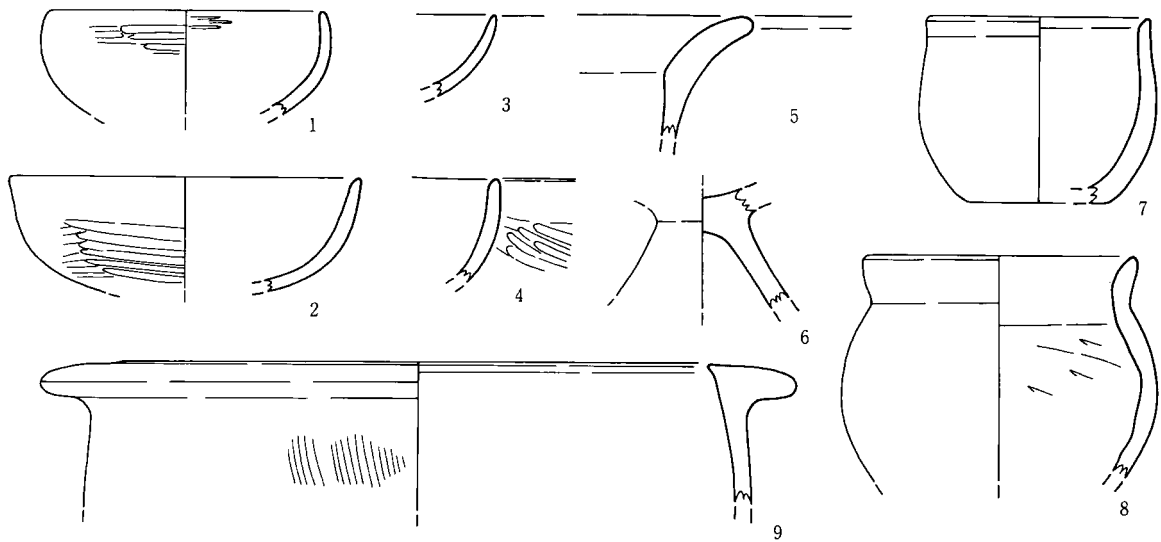
102号竪穴住居跡カマド (図版35-3、第66図)

北壁中央に付設するカマドで壁を掘り込み外側へ30 cm突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。焚口部両側は長楕円形の川原石を立て、北壁との隙間を淡茶褐色砂質土で充填し、袖としている。焚口部手前で風化により原型をやや失った長楕円形の石をカマドの軸と直交する状態で検出した。ほぼ床直の状況であり、本来、立てられていた川原石に横架されていた石材と考えられる。奥壁から20 cm手前に石製支脚を立った状態で検出した。支脚付近では土器が支脚を中心として放射状に出土した。カマド内面に燃烧による赤変、硬化は認められなかった。

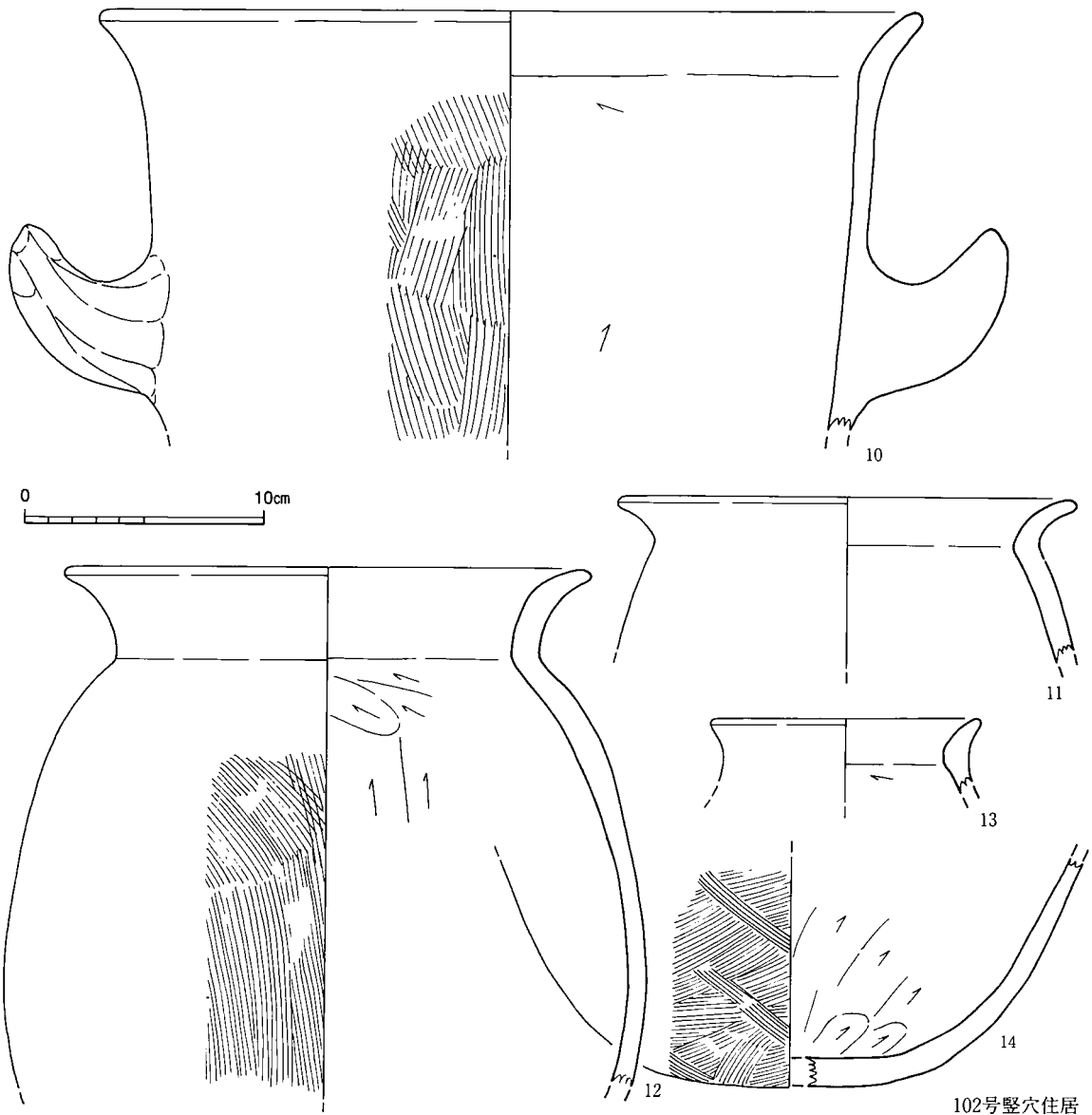
出土土器 (図版55、第67図)

土師器

甑 (10) カマドの南側で出土した。口縁部は緩やかに外反し、頸部の締めりはほとんどなく胴部



101号竖穴住居



102号竖穴住居

第67图 101・102号竖穴住居出土土器实测图(1/3)

に至る。胴部中位には大きな把手が貼り付けられる。把手貼り付け部分内面はあまり肥厚しない。外面は粗いハケメ調整、内面はケズリを行う。

甕（11～14）12はカマド正面で出土した。小型品で口縁部がわずかに外反する。内面の調整は削り。その他はナデ。13は口縁の外反が強く、胴部が張る。口縁部と肩部の境が明瞭である。14はカマド内から出土した。13と同一個体とも考えられる。平底状の底部で、外面はナデ調整。内面は削りを行う。

103号竪穴住居跡（図版36-1、第68図）

調査区の北西部で検出した。58号住居・104号住居と重複し、これらの中で最も新しい。平面プランは南北4.9m + α 、東西4.4mである。北壁中央にカマドを付設し、主軸を北にとる。壁の深さは0.1m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で主柱穴P1～P3を検出した。壁小溝は部分的に途切れるが全体に廻る。床面下層は中央部分及び壁側部分的に深さ0.03m程度掘り込まれる。遺物は土師器が出土しているが図化できない。

103号竪穴住居跡カマド（図版36-2、第68図）

北壁中央に付設するカマドで、壁を掘り込み外側へ10cm程度突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。両袖は暗茶褐色砂質土を用いて構築される。カマド内面において燃焼による赤変、硬化は認められなかった。

104号竪穴住居跡（図版36-3、第68図）

調査区の北西部分で検出した。103号住居と重複し、これより古い。平面プランは南北2.3 + α m、東西4.7mである。北壁中央にカマドを付設し、主軸を北にとる。壁の深さは0.05m程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面でP1・P2を検出した。壁小溝は部分的に廻る。床面下層は部分的に深さ0.03m程度掘り込まれる。出土遺物はない。

104号竪穴住居跡カマド（図版37-1、第68図）

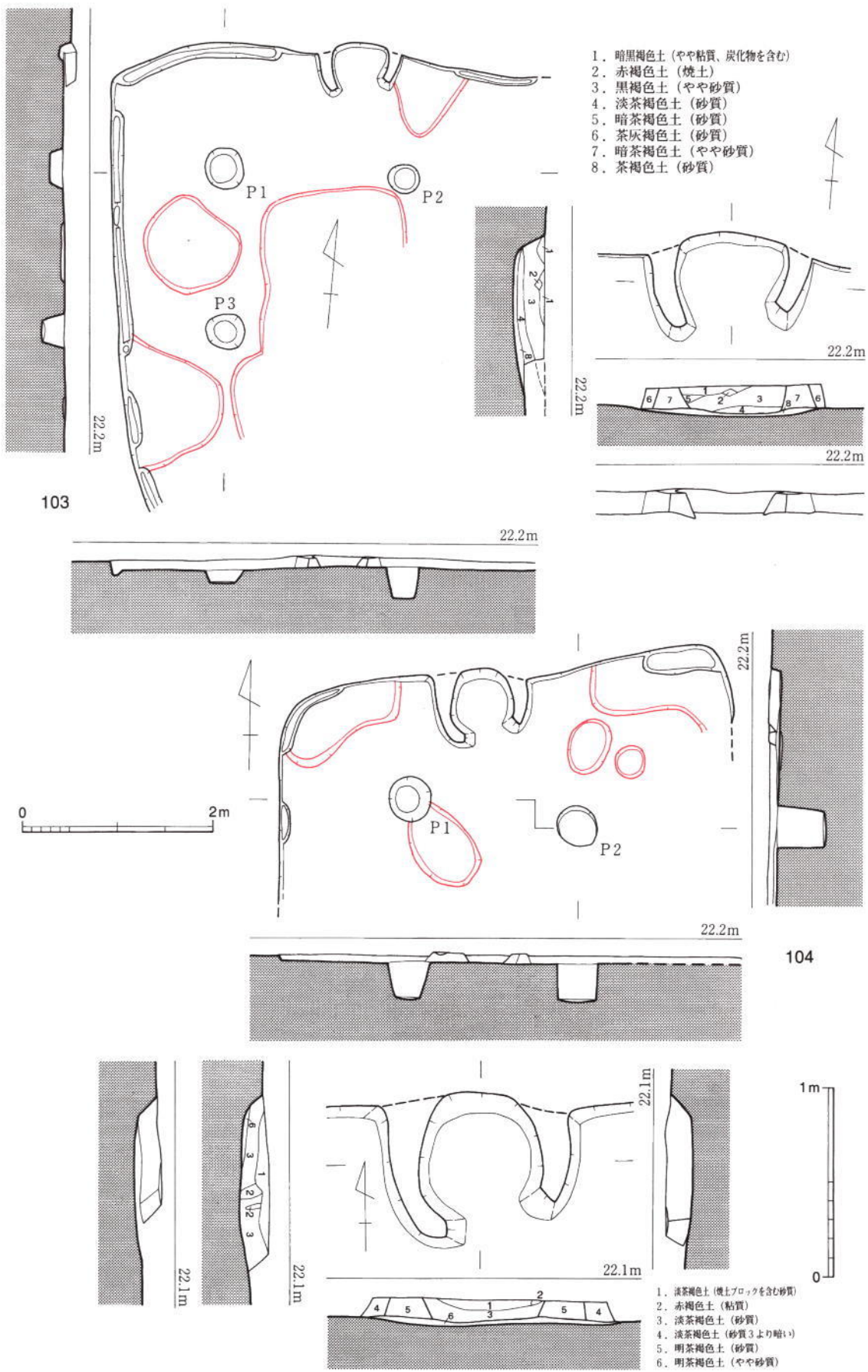
北壁中央に付設するカマドで壁を掘り込み外側へわずかに突出する。突出部分は地山をそのまま炎燃部の壁としている。両袖は明茶褐色砂質土を用いて構築される。カマド内壁の燃焼による赤変、硬化は確認できない。

107号竪穴住居跡（図版37-2・3、第69図）

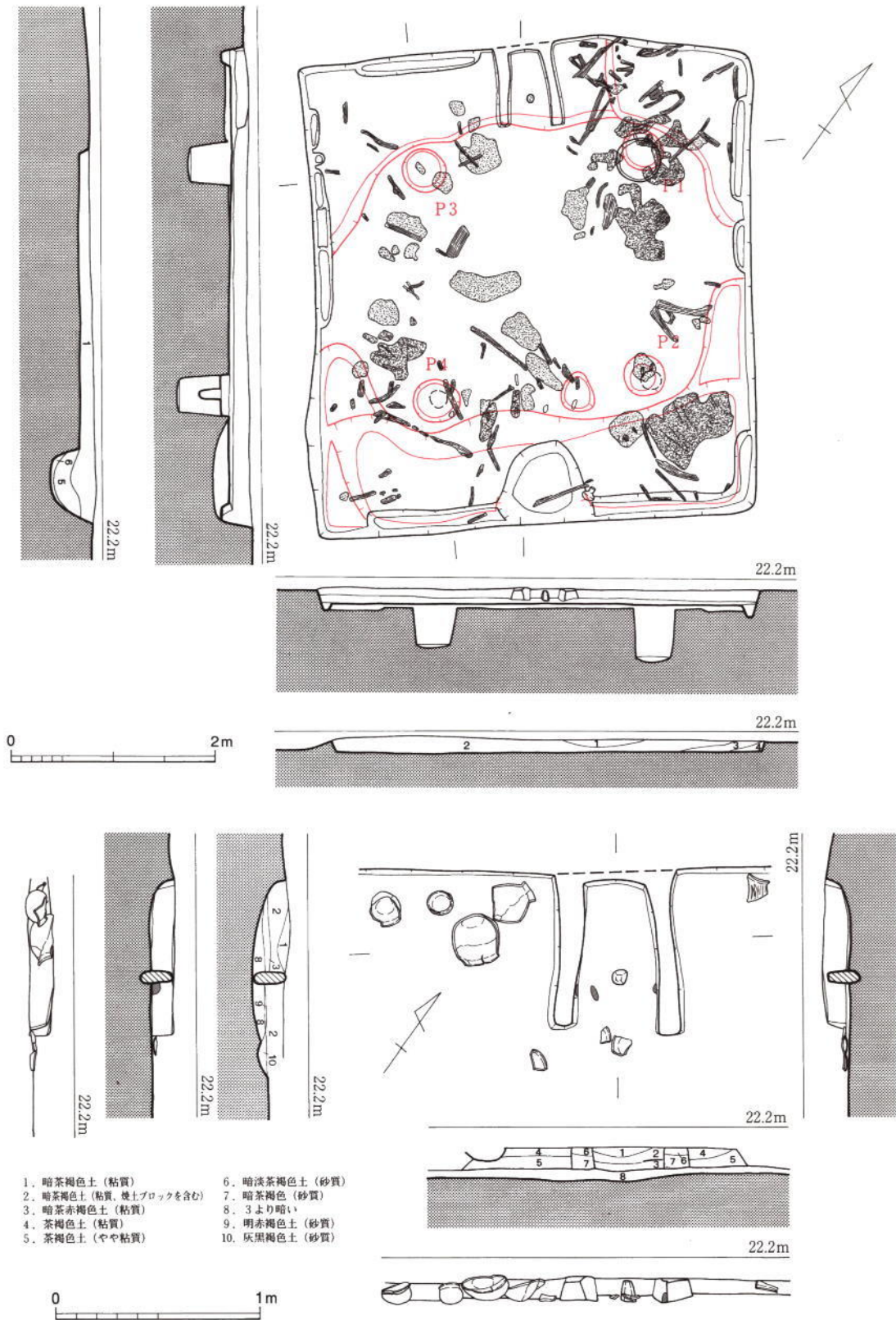
調査区の北西部で検出した。62号土坑・19号溝と重複し、これらの中で最も新しい。平面プランは南北4.7m、東西4.2mのやや長方形である。北壁中央部分にカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁の深さは20cm程度で残りが悪い。床面で柱根4つを検出し、貼床を剥がした段階で主柱穴P1～P4を確認したところ、P1以外はすべて柱根に対応していた。壁小溝は部分的に廻る。南壁中央に0.8×0.8m、深さ0.2mの土坑が掘り込まれる。この土坑の上層から小形壺が出土している。床面下層は主柱穴より内側の部分を島状に残し、周囲が0.05m程度浅く掘り込まれる。この住居は焼失住居であって、全体的に炭化材が検出された。また、東側部分からは植物の茎が炭化したもののがかなりまとまって出土している。茎の方向はランダムであった。

107号竪穴住居跡カマド（図版38-1、第69図）

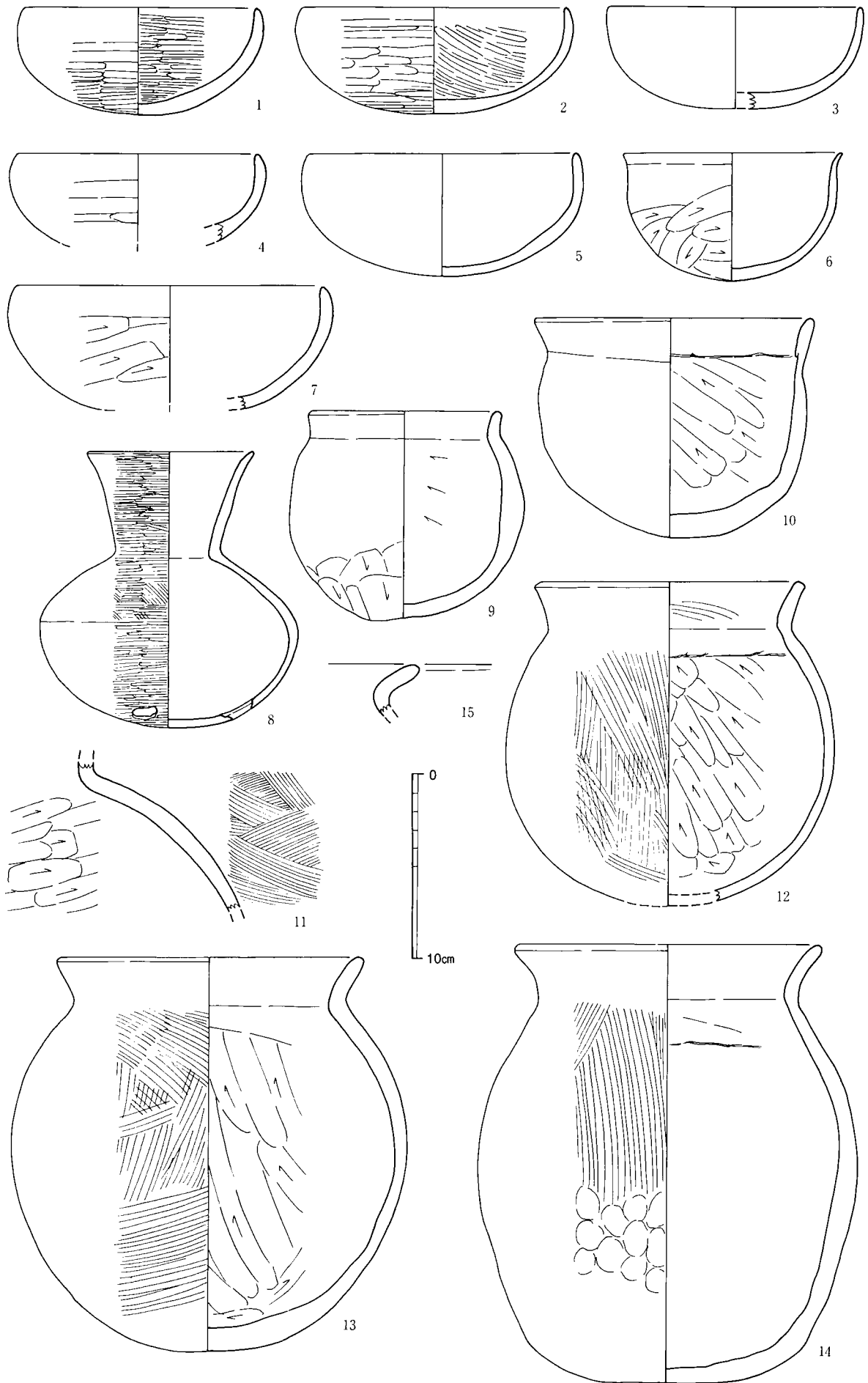
北壁中央に壁を掘り込むことなく付設するカマドである。焼失住居のためか、袖の外側の部分も



第68図 103・104号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第69図 107号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第70图 107号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

赤変しており、検出し易かった。両袖は暗茶褐色砂質土と暗淡茶褐色砂質土を用いて構築される。右袖の燃焼部付近に3 cmほど突出した部分があり、その部分のみ、赤く硬化していた。左袖の対応する部分も赤変していた。奥壁から40 cm手前に石製支脚が立ったままの状態を検出した。カマドの西側からは、甕が4個体分、並べられた状態で出土している。

出土土器 (図版55・56、第70図)

土師器

壺(1~7) 1・2・3はカマド内から出土した。口縁がやや内傾、内外面調整は丁寧なヘラミガキ。3・4・5もヘラミガキ調整と思われるが、器表面の摩滅が著しい。6はカマド正面で出土した。口縁を外反させ、外面底部付近はヘラ削りを行う。7はカマド内で出土した。他のものより径が大きく、外面底部付近にヘラ削りを行う。

卮(8) カマド対面土坑付近の床面から出土した。精製品で口縁部は長く直線的に開く。外面の調整はハケの後、丁寧なヘラミガキ。内面はナデ。底部に黒斑あり。また、底部に焼成後、外面から1 cmほどの穿孔を行う。

甕(9~14) 9・10・13・14はカマドの南側床面で出土した。口縁が開かず、胴部がやや膨らむ。底部外面はヘラ削りを行う。器壁は厚い。10は外開きの口縁部と肩部の境が明瞭でなく、胴部はほとんど開かない。頸部内面には接合痕がある。内面はヘラ削りを行うが器壁は厚い。11はカマド内から出土した。頸部から胴部にかけて大きく膨らむ。外面は丁寧なナデ。12・13は口縁がやや広がり気味で、球形の胴部をもつ。12はカマドの北側の床面で出土した。口縁内面はハケメ。頸部内面から1.5 cm下の部分に粘土接合痕があり、それ以下にヘラ削りを行う。14はやや長胴で平底気味の底部。内面に粘土接合痕。胴部下半付近に指頭圧痕あり。

弥生土器

甕(15) 混入と考えられる。口縁端部を丸く仕上げ、ナデ調整を行う。

108号竪穴住居跡 (図版38—2・3、第71図)

調査区の北西部で検出した。109号住居・59号土坑・60号溝と重複し、これらより新しい。平面プランは南北3.4 m、東西3.4 mのほぼ正方形である。北壁中央部分にカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁の深さは10 cm程度で残りが悪い。壁の立ち上がりは緩やかである。床面で支柱穴P1~P4を検出した。壁小溝は部分的に廻る。南壁中央に1.0×0.5 m、深さ0.1 m程度の浅い土坑を検出した。床面下層は東側半分に0.05 m程度の浅い掘り込みがある。

108号竪穴住居跡カマド (第71図)

北壁中央に付設するカマドである。両袖は茶褐色粘質土を用いて構築される。赤変の広がりからすると袖はもっと長いと考えられる。右袖は検出時に間違えて袖先端部を掘り過ぎた。カマド床面、燃焼部やや手前付近で15×20 cmの楕円形に赤変、硬化している部分があり、さらにその周辺にも赤変が広がっている。

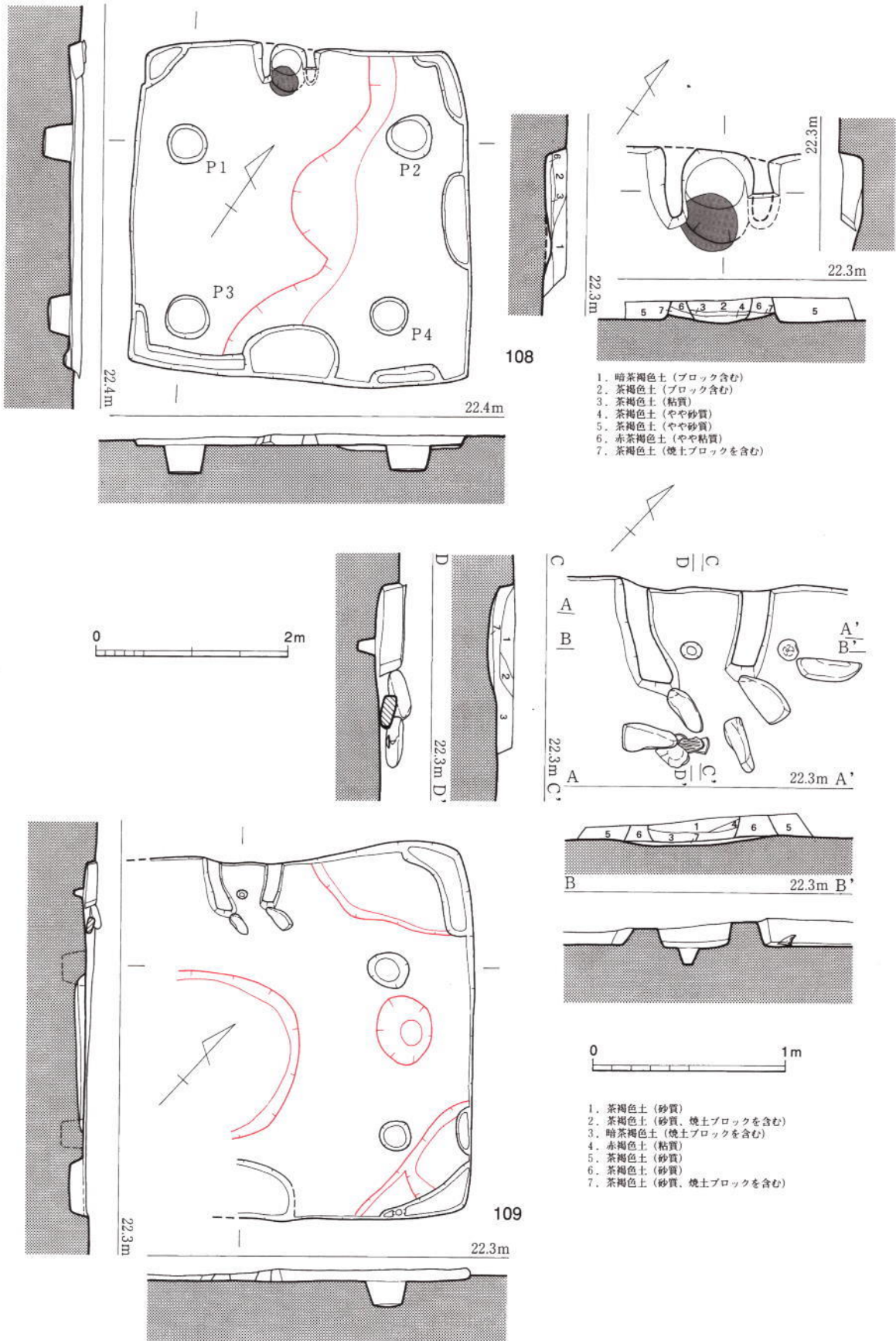
出土土器 (図版56、第72図)

土師器

壺(1~3) 1は口径が小さく深い。全体にナデ調整を行う。2は器壁が厚く浅い。

高坏(4) 坏部に稜が入る。全体にナデ調整。

不明土器(5) 口縁部。頸部から折れ、直線的に開く口縁部を持つ。全体の調整はナデ。甕として



第71図 108・109号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

は器壁が薄い。

甕(6・7) 6は、口縁部分が肥厚せず、全体が同じ厚さである。ナデ調整。7はP3から出土した。口縁部と胴部の境が不明瞭である。内面は削りを行うが全体がほぼ同じ厚みである。外面の調整はハケメ。

鉢(8) 精製品でわずかに外反する。器壁は薄く、全体にナデ調整。

須恵器

坏(9) 立ち上がりは小さく、内傾している。器壁は厚い。外面底部にヘラ記号が太く記される。高坏(10) 脚部片。透かし窓を持つ。焼成は堅緻である。

弥生土器

甕(11) 口縁部片で、端部をやや角張り気味に仕上げる。全体の調整はナデ。

壺(12) 底部で、底面に接合痕あり。色調は白灰色である。胎土は精緻で同遺跡の他の弥生土器と異なる。

109号竪穴住居跡(図版38—3、第71図)

調査区の北西部で検出した。108号住居、59号土坑、60号溝と重複し、108号住居より古く、59号土坑、60号溝より新しい。東南部分が調査区外へ伸びているが、平面プランは南北 $3.3\text{m} + \alpha$ 、東西 3.9m である。西壁にカマドを付設し、主軸を北西にとる。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは 10cm 程度で残りが悪い。床面でP1・P2を検出した。壁小溝はコーナー部分に掘り込まれる。南側に $0.6 + \alpha \times 0.6\text{m}$ 、深さ 0.1m 程度の浅い掘り込みがある。床面下層は中央部分及びコーナー付近に深さ 0.1m 程度の浅い掘り込みを検出した。

109号竪穴住居跡カマド(図版39—1、第71図)

西壁に付設するカマドである。両袖は茶褐色砂質土を用いて構築される。奥壁から 25cm 手前で直径 10cm 、深さ 9cm の支脚の痕跡を検出した。焚口周辺には長楕円形の川原石5個がある。何らかの用途でカマドに使用されていたものか。また、カマド東側からは高坏脚部が逆位で出土した。

出土土器(図版56、第72図)

土師器

高坏(13・14) 何れもカマド内から出土した。13は坏部が深めで、調整はナデ。脚部は内外面削りにより仕上げている。14は坏部がやや浅めで、口縁部が稜を境に直線的に開く。脚部の調整は内外面削りによる仕上げ。

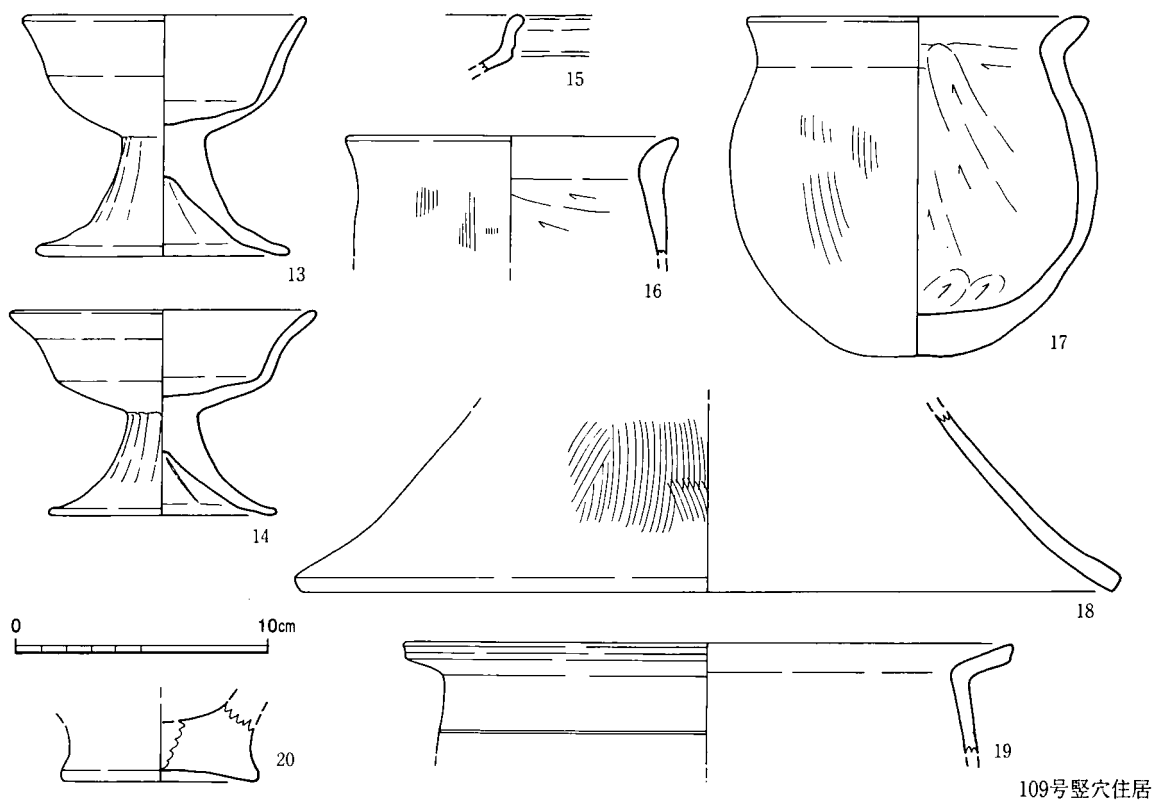
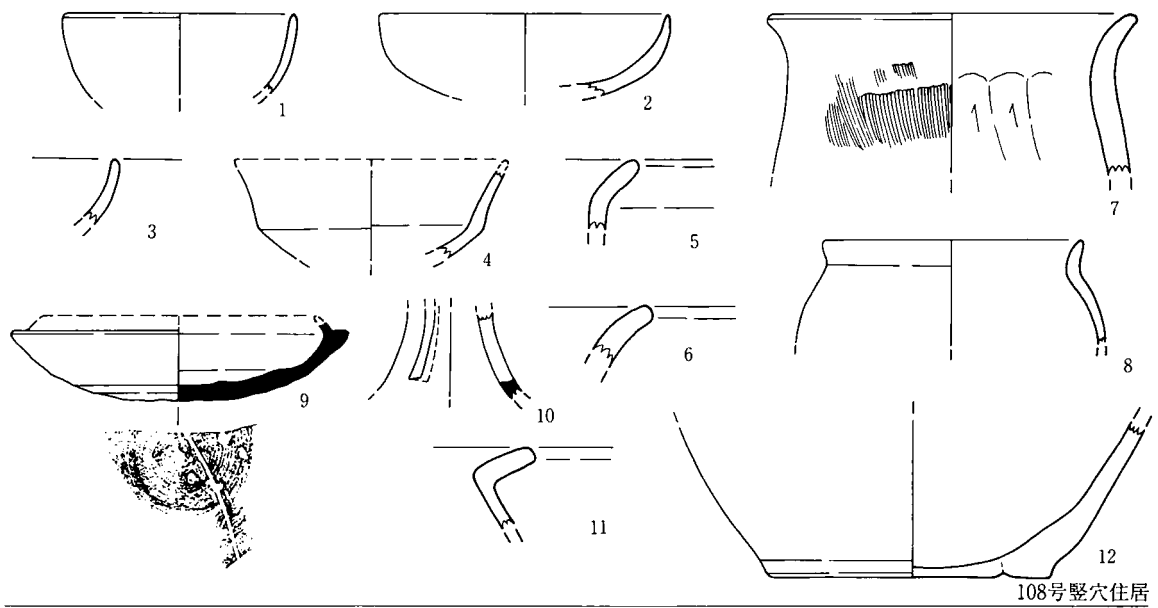
坏(15) 床面下層から出土した。細片である。全体に同じ厚さで、体部に二条の沈線状に窪む。

甕(16・17) 16は胴部が膨らまない。外面の調整はハケメ。内面は横方向の削りを行う。17は内面ヘラ削りを行うが底部が厚い。外面はハケメ調整。口縁部は丸く仕上げる。カマド付近から出土した。

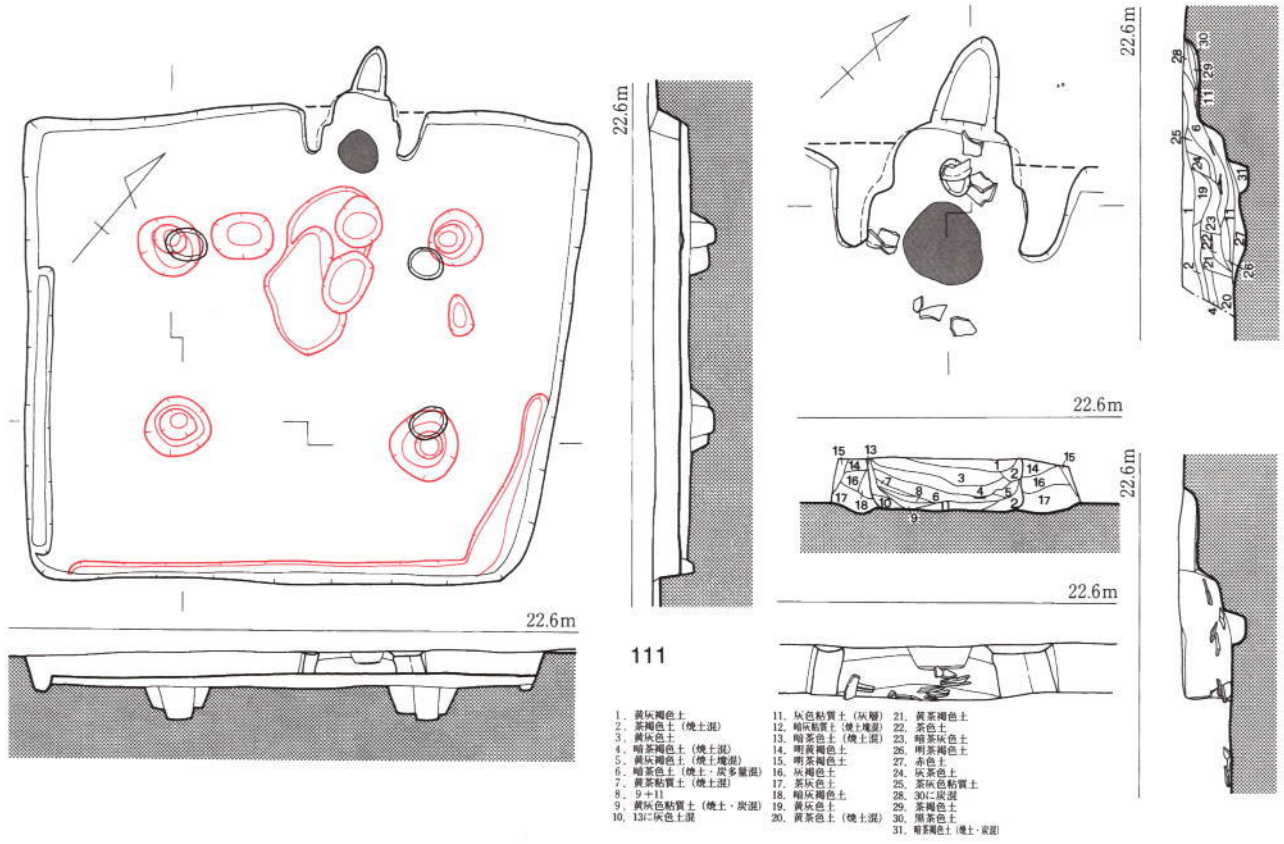
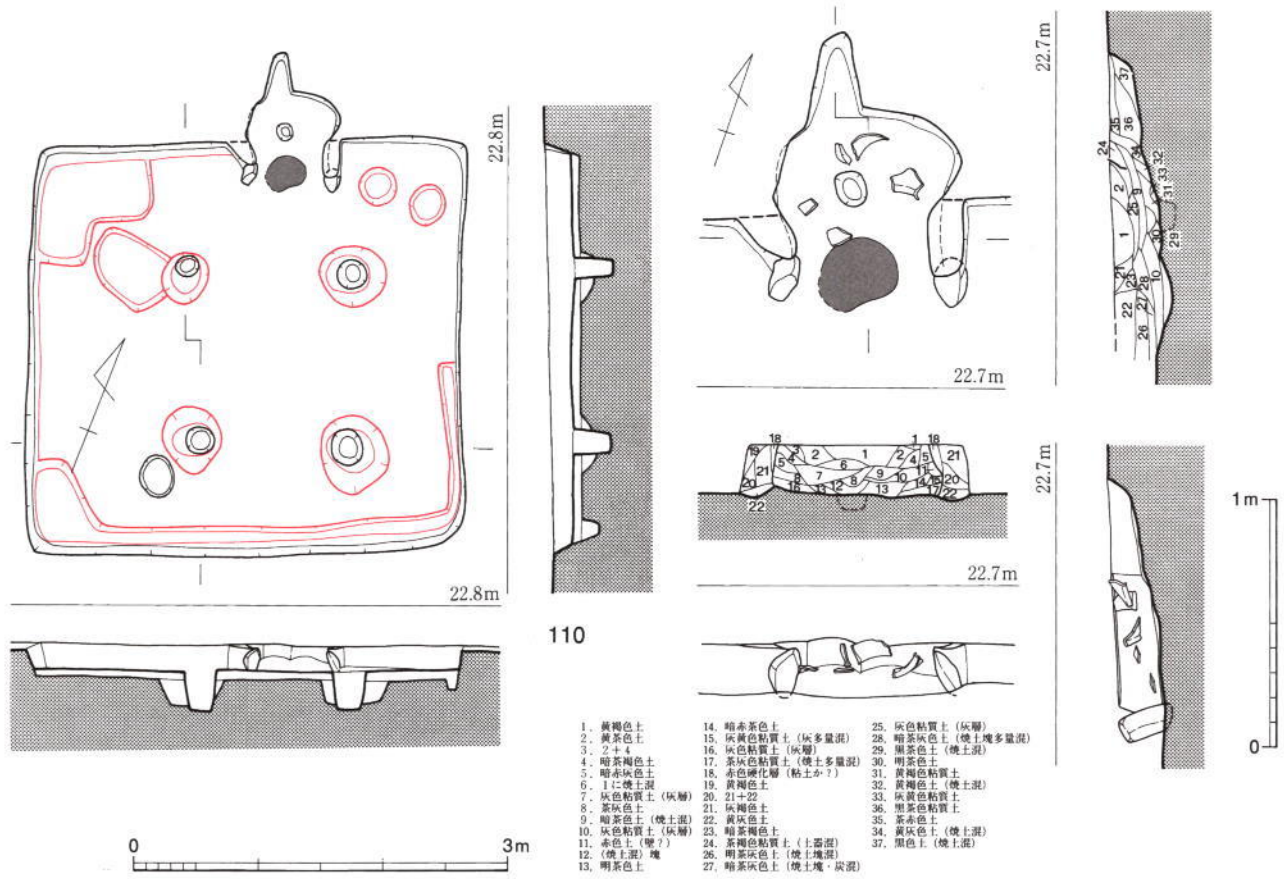
弥生土器

蓋(18) 混入と考えられる。口縁端部が角張り気味に仕上げられる。外面の調整はハケメ。内面はナデ調整。

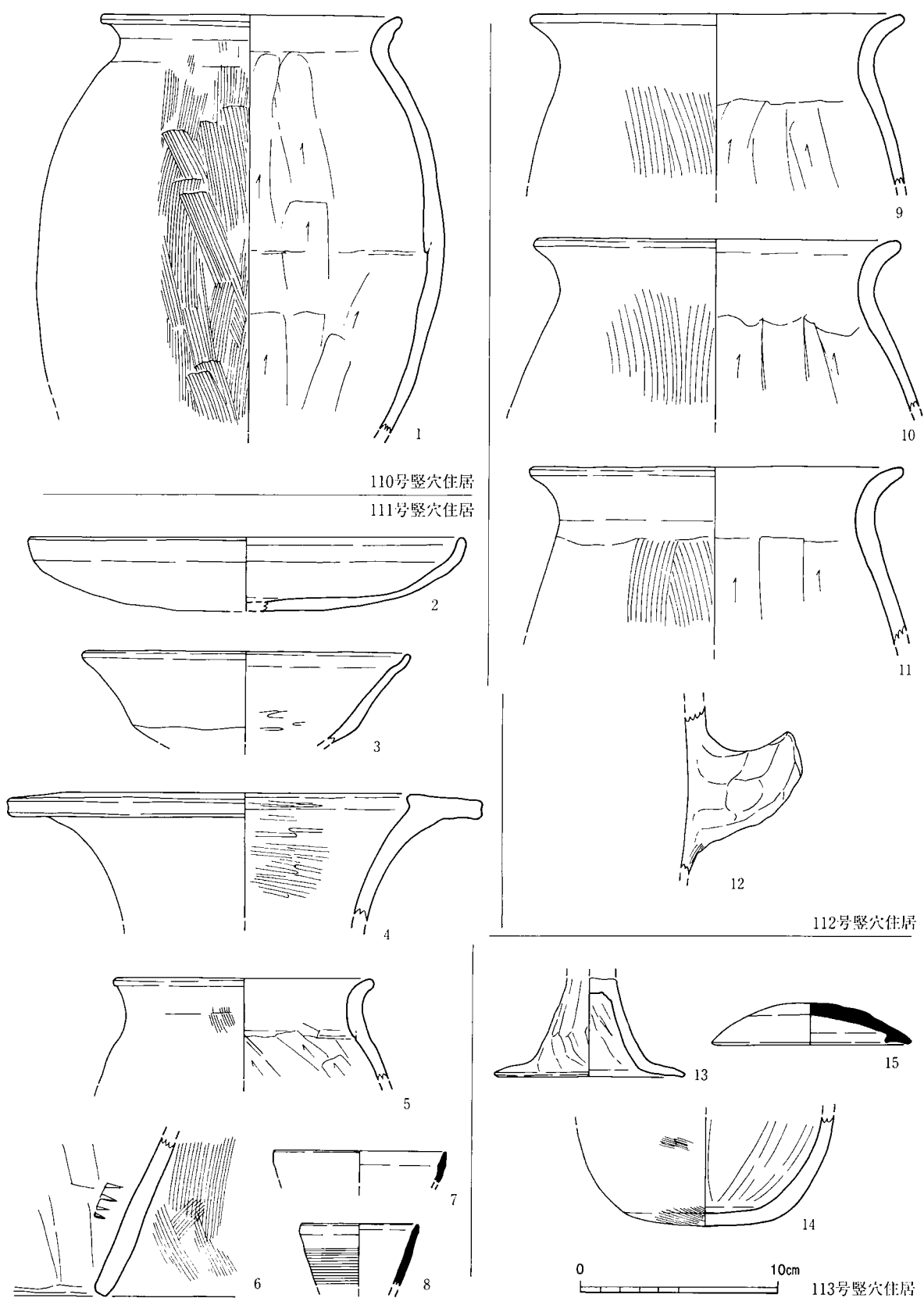
甕(19・20) 混入と考えられる。19は口縁端部がとがり気味で、口縁下に一条の沈線をめぐらす。20はやや上げ底なので、全体の調整はナデ。



第72图 108·109号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第73図 110・111号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第74图 110~113号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

110号竪穴住居跡（図版39—2、第73図）

調査区西端部で検出した。38号溝を切る。長軸長3.55 m、短軸長3.25 mの横長長方形のプランを有し、コーナー部は角を持つ。カマドは北壁中央部東寄りに付設する。床面までの深さは0.2 m、埋土は黄色土中心の自然堆積である。床面でP 1～P 4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西1.35 m・1.2 m、南北が1.4 mを測り、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は0.4～0.65 mの円形で床下からの深さは0.12～0.2 m、柱痕跡は直径0.15～0.2 mで深さ0.3 mを測る。床は暗褐色粘質土を10 cm前後の厚さで全面に施す。床下では南壁際から東壁中央まで延びる深さ5～9 cmの小溝を検出し、西北壁際では深さ12 cmの土坑を検出した。

110号竪穴住居跡カマド（図版39—3、第73図）

北壁中央東寄りに、住居外へ30 cm突出して付設される。袖は壁に張り付けており、袖長は左袖25 cm・右袖30 cm、高さは最高で18 cm残存する。両袖とも焚き口には高さ20 cmの石を斜めに立てて補強している。また袖の内面は粘土を使用しており火を受けて赤変硬化する。底のレベルは住居床面と同じで、中央に直径15 cmの支脚の抜き孔がある。焚き口には直径30 cmの窪みに赤色土が堆積し、上面は硬化する。硬化面上には焼土・灰の粘質層が堆積する。埋土中位にも同様の堆積層が面を成しており、2時期の使用が考えられる。この面には土師器甕など土器片が多量に散乱する。恣意的に埋められたものか。煙道は奥壁やや西寄りに付き、カマド底から緩やかに北へ上昇して25 cm北で急激に立ち上がる。

出土遺物（図版56、第74図）

土師器

甕（1）長胴の甕で底部を欠く。口縁は短く端部を薄く造る。頸部の屈曲は緩やかで、内面の稜は鈍い。胴部下位に黒斑を有する。復元口径15.2 cm。カマド内からの出土。

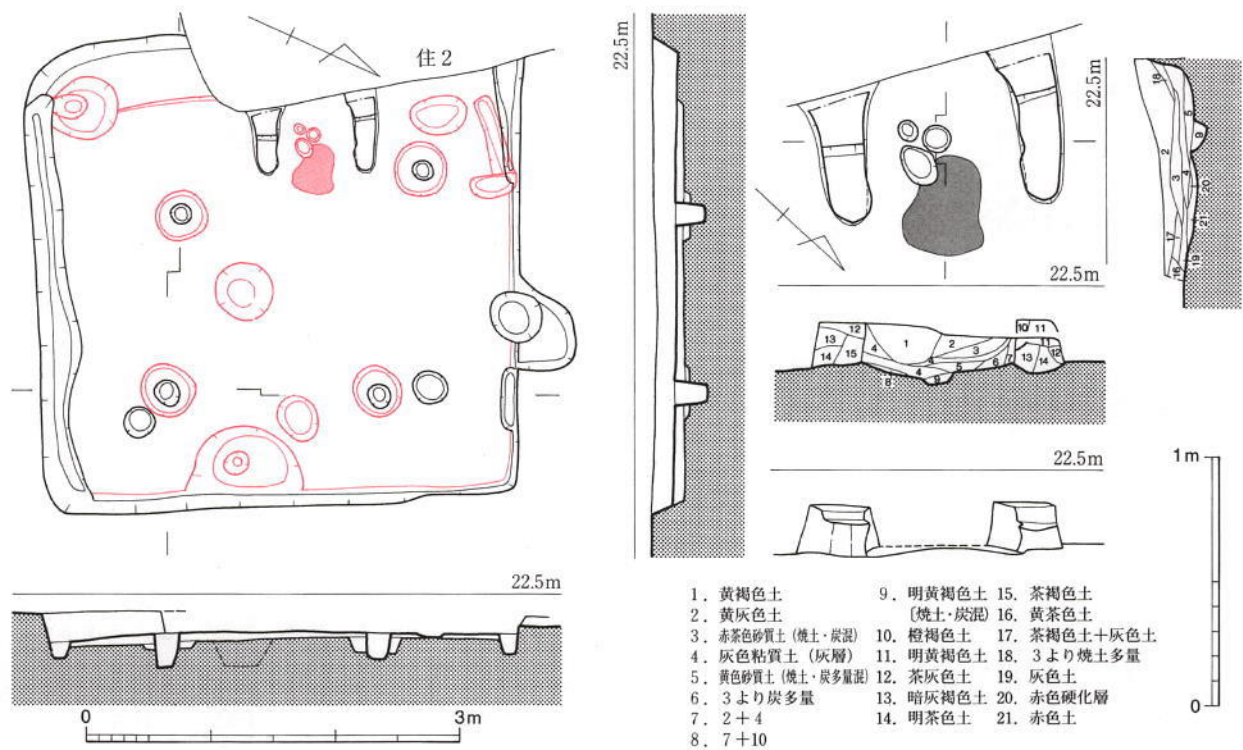
111号竪穴住居跡（図版40—1、第73図）

調査区西端部で検出した。112号竪穴住居跡・68号溝を切る。長軸長4.0～4.5 m、短軸長3.75 mの逆台形プランを有し、コーナー部は角を持つ。カマドは北壁中央部東寄りに付設する。床面までの深さは0.18 m、埋土は上層が黄灰褐色土、以下は茶褐色土中心の自然堆積である。床面でP 1～P 4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.2 m・2.0 m、南北1.7 m・1.5 mを測り、各コーナーを結ぶ対角線上に位置する。柱掘形は直径0.45～0.6 cmの円形プランで床下から深さ0.15～0.2 m、柱痕跡は直径0.15～0.2 mで床面から深さ0.25～0.35 mを測る。貼り床は暗褐色粘質土を10 cm前後の厚さで全面に施す。床下では南壁際から東壁際中央まで延びる小溝と西壁際の小溝、中央に浅い土坑とピットを確認した。

111号竪穴住居跡カマド（図版40—2、第73図）

北壁から15 cm突出するもので、袖は壁に張り付ける。袖長は左袖30 cm・右袖38 cmで、高さは最高で22 cm残存している。両袖とも上位は天井部が僅かに残存する。底は中央直径30 cm程を住居床面より5 cm掘り窪めており、赤色土が堆積し、中央直径15 cmの範囲は硬化する。硬化面上には焼土・灰の堆積層がある。底中央壁寄りに直径15 cmの支脚抜き孔があり、その上面に甑片が散乱する。煙道は底から8 cm上位より壁を掘り込み、溝状に北へ30 cm延びたところで急激に立ち上がる。全体の埋土から自然堆積と考える。

出土遺物（図版56、第74図）



第75図 112号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

土師器

皿(2) 口縁部がやや直に立ち上がるものである。底部はケズリによって平坦に造る。明橙褐色を呈し、復元口径22.0cmを測る。カマド内からの出土。

坏(3) 口縁を大きく外反させ、端部はヨコナデによってやや内湾させる。内面には磨きが残るが、摩滅が激しく明瞭でない。復元口径16.6cm。床直上からの出土。

甕(5) 口縁の屈曲が弱い。口縁部は火を受けて一部赤色化する。復元口径12.8cm。床直上からの出土。

甑(6) 底部片で、端部は方形に仕上げる。外面はヨコと斜のハケ目調整、内面はタテケズリをするが、一部横位の工具痕が付く。カマド内からの出土。

須恵器

坏(7) 口縁部小片のため他の器形になるかもしれない。口縁が肥厚し、内面に鈍い稜を持つ。

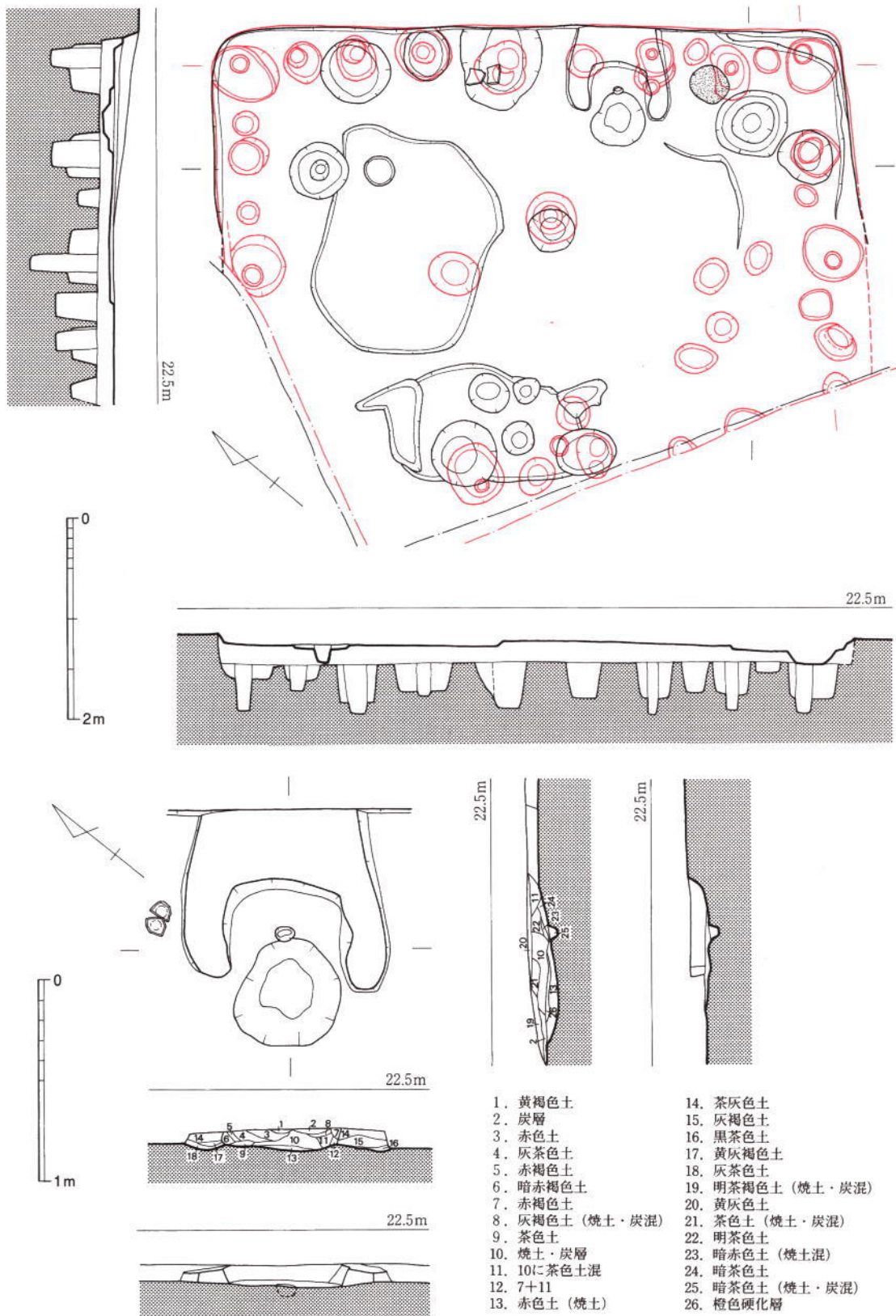
横瓶(8) 口縁部破片。外面にはカキメが施され、他はヨコナデ調整。器壁は薄く、端部は薄く仕上げる。復元口径5.8cm。

弥生土器

壺(4) 鋏先型口縁壺で、混入と思われる。内面は磨きを施し、他はヨコナデする。復元口径16.4cm。床直上からの出土。

112号竖穴住居跡 (図版40—2・3、第75図)

調査区西端部で検出し、111号竖穴住居跡に切られる。プランの全容は知り得ないが、残存部からは一辺3.9mの正方形になるであろう。コーナー部は丸みを持ち、北壁に突出した土坑を持つ。



第76図 113号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマドは西壁中央部に付設する。床面までの深さは最高で0.18 m、埋土は上層が黄灰色土、以下は黄茶色土中心の自然堆積である。南壁際には小溝を有し、西壁際には浅い段を持つ。床面でP 1～P 4の主柱穴を確認し、貼り床除去後に柱掘形を検出した。柱間寸法は東西2.0 m・1.7 m、南北1.2 m・1.8 mで不揃いな配置になる。柱掘形は直径0.4 mの円形プランで床下からの深さは0.05～0.12 m、柱痕跡は直径0.15～0.15 mで床面からの深さは0.25～0.3 mを測る。貼り床は暗褐色粘質土を10 cm前後の厚さで全面に貼ると思われる。床下ではカマドの対面に深さ0.17 mの土坑とこれに伴うピットを検出し、その他各所にピットを検出した。

112号竪穴住居跡カマド（図版41—1、第75図）

111号住居に削平され取り付き部を欠く。袖長は左袖25 cm・右袖30 cmで、高さは最高で17 cm残存している。両袖とも上位は若干内湾する。底は中央直径30 cm程を住居床面より3 cm掘り窪めており、赤色土が堆積する。赤色土の中央直径13 cmの範囲は硬化し、焼土・灰の粘質土が堆積する。底中央壁寄りに直径12 cmの支脚抜き孔があり、周辺にも浅いピットが2つある。煙道の形状は知り得ない。

出土遺物（第74図）

土師器

甕（9～11）口縁部の屈曲はいずれも似通う。外面は粗いタテハケ、内面はタテケズリ、口縁部周辺はヨコナデによって調整する。11は胴部に黒斑を有する。復元口径は18.0・18.6・18.8 cm。

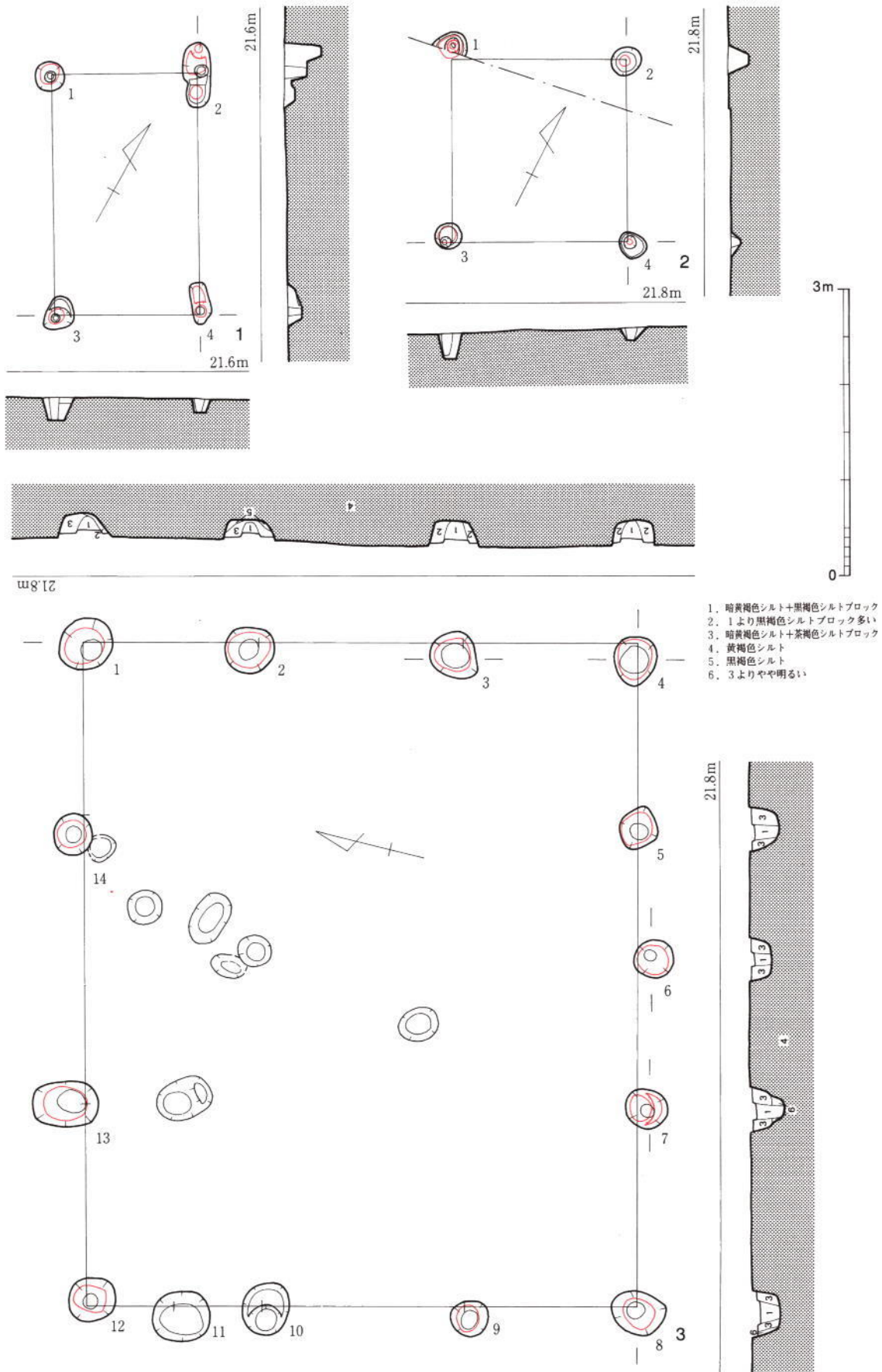
取手（12）ナデによる面取りで整形し、接合部はタテハケで調整する。内面はタテケズリ。

113号竪穴住居跡（図版41—2・3、第76図）

調査区西南部の壁際で検出した。68号溝に切られる。東南部は削平が激しくプランは不明確であるが、柱穴等から考えて長軸長6.2 m、短軸長5.0 mの長方形プランとなる。コーナーは丸みを帯び、カマドは北端部中央東寄りに付設する。床までの深さは残りの良いところで0.1 m、埋土は黄褐色土中心の自然堆積である。全面に茶褐色粘質土を0.1 mの厚さで貼り、硬化面となっていた。床面でP 1・P 2を検出し、貼り床をはがしたところで3つの土坑を検出した。この段階で壁際に複数の土坑やピットも検出していたが、壁土坑と考えていた。しかしこの後、下層遺構を検出するために全面的に掘削したところ、3 cm程下からプラン長方形に並ぶピット群が現れた。これらは位置的には住居壁際に並んでおり、この段階で当住居の柱穴群と判断したため、若干柱穴のレベルが本来のものとは違っている。また、写真撮影も別個に行ったため、本来の形を捉えていない。壁際柱穴はほぼ大小交互に並んでおり、大柱穴は柱掘形直径0.5 m前後、深さ0.15～0.35 mで柱痕跡は直径0.15～0.2 m、深さ0.45 mのものである。それぞれの間隔は0.7～1.0 m。小柱穴は直径0.15～0.3 m、深さ2.8～4.0 mで掘形は検出しなかった。それぞれの間隔は大柱穴とほぼ同じである。これらの柱穴はカマド除去後に下から検出したものもあり、一概に同時期とはいえない。大小の差が建て替えによるものの可能性が考えられる。柱を掘り込んだ溝状遺構については検出できなかった。

113号竪穴住居跡カマド（図版42—1、第76図）

北壁に直接張りつけるもので、壁より住居内に奥壁を持つ。袖長は左右とも1.0 mで、高さは7 cm残存していた。茶灰色土中心の粘質土で構築され、底は住居床面より5 cmほど掘り窪めており、跡色土が堆積していた。焚き口付近に直径30 cmの硬化面があり、上には灰と焼土の粘質土が堆積している。中央には直径10 cmの支脚抜き取り痕がある。煙道は検出できなかった。左袖横からは土師器甕の胴部片が出土している。

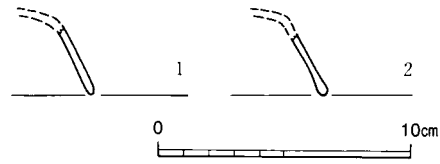


第77図 1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

3 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版42—2、第77図）

調査区の東側に位置する1間×1間の小型の掘立柱建物跡で、黒褐色シルト層上面で検出した。柱穴はP1が平面円形である以外は不整楕円形を呈す。また全ての柱穴において径10cm～12cmの柱痕を確認して



第78図 3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

いる。深さは15cm～25cmを測りばらつきがある。柱穴間の距離はP1・P3間が250cm、P1・P2間が150cmを測り、南北方向に長い配置を採っている。柱穴覆土は白灰色砂質土で全くしまりがなく、総面積3.75㎡。出土遺物は全くないが、埋土の状況から中世以降のものと思われる。

2号掘立柱建物跡（図版42—3、第77図）

調査区の東側に位置する1間×1間の小型の掘立柱建物跡で、黒褐色シルト層上面で検出した。柱穴は不整円形を呈し、径25cm～30cm、深さ10cm～20cmを測る。P1・P2・P4において、径10cm程度の柱痕を確認している。柱穴間の距離はP1・P3間が185cm、P1・P2間が180cmを測り、ほぼ正方形になる。柱穴覆土は白灰色砂質土で全くしまりがなく、1号掘立柱建物跡と同質である。総面積3.33㎡。出土遺物は全くないが、埋土の状況から中世以降のものと思われる。

3号掘立柱建物跡（図版43—1、第77図）

調査区の中央からやや北寄りの、密集する竪穴住居跡群の東端に位置し、黄褐色微砂層上面で検出した竪穴住居跡である。主軸方位は北から14°西に振れ、東西にやや長い。梁間は3間、桁間は北側が3間、南側は4間で南北が異なる配置を採る。柱穴間の距離はまちまちであり等間隔ではない。柱穴は径40cm～55cm、深さ20cm～30cmを測る。また幾つかの柱穴で径10cm～15cmの柱痕を確認している。総面積は39.33㎡を測る。出土遺物からの時期比定は困難だが、西側に位置する竪穴住居跡群と同時期のものと見て良いだろう。

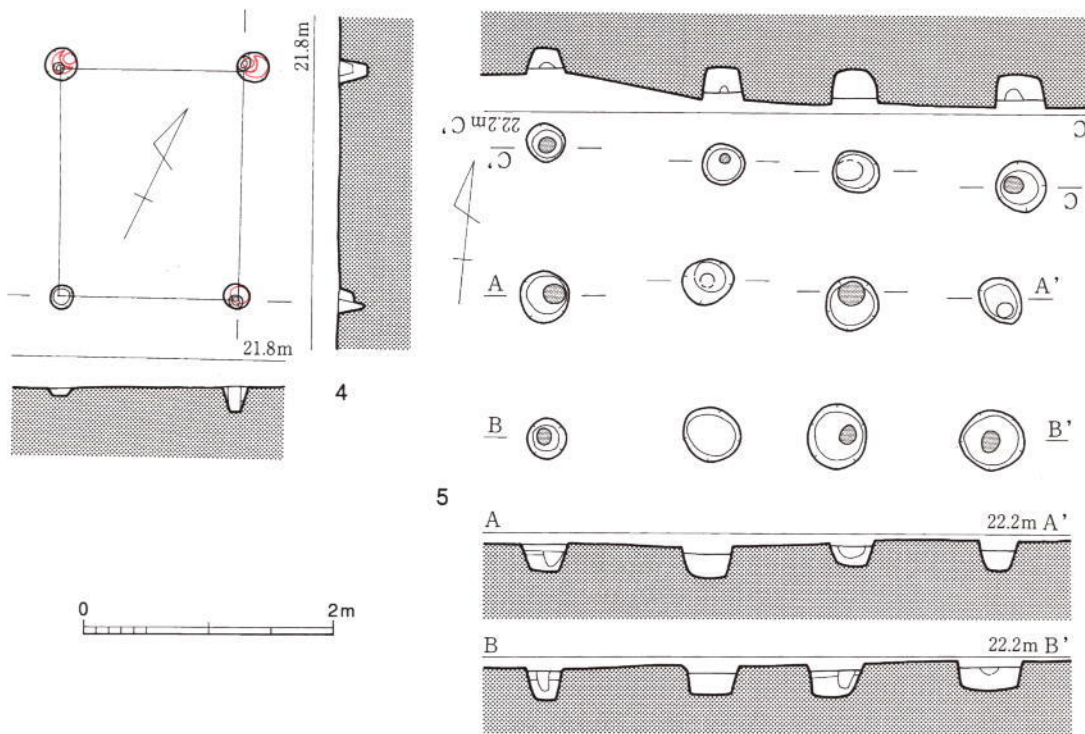
出土土器（第78図）

土師器

坏蓋（1・2）1はP8掘形から出土した坏蓋の口縁部片である。内外面横ナデ調整を行い、端部は丸く仕上げられる。胎土に砂粒をほとんど含まず非常に精良で、色調は肌茶色を呈し、焼成は良好である。2はP4掘形から出土した坏蓋の口縁部片である。1と異なって端部が丸く肥厚する。内外面横ナデ調整を行う。

4号掘立柱建物跡（図版43—2、第79図）

調査区の東側に位置する1間×1間の小型の掘立柱建物跡で、黒褐色シルト層上面で検出した。柱穴は円形を呈し、径15cm～25cm、深さ10cm～20cmを測る。P1・P2・P4で径10cm程度の柱痕を確認している。柱穴間の距離はP1・P2間で150cm、P1・P3間で180cmを測り、南北に若



第79図 4・5号掘立柱建物実測図 (1/60)

干長い。柱穴覆土は白灰色砂質土で全くしまりがなく、1号・2号掘立柱建物跡と同質である。また主軸方位も1号・2号掘立柱建物跡と同一方向を採用しており、この3棟はほぼ同時期のものであろう。総面積は2.7㎡を測る。出土遺物は全くない。

5号掘立柱建物 (図版43-3、第79図)

調査区の北東部で検出した。軸はN-85°-Wを向いており、東西の軸を意識したものと考えられる。建物の規模は2間×3間。柱穴は径40cm程度で円形を呈す。遺物は出土していない。

4 土 坑

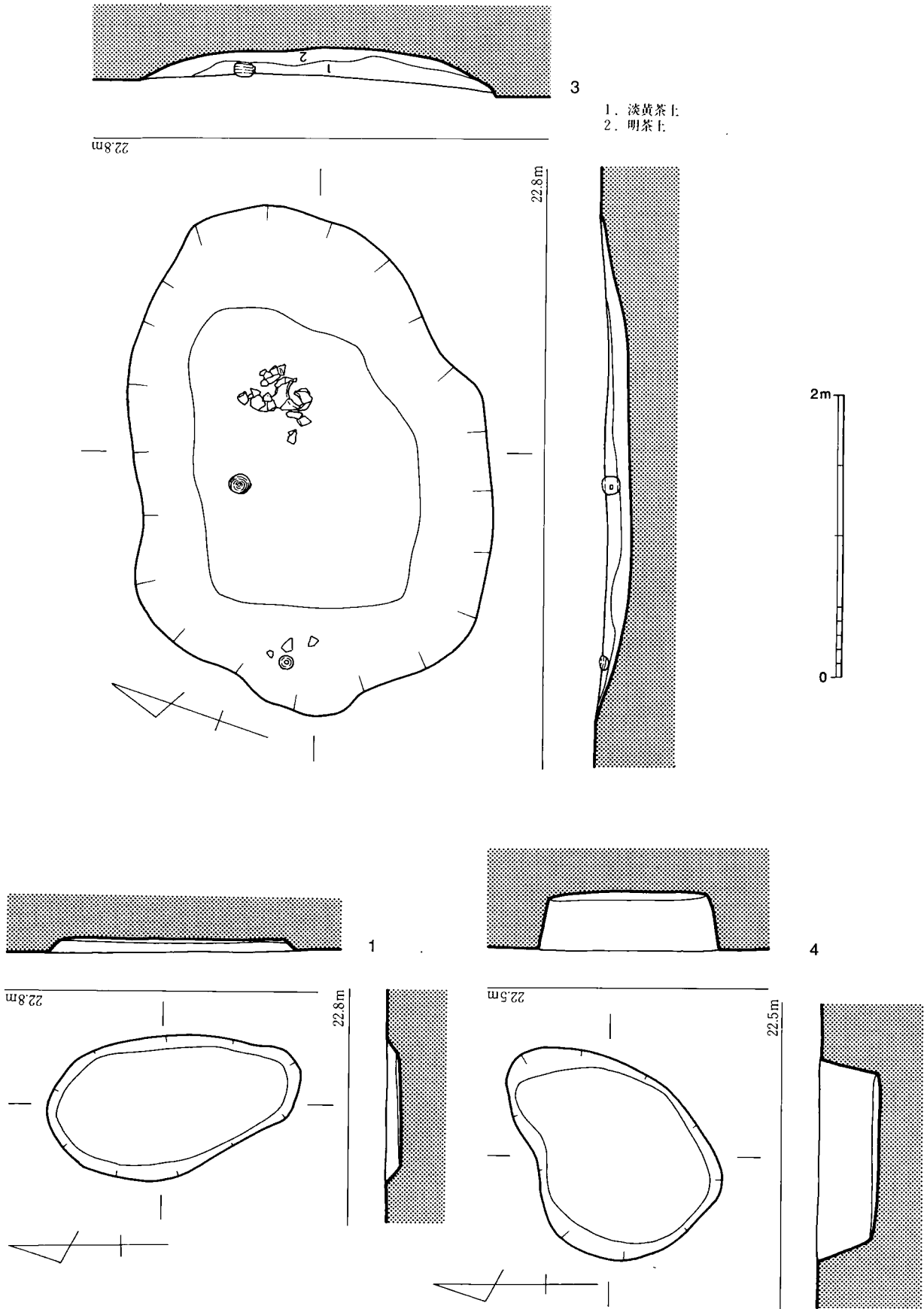
1号土坑 (第80図)

調査区西北部で検出し、8号竪穴住居跡を切る。南北1.8m、東西1.0m、深さ0.08mの縦長楕円形プランを有する。壁は緩やかに立ち上がり、底は平坦になる。内土は茶褐色土の自然堆積。2・4号溝同様調査の早い段階で検出した。

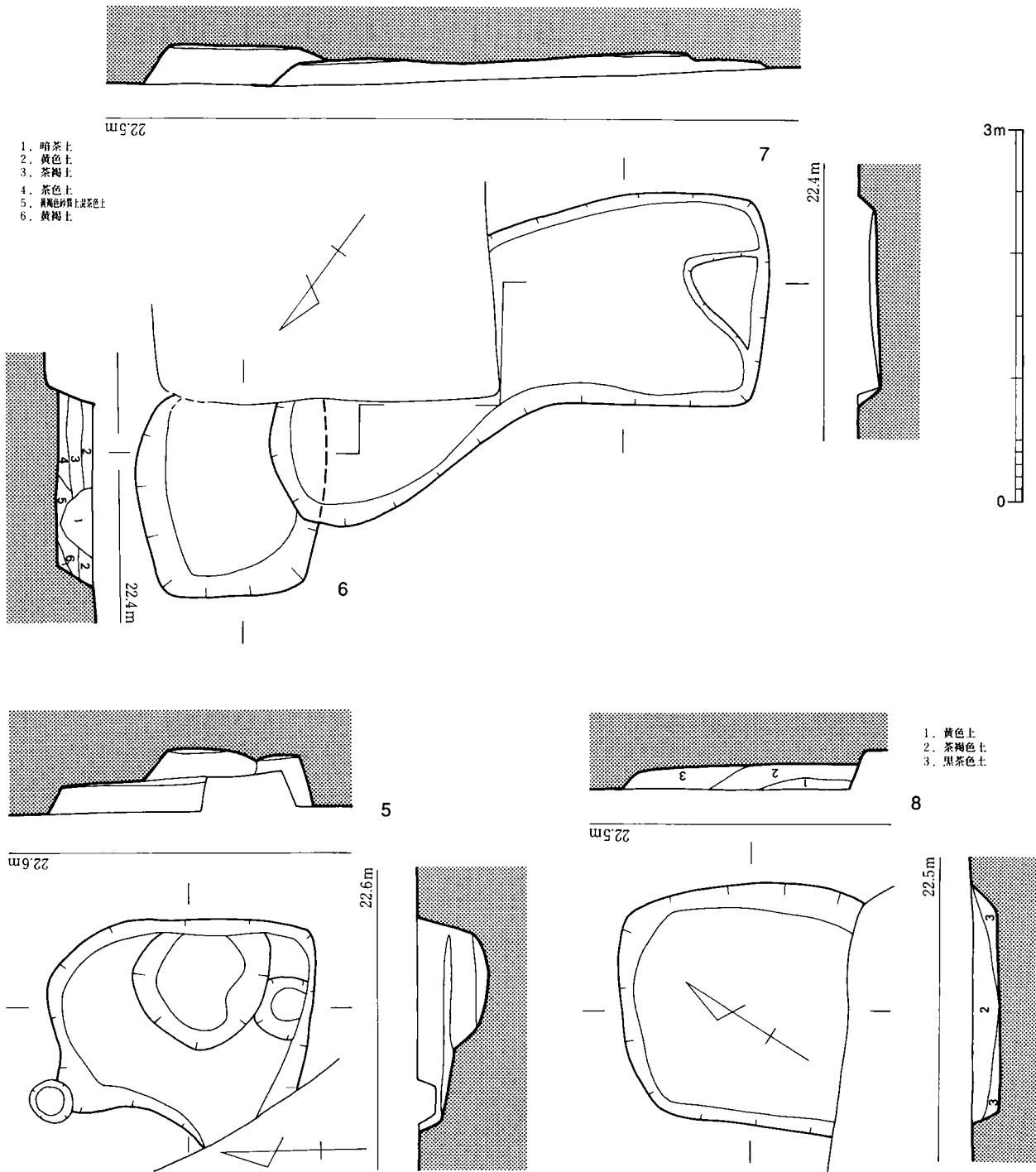
出土遺物 (図版57、第82図)

土師器

坏(1) 底部は平底で口縁を大きく開く。外底部は回転ヘラ削り調整する。器形・調整とも須恵器のものであるが、模倣したもの。口径11.1cm、底径8.4cm、器高3.3cmを測る。



第80图 1·3·4号土坑实测图 (1/40)



第81图 5~8号土坑实测图 (1/50)

3号土坑 (図版44—1、第80図)

調査区西南部の25号竪穴住居跡上面で検出した。長軸長3.6 m、短軸長2.5、の不整楕円形プランを有する。深さは0.1 mと浅く、壁は緩やかに立ち上がり底はレンズ状である。上層が淡黄茶色土、下層が明茶色土の自然堆積である。上層中に埴瓶と甕身部が出土し、下層からは甕がつぶれた状態で出土した。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (図版57、第82図)

弥生土器

甕(2) 胴部下半から底部にかけての小片。底部は上げ底状に那智、接地面より3 mm上がる。胴部は貴肉が薄く、底部は肥厚させる。内面は摩滅のため調整不明。復元底径10.0 cm。

壺(3) 底部小片。中央に穿孔する。摩滅が激しいが、全面ナデ調整と思われる。

須恵器

蓋(4) 口縁部小片。口縁端部を薄く仕上げ、外面段状にする。天井部は肥厚し、やや平坦になるものか。

坏(5) 口縁が大きく内傾する。体部は深く湾曲するが器高は低い。外底部は回転ヘラ削り調整。復元口径12.0 cmを測る。

甕(6) 頸部以上を欠損する。中位に直径1.4 cmの穿孔をし、刺突文を巡らせる。片部はカキメを施す。刺突文帯以下は回転ヘラ削りを施す。最大径9.0 cm。

埴瓶(7) 口縁部を一部欠くが、ほぼ完形品。口縁部の器肉は薄く、端部を内側に折り曲げる。外面には「∧」のヘラ書きがある。胴部はほとんど平坦にならないもので、カキメを施した後ナデ調整する。裏面はヘラ削り調整で中央部のみナデ調整。口径3.2~3.5 cm、器高19.9 cmを測る。

4号土坑 (第80図)

調査区西南部、29号竪穴住居跡の北で検出した。長軸長1.6 m、短軸長1.3 m、深さ0.4 mの不整形プランを有する。壁は直立し、底は平坦になる。埋土は黄茶色土中心の自然堆積である。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものはなかった。

5号土坑 (第81図)

調査区西南部、29号竪穴住居跡の東で検出し、29号住居に切られる。南北長2.2 m、東西1.8 m以上の逆卵形プランを有する。底面は中央がピット状に深くなり、0.5 m程になる。埋土は自然堆積で、底の2個の窪みも同時期と考える。

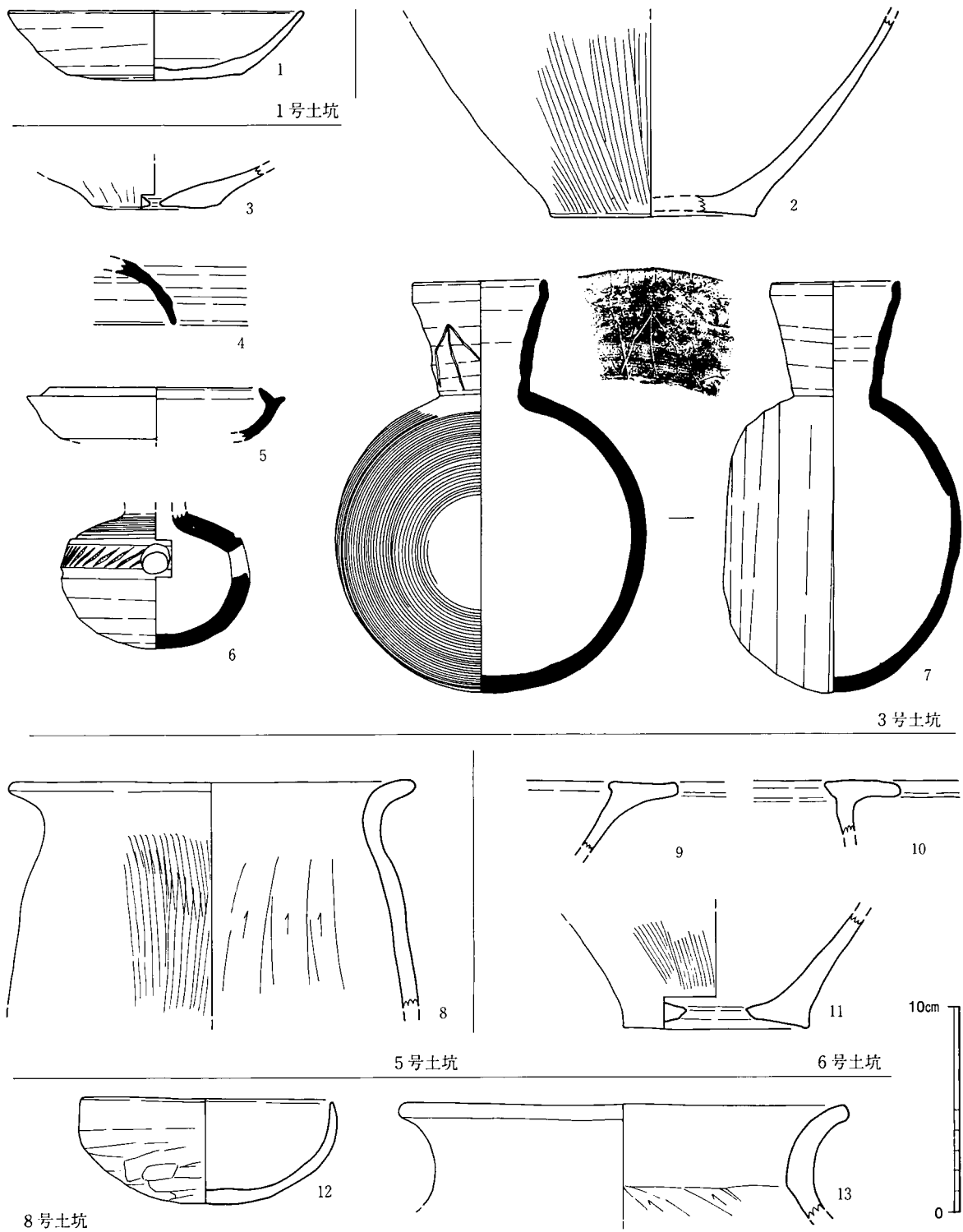
出土遺物 (図版57、第82図)

土師器

甕(8) 口縁部が短く、大きく屈曲するものである。胴はあまり張らず、頸部の締まりも緩やかである。復元口径19.6 cmを測る。

6号土坑 (第81図)

調査区西南部、30号竪穴住居跡の西で検出し、30号住居と7号土坑に切られる。長軸長1.6以上、短軸長1.5 m以上、深さ0.3 mの隅丸長方形のプランを有する。壁は斜めに立ち上がり、底は平坦になる。中央をピットに切られるが以下は自然堆積と思われる。遺物は土師器も出土しているが、小



第82图 1·3·5·6·8号土坑出土土器实测图 (1/3)

片のため図示できない。

出土遺物 (第82図)

弥生土器

高坏 (9) 鋏先口縁の小片で、内面に丹塗りの痕跡が残る。摩滅が激しく、端部は元来の形状をとどめずない。調整も不明である。

甕 (10・11) 10は鋏先口縁の甕小片である。外面端部はやや下がり気味である。端部上面はハケ調整、他はナデ調整する。11は底部のみの小片で、中央が円形に破損するが、穿孔であるかは磨滅のため確認できない。復原底径9.0cmを測る。

7号土坑 (第81図)

調査区南部、30号竪穴住居跡の西で検出し、30号住居に切られる7号土坑を切る。4.3m、短軸長1.7、のなすび形プランを有する。当初2つの土坑と考えたが、埋土が同じで底が繋がったため同一土坑とした。壁は斜めに立ち上がり、底はほぼ水平となる。西北隅には0.7×0.5mの三角形テラスを持つ。埋土は茶灰色中心の自然堆積である。出土遺物は小片で図示できない。

8号土坑 (第81図)

調査区西南部、33号竪穴住居跡の北で検出し、33号住居に切られる。検出プランは東西1.8m、南北1.8mの隅丸方形で、深さは0.2mとなる。壁は緩やかに立ち上がり底は平坦になる。埋土上層は33号住居と同様で、以下も自然堆積である。

出土遺物 (第82図)

土師器

碗 (12) 丸底のもので、口縁部は端部を薄く引き上げ内湾する。外底は手持ちヘラ削りする復元口径12.0cm。を測る。

甕 (13) 端部が強く外反するもので、断面は方形に造る。頸部内面の稜は強く、胴部は斜のヘラ削りを施す。外面は磨滅のため調整不明。復元口径21.6cmを測る。

21号土坑 (図版44—2・3、第83図)

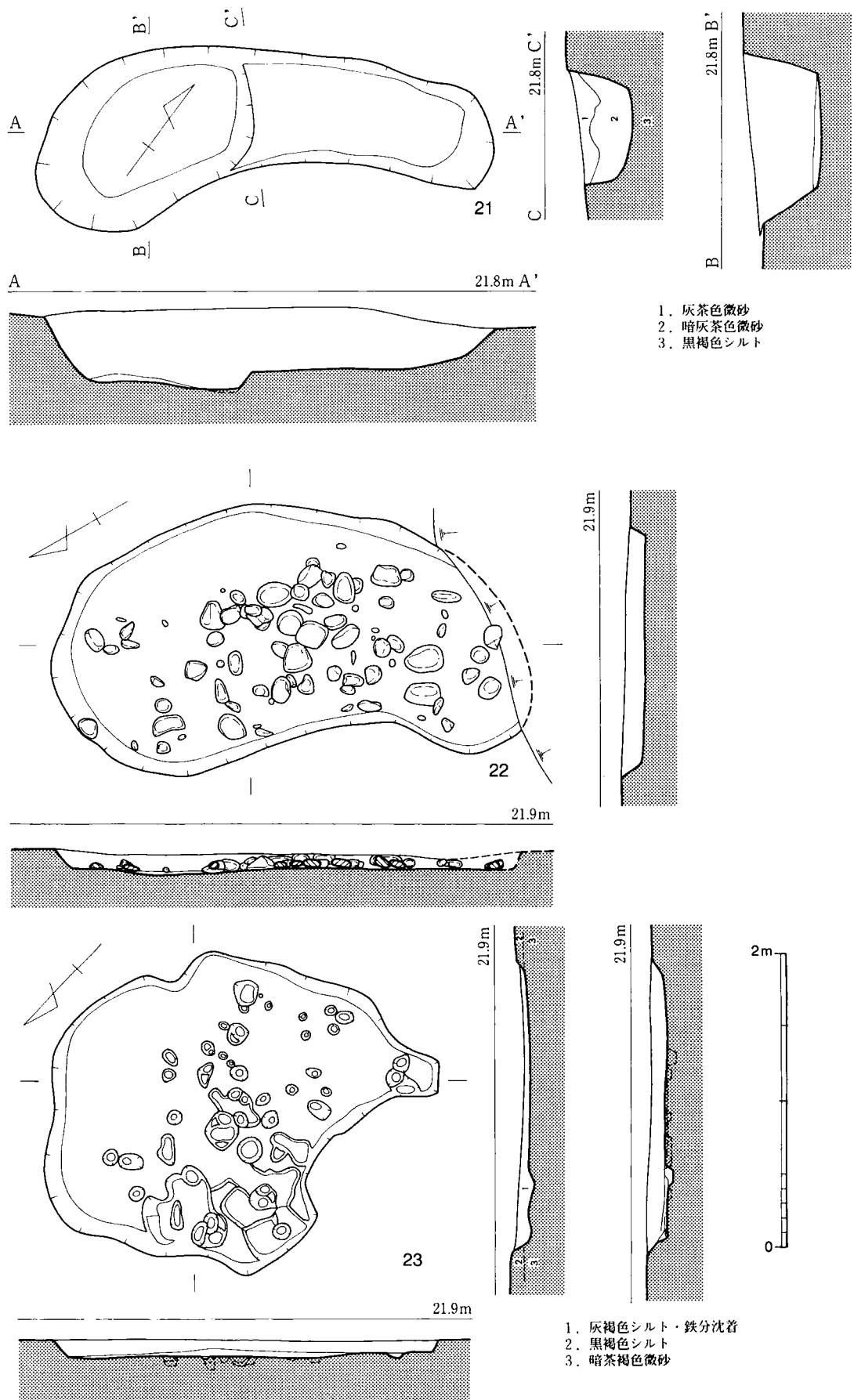
調査区の東側に位置する不整楕円形の土坑で、黒褐色シルト層の上面で検出した。長さは313cm、幅は西側で107cm、東側で73cmを測り、西側が幅広になる。深さは西側が50cm、東側が45cmを測り、やはり西側の方が深い。埋土は上層が灰茶色微砂、下層が暗灰茶色微砂で自然堆積の状況を呈す。遺物は出土していないが、埋土の状況から少なくとも古墳時代後期以降のものである。

22号土坑 (図版45—1、第83図)

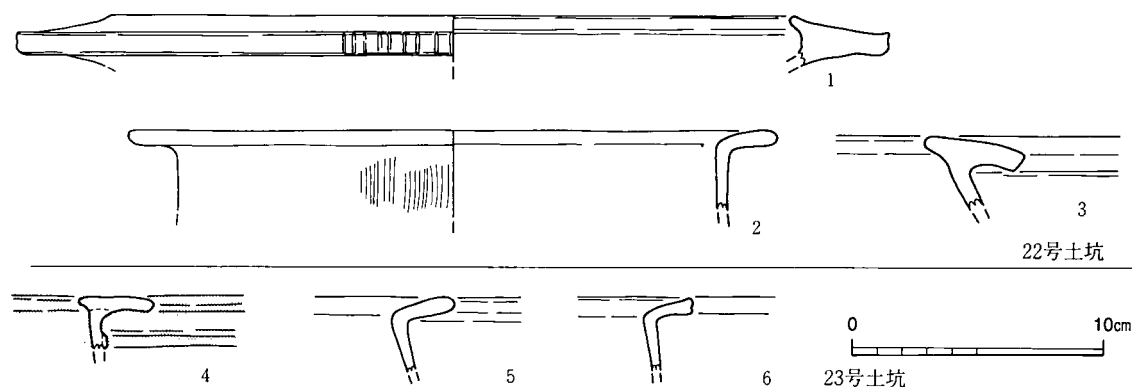
調査区の中央から南寄りに位置する不整楕円形の土坑である。長さ327cm、幅は北側が広く160cm、南側が120cmを測る。深さはどの場所もほぼ15cmを測る。土坑の底面からは大小多くの河原石が検出されたが、規則的に配置されたものではなく散在する。遺物は弥生土器が少量出土したが全て混入したものであり、当土坑の時期は少なくとも古墳時代後期以降である。

出土土器 (第84図)

弥生土器



第83図 21~23号土坑実測図 (1/40)



第84図 22・23号土坑出土土器実測図 (1/3)

壺(1) 1は発達した鋤先口縁となる大型の壺である。口縁部は短く内外に伸び、上面は外傾する。外端部は面取り整形し、浅く不明瞭な刻目を施す。口径46.2cm。

甕(2・3) 2は口縁部を水平に折り曲げた中型の甕で、端部は丸く仕上げられる。胴部はあまり締まらないようである。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ口縁部は横ナデ調整を行う。口径34.4cm、3は大きく発達した鋤先口縁の甕口縁部片で、短く内外に伸びる。上面は外傾する。全体的に風化が著しく調整不明である。

23号土坑 (図版45—2、第83図)

調査区の中央から南寄りに位置する不整形の土坑で、黒褐色シルト層上面で検出した。長軸270cm、短軸200cm、深さは10cmを測る。埋土は灰褐色シルトの単一層だが底面付近には鉄分が沈着し、茶色に変色している。従って滞水状態にあったものと考えられる。土坑底面では数多くの不整形の小ピットを検出した。遺物は若干出土したが全て混入したものであり、埋土の状況からこの土坑の時期は古墳時代後期以降のものである。

出土土器 (第84図)

弥生土器

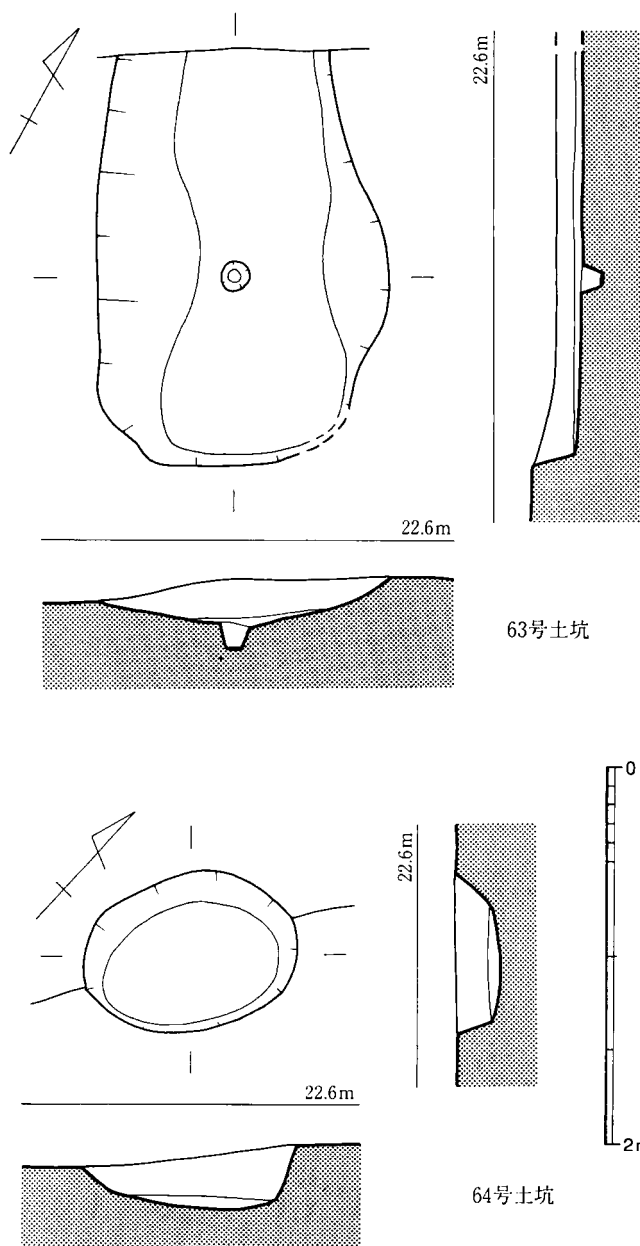
甕(4~6) 4は鋤先口縁の甕で内外面丹塗りをを行う。口縁部が外側に水平に長く伸び、また内側にも短く伸びている。口縁部下には低い断面M字形突帯を巡らせる。風化が著しく調整は不明である。5は口縁部を強く外側に折り曲げる甕で、口縁部は内傾し、端部は丸く仕上げる。風化が著しく調整は不明である。6もまた口縁部を強く外側に折り曲げる甕で、口縁部上面は内傾する。端部外面を面取り整形し、さらに上端をつまみ上げる。

63号土坑 (第85図)

調査区西端部、112号竪穴住居跡の南部で検出した。112号住居に切られる。残存部長軸長2.2m、短軸長1.55m、深さ2.9mを測る、隅丸長方形のプランを有する。中央に直径0.12m、深さ0.1mのピットがあるが、土坑に伴うものかは不明である。短軸方向の壁は緩やかに立ち上がるが、長軸方向の壁は直立する。出土遺物は土師器が出土したが、小片で少量のため図示できない。

64号土坑 (第85図)

調査区西端部、67号溝の西北で検出し、溝を切る。長軸長1.2m、短軸長0.7mの楕円形プランを



第85図 63・64号土坑実測図 (1/40)

有する。壁は緩やかに立ち上がり、底はほぼ平坦である。出土遺物は土師器が出土したが、小片で少量のため図示できない。

6は器壁が薄く口縁を強く外反させるもので、頸部は強く閉まる。外面は白若干剥離しており、内面はヨコケズりする。7は口縁が短く反りが緩やかで、外面にナデによる段が付く。内面はケズリ調整する。8は口縁が短く外反は弱い、端部を外面に巻く形になる。内面はタテケズリ、外面はタテハケ、口縁部周辺はヨコナデする。9・11は口縁が長く、外反は緩やかである。9は内面のケズリによりくびれ部の稜が付く。9・10・11とも口縁部はナデ調整。11は頸部から口縁部が肥厚し、強く外反させる。端部付近には平坦面がある。外面は細かいタテハケ調整、内面は斜のケズリ、口縁部はヨコナデを施す。復元口径は14.4・

有する。壁は緩やかに立ち上がり、底はほぼ平坦である。出土遺物は土師器が出土したが、小片で少量のため図示できない。

5 溝

1号溝 (図版45—3)

調査区中央で検出した北東—南西の溝。切り合う住居全てより新しい。幅2.0m前後、深さ0.5m、長さ約43mを検出した。最上層は現代の水路として使用されており、断面方形の灰色土層が入り、上面に河原石が点々と置かれていた。下層は土師器や須恵器が出土し、埋土は流水による自然堆積である。下層溝は西南部で6号溝に分岐する。

出土遺物 (図版57、第86図)

弥生土器

器台(1) 丹塗りの器台口縁部小片。全面ヨコナデ調整し、外面には部分的に丹が遺る。復元口径7.8cmを測る。

土師器

高坏(2) 脚部小片で、端部断面は方形になる。全てナデ調整で、内面に僅かにハケ目が見える。

坏(3・4) 高台付き坏で、高台は断面三角になる摩滅が激しく調整は不明。

甕(5~12) 3~5は小片で、外面にはハケ目、内面にはケズリは認められる。6は器壁が薄く口縁を強く外反させるもので、頸部は強く閉まる。外面は白若干剥離しており、内面はヨコケズりする。7は口縁が短く反りが緩やかで、外面にナデによる段が付く。内面はケズリ調整する。8は口縁が短く外反は弱い、端部を外面に巻く形になる。内面はタテケズリ、外面はタテハケ、口縁部周辺はヨコナデする。9・11は口縁が長く、外反は緩やかである。9は内面のケズリによりくびれ部の稜が付く。9・10・11とも口縁部はナデ調整。11は頸部から口縁部が肥厚し、強く外反させる。端部付近には平坦面がある。外面は細かいタテハケ調整、内面は斜のケズリ、口縁部はヨコナデを施す。復元口径は14.4・

14.6・16.4・17.0・18.0・24.6cmを測る。

取手(13) 細身の甌取手。ナデで整形した後、後部によるナデで胴部と接合する。

須恵器

蓋(14～17) 16～18は返りのない坏蓋で、16・18は口縁部を屈曲させる。3点とも口縁部は肥厚し、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ、他は回転ナデで調整する。復元口径11.0・11.2・10.0cm、器高4.0・3.9cmを測る。19・20は返りを有する蓋。19は肉厚で、端部をやや外反させる。外天井部を回転ヘラケズリ、他を回転ナデで調整する。復元口径10.8cm。20は端部を折り曲げるもので、外天井部はヘラ切り未調整、他は回転ナデ調整する。

坏(18・19) 外底部をヘラケズリ、他をナデ調整する。

鉢(20) 小型のもので、口縁部を内傾させるため体部との境に緩い稜をもつ。外底部付近は回転ヘラケズリが僅かに遺っている。、体部は回転ナデ、内面は工具による回転ナデ調整を施す。復元口径8.0cmを測る。

坏(21) 口縁部小片で、器肉の薄いものである。若干内湾するが、下半を欠くため全体の様子は不明。中位に二条の沈線を巡らせる。

壺(22・23) 22は短頸壺の上半部で、口縁は緩やかに開きながらやや内湾する。器肉は薄く、頸部が肥厚する。胴部上位に浅い二条の沈線を施す。全面回転ナデ調整。復元口径は8.4cmを測る。23の口縁部片は端部を断面四角に造り、一条の突帯を巡らせて段状にする。突帯の下には半月形のスタンプを施す。小片のため口径復原は不可。

はそう(24・25) いずれも口縁部のみの小片。24は器肉が薄く緩い段と沈線を持つ。全面ナデ調整を施す。25は大きく外反するもので、端部を欠く。外面には波状文を施し、端部下位に沈線を巡らせる。全面ナデ調整。

2号溝

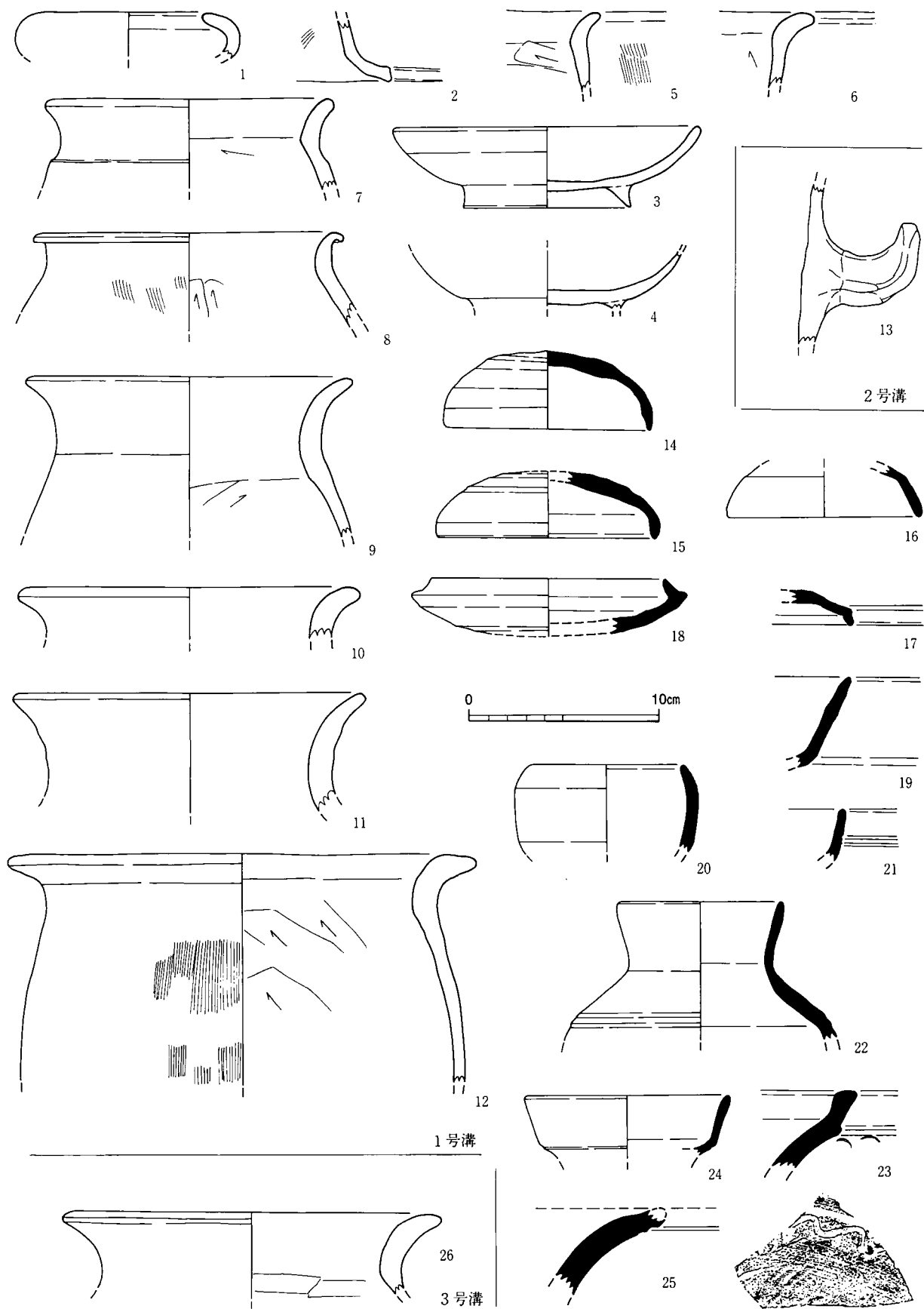
調査区中央東壁際で検出した。2号竪穴住居跡を切る。長さ5.0m、幅0.6～0.8m、深さ0.03～0.1mの浅く短いもので、西が深くなる。東は徐々に浅くなり削平されたと思われるが、西は壁が急激に立ち上がり、元来ここで途切れてと思われる。西接するピットが同じ深さであることから、関連する可能性もある。調査の最も早い段階で検出した。出土遺物は少なく小片のみで、図示できるものはない。

3号溝

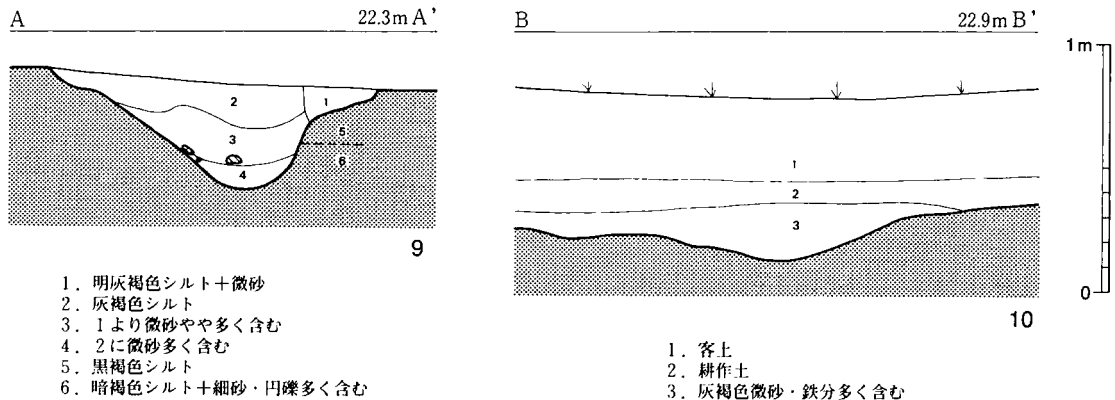
調査区西北部、9・10号竪穴住居跡の上で検出した。残存長4.0m、幅0.5m、深さ0.15mの浅い溝である。両端は削平されており、全長は知り得ない。壁は緩やかに立ち上がり、底はU字状である。出土遺物は小片のため図示できるものはない。

4号溝

調査区中央部、14号竪穴住居跡の上で検出した。東一西の溝で、長さ9.2m、幅0.45～0.7m、深さ0.1mの浅い溝で、東西は削平されている。底は平坦になる。2号溝と同様早い段階で検出した。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものはない。



第86图 1~3号沟出土土器实测图 (1/3)



第87図 9・10号溝土層断面実測図 (1/30)

5号溝

調査区中央部、3号土坑に近接して検出した北西-南東溝。試掘時のトレンチで寸断されるが、検出長9.5m、幅0.9~1.2m、深さ0.08mの浅いもので、両端が削平される。底は平坦になり、壁は直立すると思われる。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものはない。

6号溝

調査区西部で検出した、検出した、1号溝から枝分かれするものである。幅0.8~1.0m、深さ0.1mの浅いもので5.0mを検出した。西南に向かって浅くなり、17号竪穴住居跡を切って消失する。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものはない。

7号溝

調査区西部で検出した土坑状の溝である。9号竪穴住居跡の西にあり、幅0.6~0.8m、深さ0.1mの浅いもので、両端を削平され長さ3.8mを検出した。出土遺物は小片のみである。

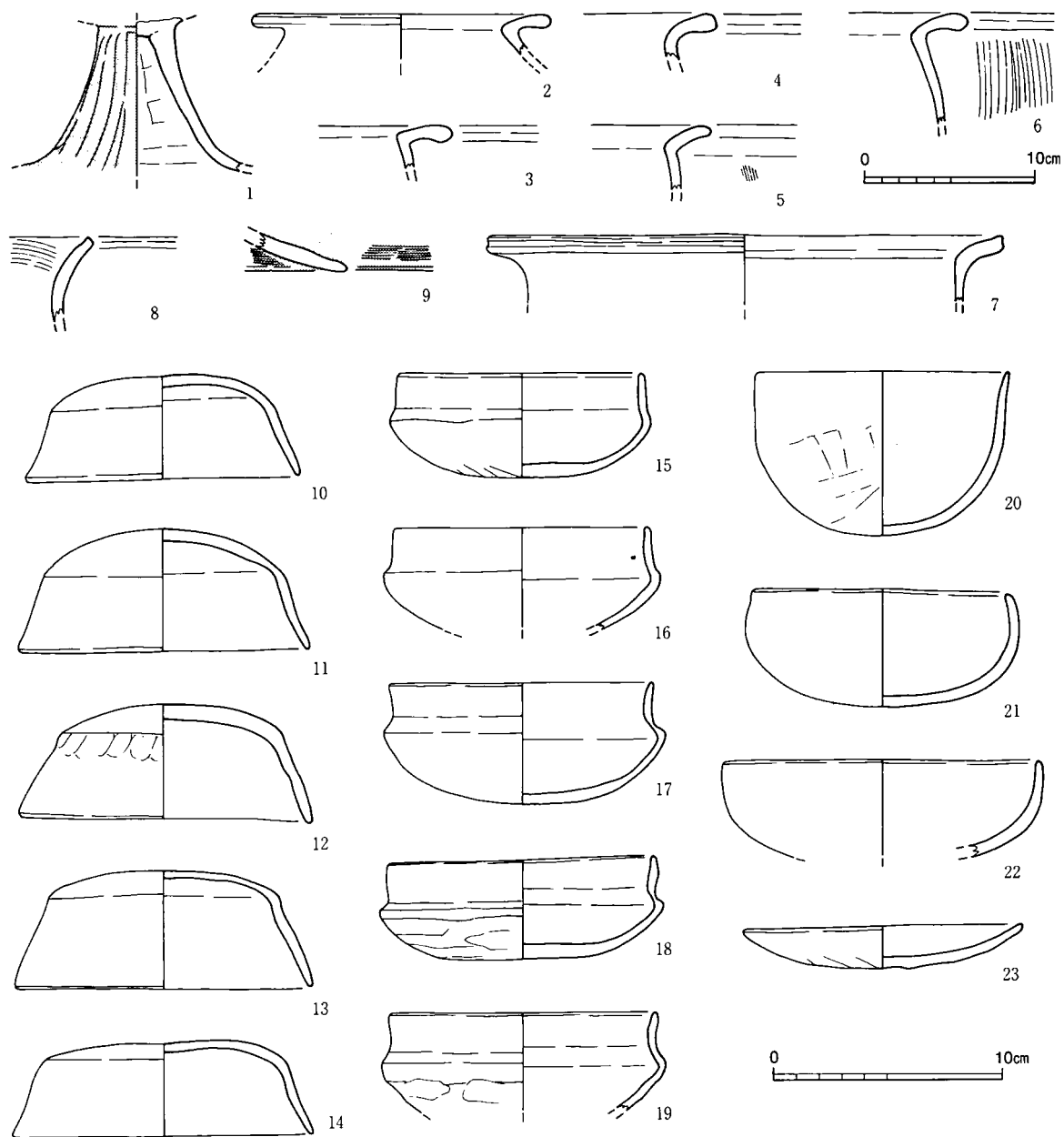
8号溝

調査区西南部で検出した、21号竪穴住居跡に切られる溝である。幅0.5m、深さ0.15mで両端を削平されており長さ1.9mを検出した。出土遺物は小片のみである。

9号溝 (図版46-1~3、第87図)

調査区の中央付近に位置し、黒褐色シルト層上面で検出した溝である。若干蛇行しながらも南西-北東方向に直線的に伸びており、長さ47.5mに亘って検出している。断面は不整逆三角形を呈し、埋土は若干分層できるものの、第1層を除いて灰褐色シルトの単一層で自然堆積の状況を呈す。幅130cm、深さ40cmを測る。第1層は他とやや堆積状況が異なっており掘り直しの可能性が指摘できる。遺物はほとんどが上層からの出土である。特に土師器10~13、16~19、21、23~30、38~40、43、須恵器44、45、47、48、50は南端上層からまとまって出土している。

この溝は竪穴住居跡群が展開する微高地の周縁に掘削されており、また多くの竪穴住居跡が主軸を同一方向にとる。従って集落域を区画する区画溝として機能していたようである。さらに溝の周



第88図 9号溝出土土器実測図① (1/3)

辺、特に東側では大小数多くの不整形ピットを検出しており、溝の東側、すなわち集落区画溝の外側を生け垣で取り囲んでいたものと考えられる。

出土土器 (図版58・59, 第88～91図)

弥生土器

高坏 (1) 下層から出土した高坏の脚部片である。外面は粗い縦ヘラミガキ、内面は横ヘラケズリ調整を行う。外面には丹塗りが行われる。

壺 (2) 短頸の広口壺の口縁部片である。口縁部は外側に強く折り曲げられ、内面には稜が形成される。端部は丸く仕上げられる。口径17.4cm。

甕 (3～7) 3～7は甕の口縁部片である。3～6は口縁部を外側に強く折り曲げる。口縁部が



第89图 9号沟出土土器实测图② (1/3)

比較的直線に近い3・5と、丸みを帯びて湾曲する4・6とがある。さらに3・4・6は端部が丸く肥厚する。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。7は端部外面を面取り整形し、上端部を尖り気味に仕上げるもので、胴部は張りが無い。口径30.0cm、

器台(8) 器台の口縁部片で、端部は上端を尖り気味に仕上げる。内面は横ハケ、外面は横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含むが比較的良質で、色調は内面橙褐色、外面灰肌色を呈す。

蓋(9) 甕蓋の口縁部片で、端部は尖る。内外面横ヘラミガキ調整を行う。胎土に砂粒を若干含むが比較的精良な粘土を使用し、内外面丹塗りを行っている。

土師器

坏蓋(10~14) 10~14は坏蓋として報告するが、坏身としても使用された可能性もある。いずれも体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に開く。端部は丸くおさまられる。須恵器の器形とはかなりかけ離れて独自の形態として発展しており、もはや模倣とは呼べなくなっている。内外面ナデ調整を行う。色調は橙肌色~黄肌色を呈し、焼成は良好である。口径12.0cm~13.1cm、器高4.5cm~5.3cmを測る。

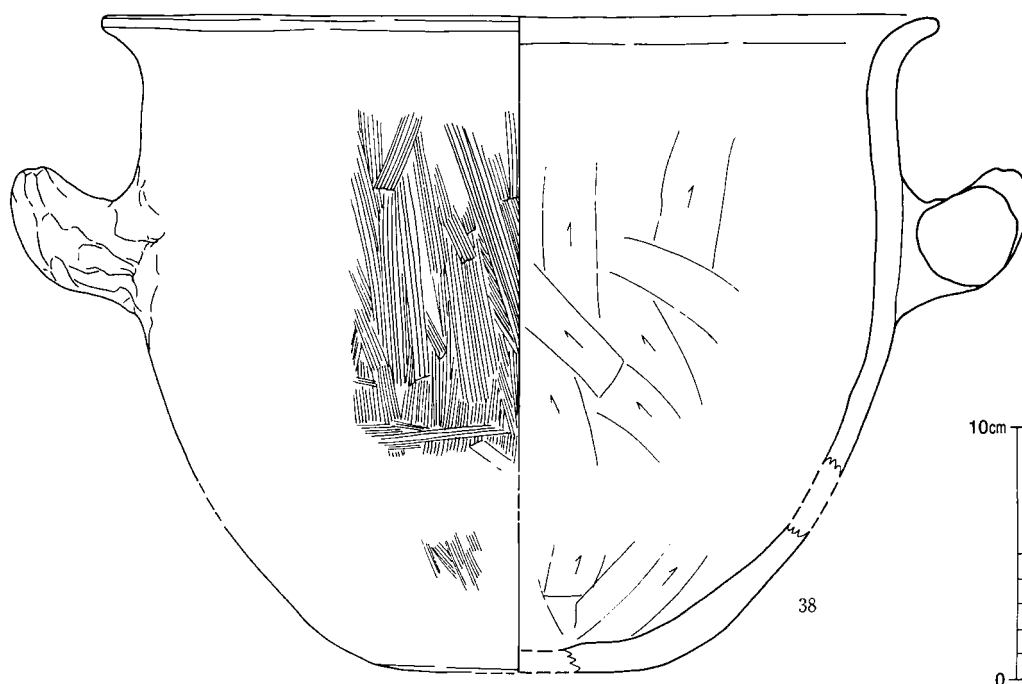
坏身(15~19) 15~19は模倣坏である。底部は丸く、体部上半で強く屈曲し、一旦内傾した後上方に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。坏蓋同様、須恵器とかなり異なる器形になってきている。いずれも口縁部は横ナデ、体部内面及び外面上半はナデ、外底部はヘラナデ調整を行う。胎土は砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用する。焼成は良好である。口径10.8cm~11.8cm、器高4.5cm~5.4cmを測る。

椀(20~22) 20は深みのある椀である。体部上半は直立し、口縁部はわずかに外反する。口縁部及び体部内面はナデ、外底部はヘラナデ調整を行う。口径11.0cm、器高7.1cm。21は口縁部が内傾する椀で、底部は丸く不安定である。風化が著しく調整不明。口径11.4cm、器高5.2cm。22は口縁部が直立する椀で、風化が著しく調整不明である。口径14.0cm。

皿(23) 23は底部が丸く不安定な皿である。口縁部及び体部内面はナデ、外底部はヘラナデ調整を行う。口径12.0cm、器高1.8cm。

高坏(24~29) 24~29はほぼ同形となる高坏である。坏部は坏蓋を反転して使用する。脚部は接合部から直線的に開き、裾部はさらに屈曲して開く。坏部は内外面ナデ、脚柱部外面は縦ヘラナデ、内面は横方向のヘラケズリ、裾部は横ナデ調整を行う。いずれも胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、肌色味を帯びた色調を呈す。口径13.1cm~13.7cm、裾部径10.5cm~12.0cm、器高10.3cm~11.0cmを測る。

甕(30~37) 30は小型の甕である。口縁部は緩く外反し、端部を丸くおさめる。肩部はあまり張らず、胴部中位に最大径がある。口縁部は横ナデ、胴部内面は横ヘラケズリ、外面は上半が雑な縦ハケ、下半が雑な横ハケ調整を行っている。口径10.7cm、器高12.7cmを測る。31は口縁部が短く直立する小型の甕である。胎土に砂粒をほとんど含まず甕にしては精良な粘土を使用している。口径13.0cm。32・33はどちらも口縁部が外反し、端部が薄くなる。また胴部内面を強くヘラケズリ調整するために口縁部との境に明瞭な稜が残る。32は胴部内面斜ヘラケズリ、外面斜ハケ調整を行う。口径14.6cm。33は胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ調整を行う。口径15.5cm。34は大型甕の口縁部片である。口縁部はやや長く外反する。内面の口縁部と体部の境に稜をもつ。口縁部は横ナデ、胴部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ調整を行う。口径24.0cm。35は口縁部が長く外反する甕。36は口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が短く外反する甕。37は完形の中型甕である。口縁部は厚



第90図 9号溝出土土器実測図③ (1/3)

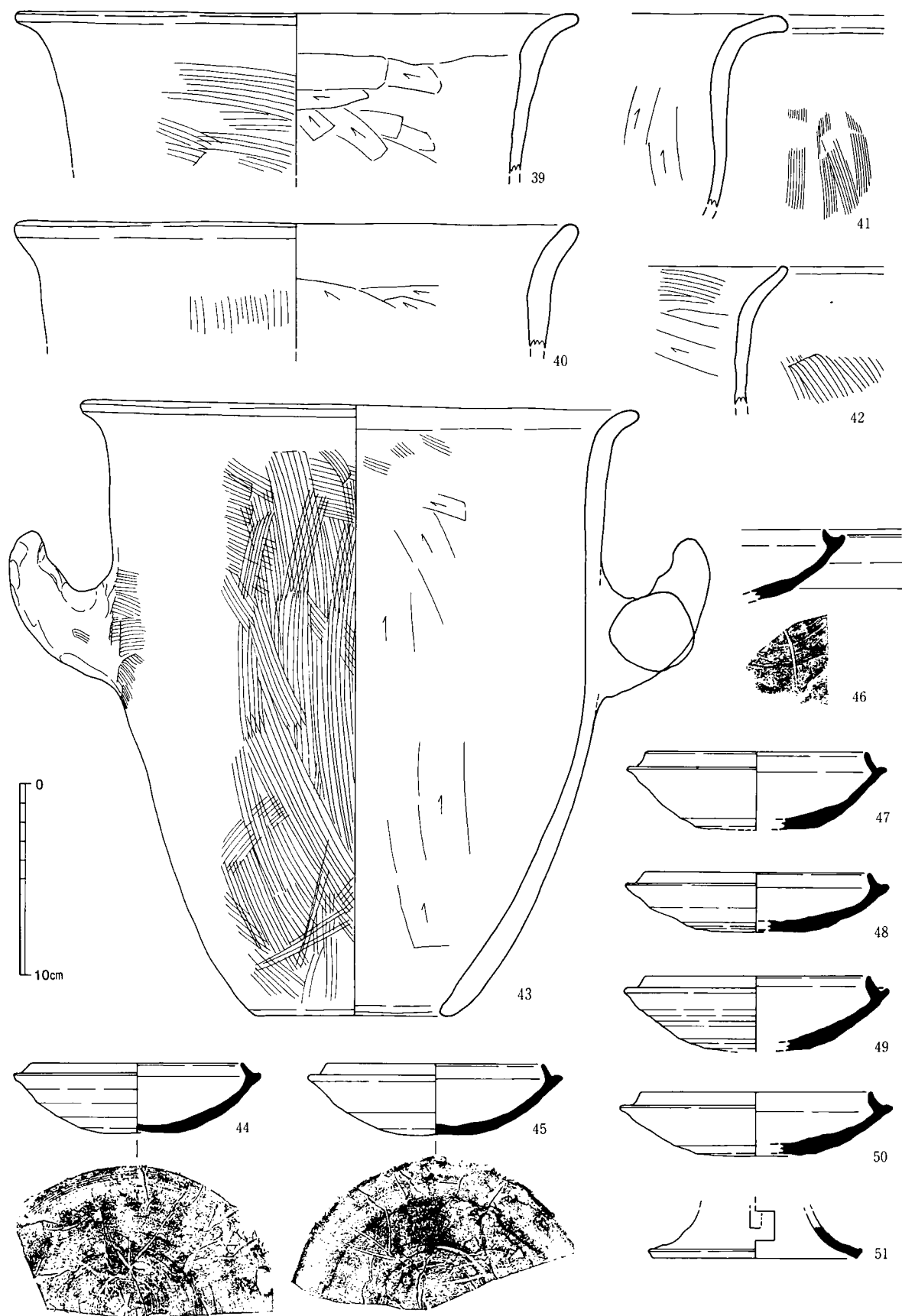
く、強く外反しており、端部は丸く仕上げられる。胴部は球形で最大径が中位にあり、内面を強くヘラケズリ調整するために口縁部と胴部の境に明瞭な稜ができる。口縁部は横ナデ、胴部内面上半は横ヘラケズリ、下半は縦ヘラケズリ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。甕にしては比較的精良な粘土を使用する。色調は肌色を呈し、焼成は良好である。口径20.8cm、胴部最大径31.0cm、器高30.7cm。

把手付鉢 (38) 38は大型の把手付鉢である。口縁部は短く強く外反し、体部はあまり張らない。底部は平底に近い。胴部の中位に一对の把手をもつ。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦・斜ヘラケズリ、外面は雑な縦ハケ調整を行う。口径33.0cm、推定器高26cmを測る。

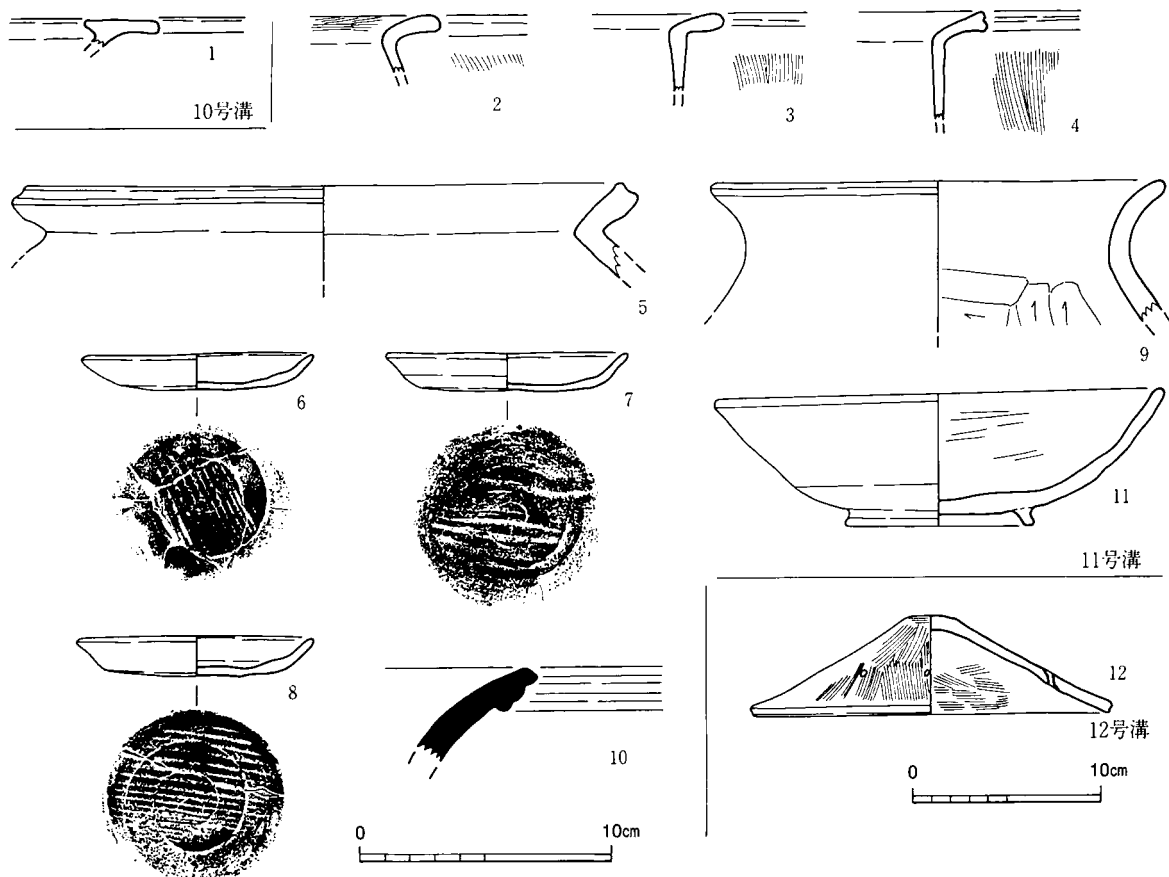
甑 (39～43) 33～39は甑である。いずれも口縁部が短く緩く外反する。39は体部に比べて口縁部の器壁が厚い。体部内面横ヘラケズリ、外面横ハケ調整を行う。色調は橙褐色を呈す。口径29.0cm。40は器壁がやや厚く、口縁端部は丸く仕上げられる。体部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ調整を行う。色調は橙褐色を呈す。口径29.0cm。41は他と比べて口縁部の外反度が強く、あるいは鉢形になるのかもしれない。体部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ調整を行う。42は器壁が薄い甑で、口縁部内面横ハケ、外面横ナデ、胴部内面斜ヘラケズリ、外面縦ハケ調整を行う。胎土に石英・長石・角閃石等の細粒を若干含み、色調は黄肌色を呈す。43は完形に復元できる甑で、一对の把手をもつ。体部には全く張りが無く、長胴気味である。体部内面縦ヘラケズリ、外面雑な縦ハケ調整を行う。口径29.0cm、蒸気孔径10.4cm、器高31.7cm。

須恵器

坏身 (44～50) 44～50は須恵器坏身である。いずれも立ち上がりは短く内傾し、体部は浅い。外底部にのみヘラケズリが認められる。44～46は外底部にヘラ記号を持つ。口径11.1cm～12.6cm、器高3.6cm～4.0cmを測る。



第91图 9号沟出土土器实测图④ (1/3)



第92図 10～12号溝出土土器実測図（1～5・12：1/4，6～11：1/3）

高坏（51）51は高坏の裾部片である。裾部に方形の透かし孔を配置し、端部は下方に尖る。裾部径11.0cm。

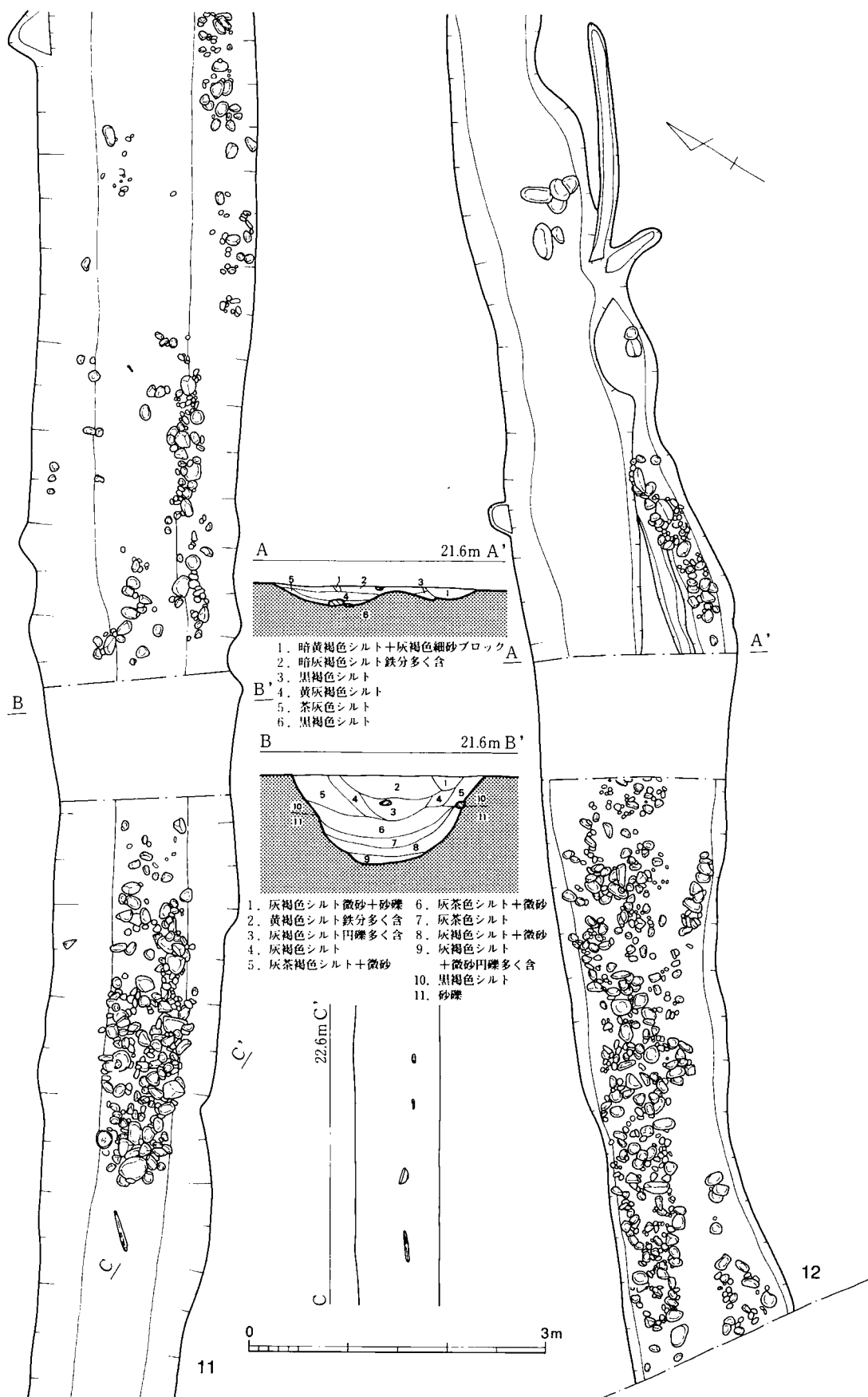
10号溝（第87図）

調査区の中央付近に位置し、黒褐色シルト層上面で検出した溝である。9号溝とほぼ併行して南西-北東方向に直線的に伸びており、長さ51.0mに亘って検出している。中央付近は溝の肩部が途切れ、東西に枝分かれする。埋土は灰褐色微砂の単一層で鉄分を多く含み、あまり締まりがない。幅110cm、深さは15cm程度に過ぎず、非常に浅い。断面で見ると限りは明確な肩部が無くなだらかに湾曲した様子が見て取れる。時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状況から少なくとも古墳時代後期以降のものである。詳細は次年度以降に後述するが、弥生時代に掘削された両肩部に盛土をもつ溝と一致した位置にあり、恐らくこの盛土が完全には埋没せず後代まで残り、中心部分が溝状に検出されたものであろう。さらにこの溝は現在の水田畦畔とも一致しており、弥生時代の溝が機能を失った後もその区画だけが存続し続けた例として特筆に値する。

出土土器（第92図）

弥生土器

壺（1）1は細片であり器形は不明だが一応壺として報告する。口縁部は内外に水平に伸びており、鋤先形となる。風化が著しく調整不明である。混入品である。



第93図 11・12号溝実測図 (1/60)

11号溝（図版47—1、第93図）

調査区の南東端に位置する溝である。9号溝・10号溝とほぼ併行して南西-北東方向に直線的に伸びており、長さ38mに亘って検出している。幅は180cm、北東側が大きく削平され浅くなるが最も深いところでは深さ100cmを測る。埋土は基本的に灰褐色シルトが堆積するが断面の観察によれば数回の掘り直しが行われたようである。また第3層上面からは多くの円礫が出土したが、規則的に配置された状況ではない。遺物は非常に少ないが、底面から約25cm浮いた状態で鉄小刀1点、瓦器1点、土師器皿3点がまとまって出土している。これらの遺物から判断すれば、この溝の時期は11世紀後半頃に比定できる。

出土土器（図版59、第92図）

弥生土器

甕（2～5）2・3は口縁部を水平近くにまで折り曲げた甕である。いずれも端部を丸くおさめている。2は口縁部内面を横ハケ後に横ナデ調整を行う。胴部は外面縦ハケ調整を行う。内面は風化のため調整不明。3は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。4は口縁部を強く外側に折り曲げ、上端部を上方につまみ上げる甕で、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。5は大型の甕で、口縁部がくの字形に強く屈曲し、内面には稜ができる。口縁端部は中央を窪ませている。口径33.0cmを測る。上記の弥生土器は全て混入したものである。

土師器

小皿（6～8）6～8は底部はヘラ切りの土師器小皿で板状圧痕が明瞭に認められる。6は口径9.2cm、器高1.4cm、7は口径9.4cm、器高1.7cm、8は口径9.6cm、器高1.5cmを測る。

甕（9）9は口縁部が強く外反する甕で、端部は丸く収められる。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラケズリ調整を行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良である。口径18.0cm。古墳時代後期のものである。

須恵器

甕（10）10は甕の口縁部で、口縁端部下に二重の低い断面三角突帯を巡らす。内外面横ナデ調整を行う。古墳時代後期頃のものである。

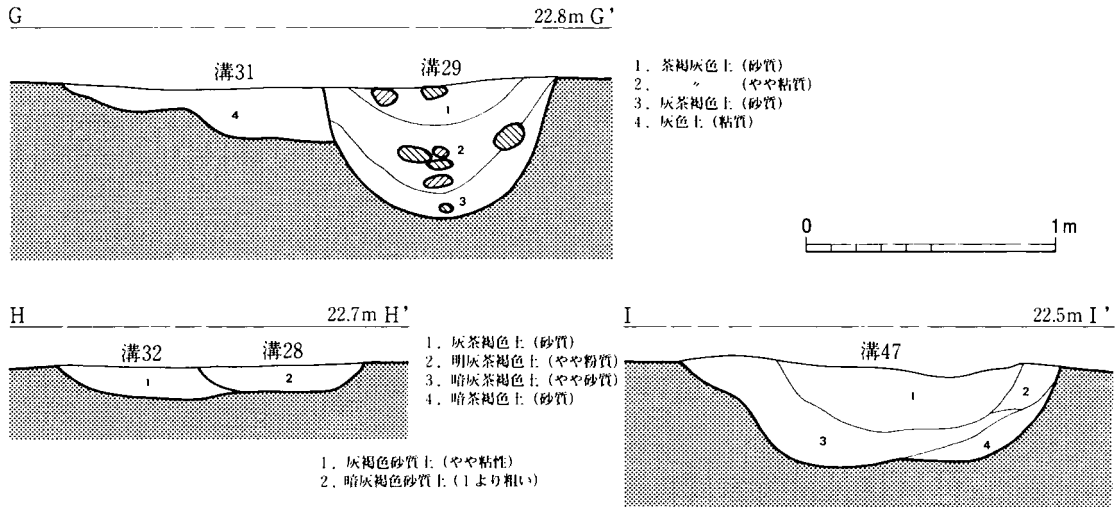
瓦器

椀（11）11は6～8の土師器小皿と近い位置で出土した瓦器椀である。高台は割としっかりしており、また外底部には板状圧痕が残る。体部は浅い。内面にはヘラミガキが僅かに認められるが外面は風化しておりヘラミガキが認められない。口径17.8cm、高台径7.5cm、器高5.5cmを測る。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

12号溝（図版47—2、第93図）

調査区の南東端に位置する溝である。南西-北東方向に直線的に伸びるが11号溝とは併行しない。北東側が削平され消滅しており、長さ17.5mに亘って検出している。最も残りの良い所で幅200cm、深さ20cmを測る。断面の観察によれば埋土は基本的に灰褐色シルトが堆積し、少なくとも1回の掘り直しが行われた様である。底面付近からは多くの円礫が出土したが、11号溝同様規則的に配置された状況ではない。時期を判断できる遺物は出土していないが、11号溝と大差ない時期であろう。

出土土器（第92図）



第94図 28・29・31・32・47号溝断面土層実測図 (1/30)

弥生土器

蓋 (12) 12は広口短頸壺の蓋である。中央付近に円形の穿孔があり、2個一組で対をなしていたものと思われる。内外面ハケ調整を行う。口径19.0cm、器高5.2cmを測る。混入品である。

28号溝 (第96図)

調査区の北西に位置する。31・32・34号溝と重複し、これらより新しい。北東-南西方向にほぼ直線状に約51mを検出。北東端は削平され、南西端は攪乱により失われる。幅は0.8m、深さは最大でも0.15m程度である。

出土土器 (図版59、第95図)

土師器

坏 (1) 口縁部はあまり広がらず直線的にのびる。全体の調整はナデ。

鉢 (2) 口縁部がわずかに直線的に広がる。全体の調整はナデ。

甕 (3・4) とともに口縁部が強く外反し、口縁端部が下向きになる。外面の調整はハケメ。内面の調整は削り。

須恵器

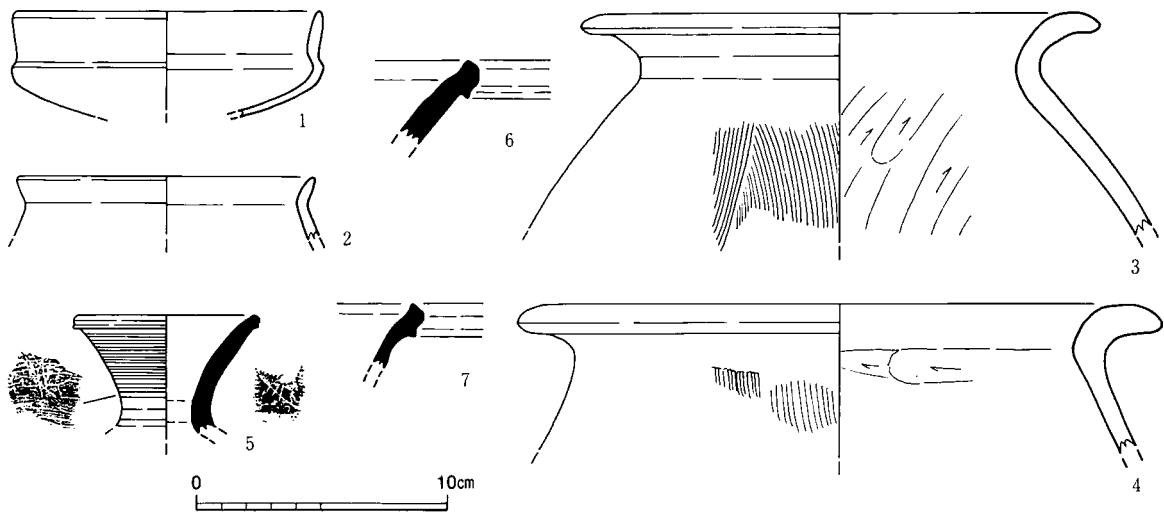
瓶 (5) 口縁部小片。櫛描文部分の2ヶ所にヘラ記号をもつ。内面の調整はナデ。

甕 (6・7) 口縁部小片。6は大型品、7は中型品。ともにヨコナデ調整を行う。焼成は堅緻である。

29号溝 (第94図)

調査区の北西に位置する。30・31・43・44・48号溝・東側落込みと重複し、30号溝より古く、その他より新しい。北東-南西方向にほぼ直線状に約63mを検出したが、更に調査区外に伸びる。幅は1.2m、深さは0.5m程度で、土層の観察から少なくとも1回の掘り直しが考えられる。

出土土器 (第96図)



第95図 28号溝出土土器実測図 (1/3)

弥生土器

甕 (1) 口縁がやや内湾気味になる。外面の調整はハケメ。その他はナデ調整。

土師器

坏 (2) 口縁部は直線的に立ち上がる。器壁は薄い。全体にナデ調整。

甕 (3~8) 3は口縁部が緩やかに外反するタイプで、胴部はやや張り気味となる。内面の調整は削り。その他はナデ調整。4は全体に同じ厚さで、胴部はほとんど張らない。ナデ調整。5は胴部が内側に傾く。口縁は直線的に短く広がる。内面の調整はナデ。その他はナデ調整。6は口縁部が緩やかに外反し、胴部が大きく張る。全体にナデ調整。7は口縁が短く外反し、胴部が張る。内面の調整は削り。その他はナデ。8は口縁が長く、あまり広がらない。内面の調整は削り。その他はナデ。

須恵器

坏蓋 (9) 全体に器壁が厚く、特に天上部が厚い。ヘラ削り部分の境に段がつく。かえりは短い。

坏 (10・11) 10は立ち上がりが厚い。ナデ調整。11は口縁が直線的に広がり、小さな高台を付する。器壁は厚く。全体の調整はナデ。

壺 (12) 長頸壺頸部である。最小径部付近に一条の沈線を巡らす。下部が次第に厚くなる。全体の調整はナデ。

青磁

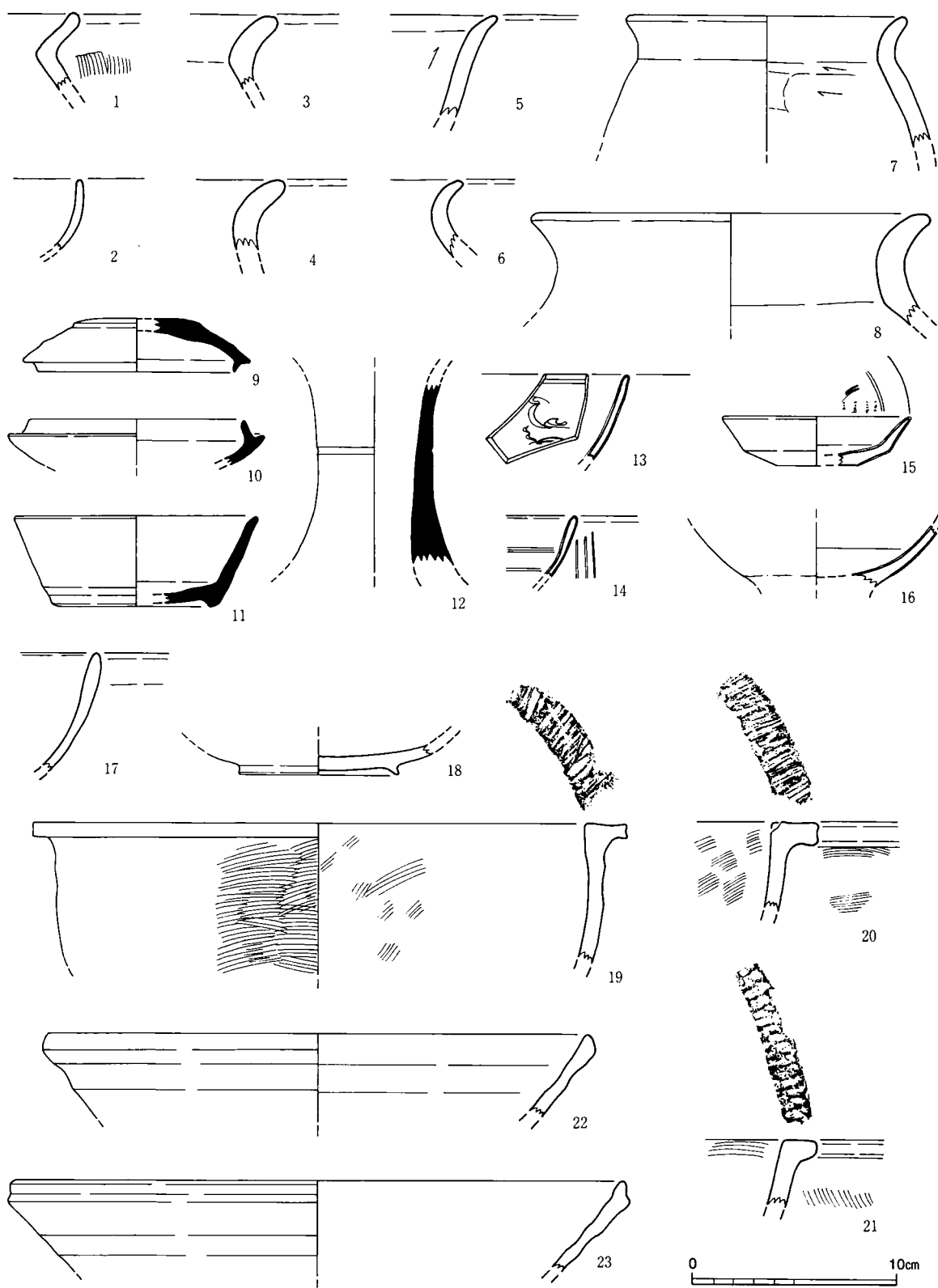
碗 (13・14・16) 13・14は龍泉窯系。13は内面に片切彫による草花文が描かれる。14は外面に線彫りによる蓮弁文が描かれる。

皿 (15) 見込みに櫛描文が施される。

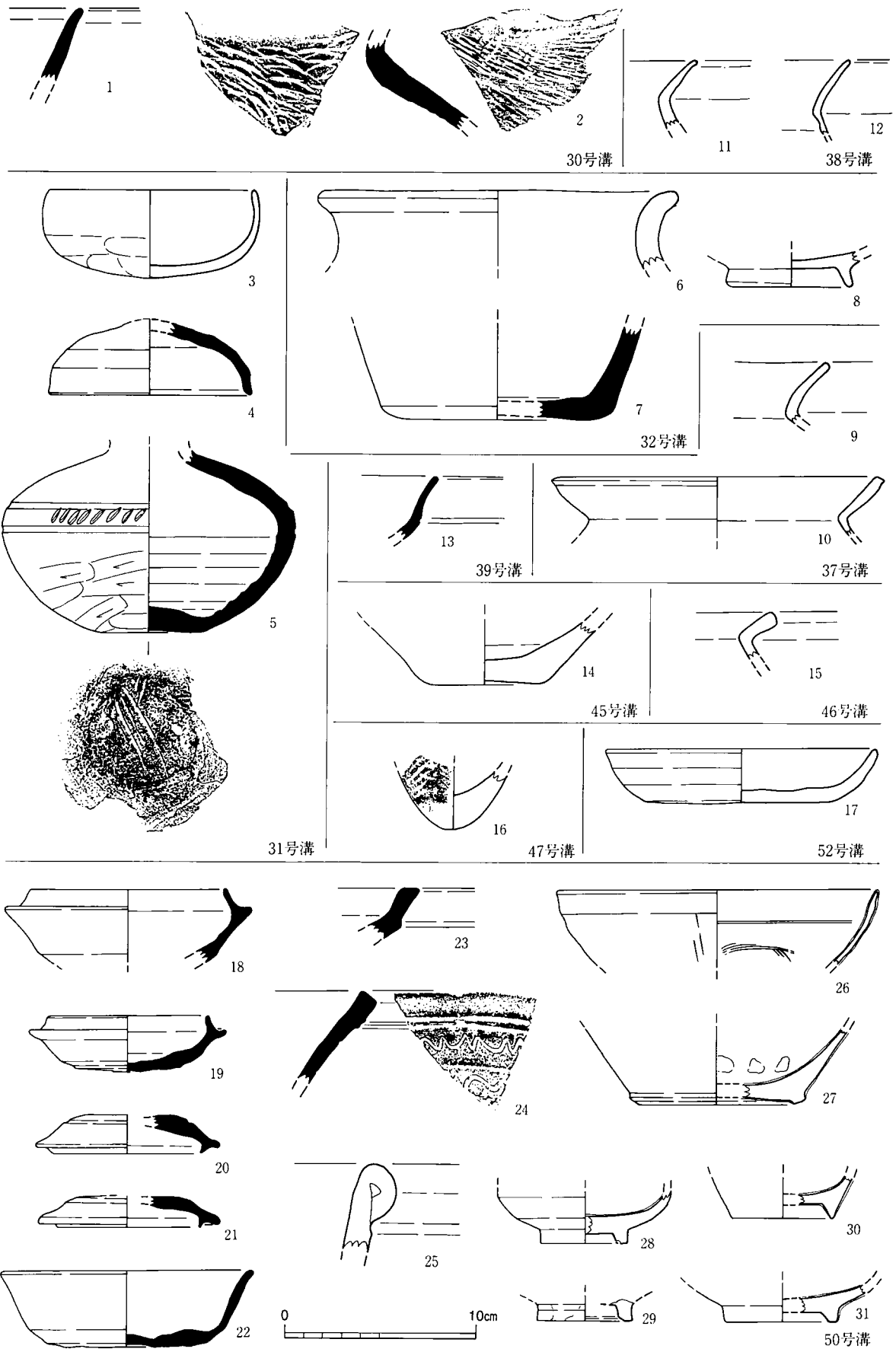
瓦質土器

碗 (17・18) 17は口縁部付近。上部でわずかに肥厚する。摩滅が著しく調整は不明。18は底部で、小さな高台が付く。

鍋 (19~21) 何れも口縁部が直角に折れるタイプで、口縁端部は面取り気味で仕上げられる。内



第96图 29号沟出土土器实测图 (1/3)



第97图 30·31·32·37·38·39·45·46·47·50·52号沟出土土器实测图 (1/3)

外面の調整はナデである。外面には炭化物が付着している。

須恵器

捏ね鉢（22・23）何れも口縁端部を尖らせるタイプのものである。全体にナデ調整を行う。焼成は甘い。

30号溝

調査区の北西に位置する。29・31・43・44号溝と重複し、これらより新しい。北東—南西方向にほぼ直線状に約47 mを検出した。北西部は削平されているが42号溝に連続するものと考えられる。幅は0.5 m、深さは0.15 m程度である。遺物は須恵器が出土している。

出土土器（第97図）

須恵器

鉢（1）口縁部小片で、器種は不明であるが鉢として報告する。直線的に広がり口縁端部でわずかに外反する。全体にナデ調整を行う。

甕（2）肩部付近の破片で、外面は平行叩き、内面には同心円文の当て具痕が残る。焼成は堅緻である。

31号溝（第94図）

調査区の北西に位置する。28・29・30・33・34・35号溝と重複し、28・29・30号溝より古く33・34・35号溝より新しい。北東—南西方向に約31 m検出したが北東端は更に調査区外に伸びる。幅1.2 m、深さ0.3 m程度である。遺物は土師器、須恵器が出土している。

出土土器（図版59、第97図）

土師器

埴（3）口縁部がわずかに内湾し、外面底部はヘラ削り。その他の調整は摩滅が著しく不明。

須恵器

坏蓋（4）口縁部内面にはわずかに段を有する。器壁は全体に厚い。外面天上部付近はヘラ削り。その他はナデ調整を行う。

壺（5）胴部最大径部上に二条の沈線を巡らし、その間に刻目文を施す。胴部下半から底部にかけて手持ちヘラ削りを行う。やや上げ底気味の底部にはヘラ記号が描かれる。内面はナデ調整であるが、底部付近はその痕跡が強く残る。

32号溝（第94図）

調査区の北西に位置する。28号溝と重複し、これより古い。北東—南西方向に約50 m検出した。両端は削平される。幅は1.0 m、深さは0.15 m程度である。

出土土器（第97図）

土師器

甕（6）口縁部が緩やかに外反する。器壁は同じ厚さである。全体にナデ調整を行う。

須恵器

壺（7）わずかに上げ底となる底部で削り調整。その他の部分はナデ調整を行う。器壁は全体に厚く、焼成は堅緻である。

瓦質土器

坑（8）底部付近でやや外にふんばる高台が付く。摩滅が著しく調整は不明。

33号溝

調査区の北西に位置する。31・35号溝と重複し、31号溝より古く、35号溝より新しい。北東—南西方向に約3.5 m検出した。遺物は出土していない。

34号溝

調査区の北西に位置する。28・31号溝と重複し、これらより古い。31号溝により大きく掘削されているために断面形は不明。遺物は出土していない。

35号溝

調査区の北西に位置する。28・31・33・40号溝と重複し、これらより古い。調査区北端部付近で二股に分かれ、各々が調査区外に伸びる。遺物は出土していない。

36号溝

調査区最北端で検出した。北東—南西方向にほぼ直線状に約10 m検出し、両端は更に調査区外へ伸びる。幅は60 cm、深さは15 cm程度である。遺物は出土していない。

37号溝

調査区最北端で検出した。38号溝と重複し、これより新しい。北東—南西方向にほぼ直線状に約19 m検出し、両端は更に調査区外へ伸びる。幅は80 cm、深さは15 cm程度である。

出土土器（第97図）

土師器

甕（9・10）口縁部細片で、ともに内面はやや下った部分から削りを行う。9は口縁部がわずかに外反する。口縁端部はつまみあげを意識したものか、わずかに尖る。10は口縁部がやや内湾気味で外側が肥厚する。

38号溝

調査区最北端で検出した。37号溝と重複し、これより古い。北東—南西方向にほぼ直線状に約23 m検出し、両端は更に調査区外へ伸びる。

出土土器（第99図）

土師器

甕（11・12）11はやや外反する口縁部の外側をわずかに肥厚する。肩部付近は器壁が厚い。全体にナデ調整を行う。12は口縁がわずかに外反し、内面は削り。その他は削り調整を行う。

39号溝

調査区の北西で検出し、90号住居、38・45号溝と重複し、38号溝より古く、その他より新しい。北東—南西方向にほぼ直線状に約47 m検出し、両端部は削平される。幅は0.8 m、深さは0.25 m程度である。

出土土器（第97図）

須恵器

高坏（13）細片。ここでは高坏の坏部としておく。口縁部はわずかに外反し外側へ開く。坏部の稜部分に一条の沈線を巡らす。全体調整にナデ調整を行う。

41号溝

北東—南西方向に約3.5 m検出し、北東端は削平される。西側にある落込みと重複し、これより古い。遺物は出土していない。

42号溝

調査区の北西で検出した。30号溝と連続するものと考えられる。遺物は出土していない。

43号溝

調査区の北西部南よりで検出した。29・30・48号溝と重複し、48号溝より古く、その他より新しい。約2 m検出したが、遺物は出土していない。

44号溝

調査区の北西部南よりで検出した。29・30号溝と重複し、これらより古い。43号溝と平行し、約8 m検出した。遺物は出土していない。

45号溝

調査区の北西部南よりで検出した。北東—南西方向に直線状に約10 m検出したが、両端部は削平される。

出土土器（第97図）

弥生土器

壺（14）底部片でやや上げ底である。底面との境は明瞭でない。全体にナデ調整を行う。

46号溝

調査区西端部で検出した。北東—南西方向に直線状に約14 m検出した。南西端は削平され、北東端は調査区外へ伸びる。幅は50 cm、深さ10 cm程度である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第97図）

弥生土器

甕（15）口縁部分を肥厚し上端部は角を有する。内側の稜は明確でない。全体にナデ調整を行う。

47号溝（第94図）

斎部調査区では別番号調査区西端部で検出した。北東—南西方向に直線状に約14 m検出した。北東端は調査区外に伸びる。幅は150 cm、深さは50 cm程度である。遺物は弥生土器が出土している。

出土土器（第97図）

弥生土器

甕（16）尖り底の底部で、外面に叩き痕を有する。器壁は厚い。内面の調整はナデ。

48号溝

調査区北西部南よりで検出した。29号溝に完全に重複し、これより新しい。約80 m検出し、中位で直角に曲がる。幅は0.2 m、深さは0.15 m程度である。遺物は出土していない。

49号溝

調査区北西部中央で検出した。59・95・96・97・98号住居、50号溝と重複し、98号住居、50号溝より古く、他より新しい。北東—南西方向に直線状に約17 m検出した。遺物は出土していない。

50号溝

調査区北西部中央付近で検出した。59・92号住居、1・49・51・52・53号溝と重複し、これらの中で最も新しい。中央部でわずかに折れるが、北東—南西方向にほぼ直線状に約65 m検出した。

出土土器 (図版59、第97図)

須恵器

坏 (18・19) 18は立ち上がりが内傾するが体部は深い。受け部内面は緩やかで稜が付かない。底部付近にヘラ削りを行うが器壁が厚い。その他はナデ調整を行う。19は立ち上がりがしっかりしている。ヘラ切未調整の底部付近は器壁が厚い。その他はナデ調整を行う。

坏蓋 (20・21) 20の器壁は厚く、天井部ヘラ削り部分との境が一段くぼむ。その他は根で調整を行う。小さく断面三角形を呈す。21はかえりが20よりさらに小さくなっている。器壁は厚い。外面天上部付近はヘラ切未調整。その他はナデ調整を行う。

坏 (22) 口縁は直線的に広がり、端部付近でわずかに外反する。底面はヘラ切未調整で、器壁は肥厚する。底部と体部の境にヘラ削りを施す。その他はナデ調整を行う。

甕 (23・24) 23は大甕で二重口縁状を呈す。全体にナデ調整を行う。24も大甕の口縁部で外面に二条の粗い波状文を施す。

陶器

甕 (25) 口縁部を外側に折り貼り付けている。焼成は堅緻で暗赤褐色の釉がかけられる。全体の調整はナデである。

青磁

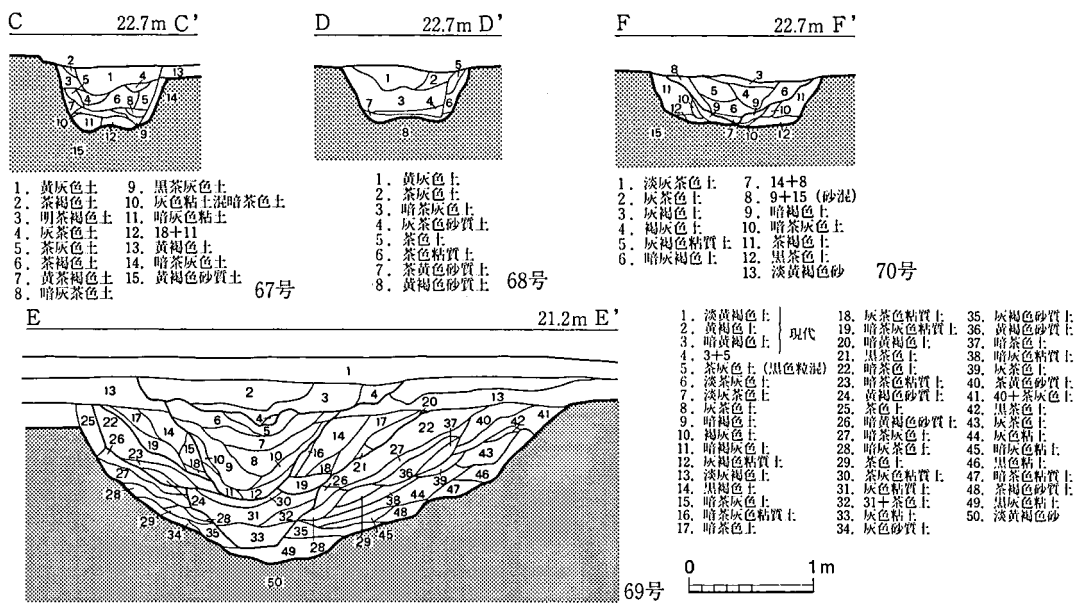
碗 (26～31) 26は同安窯系か。内外面に櫛描文が描かれる。27は越州窯系。内面見込みに目跡が見られる。高台は削り出しである。28の底部外面付近は露胎である。

51号溝

調査区北西部南よりで検出した。50号溝と重複し、これより古い。北西—南東方向に直線状に約3 m検出した。南東端部は削平される。遺物は出土していない。

52号溝

調査区北西部南よりで検出した。50号溝と重複し、これより古い。調査区の北西部南よりで検出し、西にある落込みと埋土が同じであるので、同時期に埋没したものと考えられる。北東—南西方向に約4.5 m検出した。遺物は土師器が出土している。



第98図 67～70号溝断面土層実測図 (1/30)

出土土器 (図版59、第97図)

土師器

坏 (32) 浅い口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。全体に器壁が厚い。底部には板状圧痕を有する。その他はナデ調整を行う。

53号溝

調査区北西部南よりで検出した。50号溝と重複し、これより古い。北東-南西方向にほぼ直線状に約9m検出した。南西端は更に調査区外に伸びる。遺物は出土していない。

67号溝 (図版47-3、第98図)

調査区西端で検出した南北溝である。幅0.7～1.0m、深さ0.7m、長さ29.6mを検出した。埋土は最上層は住居等と同じく包含層が入る。中層は茶灰色土の一括堆積であるが、最下層には砂層が堆積し、流水の痕跡が見られる。また掘り直しの痕跡があるが、時期差はほとんどないと思われる。110～113号竪穴住居跡に切られ、南部は削平が激しい。

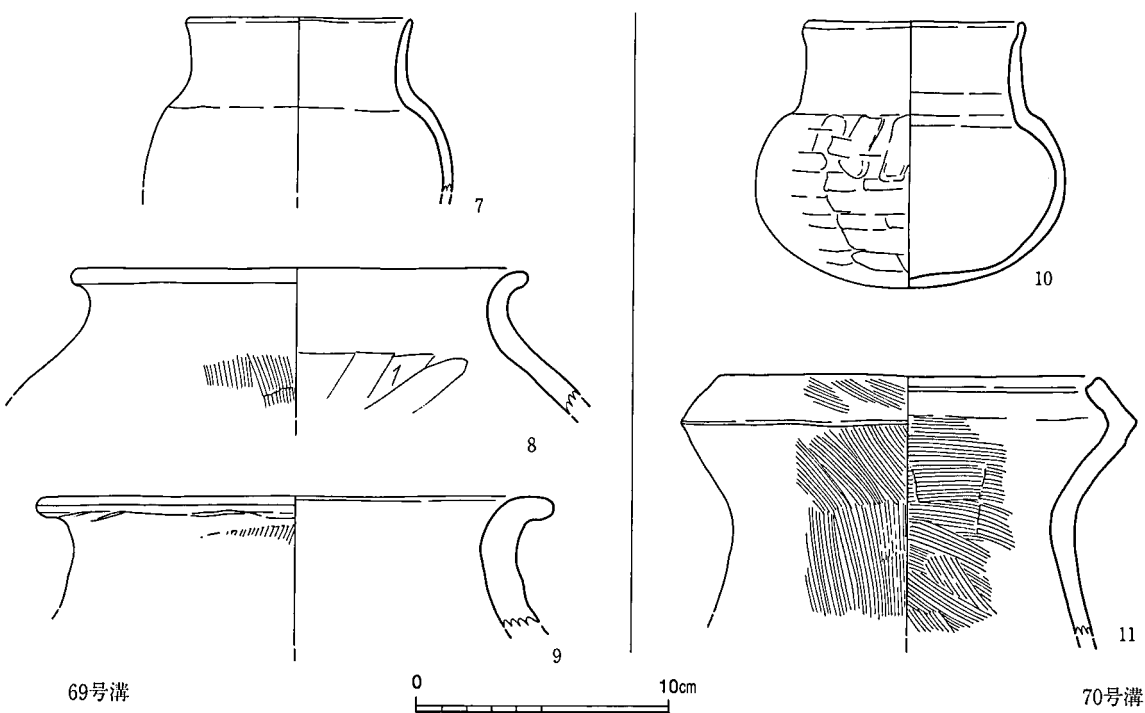
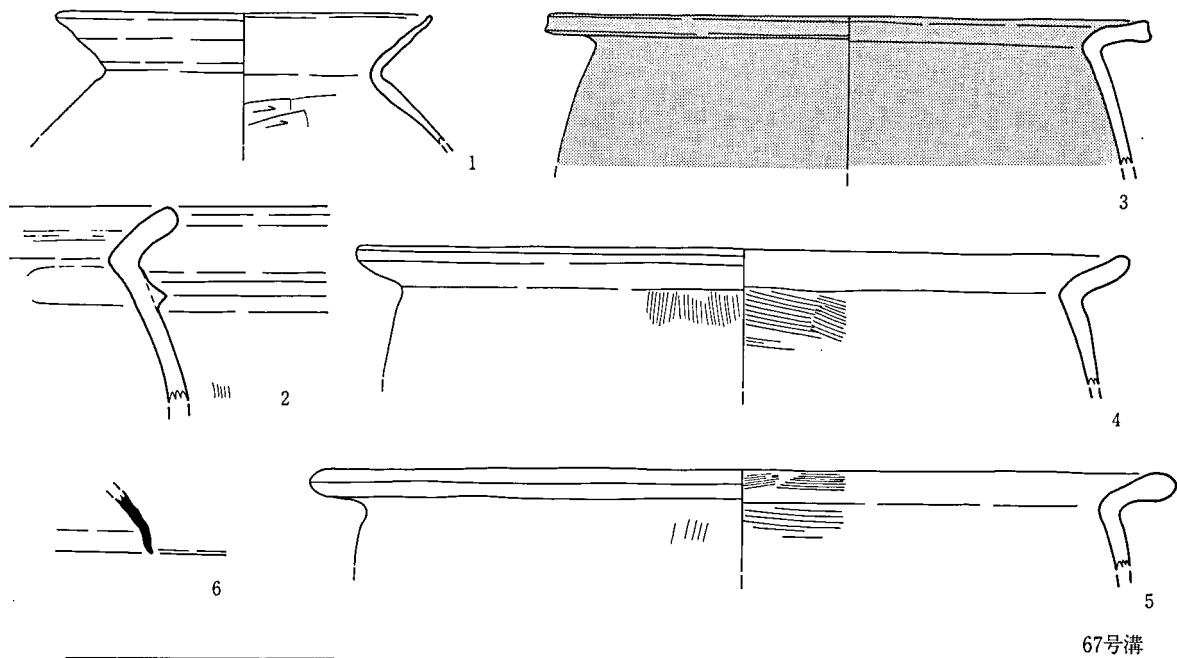
出土遺物 (第99図)

土師器

甕 (1～5) 1は器壁が薄く口縁が強く外反する。頸部の締めりは強い。内面のケズリ以外は摩滅のため調整不明。2は頸部下に断面三角の突帯を一条巡らせる。外面はヨコナデ、内面は頸部にヨコケズリが見えるが他は調整不明。3～5は口縁を強く折り曲げ、胴が大きく張るもの。3は丹塗りで、全面ヨコナデ、端部を断面方形に造る。4・5は外面をタテハケ、内面をヨコハケ、口縁部をヨコナデで調整する。復元口径24.0・30.4・32.8cmを測る。

須恵器

坏蓋 (6) 口縁部を折り曲げ、端部は外反する。全面回転ナデで、器壁は薄い。



第99图 67·69·70~72号沟出土土器实测图 (1/3)

68号溝 (図版48—1、第98図)

調査区西側、67号溝の東で検出した。1～3号竪穴住居跡に切られる。幅0.6～0.9 m、深さ0.7 m、長さ21.5 mを検出した。最上層は67号溝と同じであるが、中層は自然堆積である。最下層には粘質土層があり、滞水していたと思われる。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものはなかった。

69号溝 (図版48—2、第98図)

調査区西端部、北端で検出した東西溝である。幅m、深さm、長さ16 mを検出した。出土遺物は少なく小片ばかりで、図示できるものは少ない。

出土遺物 (第99図)

土師器

壺(7) 薄手の短頸壺で、端部は薄く引き上げる。肩部に僅かに稜が残る。摩滅のため調整不明。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。復元口径9.0 cmを測る。

甕(8・9) どちらも口縁部小片で、大きく開くものである。頸部の締まりが強く、口縁は強く外反する。外面はタテハケ、内面は斜位のケズリ調整。復元口径18.0・20.0 cmを測る。

70号溝

調査区西端部で検出した東西溝である。幅0.4～0.5 m、深さ0.6 m、長さ8.8 mを検出した。断面逆台形で、埋土は流水による自然堆積と思われる。1度の掘り直しがあるが、ほとんど時期差はないと思われる。

出土遺物 (第99図)

土師器

壺(10) 口唇部内面をナデることで、口縁を屈曲させる短頸壺。体部外面はタテ、ヨコのヘラケズリ、他はヨコナデ調整。復元口径7.4 cm、器高10.6 cmを測る。

弥生土器

器台(11) 外面はタテ・内面はヨコハケで調整する。復元口径15.0 cm。

71号溝

調査区西端部で検出した南北溝である。幅0.2～0.5 m、深さ0.1 m、長さ3.6 mを検出した。残存状況が悪く、北・南共に削平を受けている。埋土は住居と同様で、出土遺物はない。

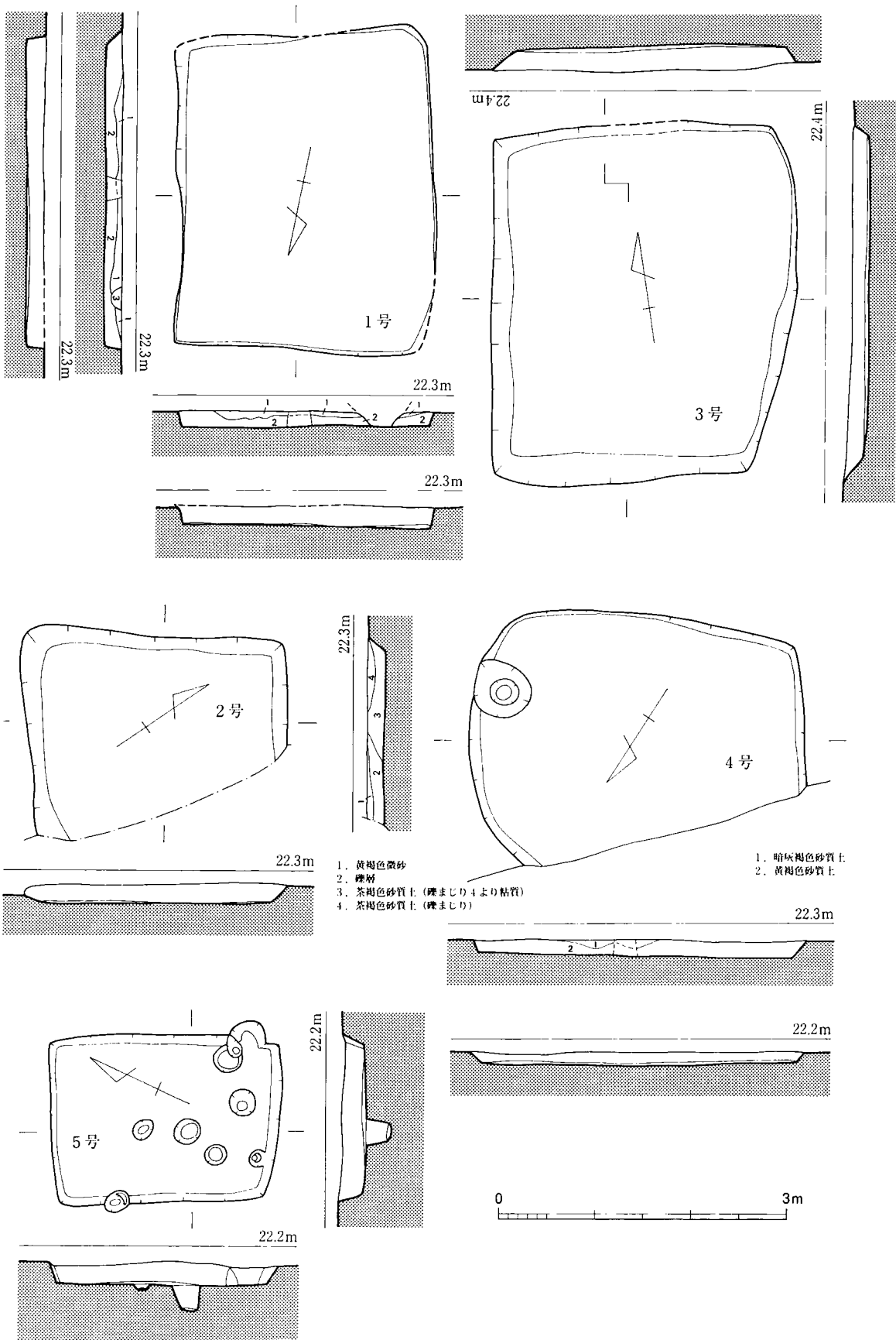
6 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 (第100図)

調査区の北西部北よりで検出した。16号溝と重複し、これより古い。南北3.5 m、東西2.7 mの方形プランを呈する。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは20 cm程度で、埋土は自然堆積である。ピット等はない。遺物は土師器片が出土しているが図化できない。

2号竪穴状遺構 (第100図)

調査区の北西部北よりで検出した。東部分は調査区外へ伸びており、平面プランは南北2.8 m、



第100図 1~5号竖穴状遺構実測図 (1/60)

東西2.2 m + α である。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは20 cm程度で、埋土は自然堆積である。ピット等はない。遺物は出土していない。

3号竪穴状遺構（第100図）

調査区の北西部北よりで検出した。南北3.7 m、東西3.2 mの方形プランを呈する。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは20 cm程度である。ピット等はない。遺物は出土していない。

4号竪穴状遺構（第100図）

調査区の北西部北よりで検出した。15号溝と重複しており、切り合いを間違えたが、これより新しい。平面プランは南北2.7 m + α 、東西3.5 mである。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは20 cm程度で、埋土は自然堆積である。東壁に接する位置にピットを検出した。遺物は土師器片が出土しているが図化できない。

5号竪穴状遺構（図版48-3、第100図）

調査区の北西部北よりで検出した。平面プランは南北2.4 m、東西1.8 mである。壁の立ち上がりは緩やかである。壁の深さは25 cm程度である。南側より複数のピットを検出した。遺物は出土していない。

7 落ち込み・ピット・包含層出土土器

落ち込み出土土器（第101図）

調査区の西南部付近にあり、29・41・52号溝と重複するが、29号溝より古く、その他との切り合いはない。底の部分には酸化した鉄分が広がり、明青灰色シルトが厚く堆積していた。

弥生土器

甕（1）口縁端部をやや膨らませ丸く仕上げる。全体にナデ調整を行う。

壺（2～4・7）2・3は壺の口縁部でナデ調整。4は丹塗りで二条の台形突帯を巡らしその間に縦の暗文を施す。内面には突帯接合時の指頭圧痕がある。7は底部片で内面に指頭圧痕がある。外面は丹塗り、ミガキ調整。

器台（5）筒型器台脚部。外面は丹塗りである。内面には指頭圧痕がある。

甕（6）口縁端部を面取り気味に仕上げる。器面の調整は粗いハケメ。

土師器

甕（8）口縁部が大きく開くタイプで、胴部が張る。全体にナデ調整を行う。

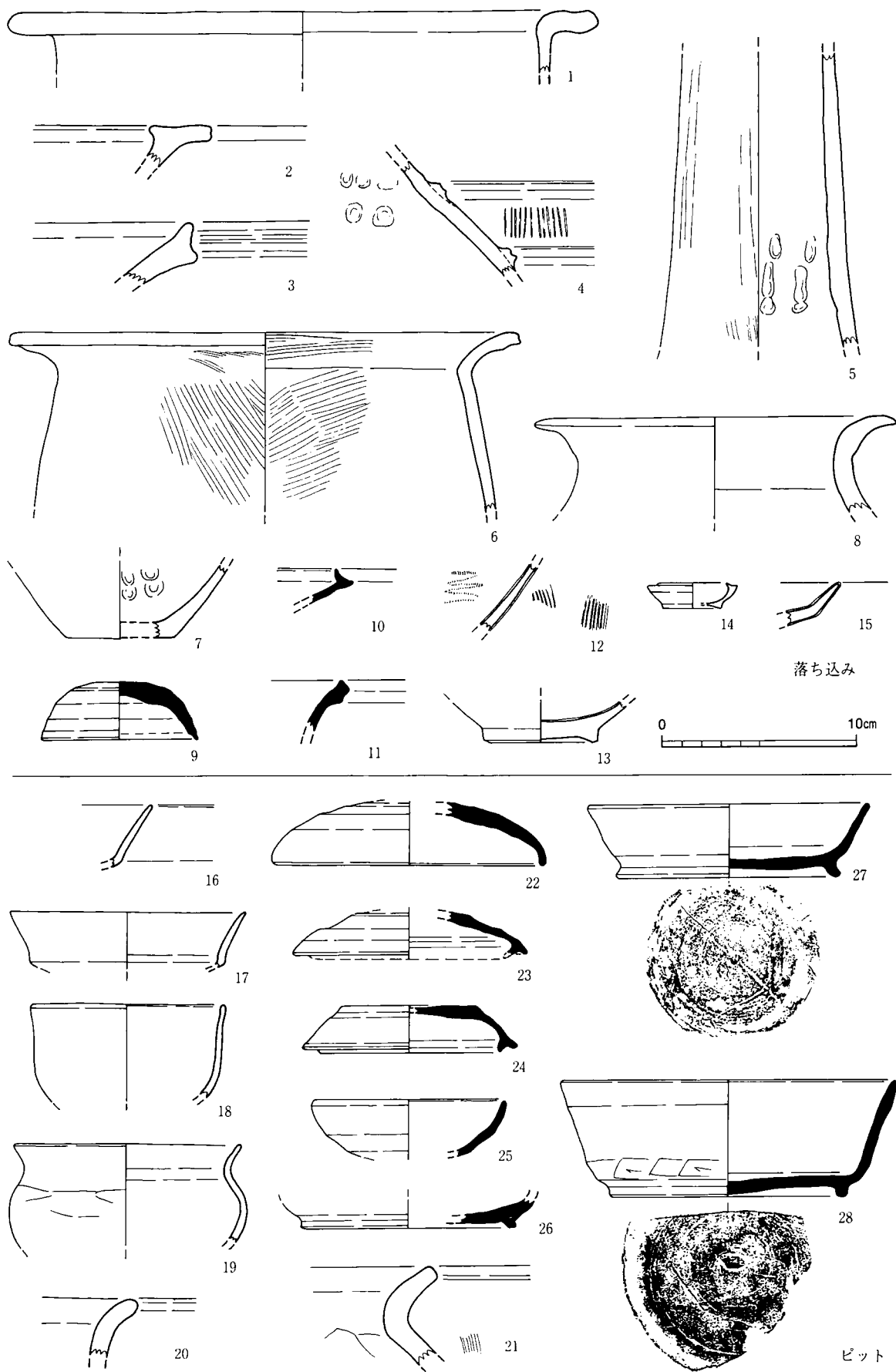
須恵器

蓋（9）小型のもので口縁端部内面には段がつく。外面は口縁部付近まで回転ヘラ削りを行う。内面はナデ調整である。器壁は厚い。

坏身（10）口縁部細片。坏蓋の可能性もある。全体にナデ調整を行う。

甕（11）口縁部細片。端部を尖り気味に仕上げる。全体にナデ調整を行う。

青白磁



第101図 落ち込み・ピット出土土器実測図 (1/3)

碗（12・13）12は同安窯系。内外面に櫛描文が描かれる。13は底部片で削り出し高台。高台部分は露胎である。

合子（14）薄手で丁寧なつくり。受部より内面は露胎である。底部は上げ底になっており露胎である。

小皿（15）内面は線彫りがある。

ピット出土土器（図版60、第101図）

土師器

高坏（16・17）16は坏部の細片である。摩滅が著しいが全体にナデ調整を行う。17は口縁がやや広がる高坏の坏部である。全体にナデ調整を行う。

鉢（18・19）18は胴部から口縁部にかけて直線的で深い。口縁はわずかに広がる。器壁は摩滅が著しいが全体にナデ調整を行う。19は口縁が短く外反する。外面調整は削り。

甕（20・21）20は口縁部細片である。胴は張らない。全体にナデ調整。21は口縁端部がやや面取り気味に仕上げられる。内面はナデ調整。外面はハケメ調整を行う。

須恵器

坏蓋（22～24）22は器壁が厚い。外面天上部の調整は回転ヘラ削り。それ以外はナデ調整を行う。23は外面中位に深い窪みが付く。外面天井部は回転ヘラ削りを行う。それ以外はナデ調整。24は天井部が平たく、坏身の可能性もある。外面天上部はヘラ切未調整。それ以外はナデ調整。

坏（25～28）25は全体にナデ調整を行う。26は底部細片。高台がわずかに外側にふんばるタイプで全体にナデ調整を行う。27の高台は外側へふんばり、底部にはヘラ記号を描く。全体にナデ調整を行う。28は小さな丸い高台が付く。体部下半は削り調整。それ以外はナデ調整。底部にはヘラ記号を描く。

包含層出土土器（図版60、第102～104図）

弥生土器

甕（1～4）1は口縁部上面に刻目を施す。2～4は口縁部をくの字に屈曲させ、端部を肥厚させる。

壺（5）口縁部が短く急激に屈曲するもので、体部の器肉は厚めである。内面はナデ調整する。

高坏（6）鋤先型口縁の高坏坏部。体部上位は器肉を薄く仕上げ、底部に向かって厚くなる。

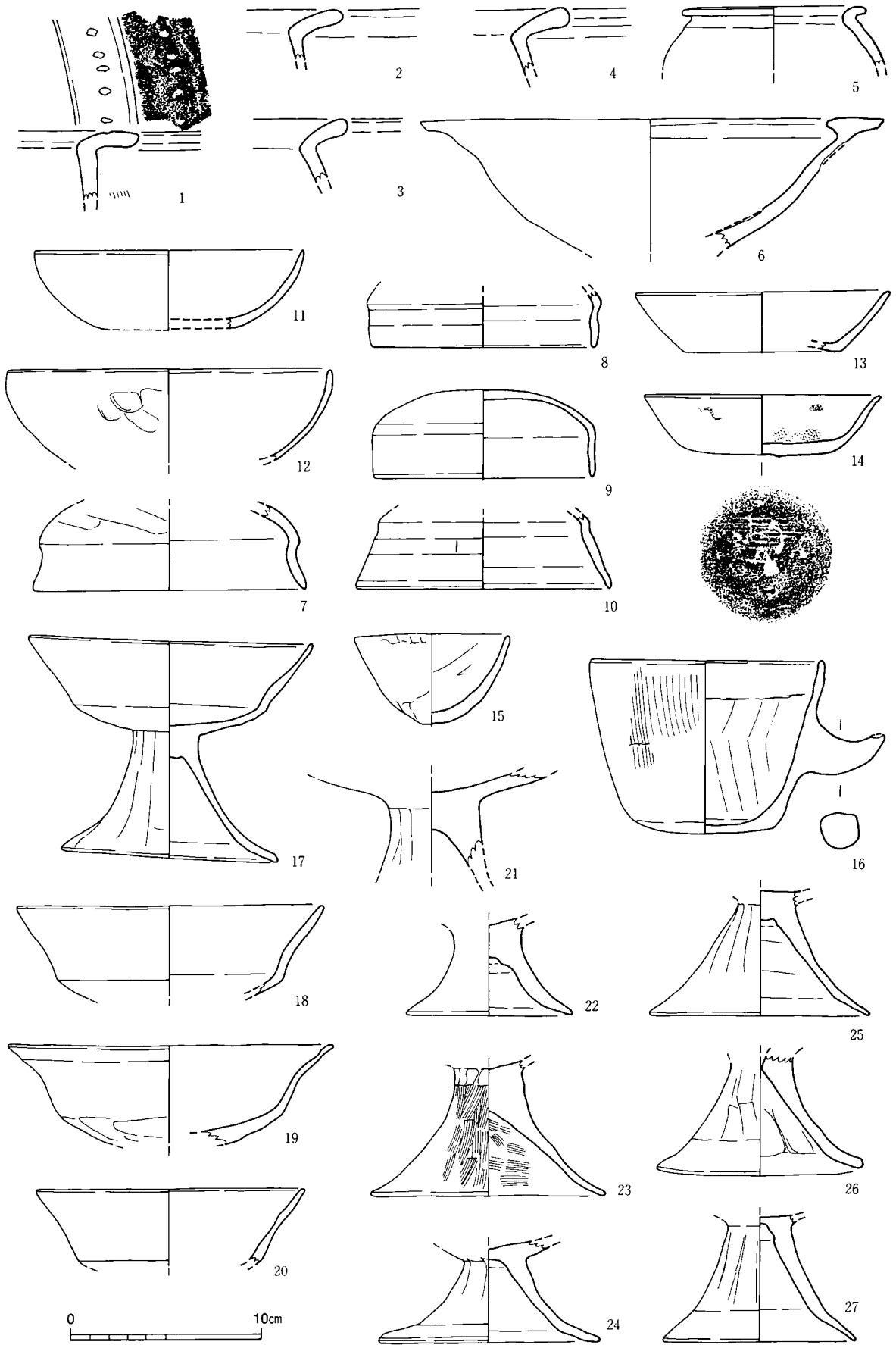
土師器

坏蓋（7～10）須恵器の器形を模倣した蓋である。一部は坏になるものかもしれない。天井部と体部の境に段を持ち、7・10は口縁部をハの字に広げる。9の天井部は手持ちヘラ削り。復元口径14.2・11.6・11.2・13.3cm、9の器高は4.6cmを測る。

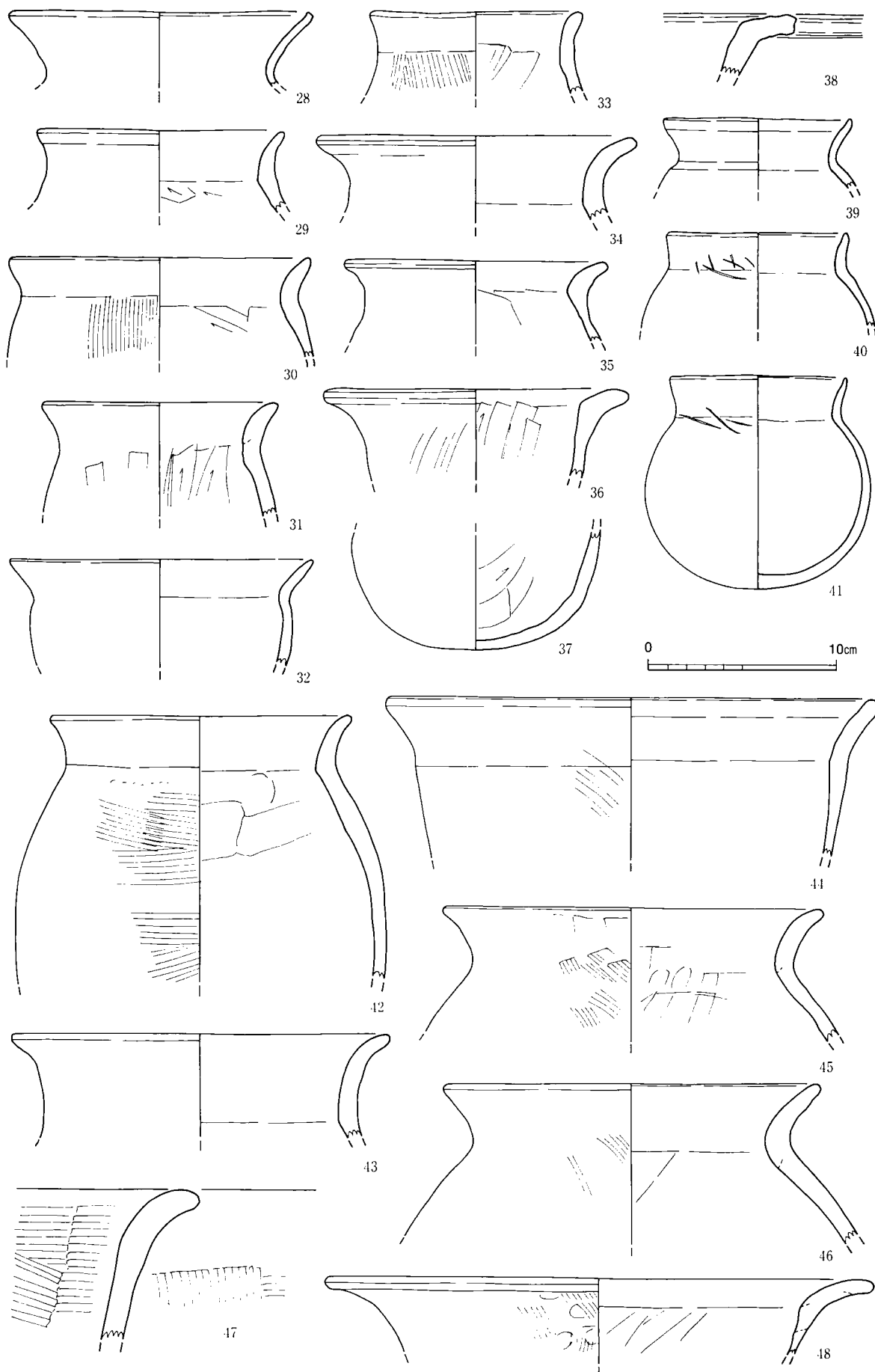
坏（11～14）11・12は体部が丸みを帯びるもの。11は端部を薄く引き上げる。12は口縁部を若干内傾させ、外面は手持ちヘラ削り調整。復元口径14.0・16.8cmを測る。13は口縁部が大きく開き、底部の屈曲が強い。14は底部に板状圧痕が付き、内外面にススが付着している。灯明皿に使用されたものか。復元口径13.2・12.2cm、復原底径8.0・8.0cm、器高3.0・3.2cmを測る。

鉢（15）小型のもので、内面には工具痕がある。外面に黒斑を有する。口径8.1cm、器高5.1cm。

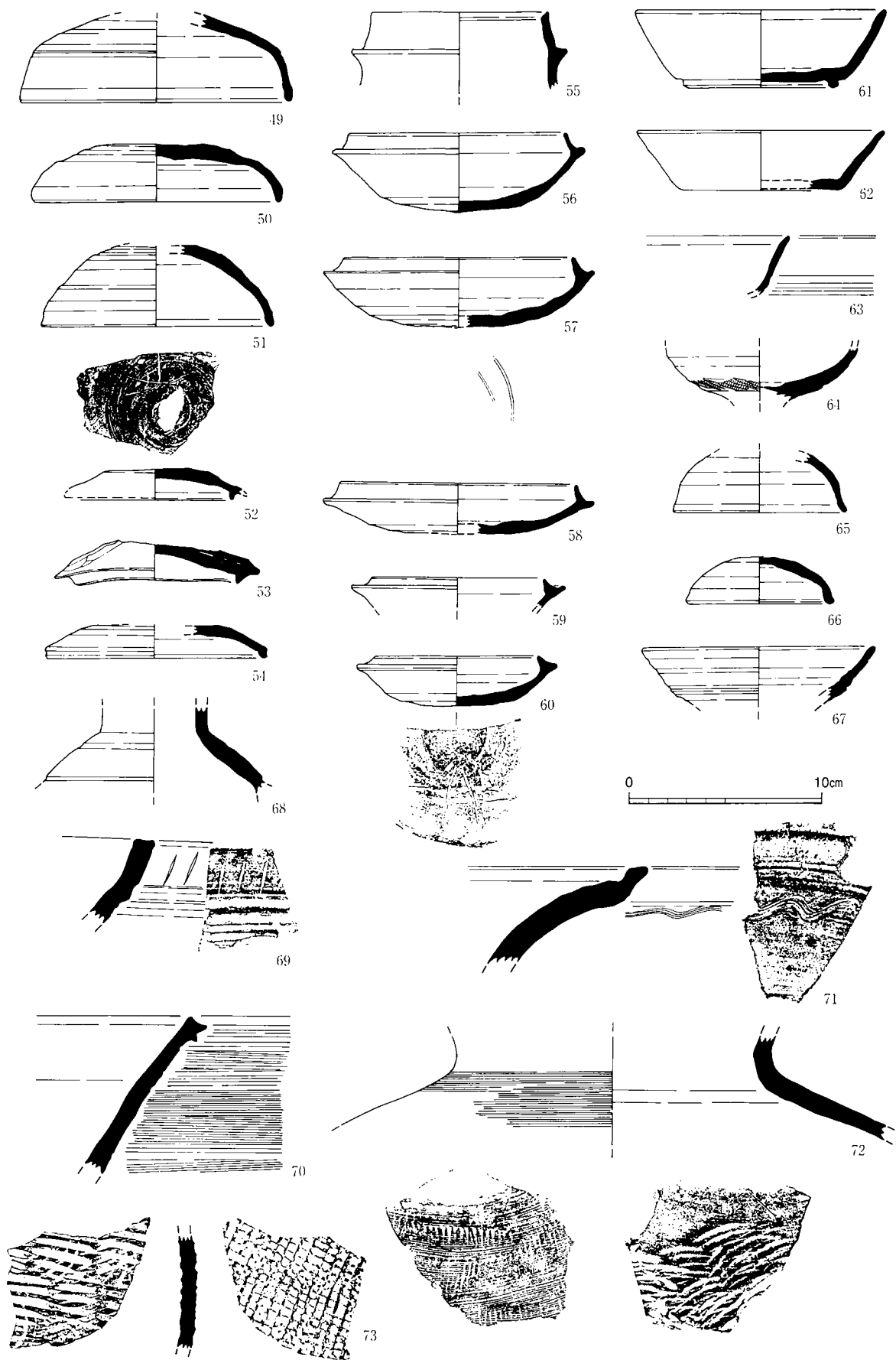
碗（16）把手付碗。口縁部はナデ、外面はハケ目調整する。内面には口縁部から2cm下に粘土



第102图 包含層出土土器① (1/3)



第103図 包含層出土土器② (1/3)



第104图 包含層出土土器③ (1/3)

接合痕があり、これ以下は削り調整。復元口径12.1cm底径7.3cm、器高9.0cmを測る。

高坏（17～27）17は焼き歪みがあり傾く。器肉が薄いもので、脚部端は若干内湾させる。18～20は坏部のみ破片で、19は器肉が薄く口縁部付近を屈曲させる。外底部にはケズリが見られる。21は外面をヘラケズリする。22～27は脚部のみ資料。22は器壁が厚く、端部の広がりも弱い。器面はナデ調整。23は外面タテ、内面の横位のハケメを施す。24は器高が低く、端部の屈曲は大きい。25・27は端部の器肉が薄く、25は外面ケズリ、27はヘラナデ調整する。

甕（28～37）28は他の包含層出土土器より古い。口縁端部はややつまみ上げ気味である。29～37は小型の甕。29～31・33は頸部の締まりが緩く、端部の外反も少ない。31の外面調整は板状工具によるナデ。32は口縁部が大きく外反し、端部の器肉も薄い。35は頸部内面に稜を有し、胴部を薄く作る。36は胴が張らないもので、口縁部の外反が強く、内面の稜も明瞭である。外面は板状工具によるナデ。36は丸底ので、器肉が厚く外底部と内面をケズる。39～41は薄手である。40・41の外面頸部には工具痕が残る。42の外面は叩きの後、ハケメ調整。

鉢（38・47・48）38は口縁部は胴部と同じ厚さで外側に折り曲げられ、端部を断面四角に作る。47の内面は粗い横ハケ。48は体部の器肉が薄く、内面は工具によるナデ、外面には指頭圧痕が残る。

須恵器

坏蓋（49～54）49は肩に段を有するもので、端部を肥厚させる。外天井部は回転ヘラ削り。50は器高の低いもので、端部が内湾する。外天井部はヘラ削り。52・53は返りを有する小型のもので、52は外面天井部にヘラ記号を描く。53は焼成時に別固体が天井部に融着している。器壁が厚く、外天井部はヘラ切り未調整である。54は口縁を折り曲げるもので、端部は僅かに外へ跳ねる。

坏（55～62）55は受部が長く、口縁端部内面に段を有する。胴部から口縁部にかけてやや内傾気味である。受部に自然釉が付着しており、蓋と身が合口でなく別々に焼成された可能性がある。57は外面底部にヘラ記号を描く。58は体部が浅い。60は底部の器肉が厚く、外面底部にヘラ記号を施す。61は断面方形の高台を貼付するもので、内面は面取りを行う。62は器肉が薄いもの。

高坏（63・64）63は外面に沈線を巡らす。64は底部付近に刻み目を密に施す。

甕（67）口縁部片で、口縁から2cm下がったところに稜があり、沈線が巡る。

壺（68）径は直立し、肩の器肉は肥厚する。外面には自然釉が付着。

甕（69～73）69は内湾する口縁で外面には縦の刻目を施す。70は外面全体にカキメを施す。71は外反する口縁部を内側に折り曲げる。外面には波状文を施す。72は外面叩きの後、ハケメ調整。

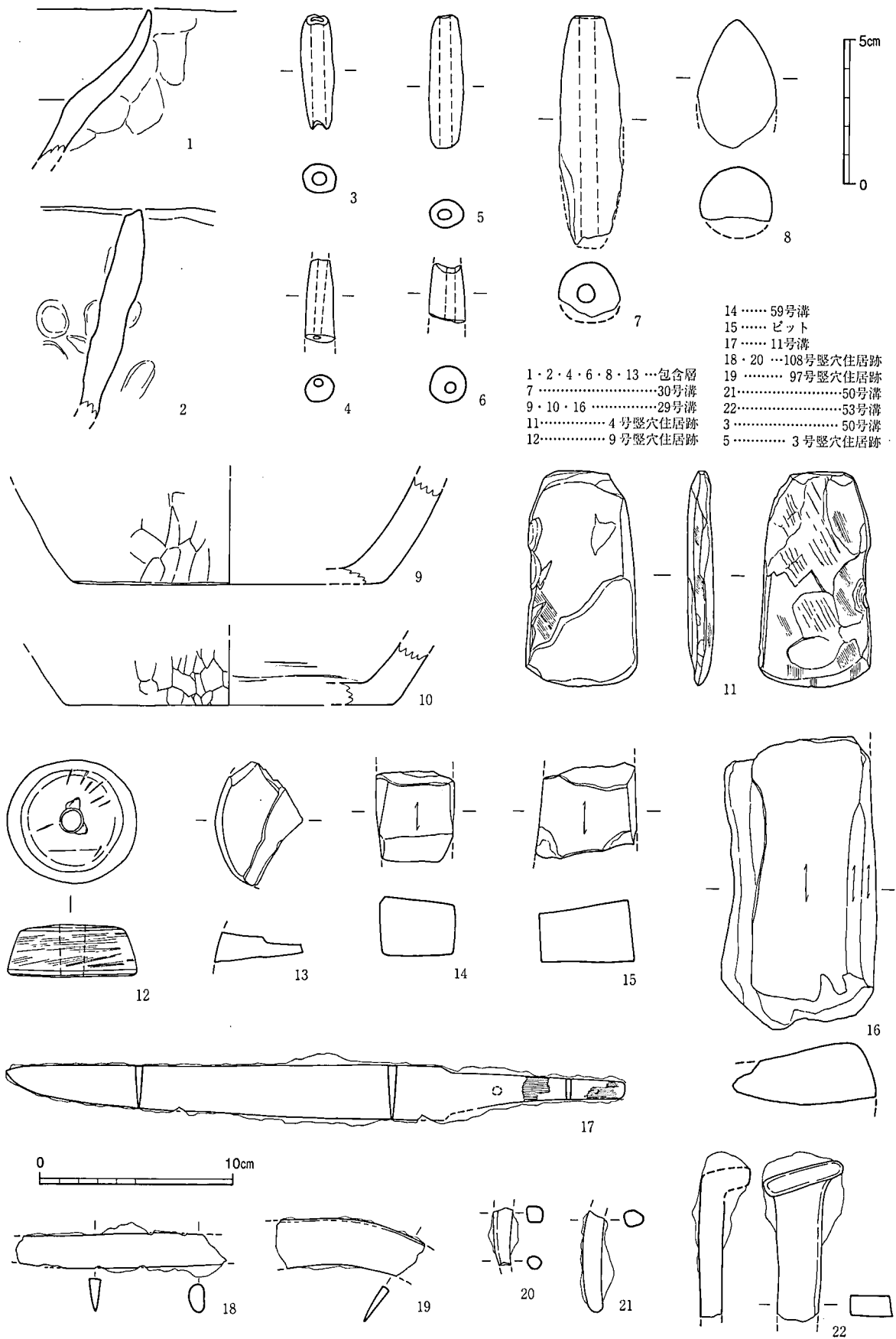
8 その他の遺物

土製品（図版61－1・2、第105図）

製塩土器（1・2）1は逆円錐形を呈する形造りによるものである。体部中位で一旦屈曲した後、口縁部が開く。内面の布目は摩滅によって消失するが、外面には指圧痕が残っている。2は円筒形を呈するもので、口縁が若干開く。内外面共に指圧痕が残る。

管状土錘（3～7）3～6は細長のもので、4は押圧痕が顕著である。他のものはナデで調整しており、6においては胎土が精良でナデも丁寧である。7は大型のもので、外面に押圧痕の痕跡が顕著で、胎土も粗悪である。

投弾（8）全体の約1/3の欠損する。黒灰色を呈する。



第105図 出土土製品・石製品・鉄器実測図 (9・10・17は1/3、他は1/2)

石製品 (図版61-3、62-1、第105図)

石鍋 (9・10) どちらも底部小片である。外面にはケズリの単位が明瞭で、9の内面は使用に寄る擦過が見られる。10の内面には工具痕がある。

磨製石斧 (11) 大まかな造りで、両面とも割れ面をそのままに磨いているため、未調整の部分が多い。刃部も僅かな範囲を磨いて使用している。側面の調整も磨ける部分のみ磨いたようである。硬質のものである。

紡錘車 (12・13) 12は滑石製のほぼ完形品で、良品である。側面にはケズリと磨きの擦過痕が見え、上下面も丁寧に磨く。13はやや軟質で、側面のみが残る。摩滅しており調整は見えない。

砥石 (14~16) 14・15は軟質のものでどちらも摩滅が激しい。16は硬質で、側面には擦過痕が顕著に残る。

鉄製品 (図版62-2・3、第105図)

小刀 (17) 刃部の一部を欠失するがほぼ完形に近い。柄部の一部にかろうじて木質が認められる。全体的に銹着が著しく、目釘穴や関部の形状は不明瞭である。

刀子 (18・19) 18はやや細型で、両端を欠く。19は若干内湾するため別のものかもしれない。錆化が激しく形状をつかみづらいが、どちらも細型のものと思われる。

釘 (20~22) 20・21は断面円形で小型のもの。錆による浸食が激しく、元来の形状をとどめない。22は断面長方形の折頭釘で、大型のもの。

挿図番号	種類	出土場所	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	
105図3	管状土錘	50号溝	3.9	1.1	0.5	4.2	
105図4	管状土錘	包含層	(2.9)	1.0	0.3	(3.0)	
105図5	管状土錘	3号竪穴住居跡	4.6	1.1	0.4	5.2	
105図6	管状土錘	包含層	2.1	1.2	0.3	(3.2)	
105図7	管状土錘	30号溝	8.0	2.1	0.5	27.6	
105図8	投弾	包含層	4.4	2.5	—	(15.6)	
挿図番号	種類	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
105図11	磨製石斧	4号竪穴住居跡	7.5	3.9	0.9	45.2	緑泥片岩か
105図12	紡錘車	9号竪穴住居跡	4.3	4.4	1.8	60.5	滑石
105図13	紡錘車	包含層	(4.3)	(3.1)	(1.0)	(16.5)	緑簾片岩か
105図14	砥石	59号溝	(3.2)	2.7	2.1	(26.3)	長石石英斑岩
105図15	砥石	ピット	(3.4)	3.5	2.2	(30.1)	長石石英斑岩
105図16	砥石	29号溝	(10.2)	(5.4)	(2.2)	(160.5)	雲母片岩
挿図番号	種類	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
105図17	小刀	11号溝	63.6	5.8	0.8	164.1	
105図18	刀子?	108号竪穴住居跡	(7.2)	1.2	0.4	(13.9)	
105図19	刀子?	97号竪穴住居跡	(5.2)	1.2	0.2	(11.3)	
105図20	不明	108号竪穴住居跡	(2.0)	0.6	0.6	(1.9)	
105図21	不明	50号溝	(3.6)	0.6	0.6	(3.1)	
105図22	不明	53号溝	(5.6)	2.8	0.8	(29.1)	

その他の遺物観察表

IV おわりに

以上、今回調査した船越高原A遺跡I区の前古墳時代以降の調査状況について述べてきた。都合3ヶ年に亘って調査を行ったが、調査の優先度が高い箇所があったり、路線を横断する道路などに分断されて、全面的な一括調査をできなかった。

ここでは前古墳時代以降の船越高原A遺跡I区の概観を述べることにしたい。

今回調査した前古墳時代以降の遺構は、竪穴住居跡69棟、掘立柱建物跡5棟、溝40条、土坑13基・竪穴状遺構5基、ピット等である。これらは大きく5世紀代・6世紀中頃・6世紀後半～7世紀初頭・7世紀代・8世紀前半・11世紀に分けられる。この中で最も多くを占めるが6世紀後半～7世紀初頭の住居であり、遺構は切り合いが多く前後関係の明らかなものが多いのではあるが、遺物を概観する上ではさほど時期差が見られない箇所もある。

まず5世紀代の遺構としては100・107号住居が挙げられる。いずれも第二遺構面からの検出で、調査区西部に位置する。長方形プランを有し、北壁にカマドを付設するものである。特に注目されるのは107号住居跡が焼失住居であり、土師器甕が使用状況のままに検出されていることである。また床面には炭化材と炭化した植物の茎が出土しており、上部構造の材の復原や住居内空間の使用方法など、多くの情報を内包している。

6世紀中頃の住居跡としては31・93号住居が挙げられる。いずれも4m以下の方形プランを呈するやや小型の住居である。カマドは北壁に付設し、袖を直接壁に貼り付ける。このほか、遺物の出土していない10・35・36号住居跡もこの時期にはいるものと思われる。

I区集落のほとんどを占める6世紀後半から7世紀初頭の遺構群は、調査区の中央部に集中する。特に切り合いの激しい箇所では方位や規模・構造を見ると、建て替えの可能性が考えられる。また、中軸線が少しずつ異なっており、この違いによって集落の時期や状況が窺えるかと思われるが、現在検討中で結果を出すまでには至っていない。竪穴住居跡で特筆するのは、まず113号住居である。横長長方形のプランを呈するやや大型の住居であるが、カマドを西に付設し、壁際に柱列が並ぶもので、畿内で検出される大壁造りの住居に似たものである。当初の検出では下層の柱穴群を確認できなかったため、別々の調査となってしまい、全体の状況はややつかみにくい。類似の遺構は三井郡大刀洗町の下高橋馬屋元遺跡においても調査されているが、これは弥生時代のものである。113号住居については、前述したようにカマドの下からも柱穴が検出されたことから、建て替えの可能性もあり、遺物もほとんど出土していないことから柱の存在した時期については確実ではない。しかし、住居床面と柱穴群のプランが同規模であり、レベル差がさほど無いことから、時間差が大きくあるとは思えない。これは他の住居と中軸線の方位が同じであることから言える。ただ、大壁住居と同様大小の柱を交互に建てるなど、共通点があることは、注目すべきである。以南の調査を待ちたい。他には一棟のみ検出した掘立柱建物が注目される。これは方位や埋土の状況から住居群との同時期と思われ、集落内での共同の建物等も考えられる。このほか特筆すべきは、10号溝の存在である。出土遺物は少量ではあるが、埋土や検出状況から住居群と同時期と考えられる。この時期の住居群を区画するものの可能性が強い。調査区西側にも同時期の溝が複数走るが、この周囲では住居跡の数が激減し、集落のはずれとも考えられる。南北に関しては未調査であるため確定はできないが、今後の調査で何らかの見解が得られることと思う。また、当地は筑後川の氾濫による水害が多く、これに際して現代まで多くの水路が引かれている。前年度調査の船越二ノ上遺跡におい

ても弥生時代から奈良時代までの水路を多数調査しており、これらに関係するものとも思われる。また、奈良時代の条里が顕著に残る地域でもあり、12号溝もこの条里に合うことから、後世まで区画溝として使用されていたことが窺える。

7世紀代の遺構としては22・24・89・90・95・99・102号竪穴住居跡が挙げられる。102号住居以外は一辺3.8～4.0mの方形もしくは長方形を呈し、中軸線が前時代の住居群より若干西に振れる傾向がある。これらは調査区西側に存在するが、これが集落の移動に伴うものか、東半部の削平によるものかは判断できない。しかし住居数は明らかに減少しており、集落の移動は考え得る。カマドの形態としては突出気味のものが増加する。

8世紀代の遺構としては3・23・24・59・91・94・97・98号竪穴住居跡が挙げられる。これらも前述の7世紀代と同様調査区西部に位置しており、一辺3～5mの方形プランの住居である。大小の規模のものが存在するが全体的に縮小化が進んでいるようにも見え、中軸線はやや東へ戻るものが多い。カマドは北壁に付設し、突出型のものが増加する。

中世の遺構としてはほとんどの溝と、方位を同じにする掘立柱建物跡群が挙げられる。溝については前述の10号溝と方位を同じにするものが多く、条里や筑後川からの水路によるものが多いと思われる。出土遺物の少量のものもあり、時期について明確なことは言えないが、条里以降中世から現代にかけて使用されたものがあると思われる。

ところで、上述してきた5～8世紀代の竪穴住居跡にはカマドを付設するものがほとんどで、多種多様な形式が見て取れる。これは時期差に拠るものと考えられるが、切り合いから見て不合理なものもあり、遺構検出時の取り違えの可能性も考えられる。遺物が少量であり、時期確定の難しいものもあることから、切り合いの激しい部分については検討の余地があると思われる。

以上のように調査区内の状況について概観したが、遺構数の割には全体の状況をつかんだとは言えない。I区内において区画溝を検出したことや遺構の集中度から見て、一個単位の集落がほとんど包含されていることが考えられるが、道路建設に伴う調査であることから、東西に長い調査区であり南北の地区については今後の調査を待ちたい。

これで船越高原A遺跡I区古墳時代以降の調査報告を終える。検討が不十分であることが否めないが、今後の検討課題とすることでご容赦願いたい。



現場作業風景

圖 版



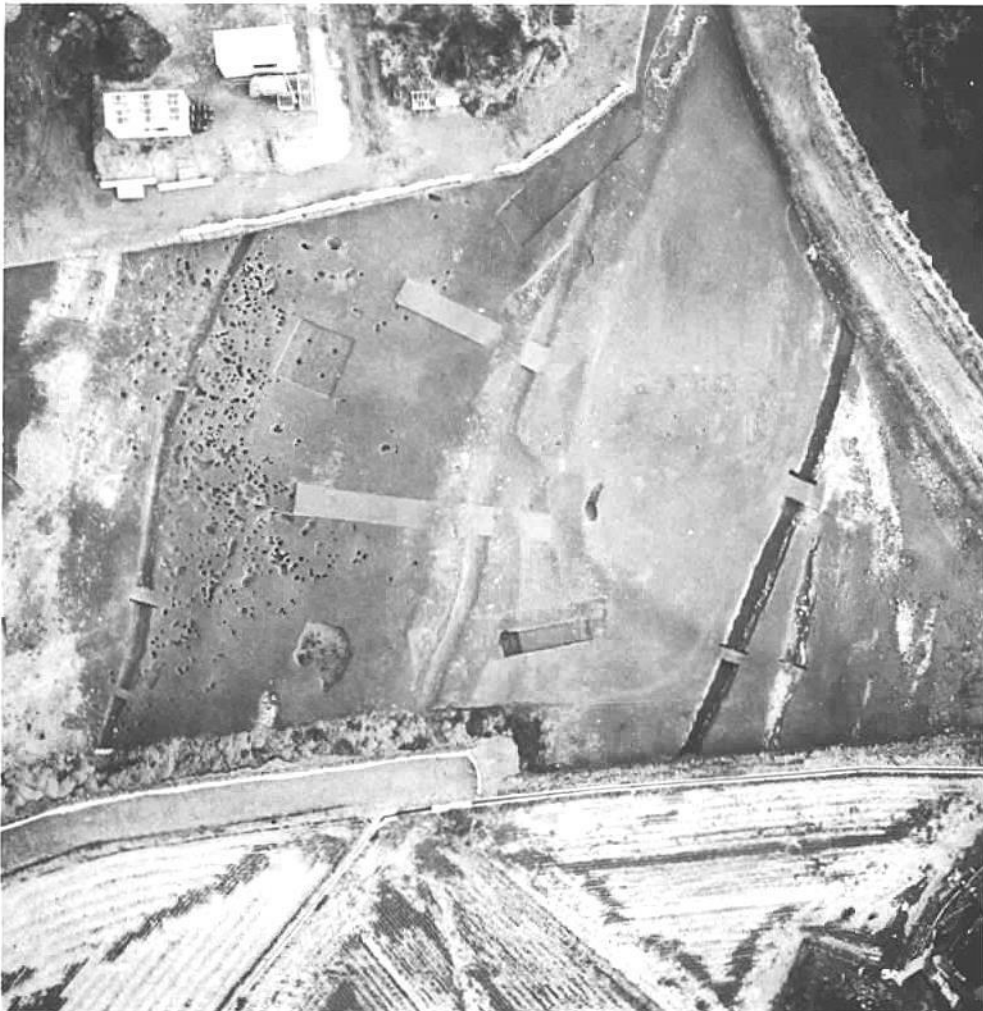
1 I区第一遺構面中央部分全景（西から）



2 I区第一遺構面東部分全景（東から）



1 I区第一遺構面東部分
全景（空中写真）



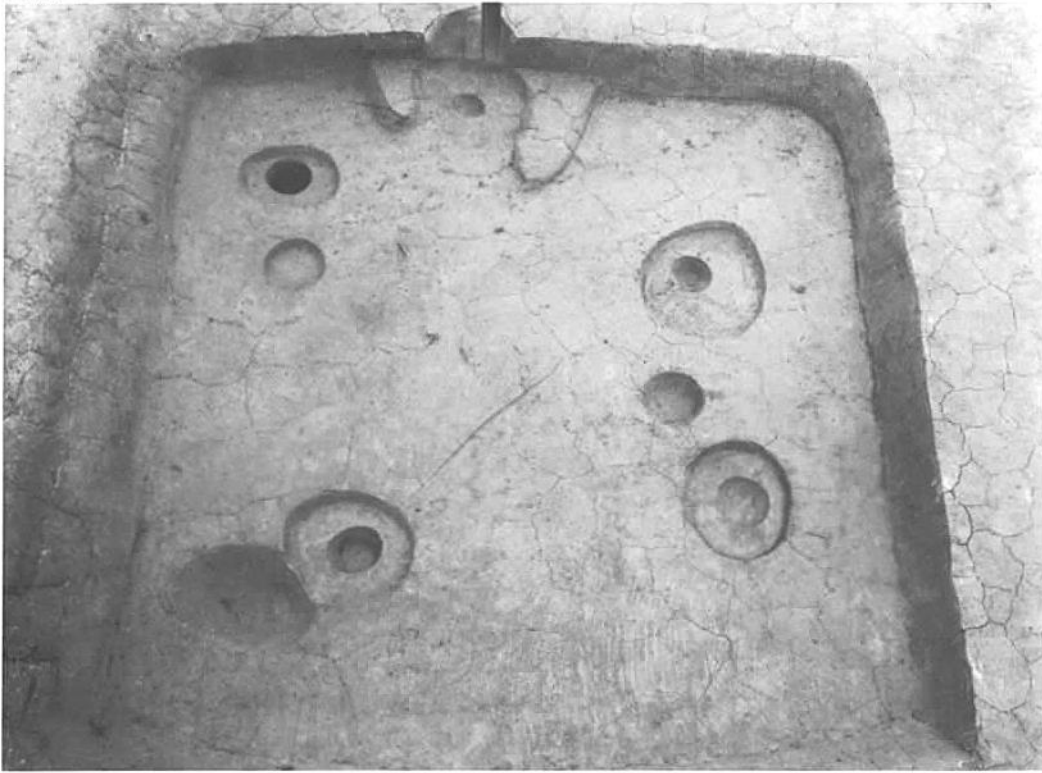
2 I区第一遺構面東端部
全景（空中写真）



1 I区第一遺構面西端部全景
(南から)



2 I区第一遺構面西部分全景
(北から)



1 1号竪穴住居跡
(北から)



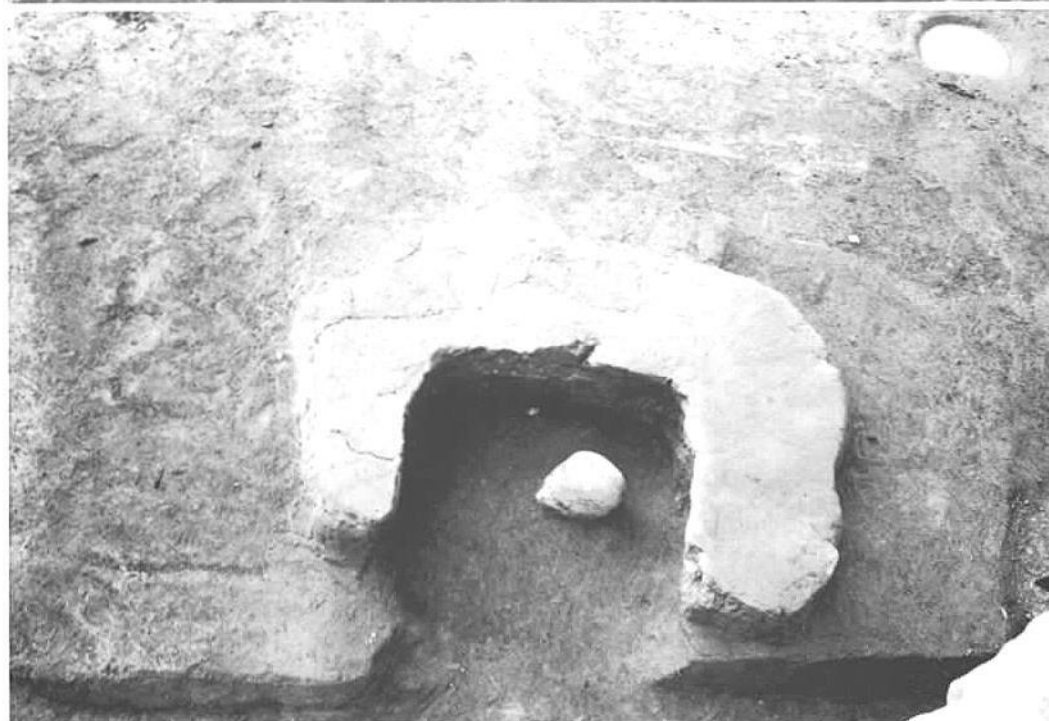
2 1号竪穴住居跡
カマド(北から)



3 2号竪穴住居跡
(西から)



1 3号豎穴住居跡
(南から)



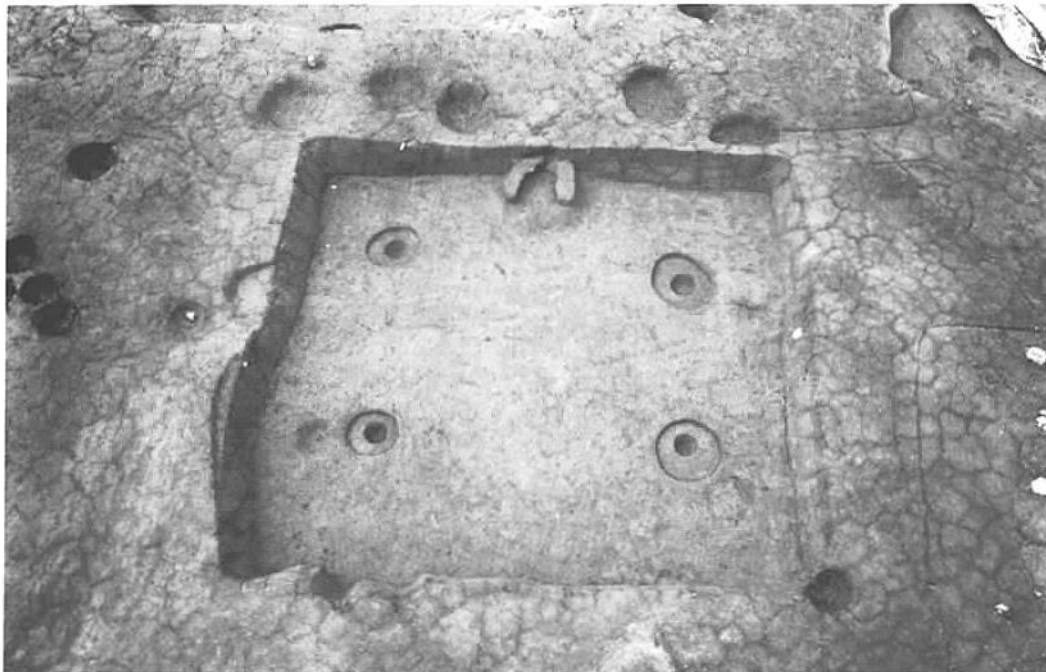
2 3号豎穴住居跡
カマド(南から)



3 4号豎穴住居跡
(南から)



1 4号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 5号竪穴住居跡
（南から）



3 5号竪穴住居跡
カマド（南から）

1 6号竪穴住居跡
(南から)



2 6号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 7号竪穴住居跡
(南から)





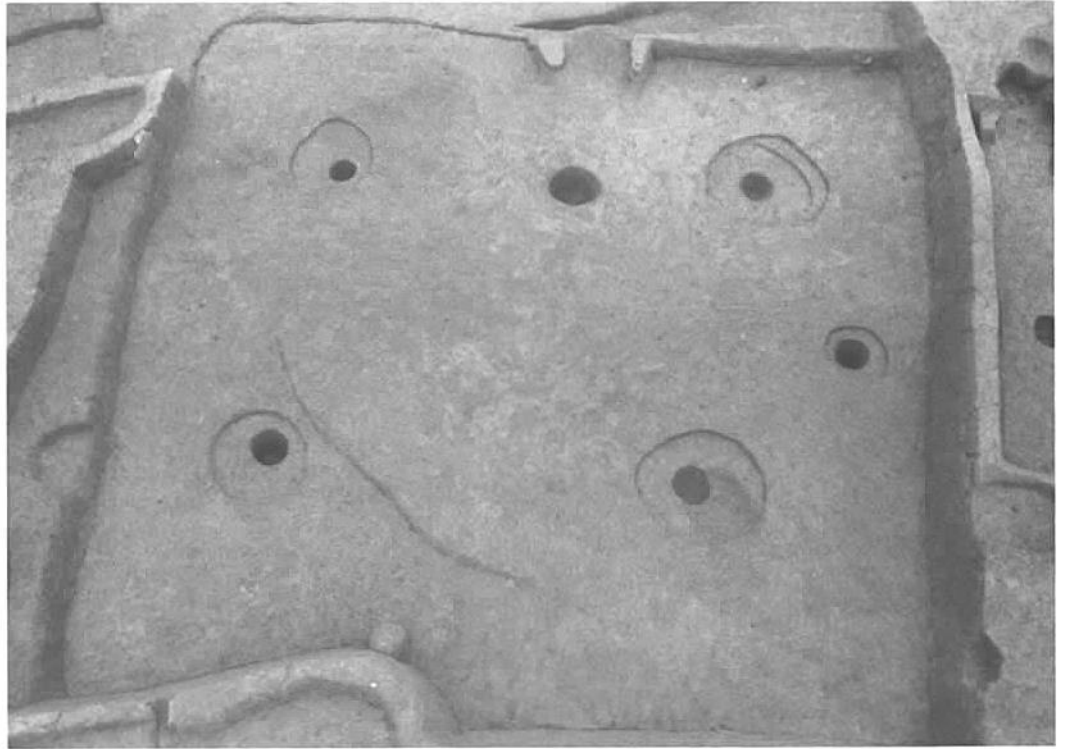
1 7号竪穴住居跡
カマド (南から)



2 8号竪穴住居跡
(南から)



3 8号竪穴住居跡
カマド (南から)



1 9号竪穴住居跡
(南から)



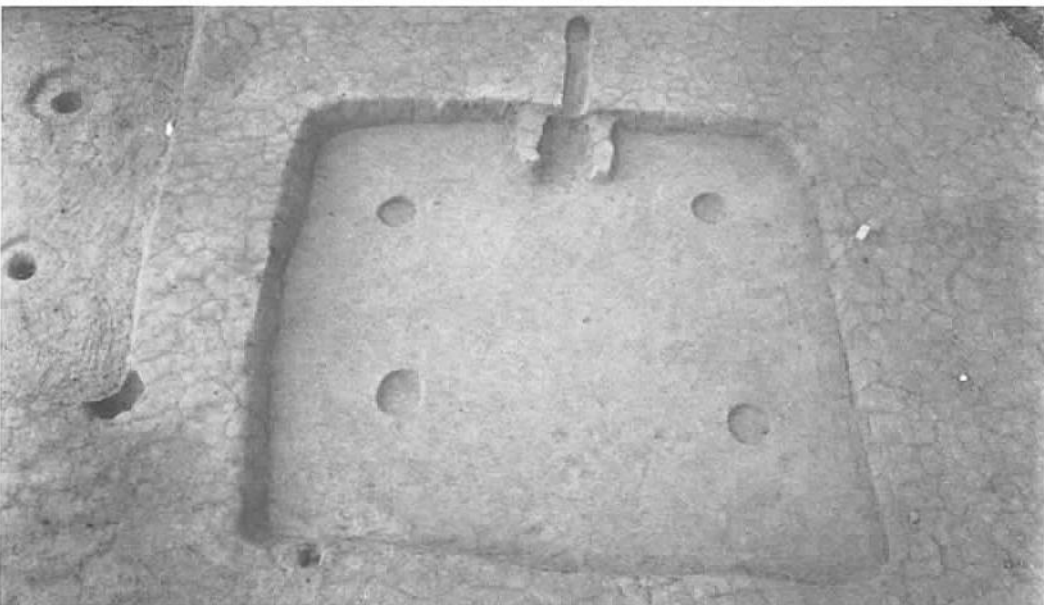
2 9号竪穴住居跡
カマド(南から)



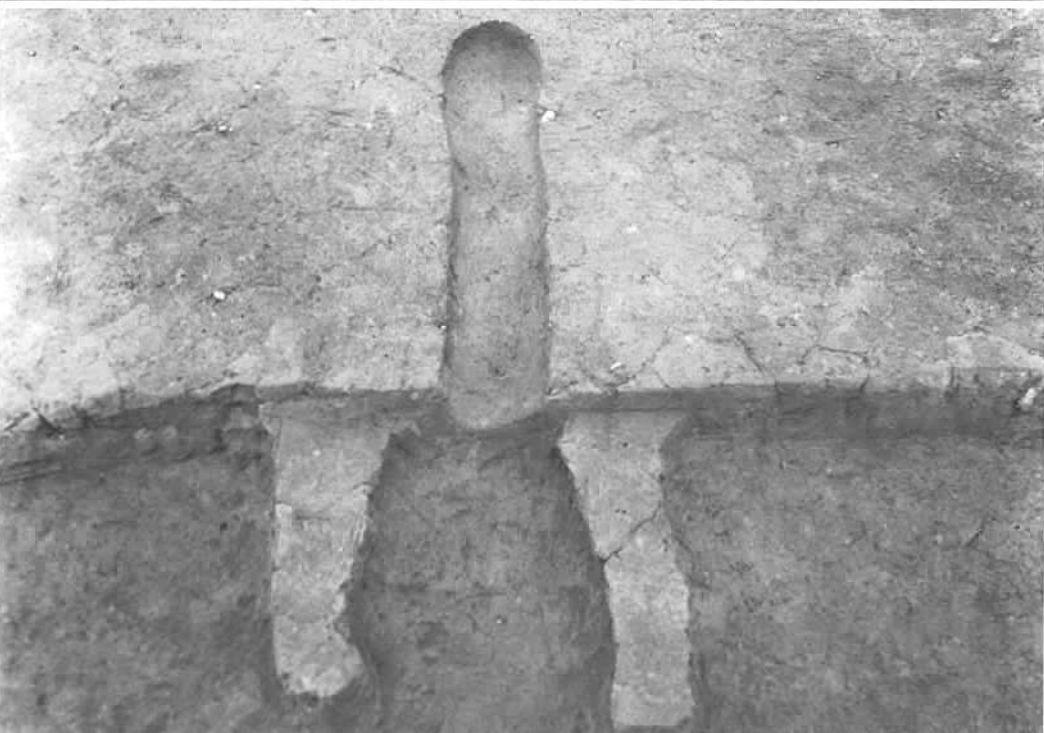
3 10号竪穴住居跡
(南から)



1 10号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 11号竪穴住居跡
（南から）



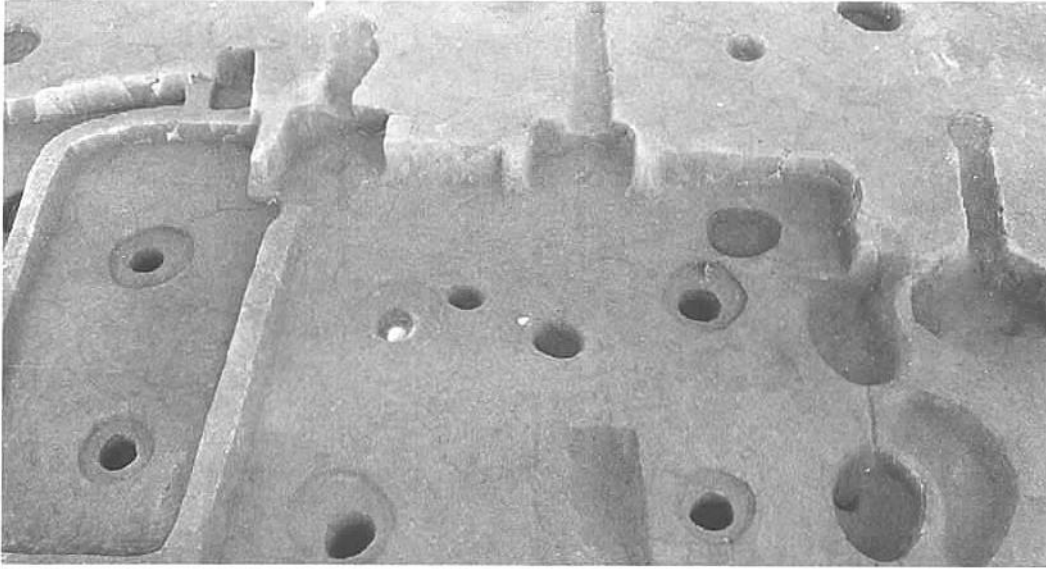
3 11号竪穴住居跡
カマド（南から）



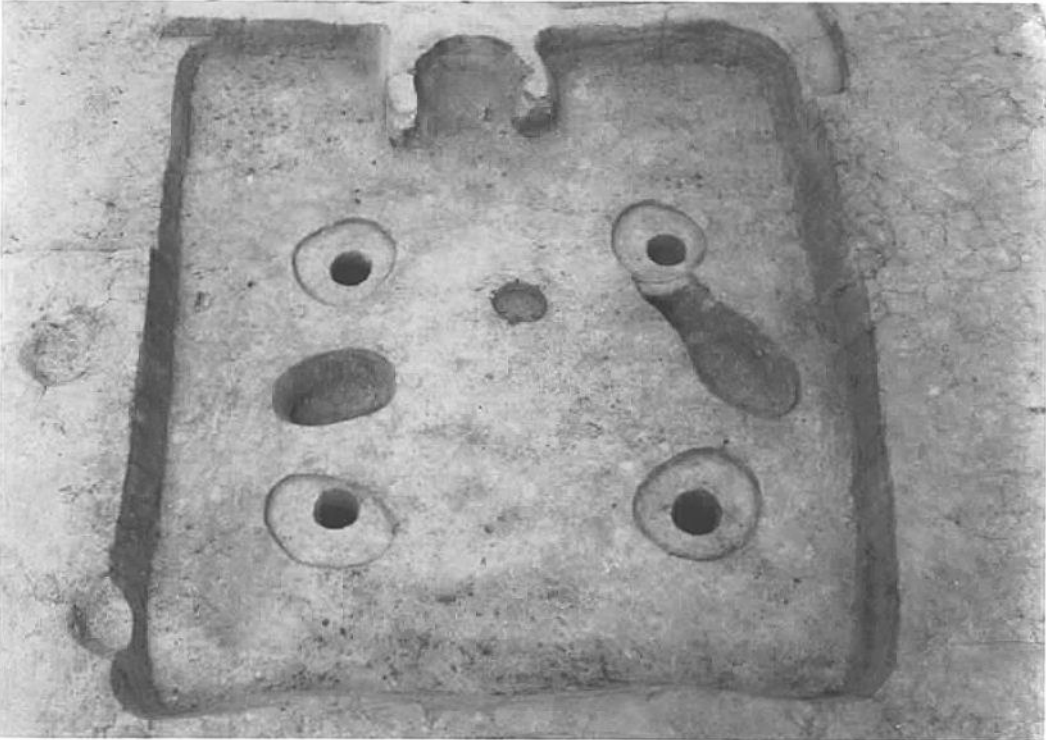
1 12号竪穴住居跡
(南から)



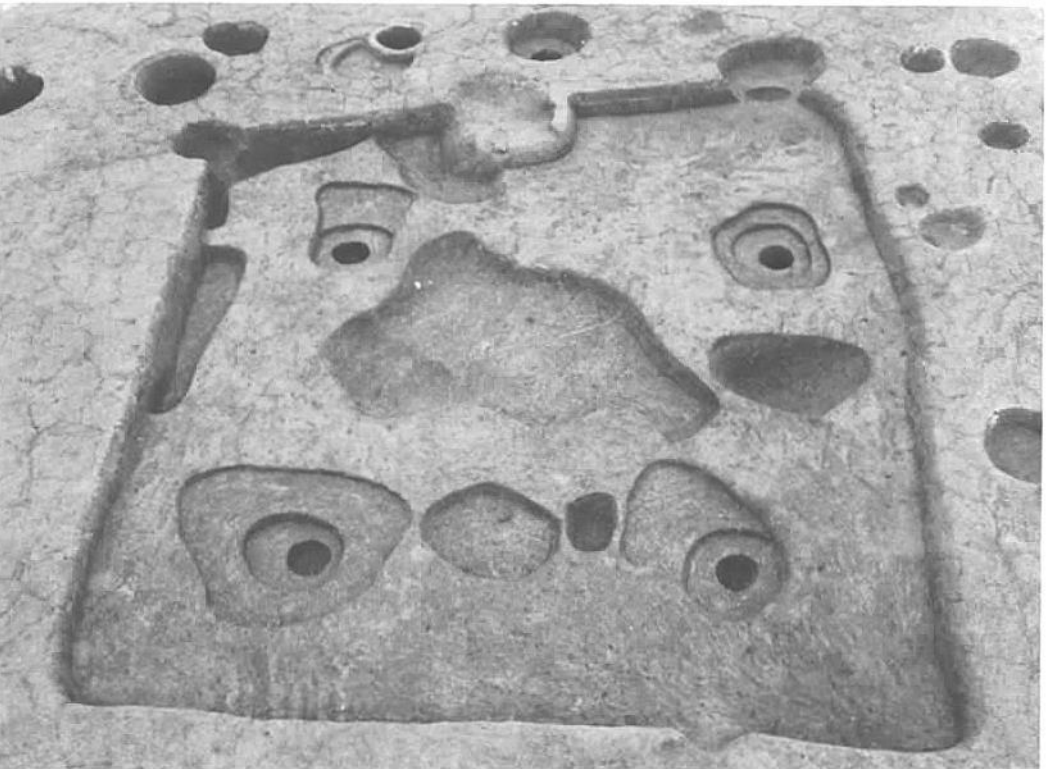
2 12号竪穴住居跡
カマド (南から)



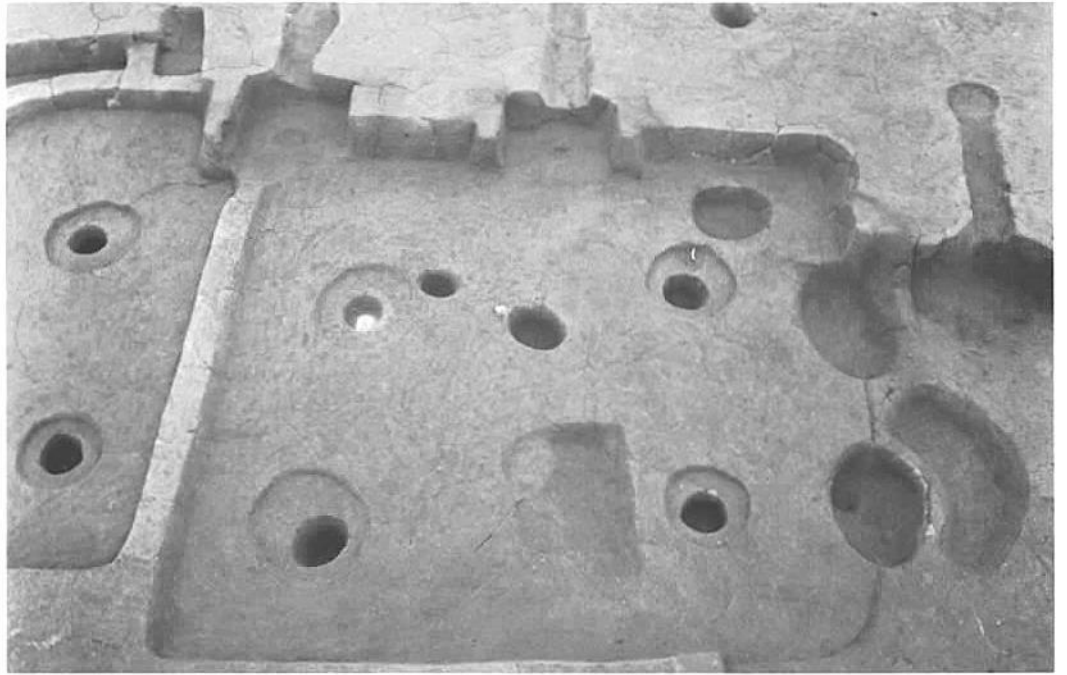
1 12・15・16・34
竪穴住居検出状況



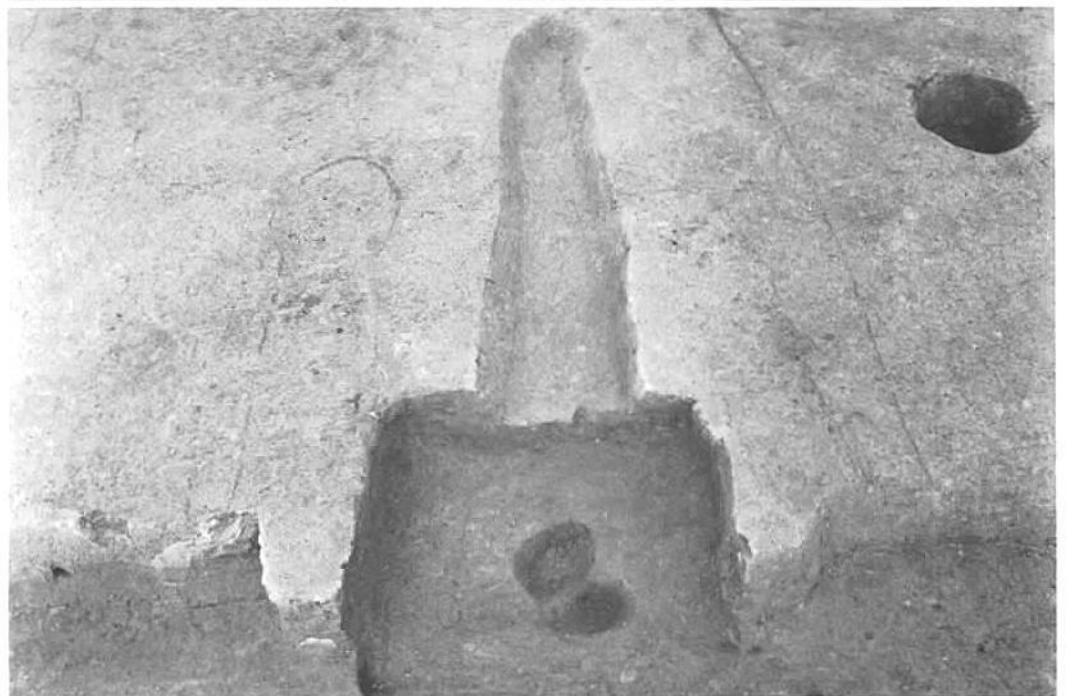
2 13号竪穴住居跡
(南から)



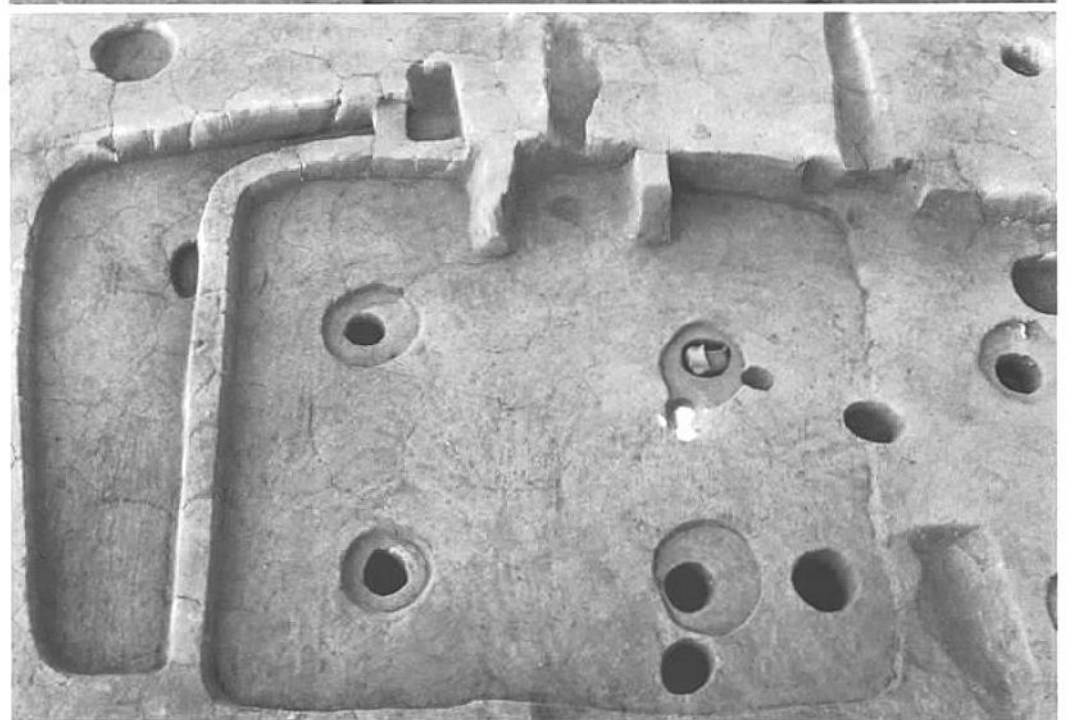
3 14号竪穴住居跡
(南から)



1 15号竪穴住居跡
(南から)



2 15号竪穴住居跡
カマド(南から)



3 16号竪穴住居跡
(南から)



1 16号竪穴住居跡
カマド (南から)

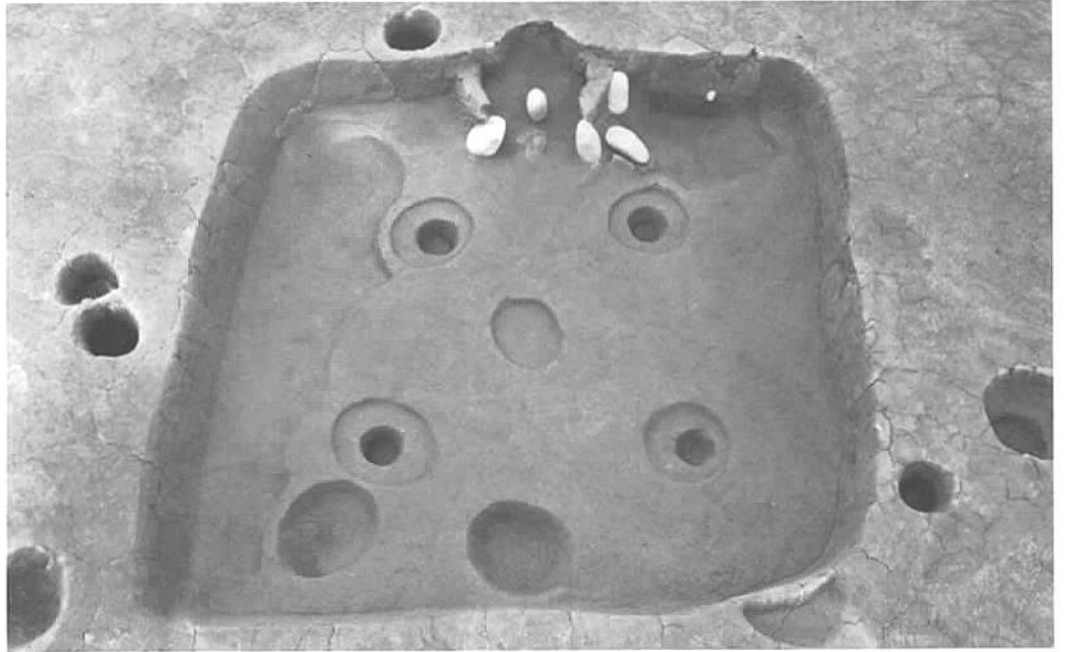


2 17号竪穴住居跡
(南から)

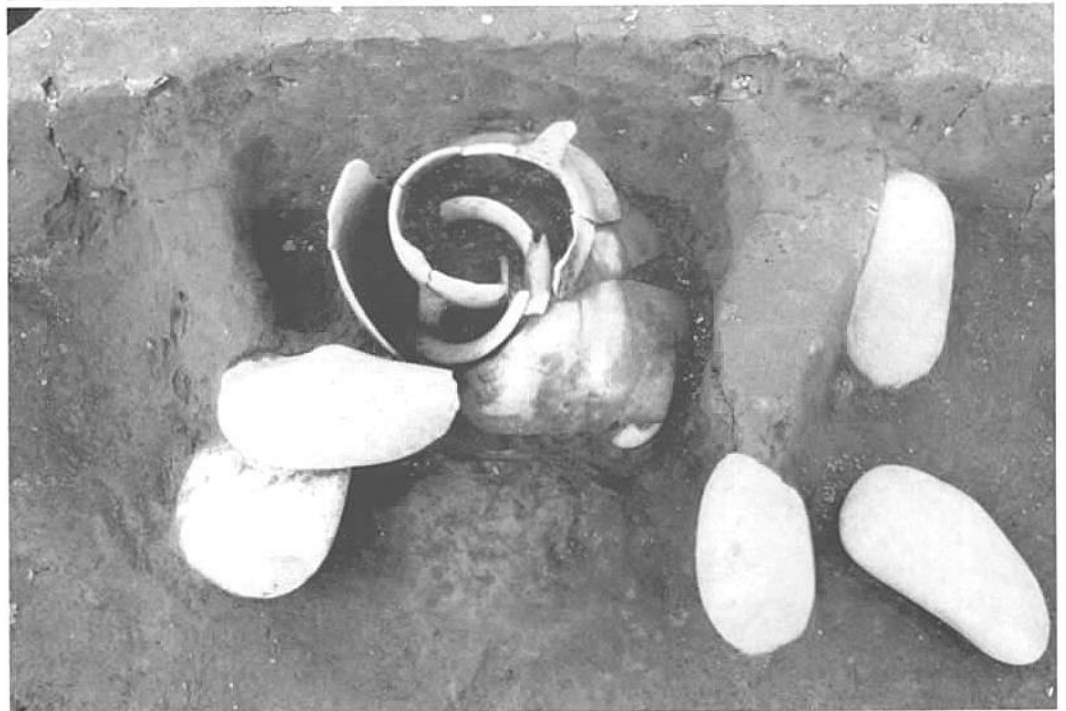


3 18号竪穴住居跡
(南から)

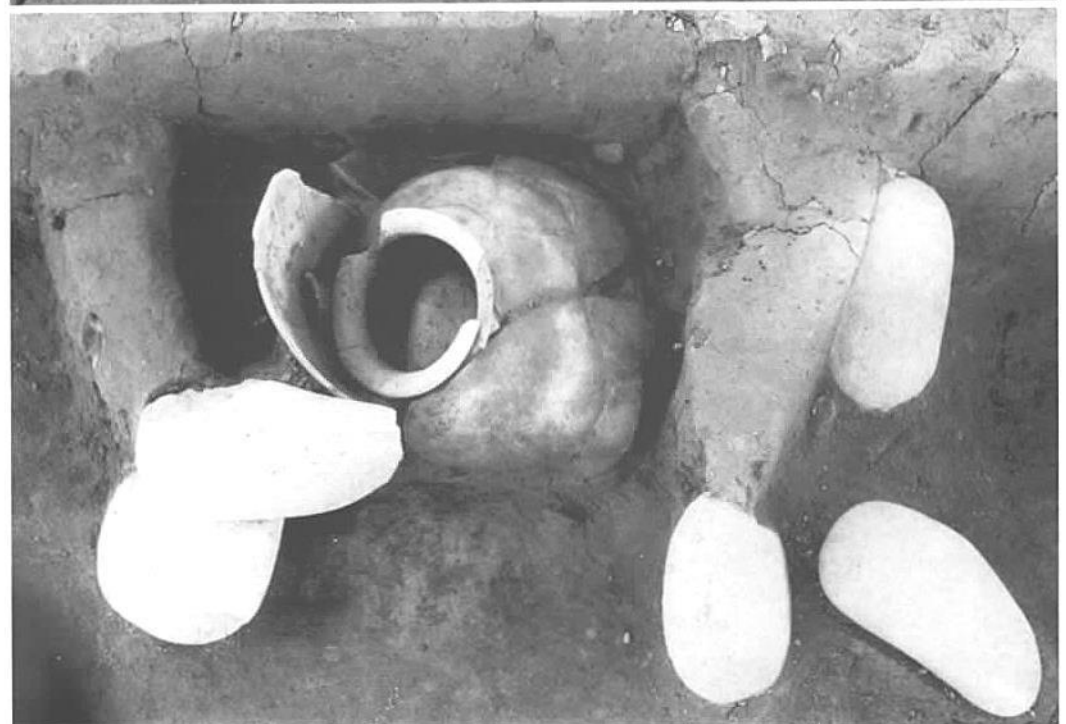
1 19号竪穴住居跡
(南から)

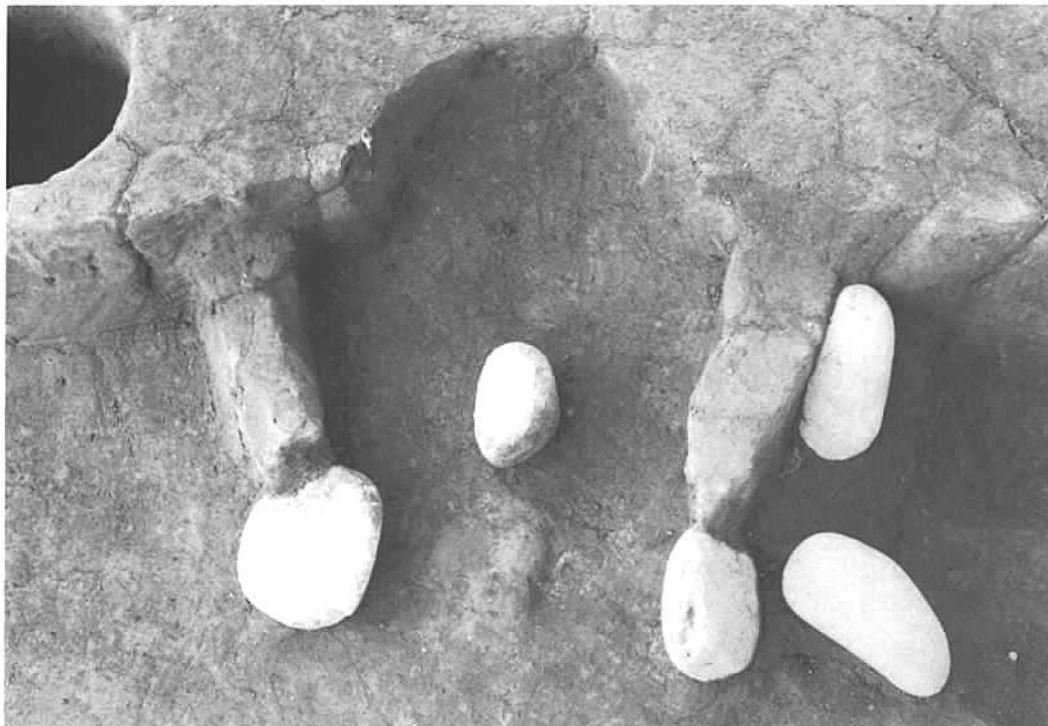


2 19号竪穴住居跡
カマド土器出土状況
① (南から)



3 19号竪穴住居跡
カマド土器出土状況
② (南から)

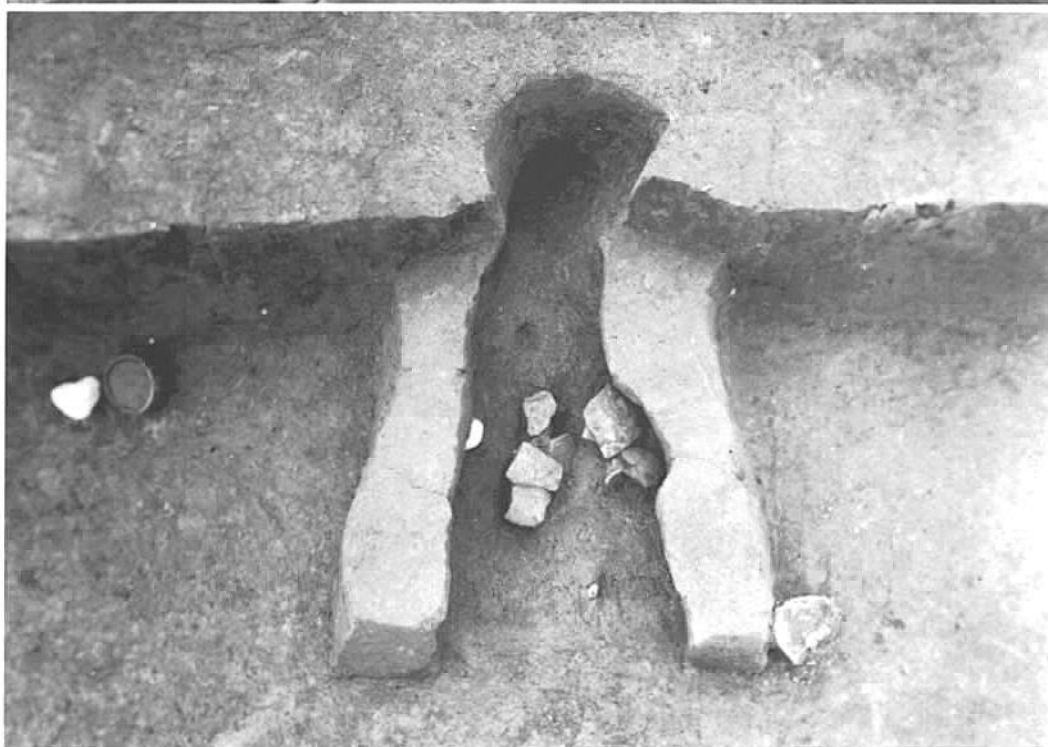




1 19号竪穴住居跡
カマド（南から）



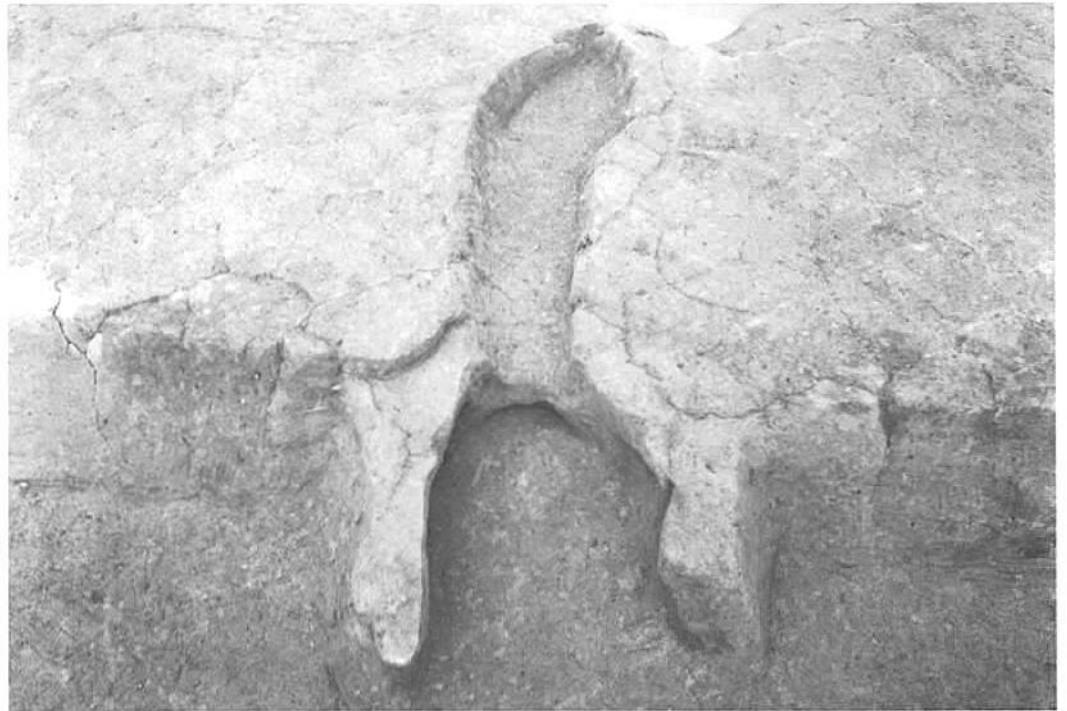
2 20号竪穴住居跡
（南から）



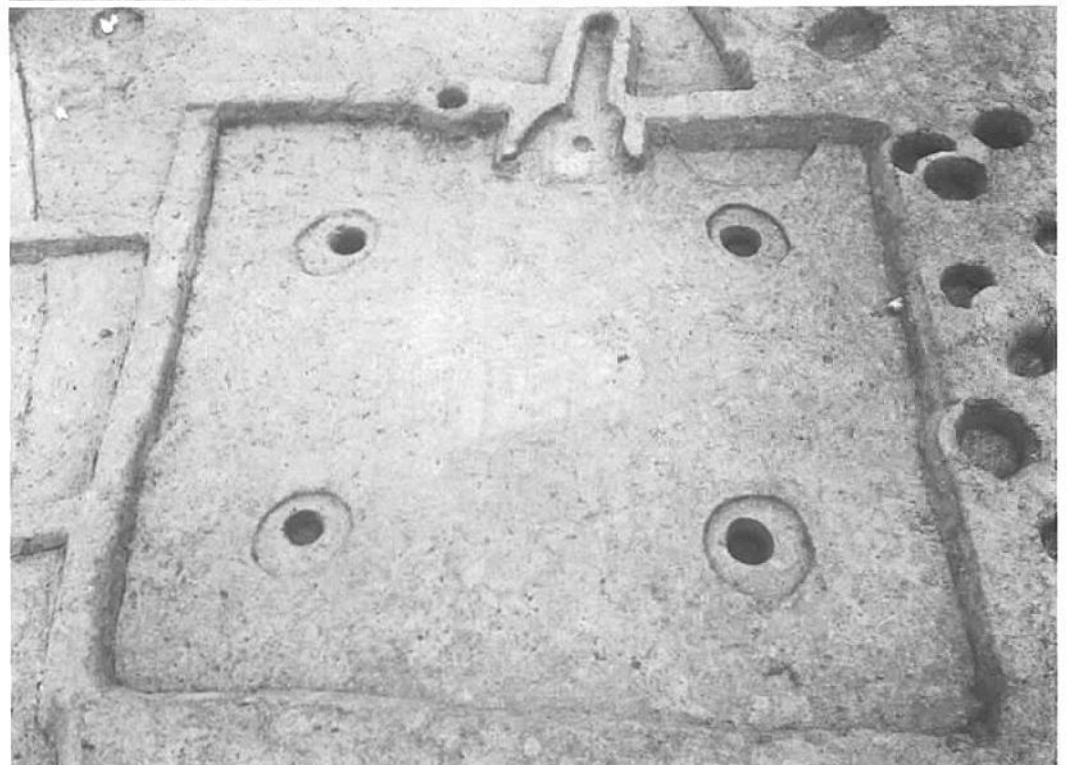
3 20号竪穴住居跡
カマド（南から）



1 21号竪穴住居跡
(南から)



2 21号竪穴住居跡
カマド (南から)



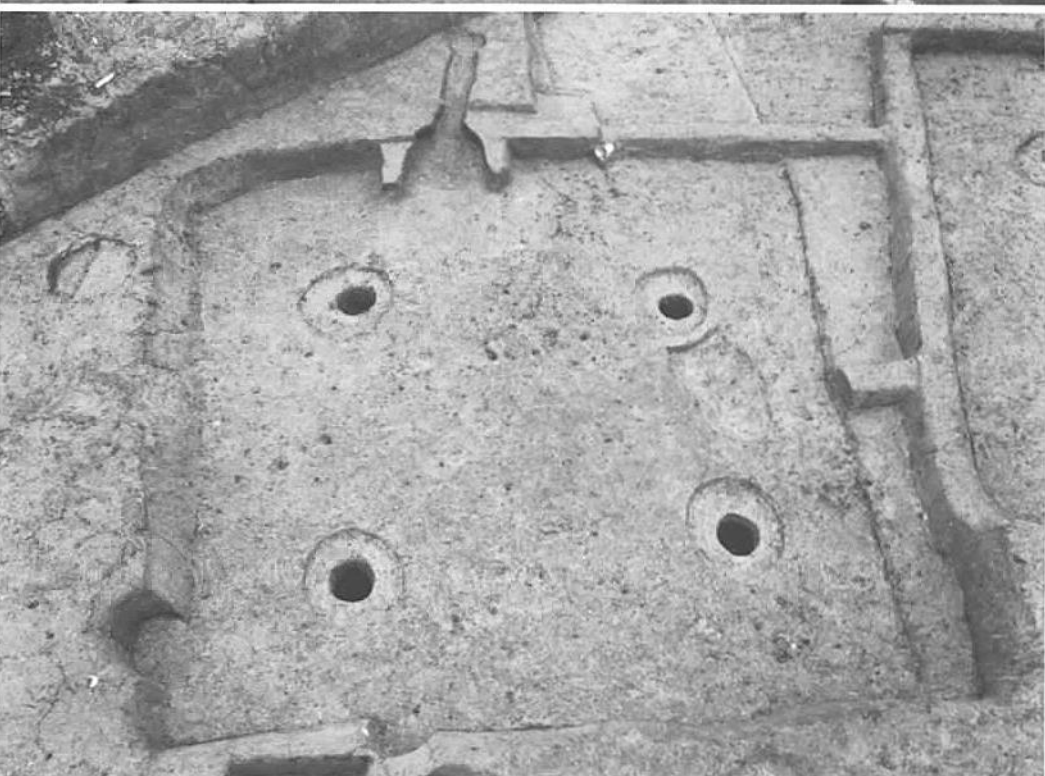
3 22号竪穴住居跡
(南から)



1 22号竪穴住居跡
カマド（南から）



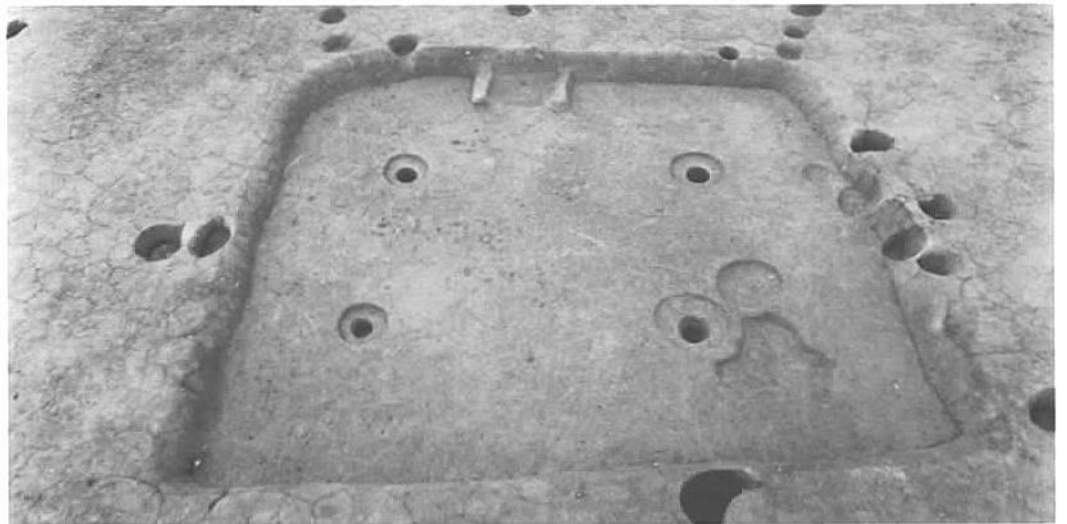
2 23号竪穴住居跡
（南から）



3 24号竪穴住居跡
（南から）



1 24号竪穴住居跡
カマド (南から)



2 25号竪穴住居跡
(南から)



3 26号竪穴住居跡
(南から)



1 26号竪穴住居跡
カマド（南から）



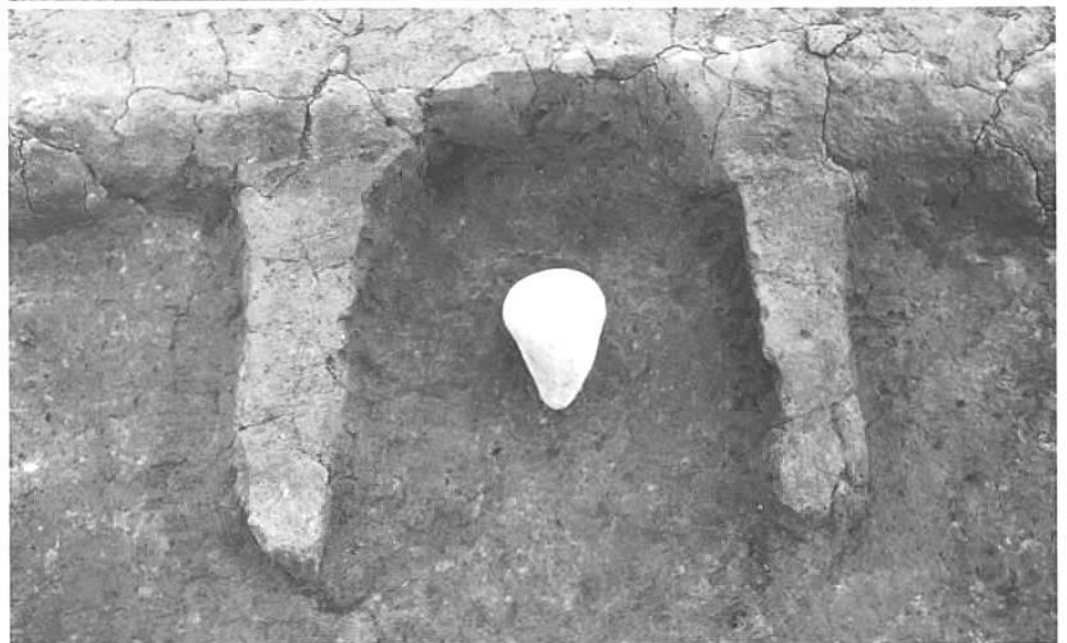
2 27号竪穴住居跡
（西から）



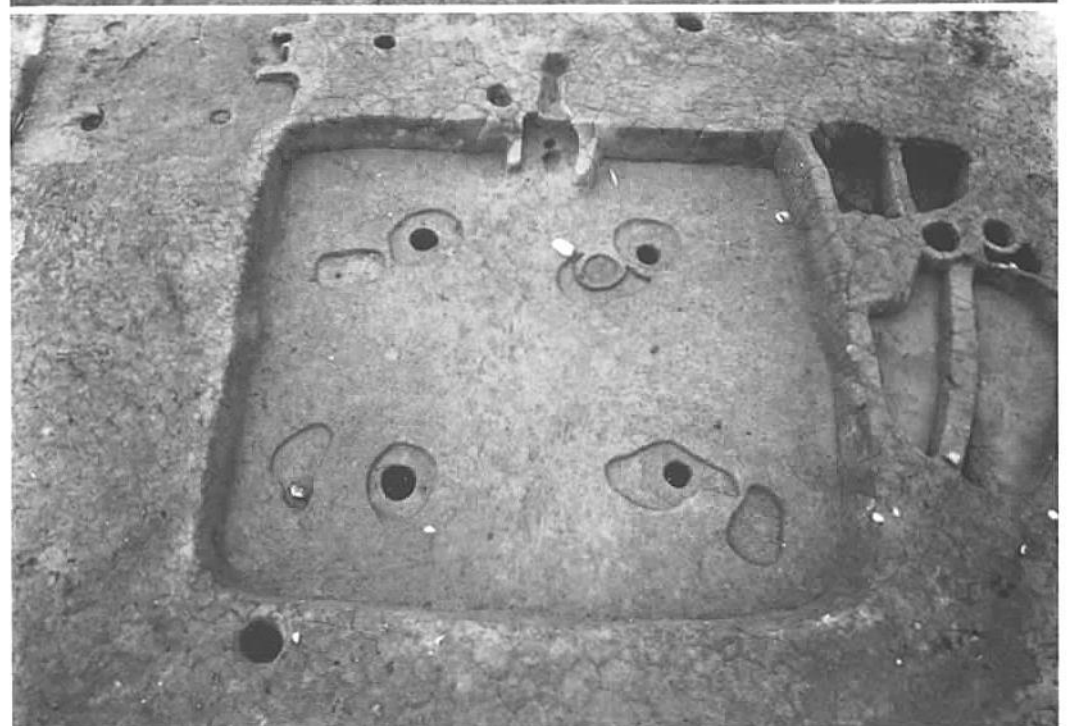
3 27号竪穴住居跡
カマド（西から）



1 28号竪穴住居跡
(南から)



2 28号竪穴住居跡
カマド (南から)



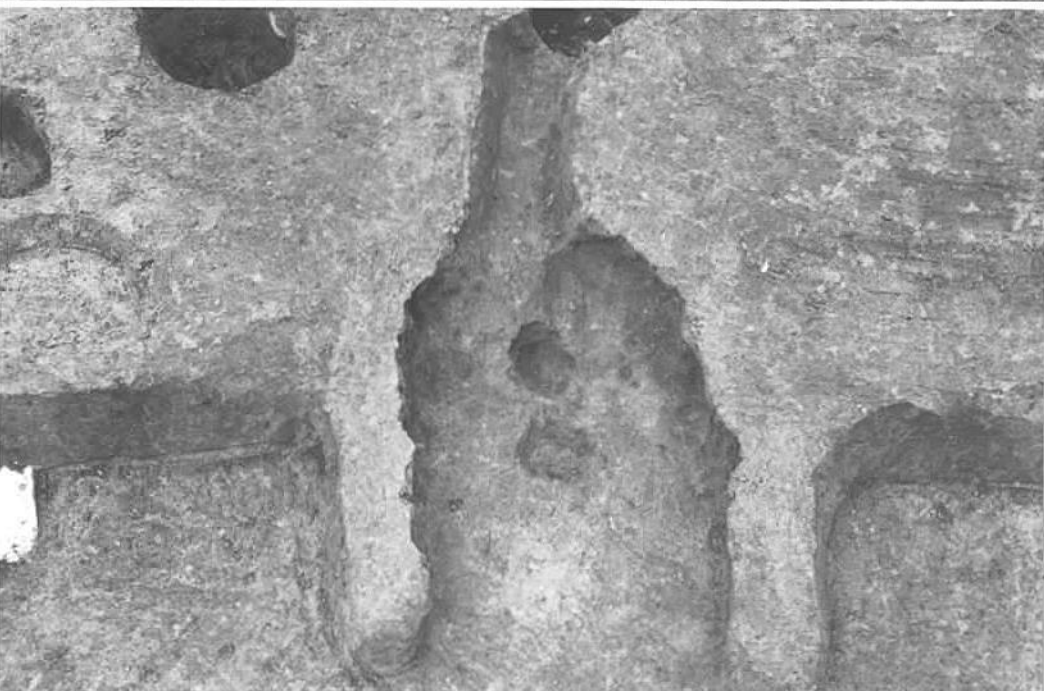
3 29号竪穴住居跡
(南から)



1 29号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 30号竪穴住居跡
（南から）



3 30号竪穴住居跡
カマド（南から）

1 31号竪穴住居跡
(南から)

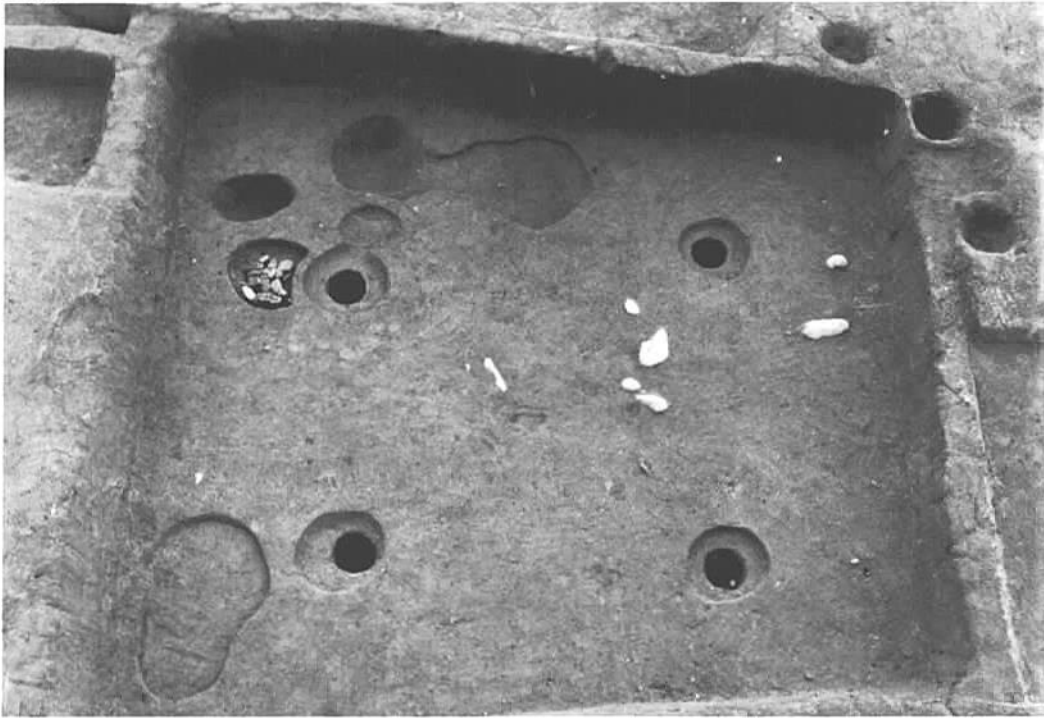


2 31号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 32号竪穴住居跡
(東から)

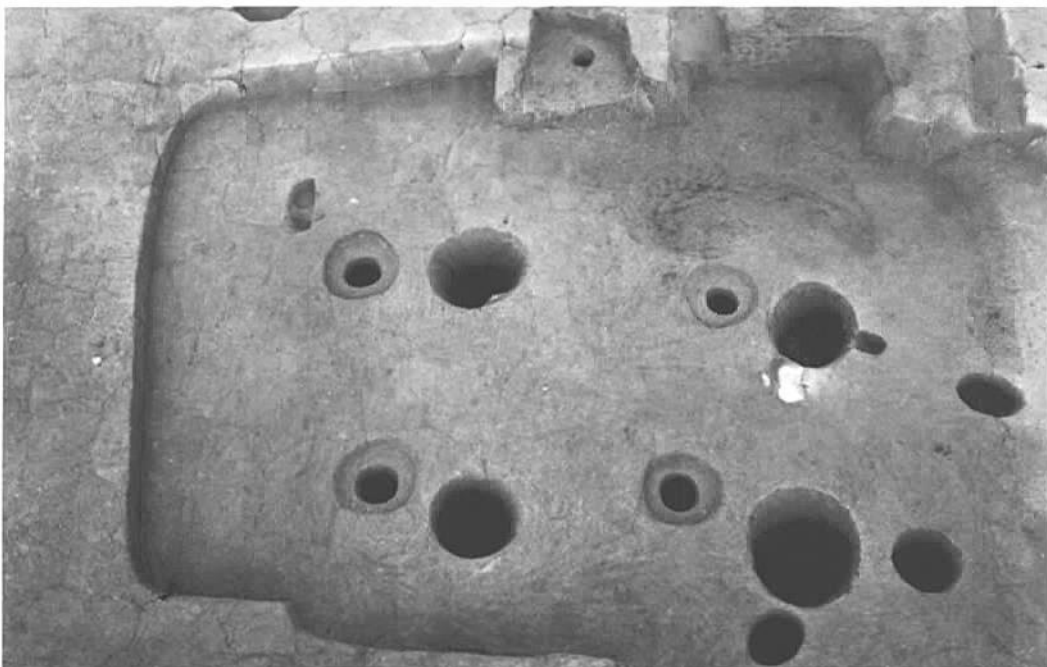




1 33号竪穴住居跡
(東から)



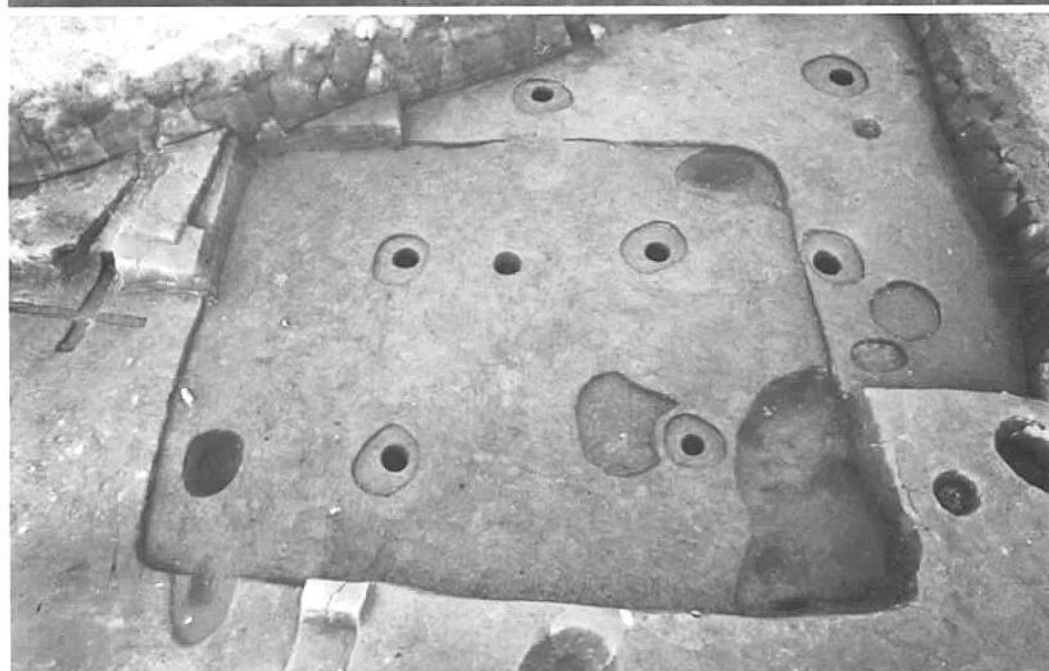
2 33号竪穴住居跡
土器溜 (東から)



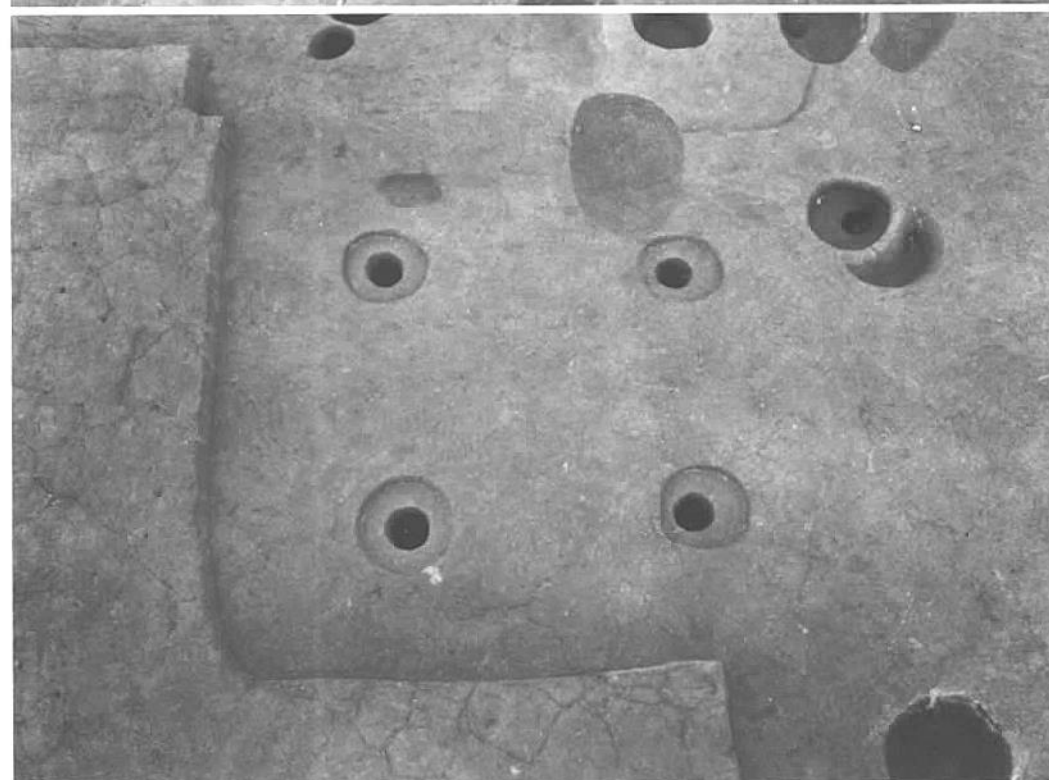
3 34号竪穴住居跡
(南から)



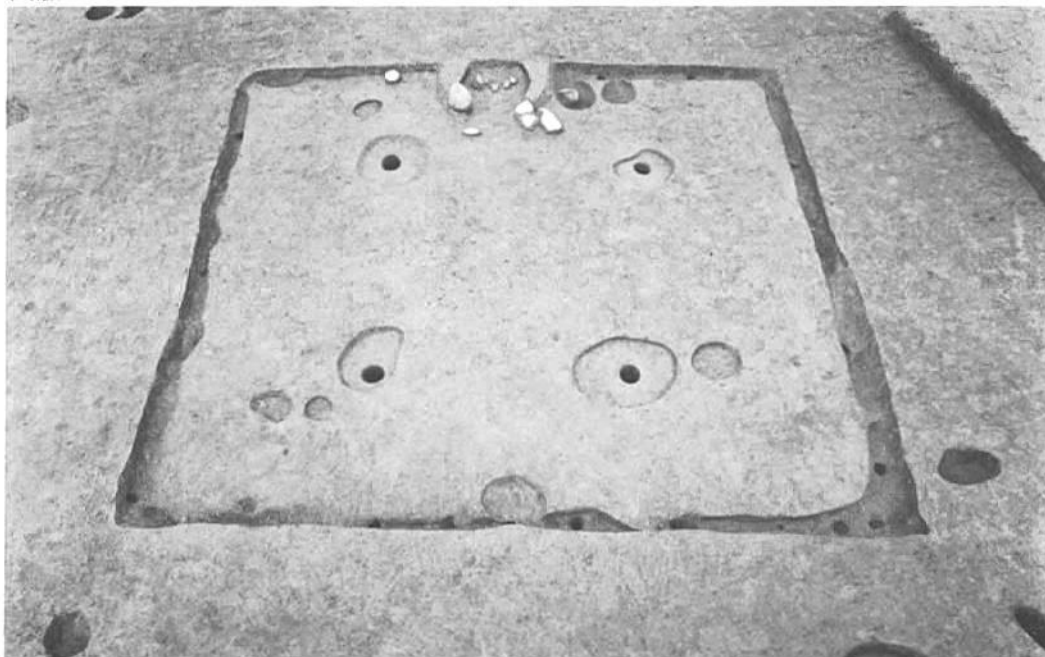
1 34号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 35号竪穴住居跡
（南から）



3 36号竪穴住居跡
（南から）



1 43号竪穴住居跡
(西から)



2 43号竪穴住居跡
カマド (西から)



3 44号竪穴住居跡
(東から)



1 44号竪穴住居跡
カマド（東から）



2 45号竪穴住居跡
（南から）



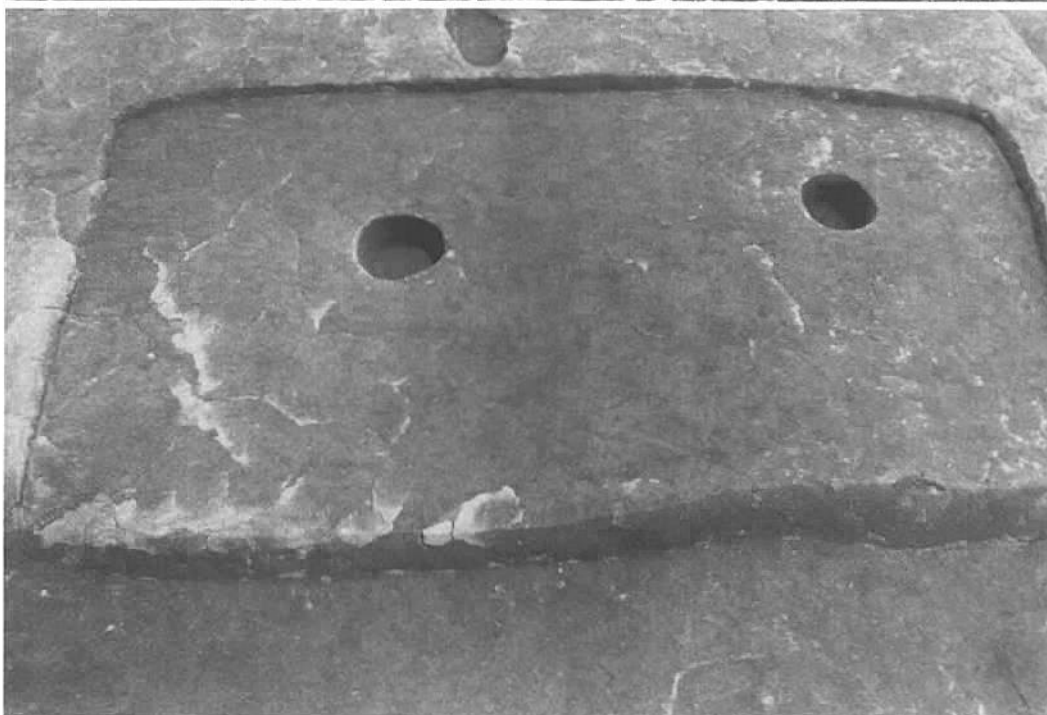
3 46号竪穴住居跡
（南から）



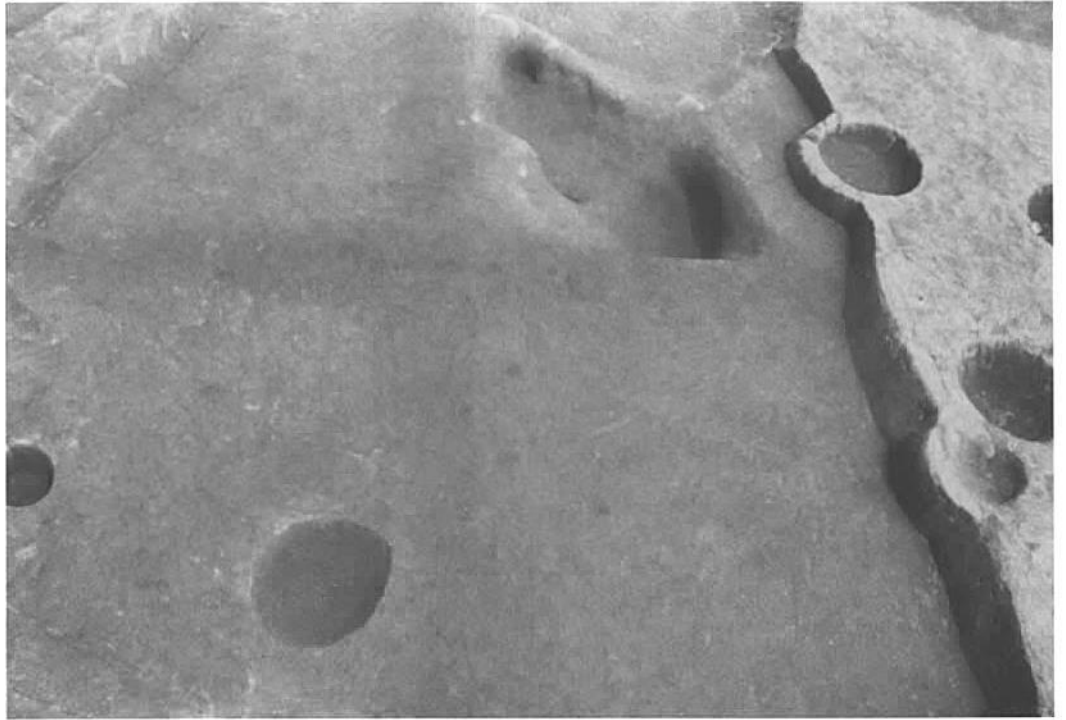
1 46号竪穴住居跡
カマド（南から）



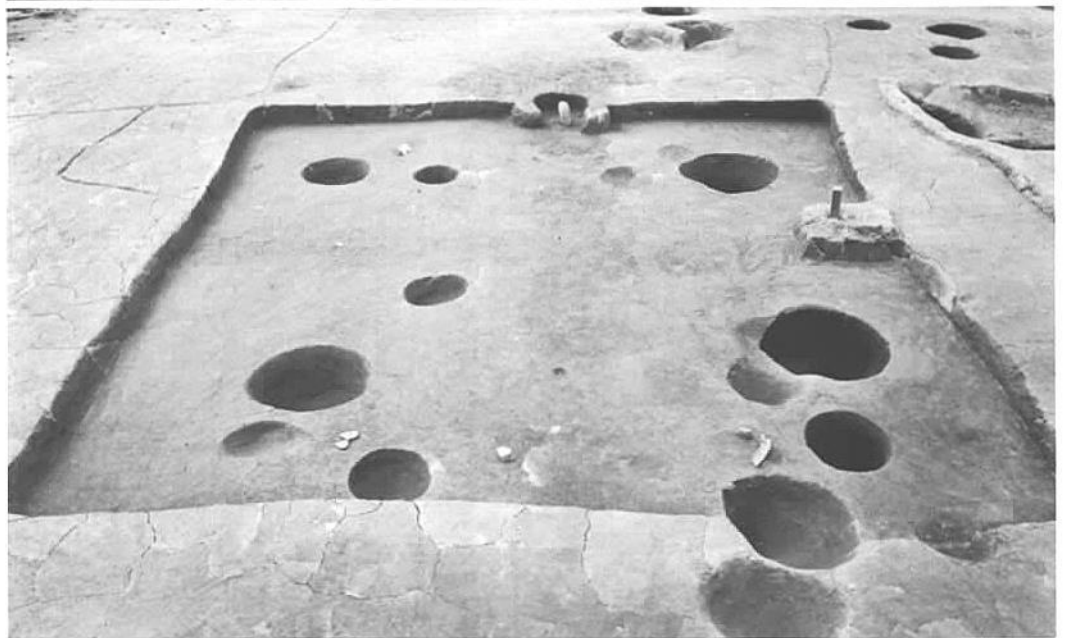
2 47号竪穴住居跡
（南から）



3 48号竪穴住居跡
（西から）



1 49号竪穴住居跡
(西から)



2 50号竪穴住居跡
(東から)



3 50号竪穴住居跡
カマド (東から)



1 51号竪穴住居跡
(南西から)



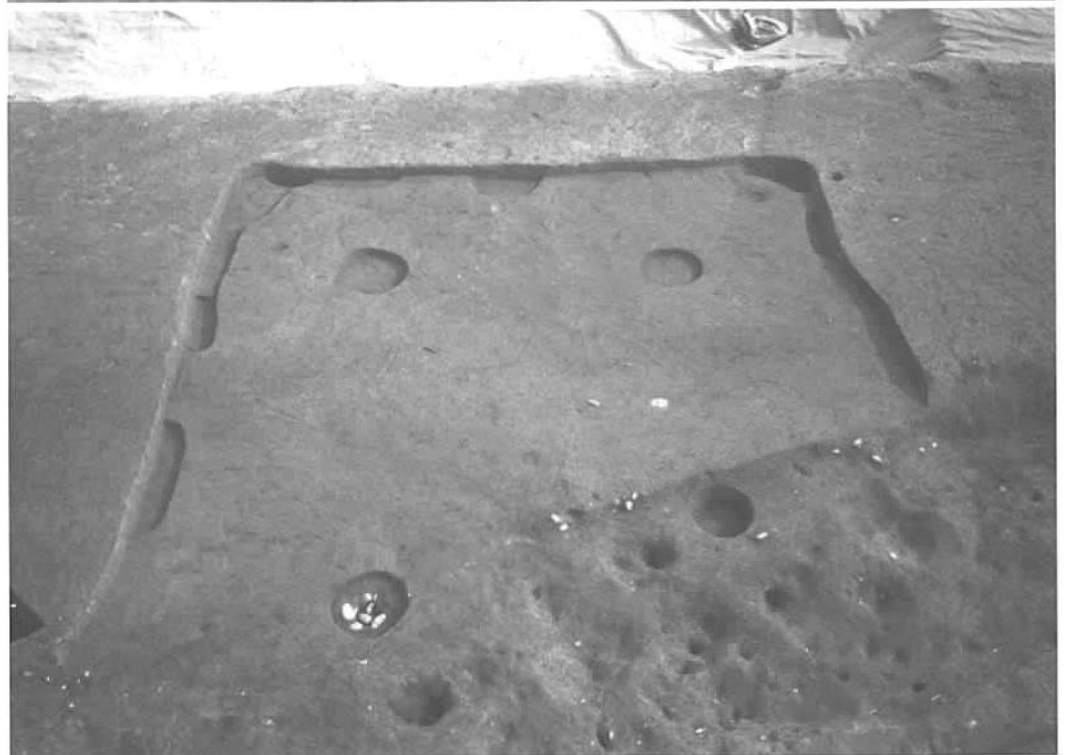
2 59号竪穴住居跡
(南東から)



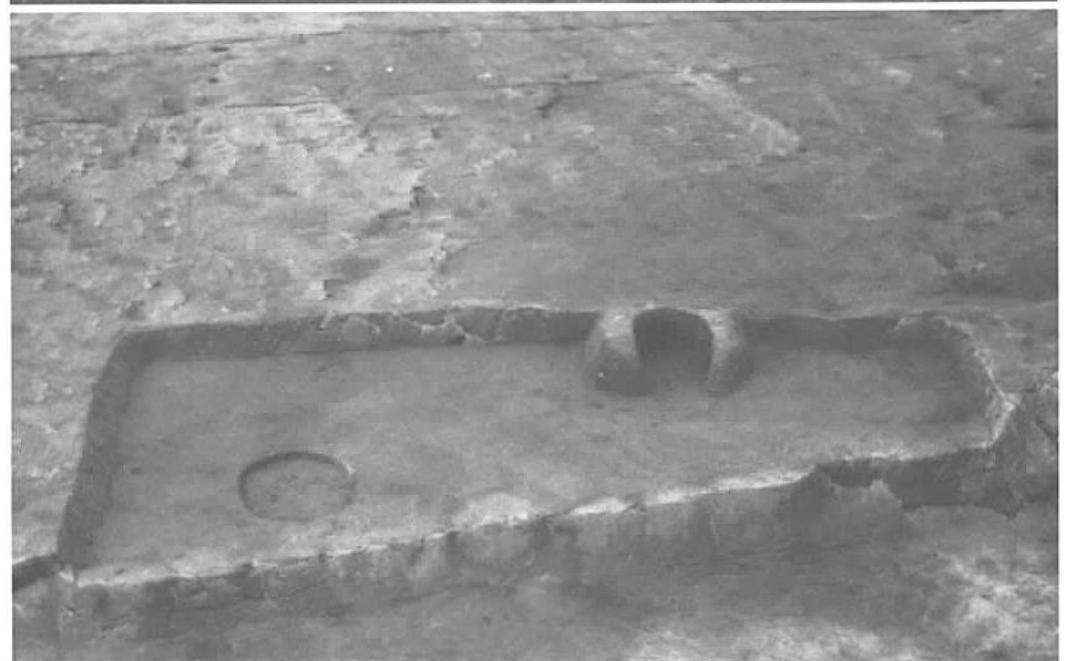
3 89号竪穴住居跡
(東から)



1 91号竪穴住居跡
(北西から)



2 92号竪穴住居跡
(南西から)



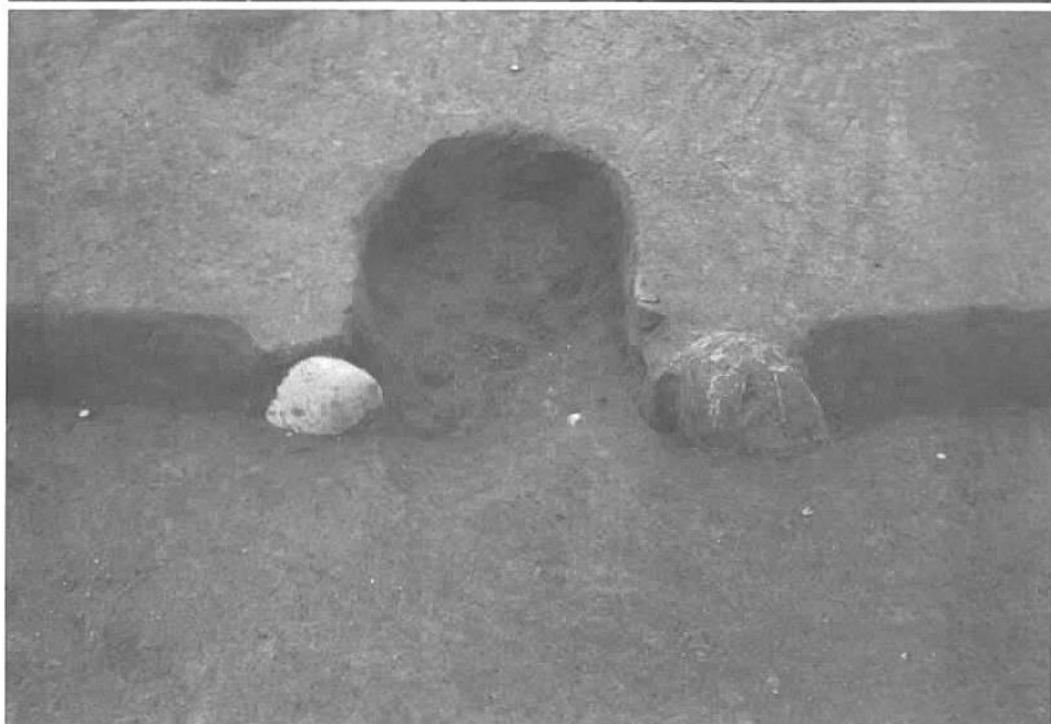
3 93号竪穴住居跡
(南東から)



1 94号竪穴住居跡
(南東から)



2 95・97号竪穴住居跡
(南東から)



3 95号竪穴住居跡
カマド(南東から)



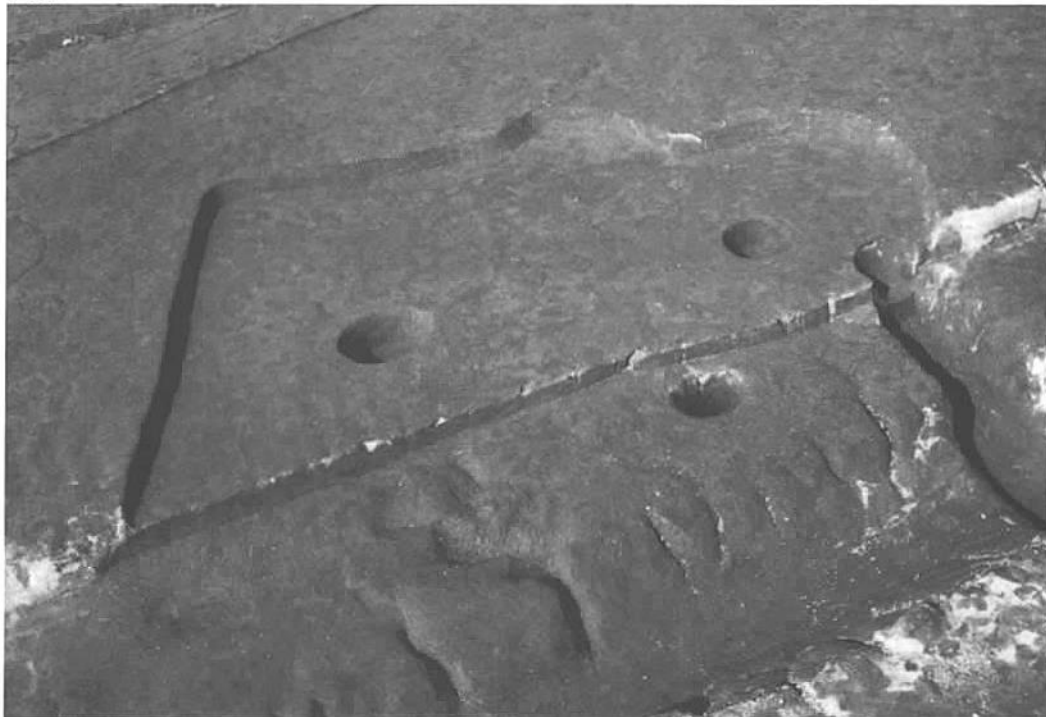
1 96号竪穴住居跡
カマド（北東から）



2 98号竪穴住居跡
カマド（南東から）



3 98号竪穴住居跡
カマド（南東から）



1 99号竪穴住居跡
(南東から)



2 100号竪穴住居跡
(南から)



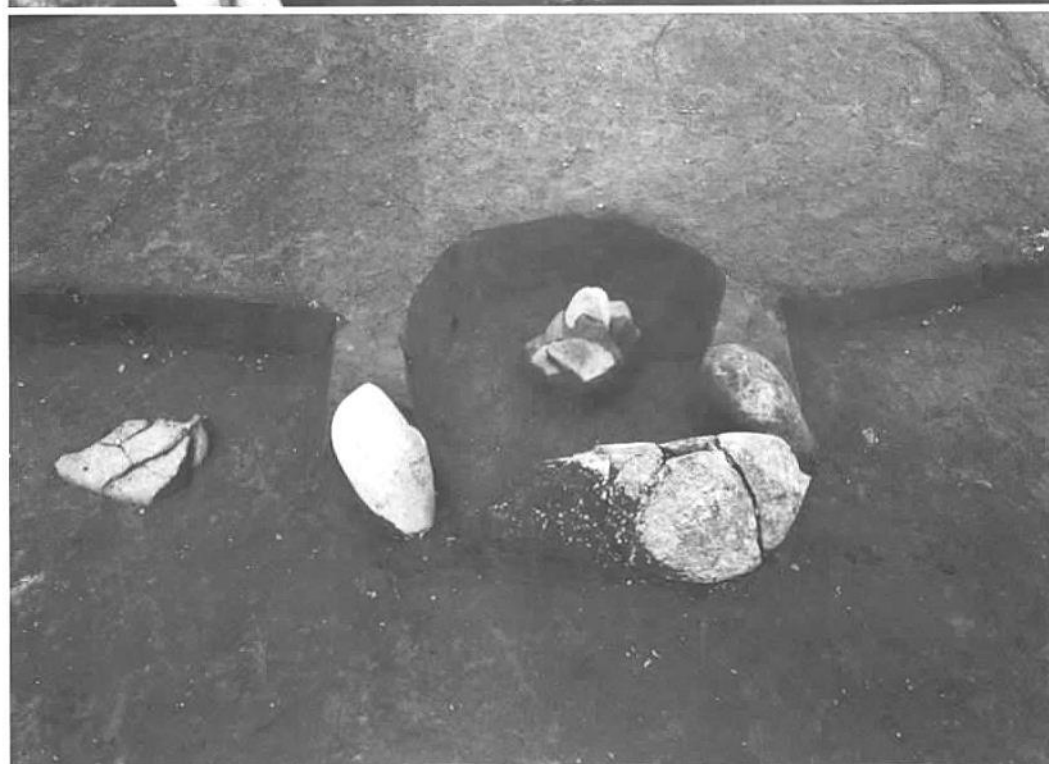
3 100号竪穴住居跡
カマド(南から)



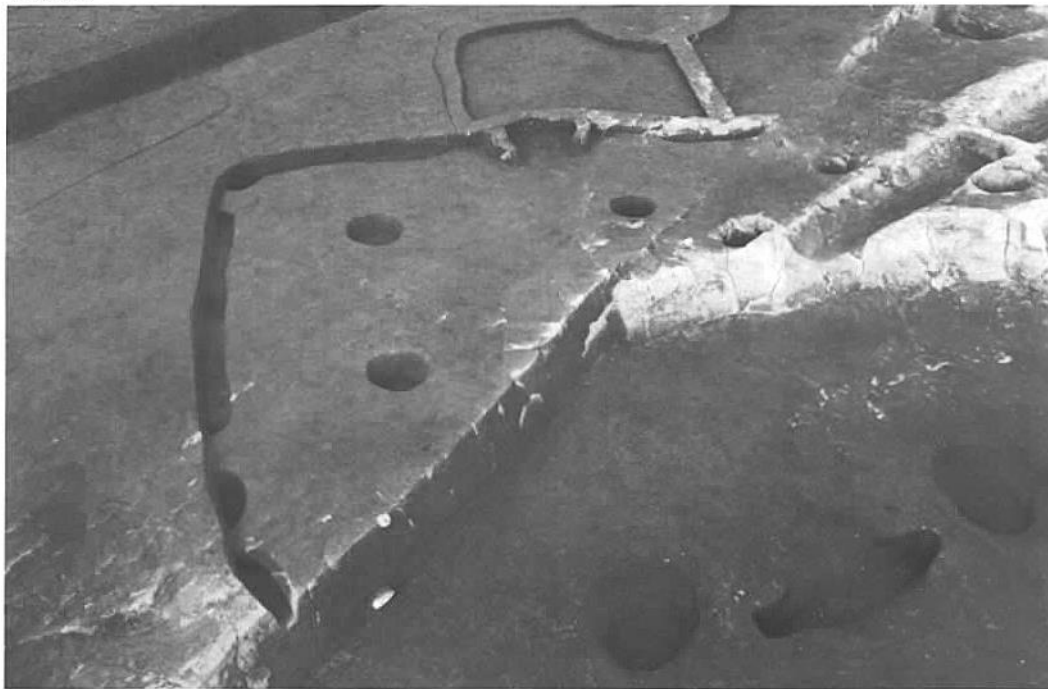
1 101号竪穴住居跡
(南から)



2 102号竪穴住居跡
(南から)



3 102号竪穴住居跡
カマド (南から)



1 103号竪穴住居跡
(南から)



2 103号竪穴住居跡
カマド (南から)



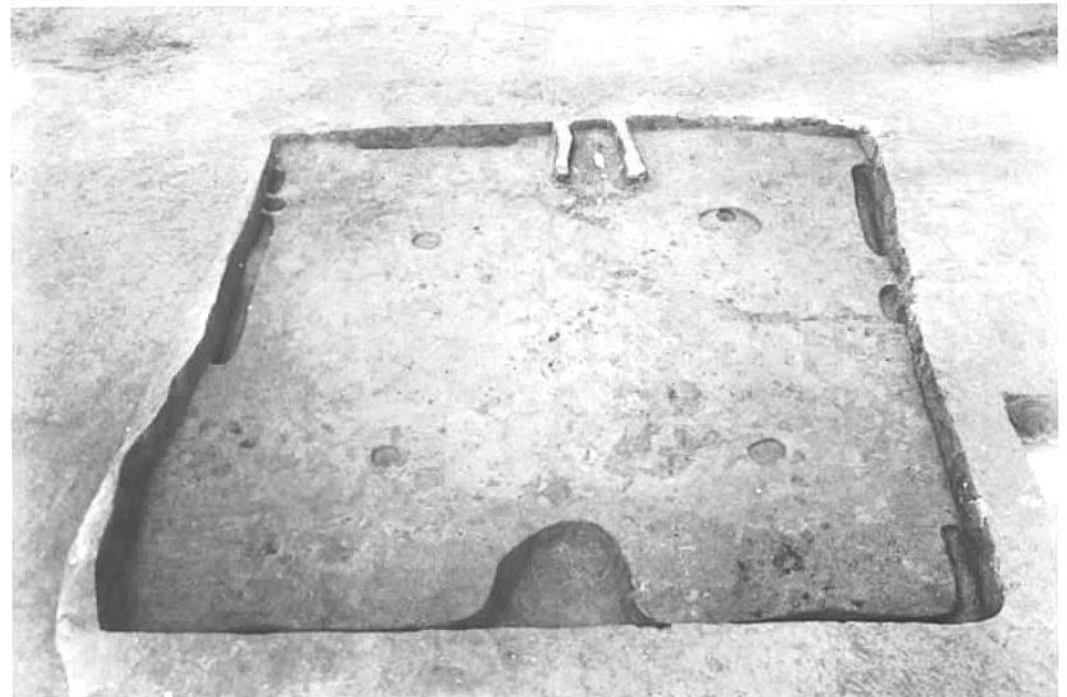
3 104号竪穴住居跡
(南から)



1 104号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 107号竪穴住居跡
炭化材（南から）



3 107号竪穴住居跡
（南から）



1 107号竪穴住居跡
カマド（南から）



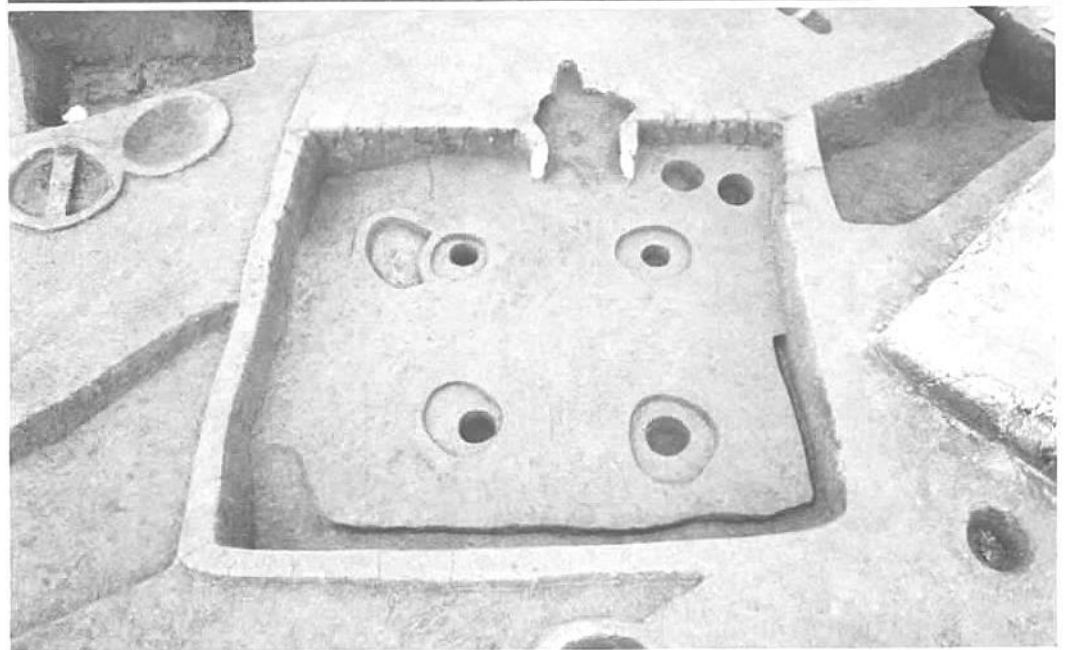
2 108号竪穴住居跡
（南から）



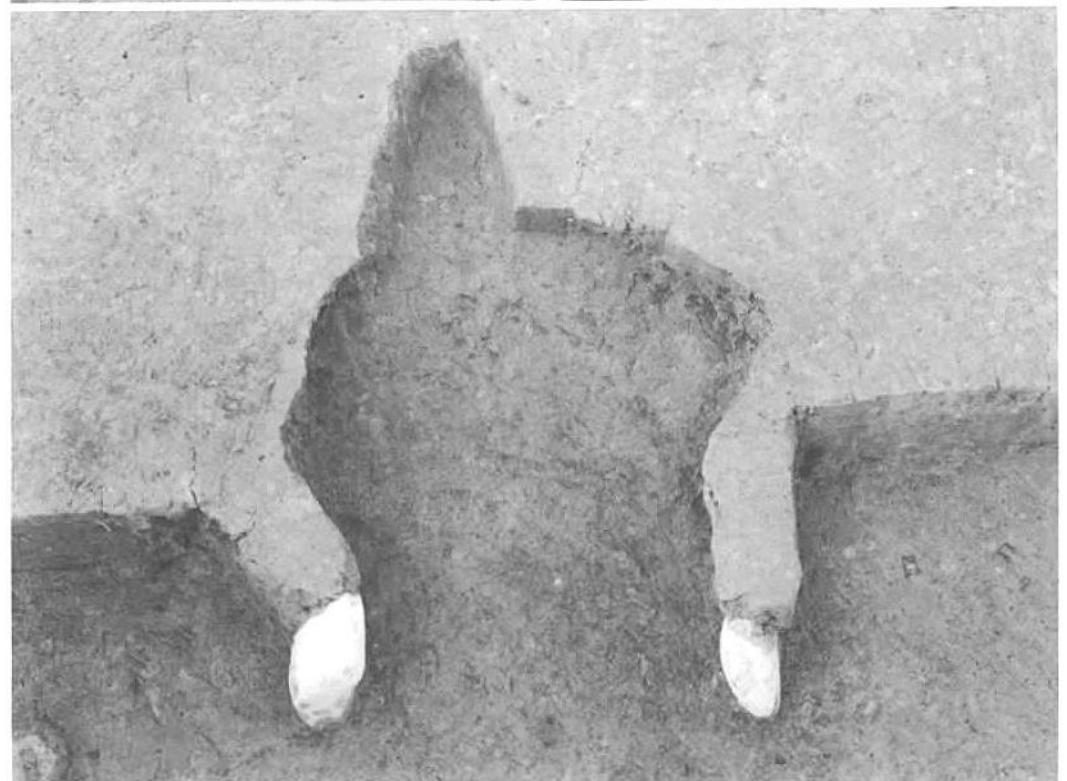
3 109号竪穴住居跡
（南から）



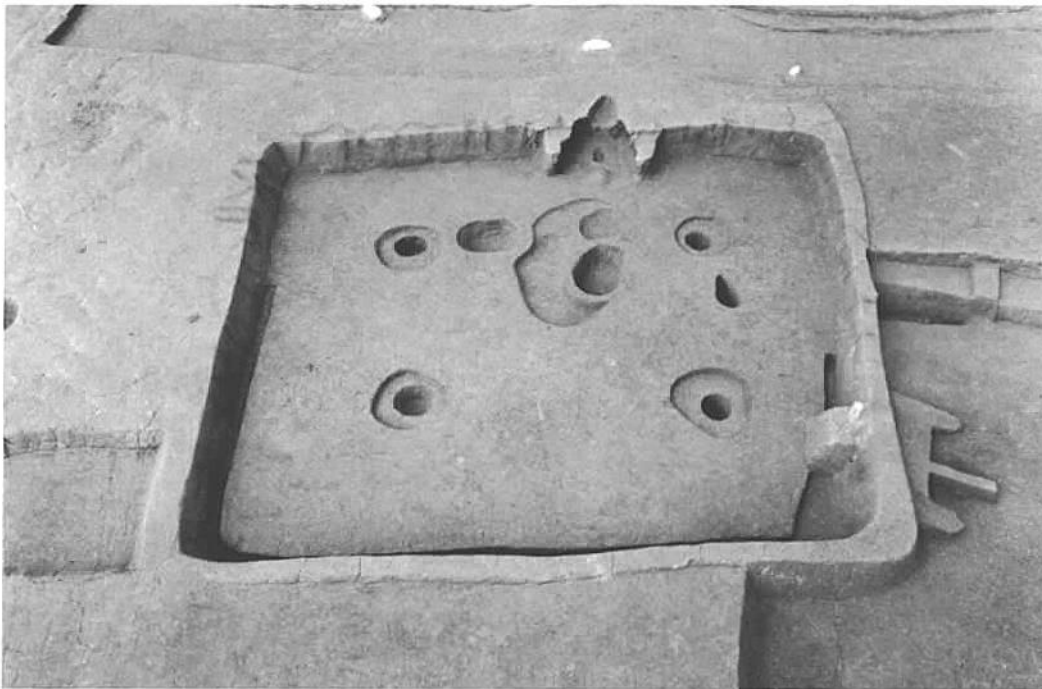
1 109号竪穴住居跡
カマド (南から)



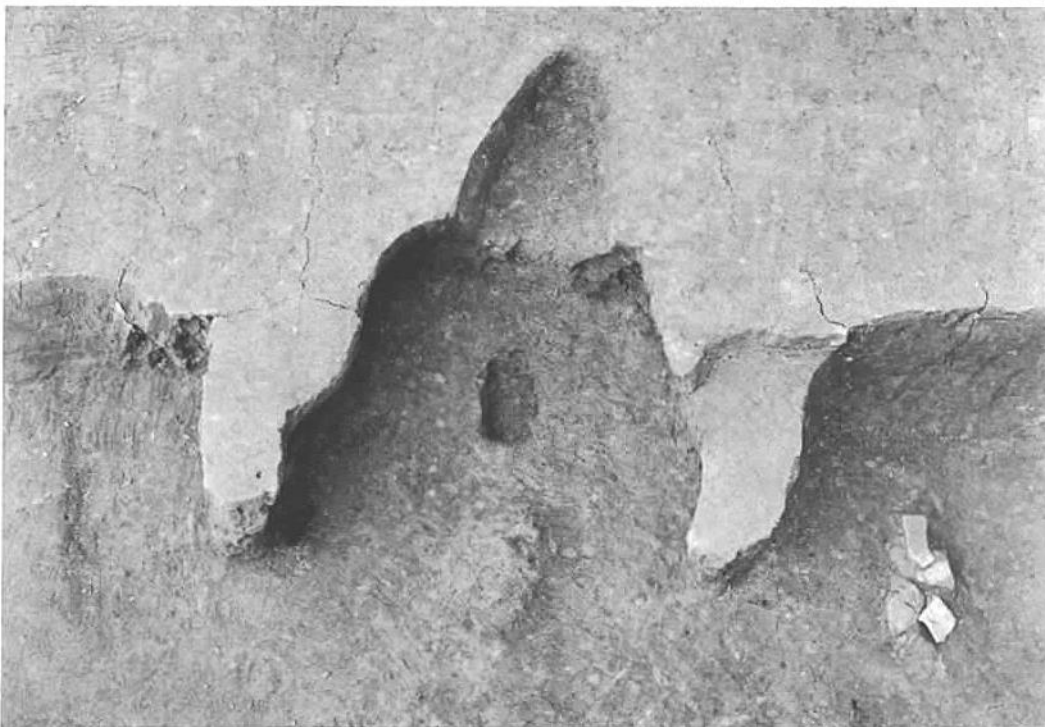
2 110号竪穴住居跡
(南から)



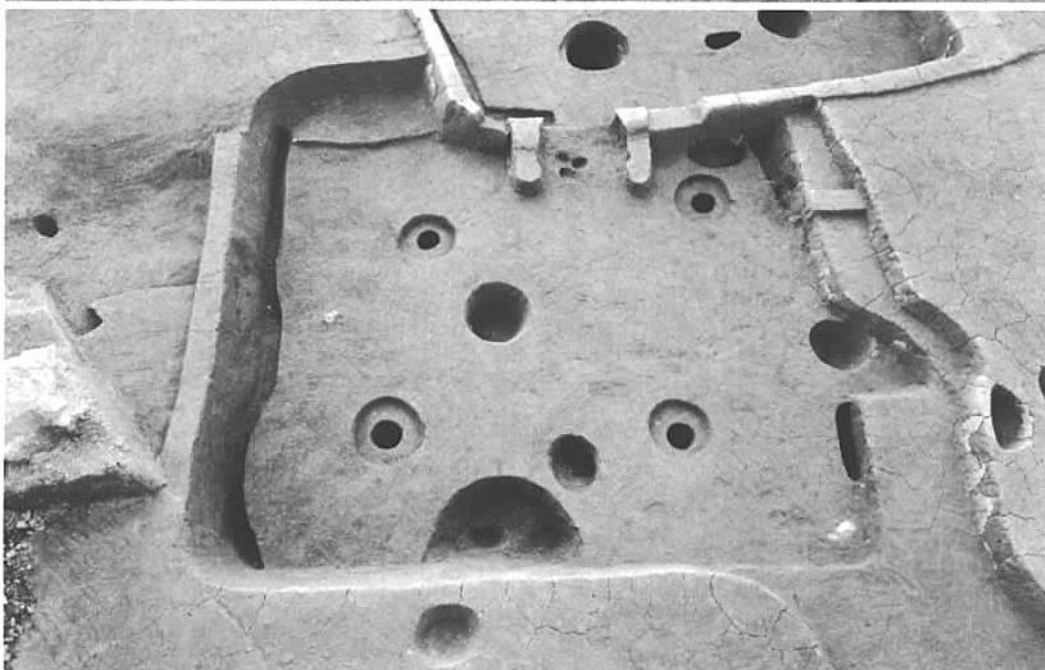
3 110号竪穴住居跡
カマド (南から)



1 111号竪穴住居跡
(南から)



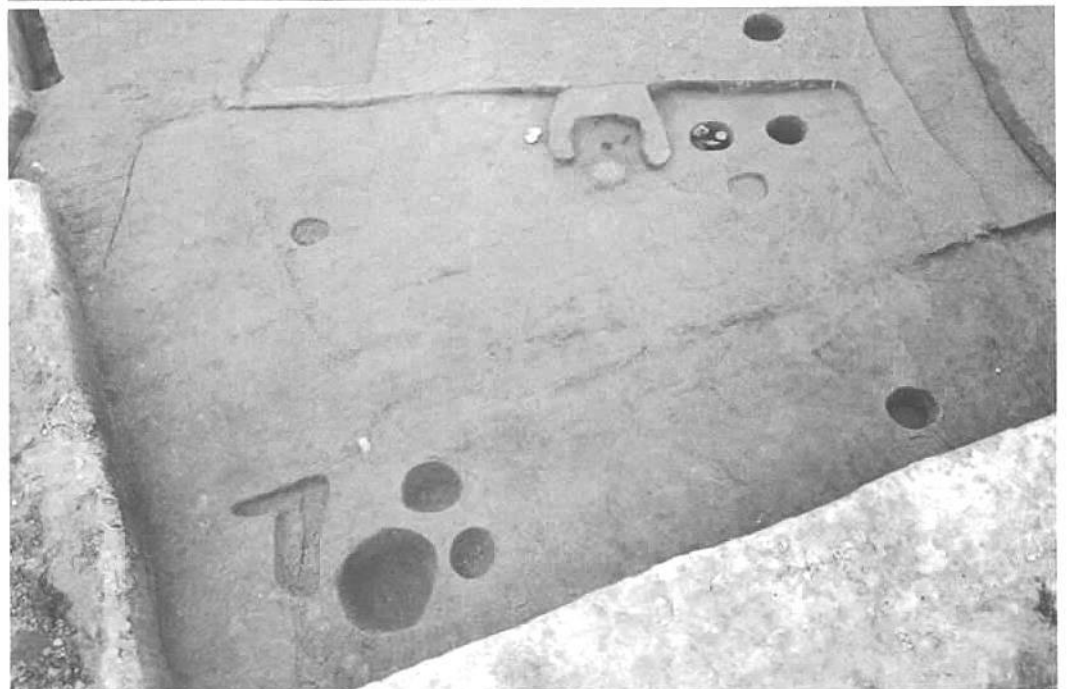
2 111号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 112号竪穴住居跡
(東から)



1 112号竪穴住居跡
カマド（東から）



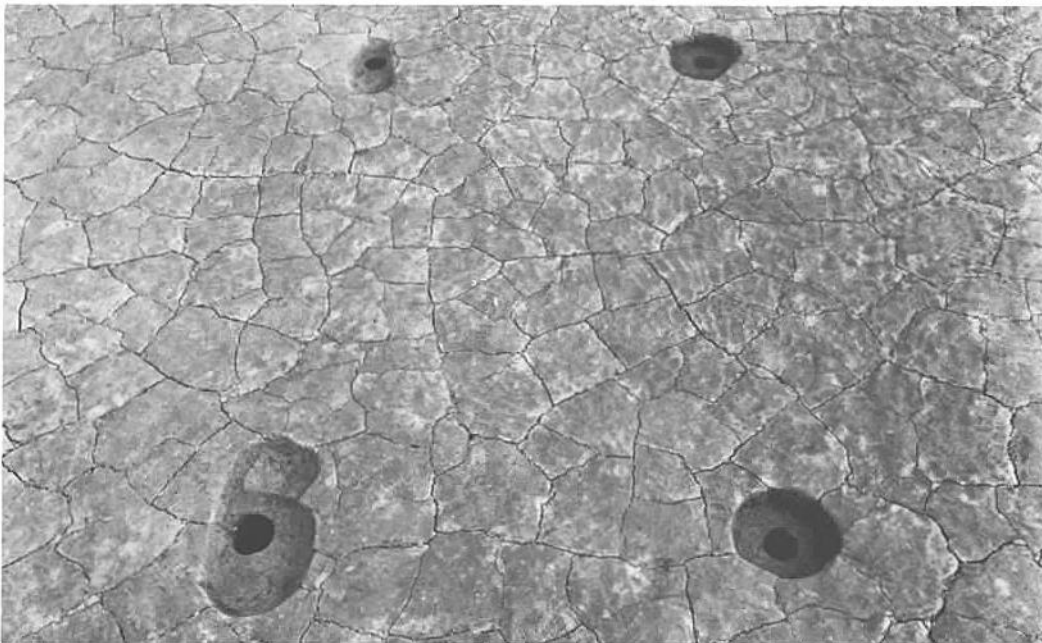
2 113号竪穴住居跡
（南から）



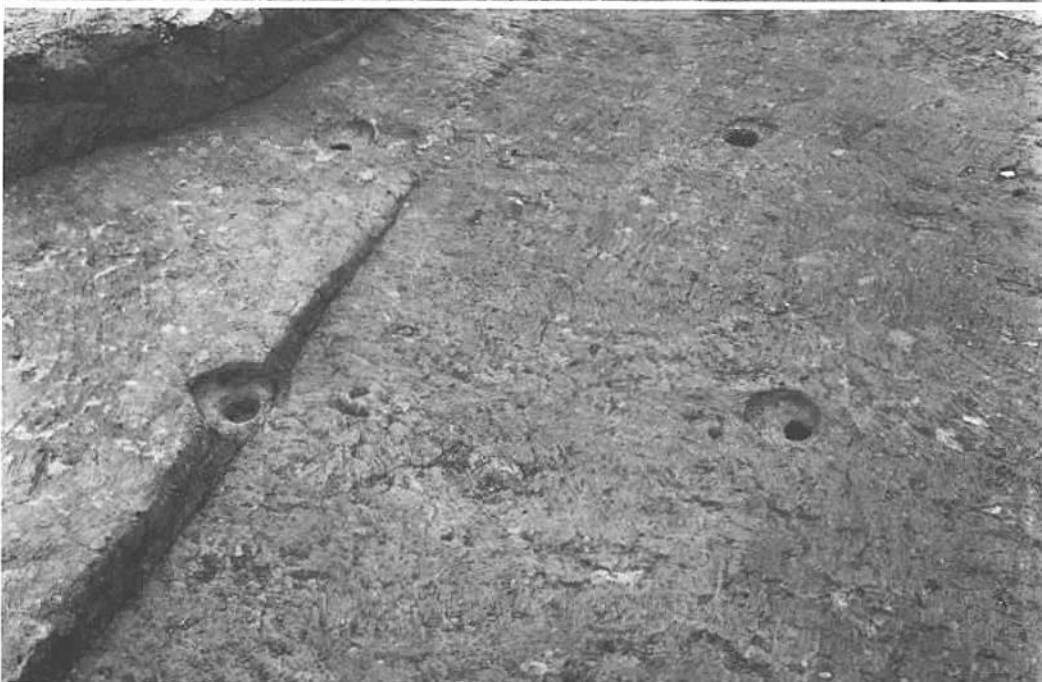
3 113号竪穴住居跡
下層（南から）



1 113号竪穴住居跡
カマド（南から）



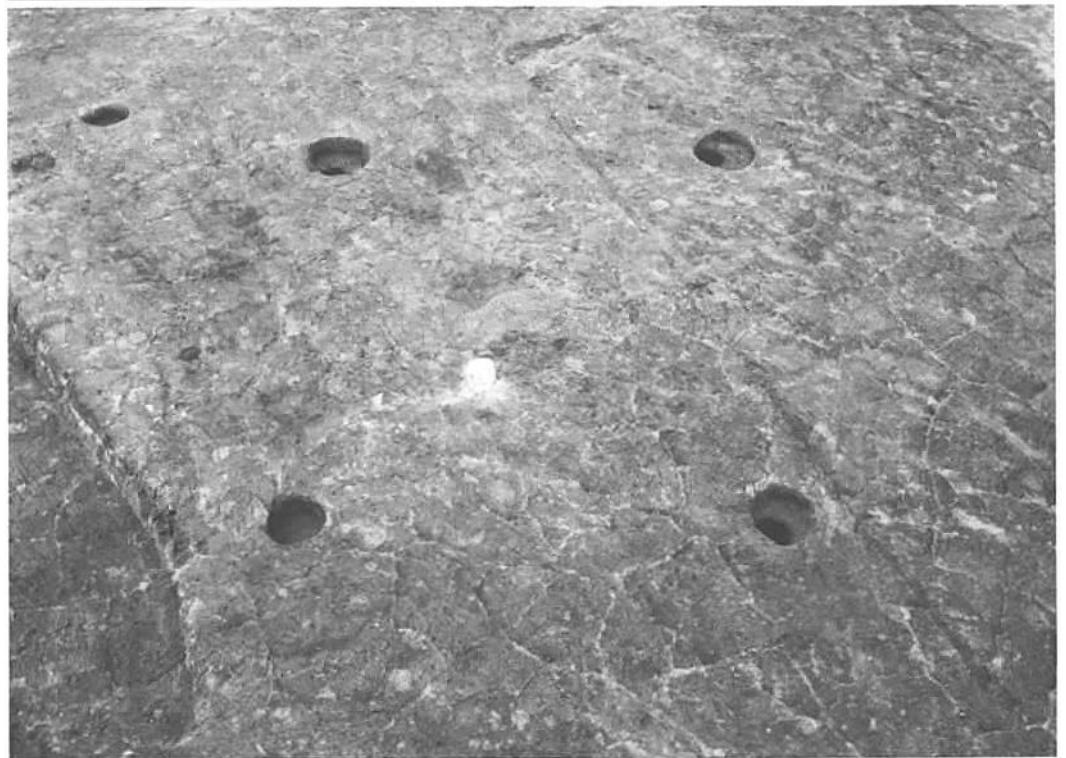
2 1号掘立柱建物
（西から）



3 2号掘立柱建物
（西から）



1 3号掘立柱建物
(南から)



2 4号掘立柱建物
(東から)



3 5号掘立柱建物
(東から)



1 3号土坑遺物出土状況（東から）



2 21号土坑（東から）



3 21号土坑断面
（北から）



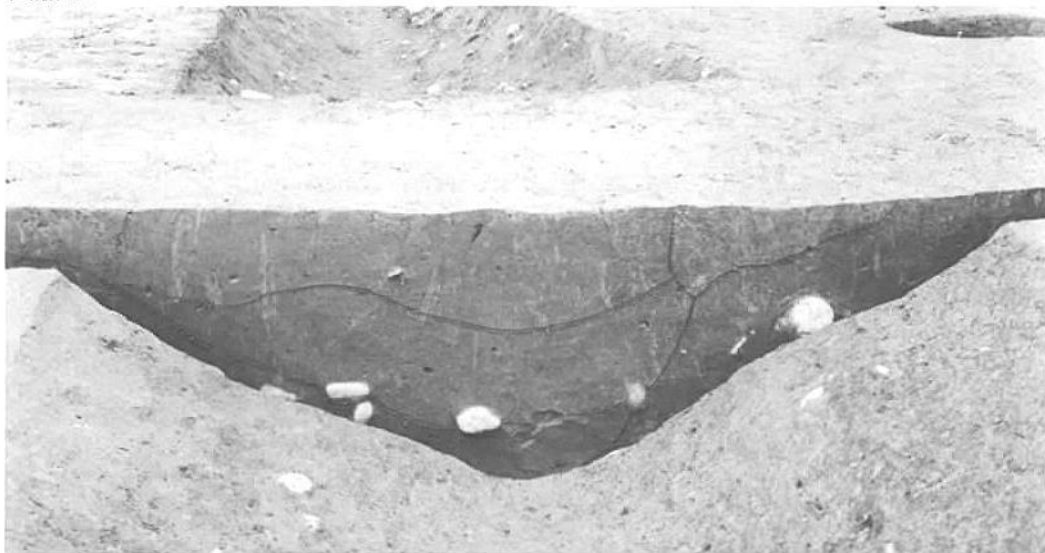
1 22号土坑（西から）



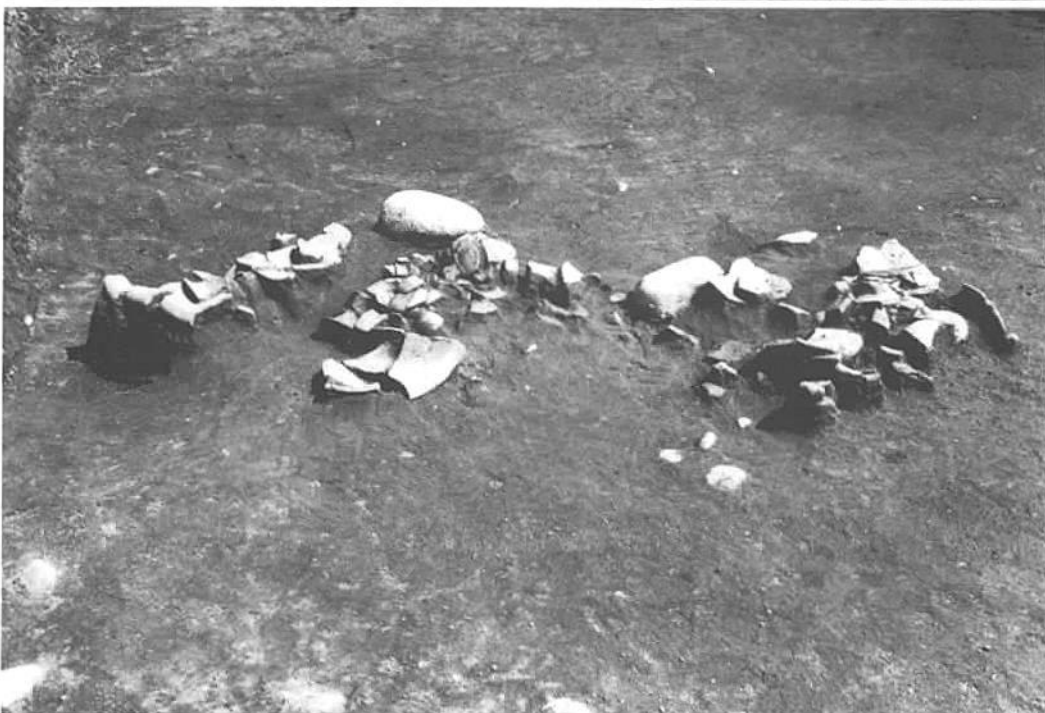
2 23号土坑（西から）



3 1号溝（東から）



1 9号溝断面(南から)



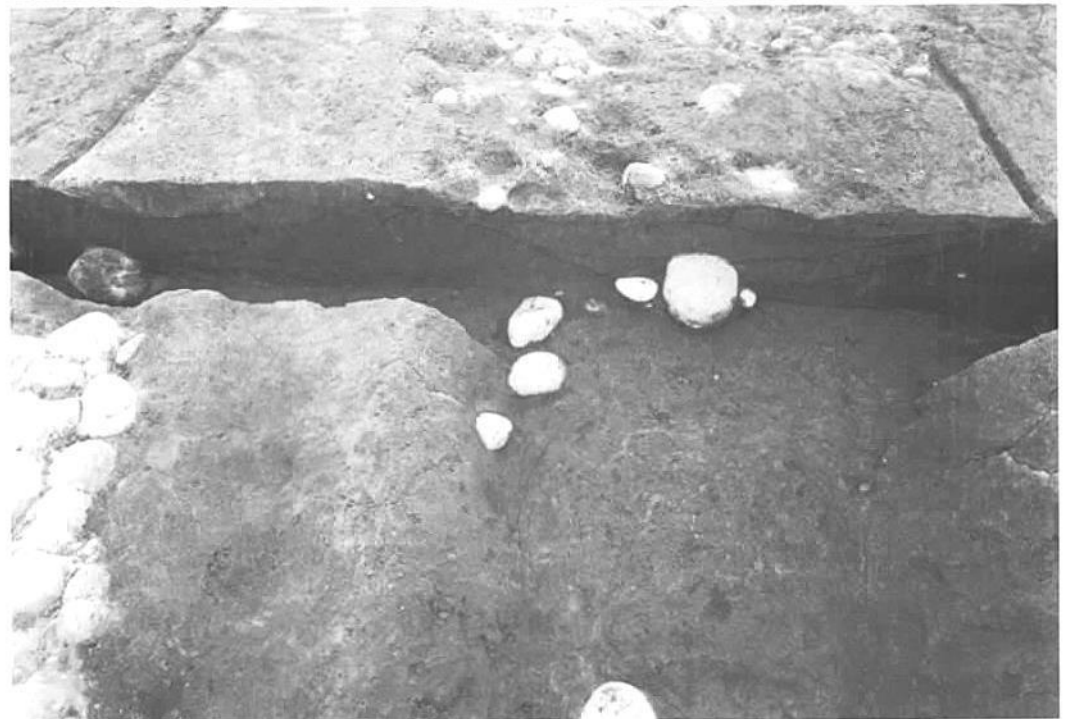
2 9号溝遺物出土状況
(西から)



3 9号溝甕出土状況
(西から)



1 11号溝断面(北から)



2 12号溝断面(北から)



3 67号溝断面(南から)



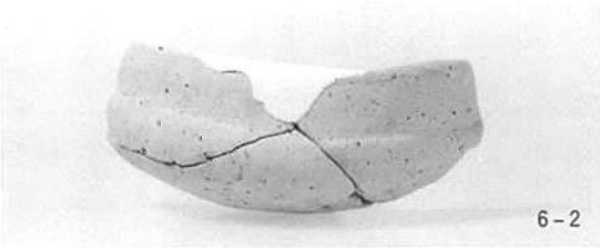
1 68号溝断面(南から)



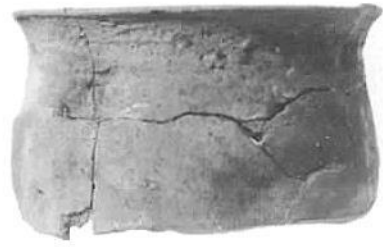
2 69号溝(東から)



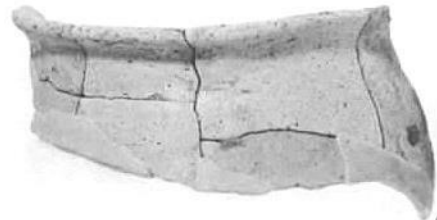
3 5号竪穴状遺構
(北から)



6-2



6-6



6-8-①



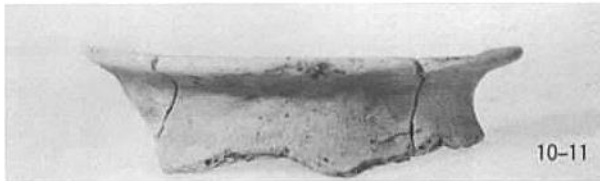
6-8-②



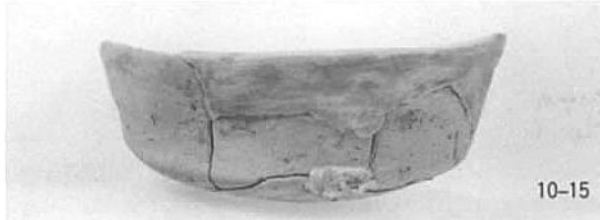
6-11



8-7



10-11



10-15



10-17



14-2



14-3



14-7



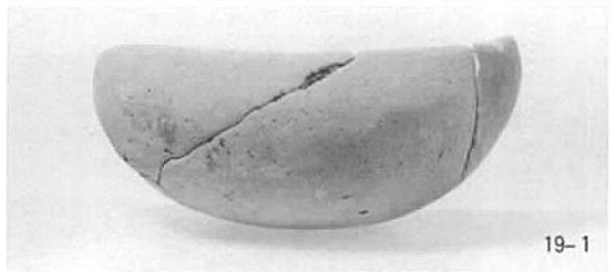
14-8



14-10



17-4



19-1



19-2



19-3



19-6



19-10



19-11



19-12



19-14



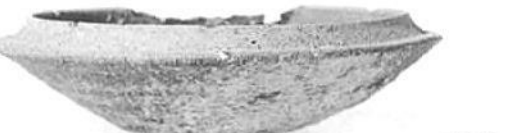
19-19



23-2



23-9



23-15



23-16



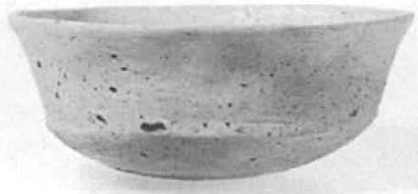
26-1



26-2



26-3



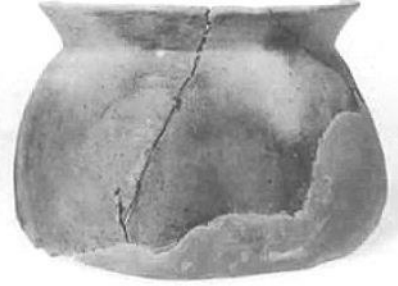
26-4



26-5



26-6



26-7



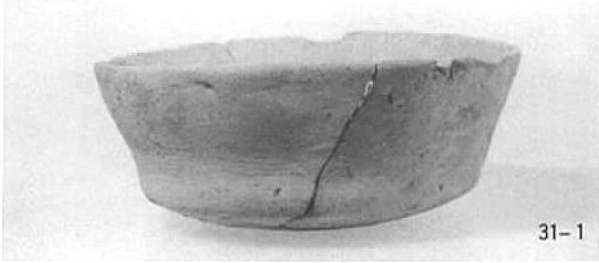
26-8



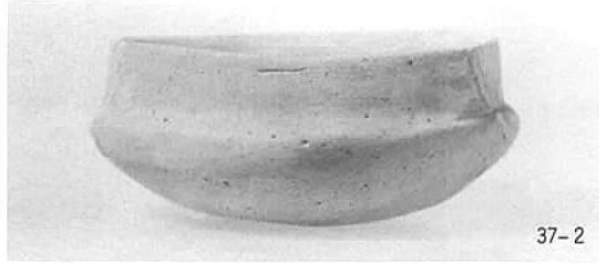
27-9



27-11



31-1



37-2



31-2



37-3



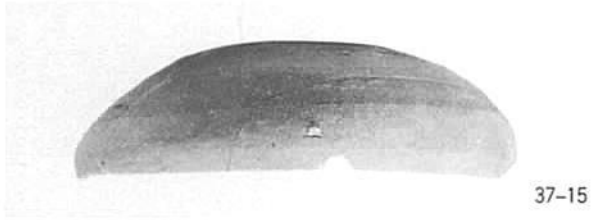
31-13



37-14



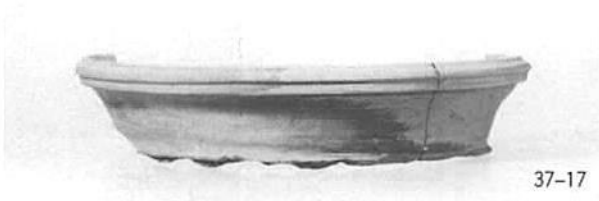
34-7-①



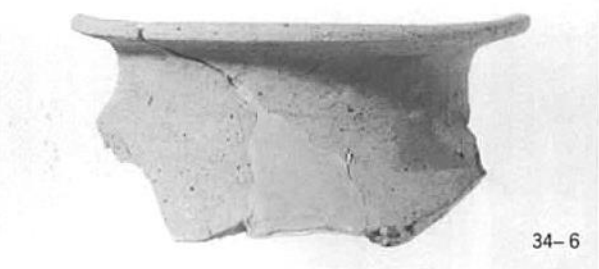
37-15



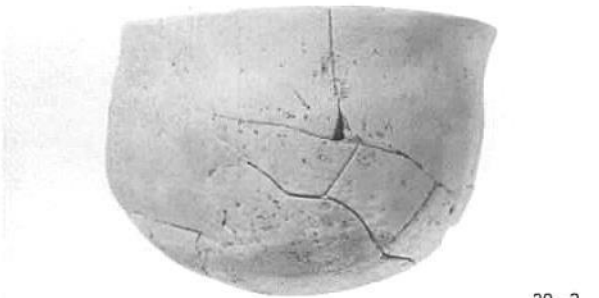
34-7-②



37-17



34-6



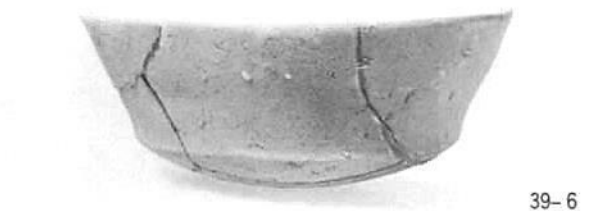
39-3



37-1



39-4



39-6



39-18



58-3



39-19



58-4



43-9



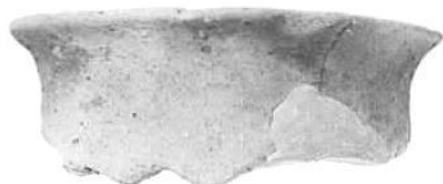
58-5



48-2



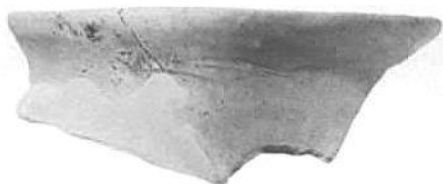
61-1



48-6



61-2



48-8



61-3



55-8



58-1



61-4



63-1



63-2



63-3



63-4



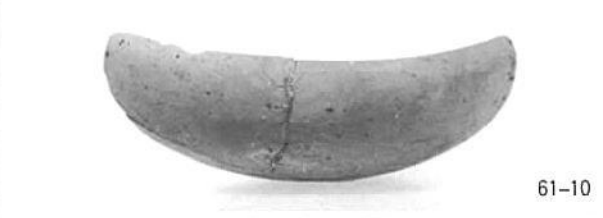
63-6



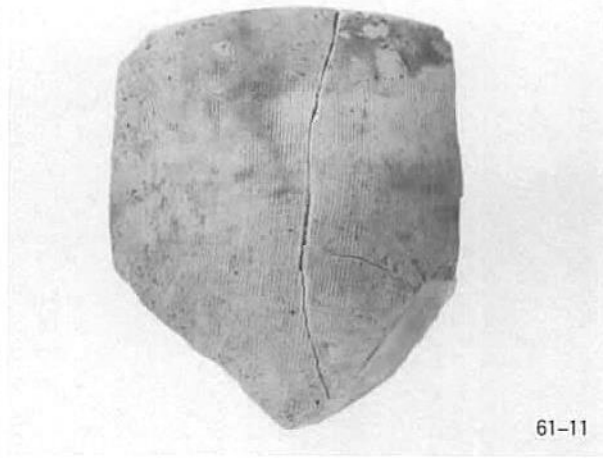
63-7



61-8



61-10



61-11



61-13



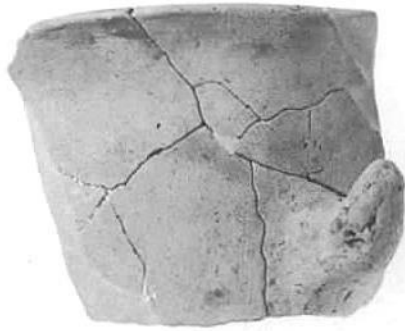
67-2



67-7



67-8



67-10



67-12



67-13



67-14



70-1



70-2



70-4



70-5



70-6



70-8



70-9



70-10



70-11



70-12



72-17



70-13



74-1



70-14



74-2



74-5



72-2



74-11



72-9



74-14



72-13



74-15



82-1



82-6



82-7



82-8



82-12



86-3



86-12



86-16



86-22



88-10



88-12



88-14



88-15



88-16



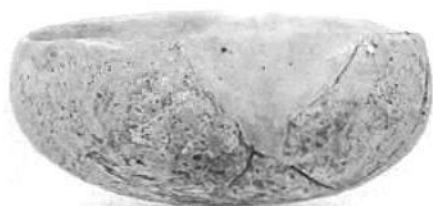
88-17



88-18



88-20



88-21



88-23



89-24



89-25



89-26



89-28



89-29



89-30



89-37



90-38



90-38



90-38



91-43



92-6



92-7



92-8



92-11



95-3



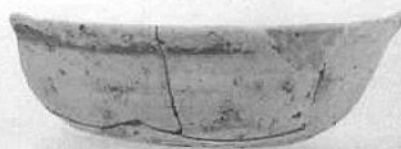
97-3



97-5



97-17



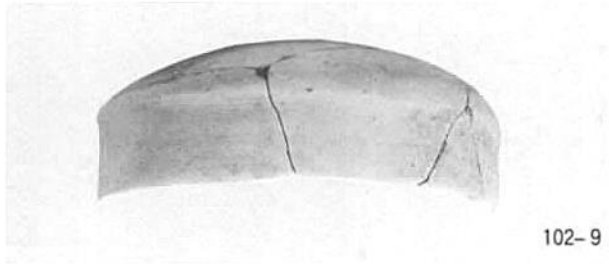
97-22



101-28



102-25



102-9



102-26



102-14



103-41



102-15



102-16



104-53



102-17



104-56



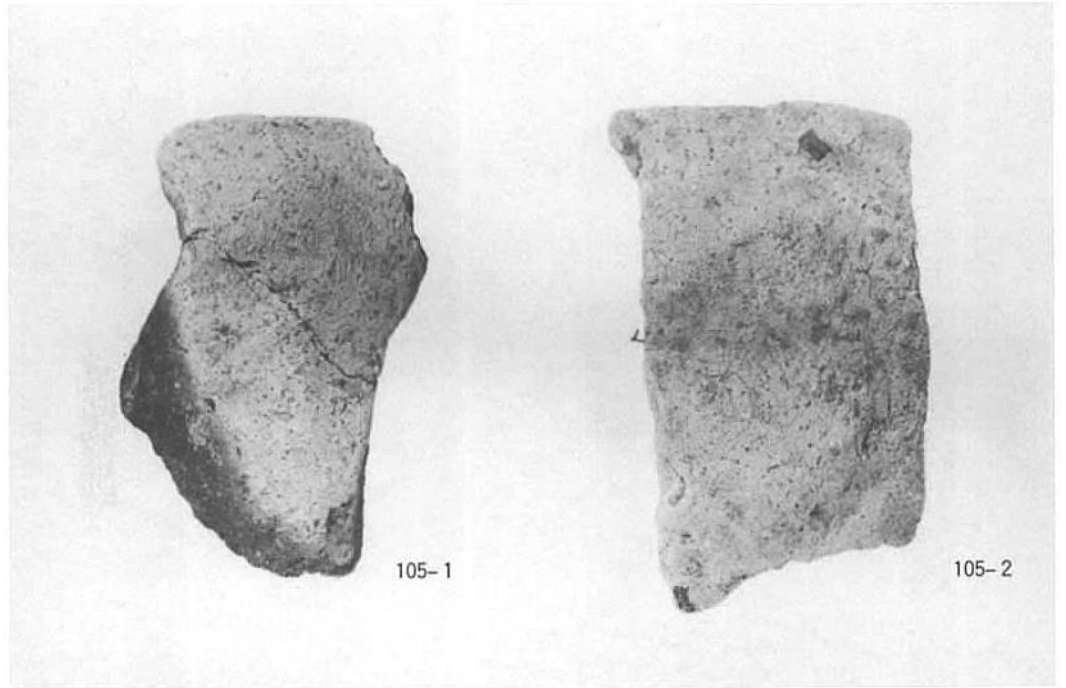
102-19



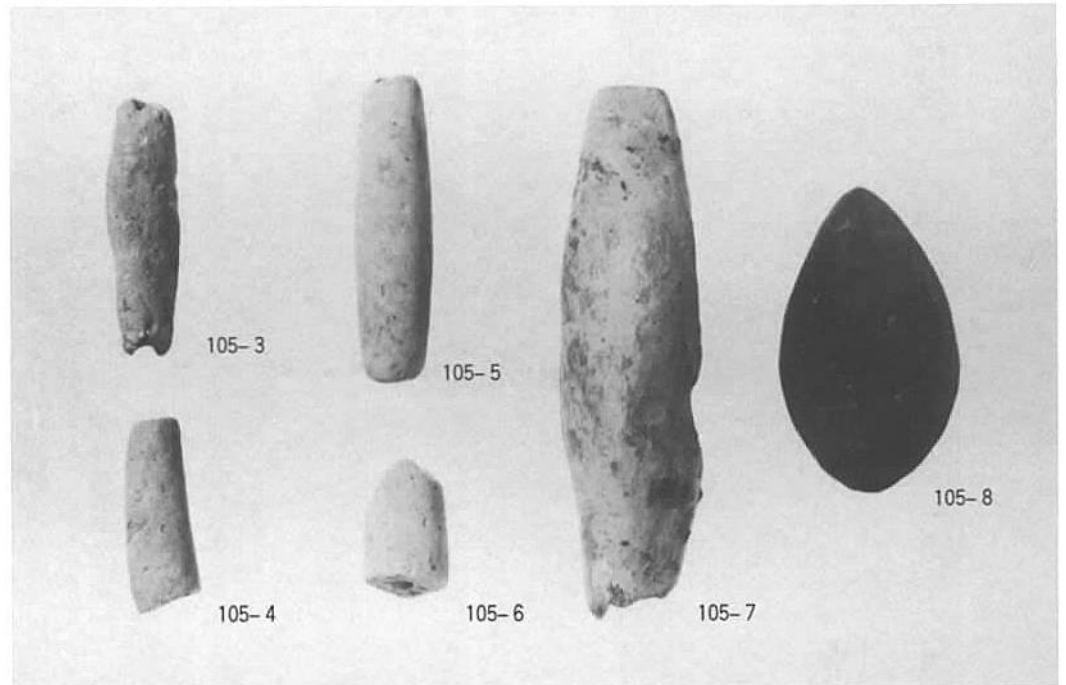
104-60



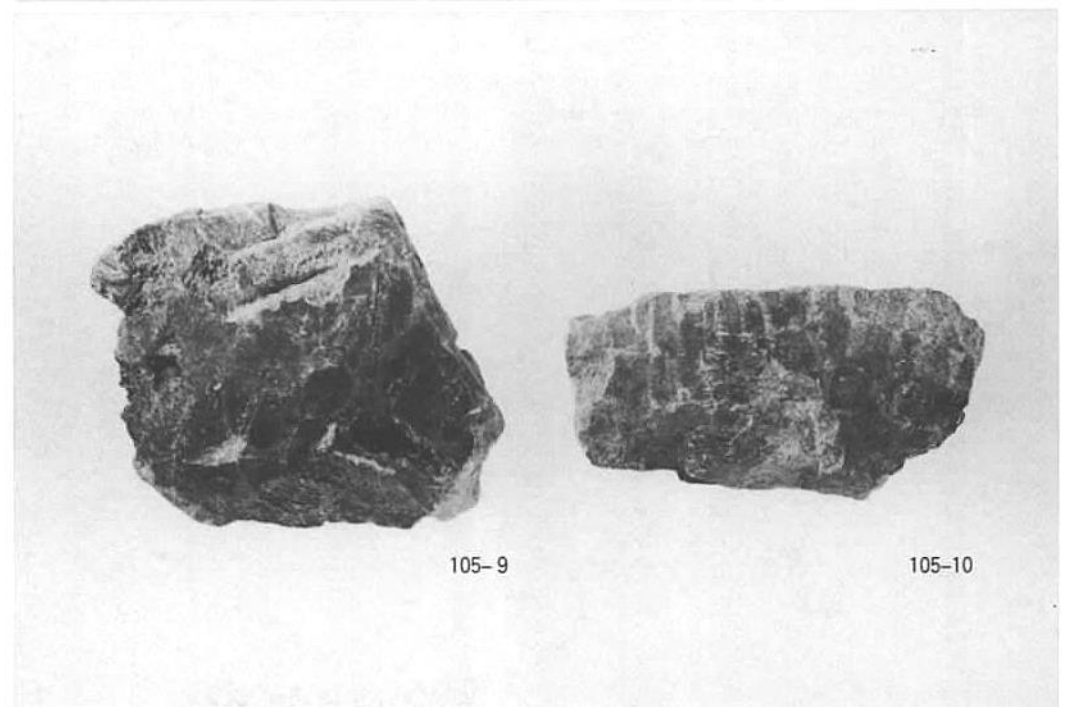
104-66



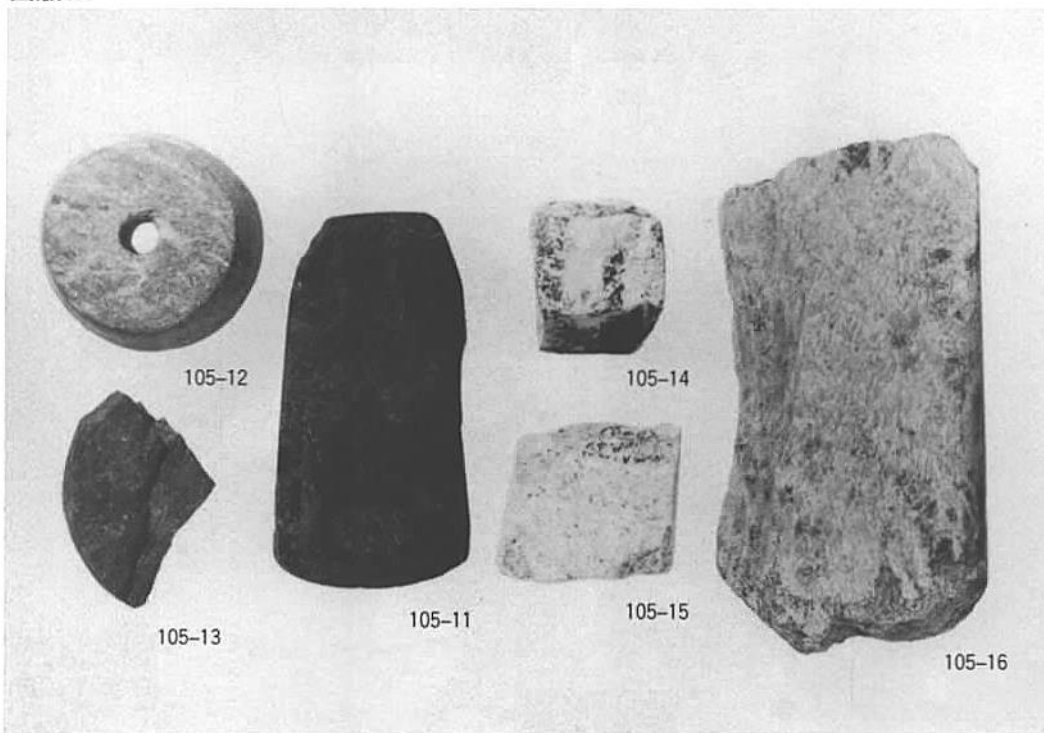
1 出土土製品 (1)



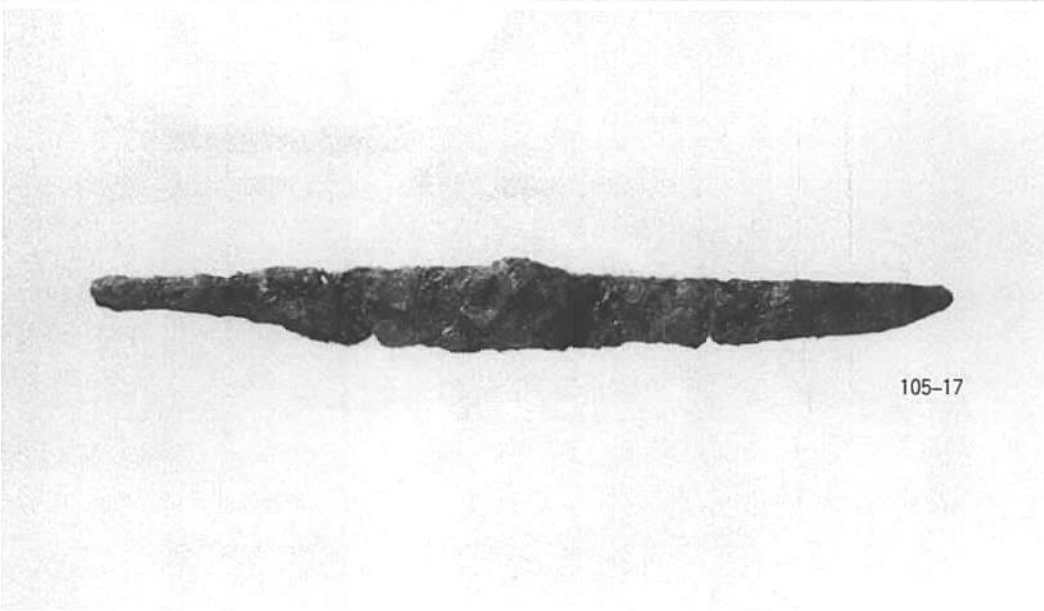
2 出土土製品 (2)



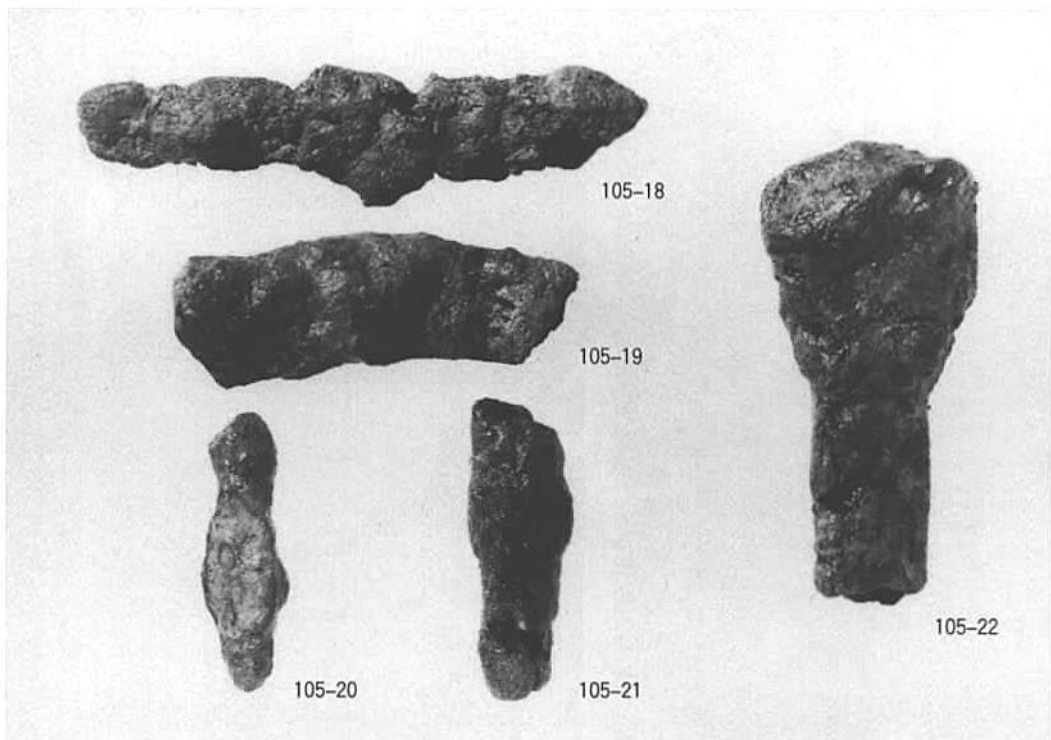
3 出土石製品 (1)



1 出土石製品 (2)



2 出土鉄製品 (1)



3 出土鉄製品 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふなこしたかはらAいせき							
書名	船越高原A遺跡I							
副書名	福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在遺跡の調査							
巻次	I							
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	齋部麻矢・吉田東明・進村真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船越高原A遺跡I	福岡県浮羽郡 田主丸町大字船越 字高原 他	40829		33° 20' 50"	130° 43' 31"	1995.05.09 } 1997.03.20 } 1997.08.15 } 1998.03.13 } 1998.04.28 } 1999.03.19	10,300m ²	道路建設 (一般国道 210号浮羽 バイパス 建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
船越高原A遺跡I	集落	古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴住居跡・掘立柱建 物跡・土坑・溝・竪穴 状遺構 竪穴住居跡 掘立柱建物跡・溝		弥生土器・土師器・須 恵器・石器・鉄器 土師器・須恵器 須恵器・土師器・陶磁 器・鉄器			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 11	登録番号 9

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第13集

船越高原 A 遺跡 I

平成12年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2-13-29

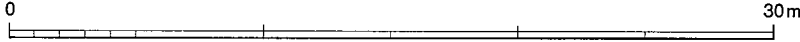
X-38650

X-38600

X-38550

Y-25450

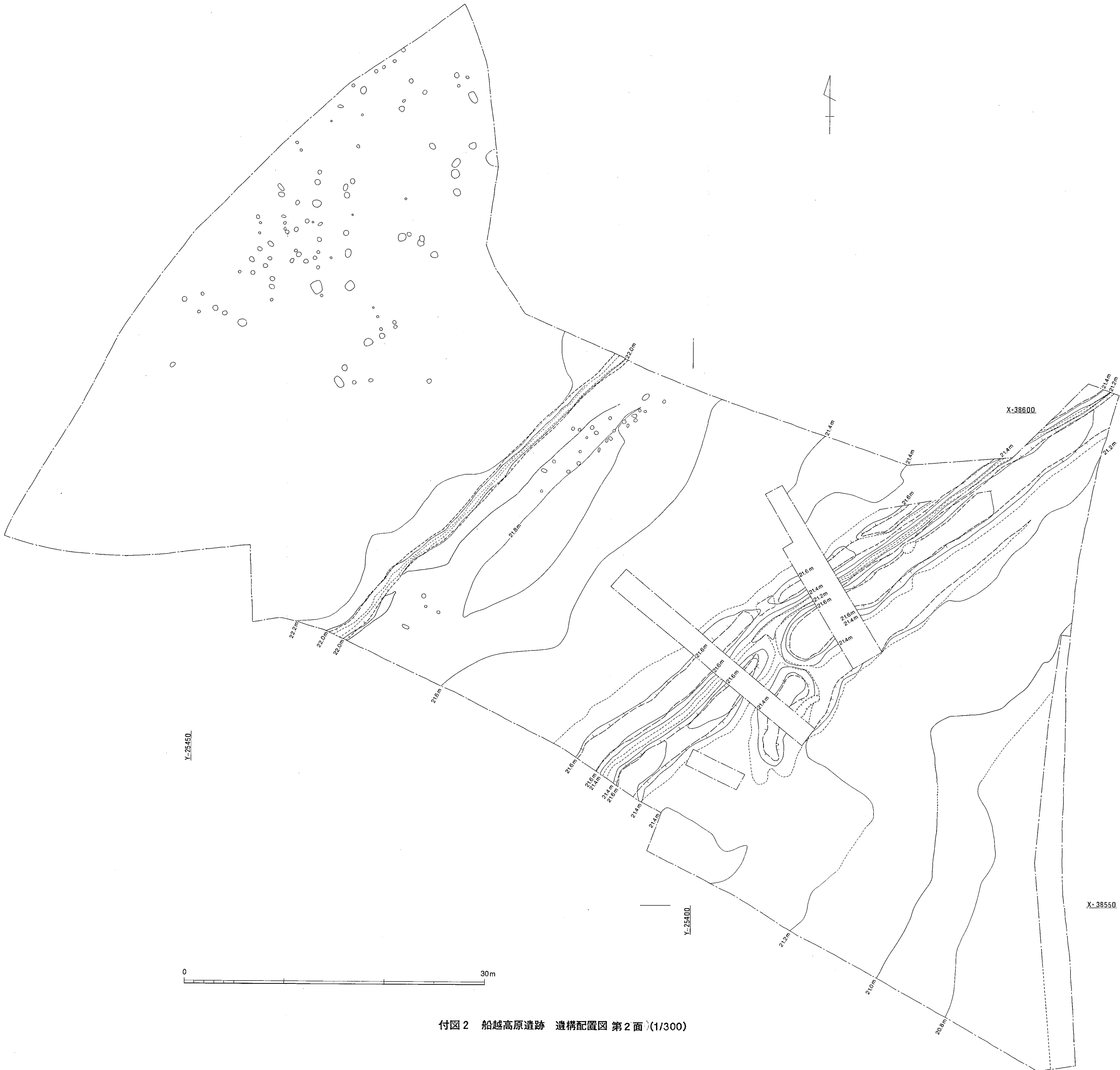
Y-25400



付図1 船越高原遺跡 遺構配置図 第1面(1/300)



X-38650



付図2 船越高原遺跡 遺構配置図 第2面 (1/300)



付図3 船越高原遺跡 遺構配置図 第3面 (1/300)